総合課のエースはわたし

流山晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
総合課のエースはわたし

【Ｎコード】
Ｎ６７０７Ｔ

【作者名】
流山晶

【あらすじ】
２８才の女性が、珍騒動に巻き込まれながら成長していく、爆笑ラブコメ。主人公の碧（みどり）は、腕の立つＳＥ（システムエンジニア）。だけど、ちょと抜けていて、極度の視線恐怖症（対人恐怖症）。ごてごての理系頭脳を駆使して、恋に仕事に全力投球します。まずは、結婚紹介所を使って、いろいろな男性とデートします。仕事で男性と知り合う機会もあります。何を血迷ったか、主人公とは反対の性格の男とつき合いだしました。浮気をしていないか心配になったり、後輩や同僚の恋を見守ったり、悪女に目をつけられたり、超優良物件にプロポーズされ

たり……　だんだんと結婚を意識するようになりました。そして、今、主人公は二人の男性の間で悩んでいます。クリスマスイブをめぐる攻防が終わり、間もなく完結です。

プロローブ（その1）

熱々の薄々のコーヒーを怪獣シールを貼った愛機『紅号（くれない）』の横に置く。その横には、すべての始まりとなった緑色のＵＳＢメモリーが置いてある。会社のデータが入ったものだ。このヤローと思いながら、気を取り直して、クリックする。

『名前』？　通称にするか、それとも本名にするか。うーん。いつもなら通称にするんだけど……　戸籍がどうのこうのと言うことだってありうるわ。やっぱり、この場合は本名なんでしょう。仕方ない、名前は、『塩原碧（しおばらみどり）』。性別は、『女』。生年月日も正直に『１９８２年１２月２４日』。つまり『満２８歳』。出身大学は『私立Ｋ大学』。職業は『ＳＥ（システムエンジニア）』。家族は、『親２人』が存命中に『弟１人』がいる。親は離婚しているが、記載する欄はないわ。

『趣味』？　ずらっとチェックボックス付の一覧が並ぶ。なるほどこの中から選択するのか。男を釣るのが、いやいや、上品に言うと、妙齢の紳士とお近づきになるのが目的であるので『スポーツ』にしようかしら。でも、これだとインパクトに欠けるわ。それに、スポーツらしいスポーツはしたことがないわ。しいて言えば、歩くのが好きだ。

そうだこれだ！　『酒』だ！　かつては、毎晩、缶ビールを１本飲んでいたこともあるから、これは嘘ではない。『ギャンブル』となるといきすぎかなぁ。そういえば、昔、住み込みの寮長のオジサンが男のたしなみは５つあると言った。太い指を折りながら「１に酒、２に女、３にマージャン、４にギャンブル、５にたばこ」と。賑やかな女学生たちにこうも言った

「本能的に、男は女の体が目当てである」

「感性のある男は、そのうちに女に恋をするようになる」

「理性のある男は、そのうちに女を愛するようになる」

「知性のある男は、そのうちに女を利用するようになる」だから君らは、学生時代に男の感性、理性、知性を見抜けるようにならなきゃいけない。

かつてあたしはあどけない無垢な少女だったわ。そして今は、昔と同じ彼氏なし、昔と同じセミロングのストレートな黒髪、昔と同じ極度の視線恐怖症（対人恐怖症）、昔と同じ細い足首。男の感性、理性、知性を知る機会は逸しつつある。変わったことと言えば、『酒』、『タバコ』、最近出てきたお腹。コンタクトをやめてメガネにしたことかしら。

とにかく趣味欄の『酒』はチェックして、他の趣味を物色する。『華道』、『茶道』はパス。『映画』は嫌いではないが、いやな思い出があるので『観劇』をチェック。映画と観劇は違うと言えば違うけど、座って見ていればいいという意味では同じ。ついでに得意な『インターネット』も選択。

『好きな色』？　『緑』をチェックしようとして、マウスが止まる。緑色のＵＳＢ、赤の紅号（くれない）、壁に視線を移せば、無残なうぐいす色のスーツ。もう一度、順にみる。酷使に関わらずいつもあたしの期待にこたえてくれる紅号が鈍い光を放つ。まるで、大口を開けて襲いかかってこようとする獣だ。赤だ！　『赤』だ！　今のこの瞬間から、あたしは野獣になるのだ。

『好きな食べ物』？　う～ん、何だろう？　嫌いな食べ物ならあるんだけど。夏ミカン、グレープフルーツ。かんきつ系は苦手なの。あの酸っぱさがどうも苦手。甘いものは好き。特に、かりん糖。かりん糖では、おばさんくさいわ。やっぱり、『チョコレート』にしておく。実はチョコレートも結構好きだ。一度でいいから鼻血が出るほど食べてみたいと思う。

『好きな動物』？　う～ん、ペットは飼ったことないし、正直、わからないわ。いやな思い出のある動物なら『牛』なんだけど。『いるか』を選択する。知性があって、お茶目な所なんてクールだし。

『特技』？　やっぱり、コンピューターかな。ＳＥ（システムエンジニア）だし。でも、こ

れじゃ仕事人間に見えるわ。特技と言えば、『人の視線を感じること』。異常なくらい敏感に、しかも正確に感じるの。視線感覚と言っていいかもしれない。冷たい視線、熱い視線の区別なら普通。あたしの場合、色つきベクトルのように、細い視線、太い視線、点線状の視線、青い視線、黄色い視線が区別できるわ。これがあたしの不幸の元凶。想像するだに恐ろしい。特技はなし、なしだ！

やれやれ、やっとオンラインパートナー紹介サービス、いわゆるネット上の結婚相談所の基本プロフィールを登録できたわ。性格診断テストは、また今度にして、今日はこのぐらいにしておくわ。ほんと、今日は色々ありすぎたわ。冷めたコーヒーを一口すすって。ログアウト。

ふと、神様の視線を感じる。

「これこれ、人の心をもてあそぶのも大概にせよ。そのうち天罰がくだるであろう」

え、天罰はもう十分経験したはずよ。あたしの視線感覚は正確ではない？　（正確なことを、後日、思い知ることになる。）

コーヒーを電子レンジにいれて、牛乳モードでもう一度温める。ベランダに出て、向かいのビルの横に小さくかすむ高層ビル群を眺める。空気が生暖かく、かすかにツツジが香る。

さてさて、あたしの人生はどうなるのかしら。白馬の王子が現れて、キスをして、お城に連れて行ってくれるなんて都合のいいことが起こらないかしら。まあ、なんにしろ、オンラインパートナー紹介サービスを利用することにしたから、これで、一歩前進。何も起こらないなんてことはないわよね。ね、神様！

プロローグ（その2）

そもそも、なんでオンラインパートナー紹介所（いわゆる結婚相談所）に登録したのか。今日の3つの不運が直接のきっかけであることには違いないわ。

悪いこと、トラブルは重なるもの。第一のトラブルは通勤電車。珍しく遅い出勤の許可を得て、ぎりぎりまで、部長も出席するプレゼンの準備を自宅でしていた。うぐいす色のスーツ、うす茶のヒール、白のインナー、桃色の口紅、アイシャドウ。ラフなスタイルとベースメイクのみを標準装備とするあたしには、完全武装に近い装いで家を出た。

電車がすいていたので、座って、最終チェックのために紅号を起動し、緑色のＵＳＢメモリーからファイルを読み込む。薄く口紅を引いた唇をぎゅっと結んで、目をかっと見開いて、資料をチェックする。よし完璧。そう思ってセーブしたの。

ふと、外に目をやると見慣れない風景。え！　ここはどこ？　車内アナウンスは『みなみせんじゅ～。みなみせんじゅ～』と告げている。しまった！　一駅乗り過ごした。あわてて愛機を閉じて、左手に持つ。右肩にショルダーバックをかけて、戸口に向かって小ダッシュ。乗り込む乗客はいないわ。ベンチに老人が座って、にこやかにこちらを向いているだけ。まだドアが閉まる気配はない。おっと、大事なＵＳＢがささったままだったわ。どこかにあたらないようと、メモリーを抜いてバックに入れようとした。もしかしたら指先が汗で滑ったのかもしれない。

緑色のＵＳＢメモリーは、あたしの指を離れてドアを通ってホームへ落ちていく。放物型の自由落下をする。あたしは、即座に左脳で計算した。このまま、メモリーは落下してホームの床に衝突し、跳ね上がって、さらに慣性で前方、つまり、ベンチの老人の方へ飛

んでいくに違いないわ。もしかしたら、老人は苦笑するかもしれない。メモリーはノートＰＣよりはるかに丈夫なはず。何も悪いことは起きないはずだわ。

　ホームの床に衝突し跳ね上がったまでは予測通り。なんと、メモリーはこちらへ側、つまり電車側に跳ねてきた。その０．３秒後に電車とホームの間に吸い込まれていった。眼が点になる。茫然とするあたしをホームにおいて電車は去っていく。老人に目をやると目を閉じている。見られた？　見られなかった？　きっと見なかったに違いないわ。

　それから恐る恐る線路を覗きこむ。わたしのかわいい緑ちゃんは、どこ？　何処？　見えない！　行方不明だ！　じんわり汗がおでこに浮かんだ。対人恐怖症で視線恐怖症のあたしがささやく。

「メモリーはこの世から忽然と姿を消したのよ。このまま何もなかったふりをして会社に行けばいいわ。」

合理性のあたしが叫ぶ、

「メモリーには大事なプレゼン資料が入っているよ。しかも社内のＰＣに入っているのは昨日の夕方のバージョン。何時間分かの更新がパーになってもいいの？」

対人恐怖症のあたしがささやく

「じゃ～どうするの、駅員さんに線路に降りてさがしてもらうの？　なんて説明するの？　全く知らない人よ。それにベンチの老人がなんと思うかしら。もし、列車を止めることになったら大迷惑よ。新聞記事にでもなったらどうするの」

合理性のあたしが結論を宣告した。

「メモリーには会社の情報がはいっているのよ。後で誰かが見つけてネットに流したらどうなるの。訓告ものよ。駅員さんがなんと言おうと、老人がなんと思おうと、電車を止めようと、やるべきことをやらないでは、火事を見て見ぬふりをするようなもの。結果的に報われるかどうか迷惑をかけるかどうかではなく、責任を果たしたかどうかが重要なの。まったくお子様はこれだからこまるのよね」

対人恐怖症のあたしが半べそかきながらしぶしぶ承諾する。重い足取りで駅員室に行って、深呼吸をして話し始める。

拍子抜けするほど簡単に事態は収束した。大きな目の若い駅員は、こちらが恐縮するほどていねいだったわ。マジックハンドと細長い棒とガムテープを持つと、小さな目の先輩駅員をつれて現場に急行。若い駅員がホームに腹ばいになって、コンクリートブロックの隙間に挟まった緑ちゃんを発見。細長い棒の先にガムテープを慎重につける。先輩駅員が時計を見ながら『４分３０秒後に入線』と言う。若い駅員は棒をゆっくり伸ばしてガムテープで緑ちゃんを捕捉。やはり、ゆっくり棒を引っ込めて、見事に身柄を確保。先輩駅員がつぶやく、『任務完了、２分４０秒後に入線』。あたしは、何度もお礼を言って、その場を離れ、改札を出る。反対側のホームから電車に乗るべきだったのだが、それを説明する気力もないわ。

試練はさらに続く。プレゼン開始まであと２５分。今の騒動に巻き込んだ駅員たち、興味深そうに捕りもの劇を見ていた老人の視線のある所には戻れない。仕方ない、タクシーに乗ろう。財布の中に千円札が3枚あるのを確かめる。タクシーは簡単につかまった。運転手は同性。つまり女性。普段は、行き先を告げる以外は全く喋らないのだが、何となく落ち着かず、大事なプレゼンがあること、急いでいることを告げる。だからと言って飛ばしてくれるわけではない。都内は慢性渋滞。運転手はすまなそうにしている。

３分前に会社に到着。一服している暇はない。もちろん洗面所に行って化粧を直す暇なんてなかった。会議室には、半分ほどが着席していたが、全員ではない。つまり、間に合ったということ。急いでプロジェクターを準備し、緑色のＵＳＢメモリーを突っ込む。一瞬、間があき、ＵＳＢが壊れたのかと焦るが、正常にファイルが開く。

プレゼンの前半は、市場調査。つまり、提案する計算機能（フィルタリング機能）が他社の同等品には搭載されていないこと、ワン

ランク上の製品では、その機能に需要があること。後半は、貧弱なハードウェアでその機能を実現するために、特別な方法を採用したことを説明する。反応はおおむね好いようだわ。特に最後の特別な方法があたしの自慢。

　無事にプレゼンを終えたかに見えた時、それまでじっと黙って聞いていた上司のキューピー課長、もとい、霧島課長が口を開く。メガネの真ん中を人差し指で上げながら

「水上(みなかみ)君の手法は、大変素晴らしいアィディアのように思われます」

この瞬間、あたしの顔は凍りついた、課長が部下を姓で呼ぶ時、馬鹿丁寧な言い回しで始める時、これは、決まって、相手を叩きのめす時である。課長は冷酷に続ける。

「ですが、今回の製品の場合、ワード数が非常に大きいのが特徴であります。従って、このような計算をすると丸め誤差は無視できなくなり、最後には破たんします」

ガーン、あたしの左脳は空転し、課長の言うことが正しいのかどうか判断できない。だけど右脳は、課長が正しいと言っている。とどめを差すのが課長は好きだわ。

「例えば、……」

と言って、白板へつかつかと歩み寄って、計算を始める。たった3行の数式で片をつけた。自信満々だったあたしはどん底へ突き落とされる。『かちょ～。なんで昨日言ってくれなかったの?』と思うとともに、こんな基本的なことを見過ごした自分が情けないわ。

　唇が動くが言葉がでない。会議室にはしらけた空気が漂い始める。課長がため息をついて会議を締めた。

「では、明日のクライアントとの打ち合わせは中止にして1週間延期してもらうよう依頼しておきます」

凍ったままのあたしは、情けなくて涙が出そうになる。だんだんと涙腺が緩んでくる。会議の出席者は、書類を持ってばらばらと会議室から出ていく。こんな所で泣いてたまるかと歯を食いしばる。

　涙が止まったのはいいが、今度は、鼻水が出てくる。アー鼻水が

滴り落ちそうだ。汗ふき用の深緑色のタオルハンカチで、思いっきり鼻をかむ。その音に驚いて、会議室を出て行きかけた数人が、何事かとこちらを振り向く。涙も鼻水も止まった顔で、キッと睨み返す。振り向いた数人はあわてて顔をそむけて出て行った。

そんなあたしに、同僚の桃姫（本名：熱海桃子）は、こちらを見もせずに、捨て台詞を残す。

「あんた色気ないわね～」

い、色気がないだって！　一番気にしていることを。涙を流せば色気があったの？　そりゃ～、鼻水より色気があるわな～　もう落ち込む気力もなくなった。

その時、ふっと、ゴーストさとる君（本名：月夜野悟）が現れた。彼の存在を全く認識していなかった。ただでさえ影が薄いのにプレゼンに集中していたため、会議室にいたことを今の今まで気がつかなかったの。彼は、自信のなさそうにこう言う。

「あのー。要は精度が上がればいいですよね。例えば、ｄｏｕｂｌｅ、倍精度に」

そんなことはわかっているわよ。ｓｉｎｇｌｅ、単精度しか使えないから苦労しているんじゃないの。あたしをバカにしているのと眼で言う。なおも彼は続ける。

「ですからバッファをうまく利用して倍精度計算を自分でコーディングすれば何とかなるんじゃないでしょうか？」

とたんにあたしの左脳と右脳が同時に回転し始める。２秒後にチーン。ご名算！！

「あんた、頭いいね」

と感心して、次の言葉をゴクリと飲み込む。飲み込んだ言葉は、『なんで会議中に言ってくれないの。今更、助けてくれても手遅れなのよ！！』。あたしも大人になったから、思ったことをなんでも言うわけではないわ。以上が２番目のトラブルの顛末。

いつもなら、昼食を食べて、だれもいない屋上で一服する。この

屋上にわが社の喫煙スペースがあるのだ。灰皿と庇のある喫煙スペースは品の悪いオジサン達で占められているので、あたしは皆から見えないいつもの席に座る。携帯灰皿を左手に持って吸う。いつもの席とは、１m四方ほどのコンクリートブロックにハンカチを敷いたスペース。喫煙スペースのように庇はないが、眺めがよいし、だれも来ないのがいい。

今日は昼を食べる気になれない。男のスモーカーも時間が早いせいかだれもいない。と、彼は黄色い袋を持ってやってきた。

「あれー、碧ちゃんタバコ吸うの？」

気安くあたしを名前で呼ばないでよ。さっき、あたしを姓で呼んで、鉄槌を打ちおろしたキューピー課長だ。課長は悪い人じゃあないし、嫌いなわけではない。それどころか好きとさえ言ってもいい。あたしを拾ってくれた。つまり中途採用してくれたのも課長だし。あたしの仕事をチェックして、左脳を鍛えてくれるのも課長。電話の苦手なあたしに替わって、電話してくれたこともある。ただ、時々、正直すぎて、配慮がないために、周りの心証はいいとは言えない。本人に悪気はないのだが、さっきのあたしのように、彼に撃墜された社員は沢山いる。残念ながら、課長はあたしの恋愛対象ではないわ。なぜなら４０半ばの妻帯者だし、髪は薄くなりかけているし、額は広いわ。お腹は出ているし、メガネをとるとキューピーにそっくり。ようするにオジサンのなりをしたお子様なのだ。

「いや～、さっきは軽薄な意見を言ってごめん。後で悟君に聞いたよ。あの方法なら何とかいけるよ」

あたしは、むすっとして返事をしない。今更ご機嫌取ったって駄目よ。なにより、皆の面前であたしをコケにしたのだから。しかも、それを意識していないのが、また腹立たしいわ。

「まあ、碧ちゃん頑張ってよ」

その後に全く予期しない言葉が続く。

「碧ちゃんは、わが課のエースになる人材なんだから、少々のことでへこたれちゃ駄目だよ」

へ！　今何て？　わが課、つまり、あたしのいる総合課のエース？
　自然と口が開く。当然、くわえていたたばこは、落ちていく。口紅と火をつけたたばこが落ちていく。タイトスカートの上に落ちていく。やばい！　野獣的反射神経でタバコをよけようと立ち上がりながら、大きくステップを踏み出す。キュロットなら、それでも良かったのだろう。だけど、はいていたのはタイトスカートだったの。タバコを避けた所までは良かったのだけど、「びりびりびり」と嫌な音がする。前面は無傷だけれど、お尻がスースーする。なんとバックスリットが不自然に上の方へ延びている。
　課長が言う。
「スカート破れたんじゃないの」
わかりきったこと言わないでよ。とにかく被害状況を正確に把握するのが肝要。課長は、あたしにとっては、草食系でも肉食系でもない。あえて呼ぶなら無機物系だ。後ろを向いて課長に頼む。
「課長、どのくらい破れてますか？」
「うーん。正常クラックが５ｃｍ、そこから異常クラックが１５ｃｍ」
正常クラックじゃなくてバックスリットって言うんですけど。とすると膝上５ｃｍを足して、合計して膝上２５ｃｍ。完全にパンチラ限界を超えている。さすがに課長も事態を理解したようだ。
「さて、今後の方針や如何に……　まずは、代替部品に交換ですかね。悟君がジャージを持っていなかったっけ？」
げげ、それだけは、やめてほしい。確実に１週間は洗濯していない薄汚れたジャージだ。うぐいす色のスーツの上着を着てジャージをはいたあたしを想像する。これなら、まだ埴輪スタイルの女子高生の方がましだ。課長はあたしの眼が不同意と言っているのをわかってくれたようだわ。
「だとすると、応急処置でしょうか」
課長は暫く考えた上で
「ちょっとそこで待っていてください」

そう言って、黄色の弁当袋をコンクリートブロックの上に載せてすたすたと行ってしまった。

戻ってきた課長は小さめの白いバスタオルと携帯裁縫セットを持ってきた。

「諏訪さんに借りてきました」

諏訪さんとは、うちの課で唯一制服をきているおばさんである。なおもあたしの眼が疑念を語っているのを見て

「あ、バスタオルは私のものです。ちゃんと洗濯してありますから」

と言いたす。意外に課長は察しがよい。女子トイレにこもって縫うことも考えたが、そこに行くまでに他の課の社員に見られないとも限らない。あたしは物陰でこそっとスカート脱いで、腰にバスタオルを巻いて、指定席のコンクリートブロックに腰掛けて縫うことにした。

屋上には5月のようなさわやかな風と日差しが満ちている。課長は、これまた指定席らしいあたしの指定席の反対側に座って、黙々と弁当を食べている。応急処置を終え、あたしは、何事もなかったように、タオルを課長に返す。部屋に戻って、諏訪さんにこっそり礼を言って裁縫セットを返した。何故か、他の課員は皆、事態を知っていたらしい。ちらちらとこちらを、あたしの下半身を見る。桃姫がつかつかと寄ってきて、やおら処置部分を触る。ジッと見て

「なるほど〜。意外に裁縫うまいのね。これなら、立派な中学生レベルね」

と皆に聞こえるような大声で言う。あの―　あたしは高校でも裁縫習ったんですけど。これが最後の試練だった。

そんなわけで、あたしは、これより下はないというほど落ち込んだ。と、同時に、これより悪くはならないと思うと、なんだか、猛烈にファイトが湧いてきた。

すべての元凶は視線恐怖症である。駅員さんの視線、ベンチの老人の視線、会議室での視線、同じ課での視線、社内での視線。これ

を気にしなければなんてことはない。それに、不運はあったけど、すべて収まるべくして収まったではないか。うぐいす色のスーツはゴミ箱に収まるしかないけど。この視線恐怖症を克服すれば、あたしの未来はバラ色、あたしの王子さまは白馬に乗ってやってくるし、極楽浄土は金色。極楽浄土？　はまだ早いわね。

　知っている人は、そうでもないのだけど、知らない人の視線は耐えられないの。視線とともに放射される意識があたしをブスブスとあたしを刺していく。は～　とため息。やっぱり、慣れるしかない。慣れるしか、というわけで、知らない人に会えるシステムとしてくだんのオンラインパートナー紹介所に登録することになったの。実にハタ迷惑な女だわ。まあ、もしかしたら、本当に白馬に乗った王子が現れるかもしれないし。全く、その気がないわけじゃないのよ。

牛飼い少年（その1）

携帯の目覚ましがロックをがなりたてる。スヌーズ機能があるので、寝過ごすことはない。先週、さんざんな目に逢ってから、曲をバッハからロックに変えたのだ。たっぷり寝たおかげで、夢を見た。夢の中で桃姫があたしを挑発していた。なんでもゴーストさとる君をあたしが寝取ったらしい。ゴーストさとる君を取り合うのもあり得ないシチュエーションだけど、桃姫にあたしが悪いことをするはずがない。なんたって昨日は、美容院でのヘアーカラーリング（つまり髪をそめること）に付き合ってもらったのだ。

先週金曜日にあたしはおずおずと桃姫に相談した。

「ねえ、桃子。あたし髪を染めたいだけどどうしたらいいの」

「じゃ～染めたら」

そっけない返事。何度か無意味なやり取りして、桃姫は、ようやく、行ったことがない美容院に一人でいけないことを察してくれた。もちろん、自分で染める手もあるんだけど、過去の失敗を考えるとそれもできないわ。かといって、行きつけの美容院では、高度なカラーリングはできそうもないし、行ったことがない美容院に飛び込む勇気はない。美容師さんの、『うちは一見さんお断りなんですけど』というような視線を浴びた日にはもう息も絶え絶え。という次第で、せめて、桃姫の良く知っている美容院を紹介してもらおうと思って相談したの。

あたしが

「赤っぽい茶髪にしたいの」

と言うと、桃姫は、難しい顔した。

「あんたわかってないようね。髪の色、眼の色、ファウンデーションの色、肌の色、服の色・形、これらのバランスが全体の印象をきめるのよ。赤が入っているとわかるような髪にしたら、バランスで

きる組み合わせがなくなるわよ。もちろん、カラーコンタクト、フルメイク、服、靴に投資するだけのお金と時間があれば別だけど」

もちろん、あたしにそんな投資をする余裕はない。ということは、この計画は駄目？　あたしの眼を見て桃子はため息をついた。

「仕方ないわね～。あたしがつきあってあげるわよ」

日曜日に桃姫指定の渋谷のモヤイで待ち合わせた。最初は、桃姫とはわからなかった。黒革の上着に、黒革のミニ、薄ピンクのTシャツ。腰には銀の鎖がじゃらじゃら。おまけに星型のピアス。Tシャツの向こうに豊かな胸があるのがよくわかるわ。桃姫は少し迷って、こぎれいな美容院に連れて行ってくれた。あれこれ、店員さんと相談して、色を選ぶ。二人してあたしの髪をいじりまわしながら、なおもカット、ブローを決めていく。桃姫は

「じゃね～」

と言って、出て行ってしまった。

美容師さんに桃姫は常連なのかと聞くと、今日初めて会ったとのこと。つまり、桃姫は、適当にその場で店を選んだのだ。渋谷で待ち合わせしたのも、単に自分の用事があっただけに違いない。飛び込みで美容院に入る度胸に感心するとともに、それができない自分が情けないわ。何も言わずに付き合ってくれた桃姫の優しさに、惚れそう。

週明けの月曜朝に、明るくなった髪に合いそうな服を探す。出てきたものは、お気に入りのベージュのパンツスーツ。襟にフリルのついたブラウスを着て、鏡に向かってメイクを施す。何か、赤いものはないかと探し回った挙句に出てきたのは、赤いバンダナ。高校の遠足で、目印代わりに皆でしてたもの。試しに首に巻いてみる。う～ん今いち。フリルブラウスをやめて白のカッターブラウスに変更。なんとなくカーボーイ風。わるくない、悪くない。靴は茶のパンプスはやめて、黒のショートブーツに。玄関で全身が映る鏡をみ

ると、結構カッコいいじゃん。よし、準備完了。いざ出勤！

職場に着くと、何となく皆の視線を感じる。あたしは、桃姫の席まで行って、昨日はありがとうと言う。桃姫は
「かわいいじゃん。そうね～６０点ぐらいかな。」
珍しく及第点、つまり、５０点以上をもらえた。でも、かっこいいではなく、かわいい？　どうもあたしのセンスは１ビットずれているようね。多分、かわいいは本当なのだろう。
「ありがとう」
と答える。悔しいけど桃姫のセンスは抜群だ。うちの課のＣＡＤ担当で、デザインをさせたらピカイチ。なんでも服飾専門学校を出たらしい。構造計算までやってくれるから、一体どういう教育を受けたのか謎。でもってわが社の中で一番セクシーだ。単に露出が多いわけではない。小柄な体にはち切れそうな肉体かと思うと、清楚な乙女を演じることもできる。特に眼の表情が豊か。黙っていれば、同性のあたしでもグッとくることがあるわ。唯一の欠点は、その毒舌。うわさでは、その毒舌にくらくらするＭな男も多いらしいから、手がつけられないわ。

午前中は左脳、右脳をフル回転させて、バリバリ仕事をした。先週、問題になった件は、あたしの手を離れて、回路のプーさん（本名：赤倉大輔）の所で止まっている。どうやら、熱設計に問題があるようだ。先ほどからキューピー課長とプーさんが深刻な顔で議論している。課長が言った。
「しかたない、美の山製作所に頼みますか」
美の山製作所と聞いて、課員の視線が止まった。課長は続ける。
「ＯＫがでれば、ベースが確立するので、なんとしても今日中には結論がほしいところだなあ」
その瞬間、皆の視線が３０度、課長から遠ざかる。
「そもそも、熱設計が難しくなったのは、例の新機能を入れたのが

原因だから……」
きた来た来た！
「碧ちゃんに行ってもらいますか」
やっぱり来た。あたしは、うつろな返事をして、しぶしぶ、美の山製作所に電話を入れる。誰も出ない。
「あの～　課長。誰も出ないんですけど。御留守では」
と半分ウキウキして報告する。課長は答える。
「大丈夫だよ、あそこは兼業農家だから。いないってことはないでしょう。ファックス入れて、今からモジュールを持ちこんでください」
確かに。あそこには、牛が４、５頭いたから、まる一日いないなんてことはない。げげ、うし、牛か～
　前回行った時のいやな思い出がよみがえる。あの時は、さんざん脅されていたから、完全武装をして行った。ジーンズ、スニーカー、ウィンドブレーカーに麦わら帽子。駅まで軽トラで迎えに来た息子に、ハイキング客と間違われたぐらいだ。そういう息子も童顔に無精ひげ、手ぬぐい、軍手、長靴といったいでたちだったから、いい勝負だわ。
　美の山製作所は、なんでも４、５年前に親父が独立して作った会社で、親父と一人息子だけで操業しているらしい。山奥に会社を建てたのが先なのか、牛が好きだから山奥に会社を建てたのか、どちらが先なのか、真相は不明だわ。とにかく、プレハブ工場の裏に牛舎があって、放牧地があるの。
　親父がもっぱら工場で働き、息子が牛の世話をしているらしい。そんなところに会社を建ててやっていけるのかと皆、疑問に思うわ。でも、一度一緒に仕事をすると、その技術がピカイチであることが分かるの。今回の製品のように産業用モジュールは過酷な環境で用いられる。しかも機能を１００％作動させて、休みなしで使用することは珍しくないから、熱設計は信頼度が重要。大抵の場合、熱設計は社内で済むのだけれど、今回は、あたしが新しい機能を実装し

たために、発熱量が格段に増えたわ。というわけで、あたしが責任をとって、発熱試験に付き合うことになったの。

最初から牛が嫌いだったわけじゃない。前回、発熱試験が一通り終わって、一服していたら、あのバカ息子（名前は忘れた）が寄ってきた。

「丁度いい。おれの牛を見てくれよ」

とくりくりした目で『牛飼い少年』は言う。別に見たか〜ないんだけど。嫌そうにするあたしを牛舎まで引っ張っていく。

「立派な雌牛だろ。みどりって名前だ」

げげ！　なんであたしとおんなじ名前なの？

「乳もでかいし、尻もでかい」

そりゃー人間とは比べものにならないぐらいでかいわな。

「妊娠してなかったら、やりたいんだけど。みどりちゃん、一発やらしてくれ！」

あたしは、思わず、くわえていたタバコを落とした。あわててタバコを拾おうとして手を伸ばしたら、『牛の』みどりが排泄をした。そのしぶきが伸ばした手に降りかかる。あの時、あたしは誓ったのよ。今度来るときは絶対、軍手を持ってこようと。

今回は、急なお話。軍手はおろか、装備は標準。ピカピカでサラサラの染めたての髪に、お気に入りのスーツ。皆の同情の視線を浴びながら出かけた。

おかしい。おかしい。胸騒ぎがする。特急に乗る前に電話したけど、だれも出ない。最寄りの無人駅に着いて電話したけど誰も出ない。幸い、駅前にハイキング客相手のタクシーが止まっていたので、それに乗って行く。運転手さんによれば、親父も息子もそこらあたりでの評判がいいらしい。面倒見がよく、すぐに地元に溶け込んだそうだ。目下のところ、息子の花嫁ポジションを狙って、３人の乙女が熾烈な？　かわいらしい？　競争をしているそうだ。運転手は

ぺらぺらと色々なことを喋ったが、覚えていない。一度心配になると、他のことを考えられないあたしは、上の空。

タクシーの釣銭を受け取るのももどかしく、工場に駆け込む。誰もいない。ファックスから出がけに送った用紙が出たまま。やばい、事件に巻き込まれた？　何が起きたの？

牛飼い少年（その2）

プレハブ工場の裏にある牛舎に駆け込む。と、そこには、白衣を着た青年と、つなぎを来たオジサンが1頭の牛のそばにいた。オジサンの方は、美の山製作所の社長である。青年の方は、良く見るとあのバカ息子、もとい、牛飼い少年であった。二人とも深刻そうな顔つきだけど、事件に巻き込まれたようでもないわ。ホッとする。

あたしは、切り出した。

「あの～。黒川電子工房の水上ですけど。いつもの発熱試験をお願いにあがりました」

社長が答える。

「あ～黒川さんとこの方ですか」

牛飼い少年が言う。

「見ての通り、取り込み中。出直してくんない」

どうやら、雌牛（名前はみどり）が出産中で、しかも難産だそうだ。予定日を過ぎて、ようやく破水したが、まだまだ子牛が出そうにもないと。電話に全く出なかったぐらいだから深刻な事態らしい。あたしは、社長に哀願する。

「どうしても今日中に結果をいただきたいのですけど」

牛飼い少年は

「だめ、駄目。帰った、帰った！」

あたしも、遊びで来ているわけじゃないのよ。会社背負ってんだから。なおも食い下がろうとするあたしを見て、とうとう、牛飼い少年は怒りだした。

「お前、命と仕事とどっちが大事だと思ってんだ。それでも人間か！」

ガーン。確かに。あたしは人間以下か。そうかもしれない。シュンとなる。牛飼い少年はさらに追い打ちをかける。

「全く、だから別嬪（べっぴん）は嫌いなんだ。なんでもわがままが通ると思っ

ていやがる」
あたしは全面降伏した。しらけた雰囲気を社長がとりなしてれる。
「まあまあ、黒川さんも事情があるんだし、はるばる来てくれたんだし。なあ、歩（あゆむ）、その～　わしが試験の準備をしている間に、この方、えーと名前は水上さんだったかな、に手伝ってもらったらどうかな？」
牛飼い少年（あゆむという名前らしい）は、視線を外して、考え込む。
「役立たずの別嬪に何ができるって言うんだ」
よほど、別嬪、つまり、美人に恨みがあるらしい。え、あたしって別嬪なの！
そして、ついに少年は折れた。
「親父がそういうなら、俺はそれでもいいよ」
社長は、ほっとした様子。息子に手をやいてんのかあ。
「そんじゃー　わしは試験の準備をしてくるから、水上さん、後はよろしく」
と言って、社長はあたしからモジュールと試験用コードの入った緑色のＵＳＢメモリーを受け取って工場の方へ行ってしまった。
よろしくと言われたけど、えーと。あたしは何をすればいいの？
牛飼い少年は、やっと、こちらを向いた。上から下まで、じっくり見て。
「おまえ、この間、みどりに糞かけられたヤツか」
「糞かけられたヤツとは何よ。ちゃんと名前で呼んでよ。あたしの名前は水上碧（みなかみみどり）。みどりよ！」
牛飼い少年は、それまでの険しい表情を和らげた。
「ほほう、同じみどりか。それじゃーお前もみどりと同じ難産型か？　それとも安産型か？」
「し、知りません！」
あたしは逆襲する。
「あんた、いつも別嬪に向かってそんなこと聞くの？　そんなじゃ

ー誰も嫁にこないわよ！」
牛飼い少年は、まじめな顔にもどる。
「とりあえず、その上等で、役立たずの服は着替えてくれない。汚れるだろ。あ、着替えなんかないよなあ。ちょっと、こっち来いや」
そう言って、母屋らしい小屋に向かっていく。あたしが、少年を追いかけながら
「ねぇねぇ。それより、難産なら、お医者さん、獣医さん呼んだら。この辺に獣医さんはいないの？」
と言うと。少年はいたずらそうな眼で
「ここにいるよ」
と自分の顔をさす。え、この子、獣医なの。そういえばタクシーの運転手が『獣医』がどうのこうのと言っていたけど、この子なの。なんで獣医が牛飼ってんの。なんで獣医が電気屋手伝ってんの。わけわかんない。

つなぎの方は、洗濯して干してあったので良かったけど、長靴の方はドロドロで、ホースの水で洗った。中まで洗ったので、靴の中はまだ濡れている。服だけでなく、パンストも脱いで下着だけになってつなぎを着た。う～なんだか気持ち悪いわ。
「で、あたしは何すればいいの？」
少年は答える。
「う～ん。とりあえず何もしなくていい」
「はあ？」
少年は手袋をはめて、牛の『みどり』のお尻から手をいれる。ズズっと。もしかして、子宮まで手を入れてるの？　まさぐっている。なんだかあたしは興奮してきた。あたしはゴクリと唾を飲み込む。やばい、やばい。冷静に、冷静にと自分に言い聞かせる。
どのくらい時間がたっただろうか。汗でつなぎが肌に貼りついてくる。牛飼い少年はどこからか黒い紐を持ってきた。もしかしてＳＭ？　先ほどと同じように『みどり』のお尻に紐を手にもって突っ

込んだ。何やらもそもそやっている。
「よし、前足につないだ。やるぞ」
やるって、何やんの？　もしかして引っ張り出すの？
「親父を呼んできてくれ」
工場に行くと、上下に分かれた作業着に着替えた社長さんが、何十ものワイヤーをモジュールにつなぎこんだところのようだ。４台のモニターにカメラ画像、ＣＡＤ図、回路図、試験コードを出して比較している。画像の方は赤外線カメラの映像に違いない。ＣＡＤ図にはセンサー（熱電対）が赤点で示されている。牛舎との雰囲気の違いに頭がクラクラする。まるで異世界に迷い込んだようだわ。準備の方はあらかた終了した模様。
息子さんが呼んでいること伝えると。
「分かった。１０分後に行く」
と答えた。牛舎にもどると、牛の『みどり』のお尻から黒い紐が５０ｃｍほど出ており、その先に茶色の長いロープが数本つながれている。そのうち社長さんが、またつなぎに着替えて戻ってきた。
「親父、引っ張り出すぞ」
そう言って、社長さんにロープを１本渡す。社長さんは何も言わずにうなずく。やっぱり、この少年が獣医さんて本当かも。と感心していると、少年は
「ハイ」
と言って、あたしにもロープを渡してくれた。えー　私も引っ張るの？
「お前、力持ちだろ」
少年のくせに、別嬪だの力持ちだの、よくもちあげてくれるわねぇ。なら、やってやろうじゃないの。あたしの力におどろくな！
３人で引く。
「せーの、せーの、せーの」
なかなか手ごわい。運動会の綱引きを思い出すわ。
「せーの、せーの、セーノ、セーノ」

息がみだれてきた。まだなの～
「セーノ、セーノ、セーノ！、セーノ！」
あ！　なんか出てきた。足？
「もうちょっと」
「セーノ！、セーノ！、セーノ！、セーノ！」
なんか黒い塊が出てきた。
「もうちょっと！」
「セーノ！、セーノ！、セ～ノ、せ～の」
どさっと、何かが地面に落ちる。
　良く見ると足が４本あって、頭もある。うしだ。子牛だわ！　これが産まれ落ちるってこと？　でも生きてるのかな？　あ、息している。息してるわ！　母牛は、子牛を舐め始めた。お～感動！　牛でもやっぱり子供がかわいいんだ！　ふっと視線を感じる、父子がにやにやしてあたしを見ている。子牛よりあたしの方が面白いみたい。コホンと咳払いをする。
　社長さんが
「じゃ、わしはもどるぞ」
と言うと、少年は
「おれは、子牛が乳をのむまで見てる」
と答える。で、あたしはどうしたらいいの？　少年の元に留まることにした。
　一時間ほどたっただろうか。子牛は自力で立って、母牛の乳を飲み始めた。全く、子牛はすごい！
「さて、お前はどうする？　とりあえず、シャワーでもあびるか？」
寒気のしてきたあたしは、ウンウンとうなずく。

　シャワーを浴びてすっきりした。メイクも強引に落とした。化粧水がないのはまだしも、汗をすった下着が気持ち悪い～。自宅ならノーブラ、ノーパンもＯＫなんだけど。あ～　下着が気持ち悪い～
と思いながらスーツも着る。しょっぱい顔をしながら、工場へ顔

を出すと。また、作業着に着替えた社長さんが
「試験の方は、大丈夫そうだよ」
と言う。それからあたしたちは正規の発熱試験を行った。念には念をと、チェックをして異常がないことを確認。ふー　一段落。あとは、報告書にまとめれば、任務完了。
　根を詰めたせいか、頭が痛い。時計をみると、げげ、こんな時間！　今日中に帰れるかなあと思いながら立ち上がると、ふらふらと足元がおぼつかない。なんだか吐き気までしてきたわ。熱もありそう。う～まずい。完璧に風邪をひいた。あたしの場合、風邪を引くと、まず頭痛がする。さらにひどいと熱が出て吐き気がする。もっとひどいとレベル3。今のあたしはレベル2の風邪ね。
「社長。あたし、風邪をひいたみたい。ちょっと帰れそうもないから休ませてもらえます？」
あたしは、ソファーにへなへなと倒れこむ。
　そこへ、シャワーを浴びて、すっきりした少年が頭を拭きながらやって来た。片手にあけていない缶ビールを持っている。
「おい、歩。風邪薬もってきてくれないか？　水上さん風邪をひいたみたいだ」
と、やさしい社長の声。少年は、市販薬の瓶をもってきて、あたしに尋ねた。
「お前、何歳だ？」
左脳が止まって、右脳も止まりそうな、あたしは
「２８歳」
と無防備に答える。
「ということは、１５歳以上だから、1回に3錠だ」
なにバカなこと言ってんの、と思ったが、つっこむ気力もない。少年は、あたしに3錠渡して飲めという。あたしは3錠口に入れて、水は？　とゼスチャーで伝える。
「ああ、水か？　水がないと飲めないのか？　しょうがない、一口だけだぜ」

と缶ビールをあけて渡してくれた。ちょっと、薬とお酒の組み合わせってヤバいんじゃないの。あんたホントに獣医？　あたしは2口飲んだ。

「歩、ベットに連れて行ってやれ」

社長が言う。

「オレのベット？　しょうがないな」

と少年はあたしを彼の部屋に引っ張って行った。ありがたいことに清潔なジャージ（トレパン）とトレーナーを渡してくれた。

「むこう向いているから、着替えな」

あたしは、礼を言って、着替える。あ～洗いたてのトレーナーは気持ちがいいなあ。それに比べて下着が気持ち悪る～　（この時、あたしは声に出して呟いていたらしい。）　のろのろと布団にもぐるこむ。頭がずきずきする。もしかしたら、レベル3の風邪？　もーなんにも考えられないわ。

夢をみていたのかもしれない。少年があたしの顔を覗き込んできた。

「パンツ買ってきたよ」

あたしは、夢の中で返事をする。

「置いといて～　後で使うから」

少年は優しい声で言う。

「コンドームも買ってきたよ」

あたしは、夢の中で返事をする。

「置いといて～　後で使うから。」

まだ、夢の中らしい。牛飼い少年とゴーストさとる君がジャージを取り合っている。勝った方があたしと星空の下でエッチをすることになっているらしい。ホント男はバカだねえ。

目がさめる。まだ、頭がぼーっとしている。窓からの光がまぶしい。右脳がゆっくり回転し始める。椅子の上にスーツが畳まれてお

いてある。メガネを探し当てて、良く見ると、スーツの上にショーツとブラがきちんと置かれてあるわ。だ、誰が畳んだの？　あ、あたしは畳んでいないよ。畳んだ記憶はない。少年だ！　ということは、あたしはノーパン、ノーブラ？　確かめるとブラはしてないがショーツははいている。しかもショーツはピンク？　スーツの上のショーツは白。ようやく左脳が回り始める。スーツを着ながら、状況を整理する。あたしがはいているのは、ピンクのショーツ。あたしのではない。ということは、あの少年がコンビニで買ったに違いない。とすると、誰が、あたしにショーツをはかせたの？　（1）あたしが自分ではいた。（2）あの少年がはかせた。うーんわからない。記憶がない。ということは（2）？　それよりも『コンドーム』がどうとか言っていた気がする。あはは、まさかね～　これ以上考えるのはやめておくわ。

「おはよーございます」

自分の声が頭にひびく。まだ、頭痛が残っている。朝食の時間に間に合ったらしい。ベーコンエッグと牛乳、オレンジジュースをいただく。うまい。当然だ。昨晩は何も食べていない。あれ、もしかしてこの牛乳、あの牛舎の牛の？

　食べながら、社長さんの話を聞く。昨晩の内に課長に電話して、すべて報告したらしい。あたしが風邪を引いて今日は会社を休むかもしれないとも言ってくれたそうだ。社長さんに、あたしが泊ったことを課長に報告したか確かめた所、そこまでは、言っていないとのこと。案外、社長さん気がきく。牛飼い少年の方は静かだ。

　朝食後に牛舎を見に行く。母子ともども健康。子牛は雌。名前は決めてないそうだ。どうせ売り渡すので決めなくてもいいとのこと。

「えー　決めようよ。名前がなくちゃかわいそうよ」

とあたしが言うと

「じゃー　水上さんが決めてくれ」

と言われた。

「そうねー。みどりの子だから、べにこ（紅子）はどう」
「いいね。べにこで決まりだ」

駅まで軽トラで送ってもらう。思い切ってあたしは言った。
「ピンクのショーツありがとう。何かお礼をしなくちゃね」
牛飼い少年はお礼なんていらないという顔をしながら運転している。
「ところで、あたし、自分でショーツはいた記憶ないだけど、もしかしてあなた？」
少年は、黙ってうなずく。あたしのトーンが半音階上がる
「ということは見たわね？」
少年は答える。
「い、いや、暗くて何も見えなかった」
「でもさわったでしょう」
と、あたしは、牛の「みどり」のお尻に入っていく少年の手を思い出した。
「そら、さわらなきゃー　できんないなー」
少年の答えも半音階上がっている。さらに半音階上げてあたしは聞く。
「それ以外は？　それ以外に何かした？」
少年は、プルプルと首を横にふる。
「ホントに？　ホントに何もしなかった？」
少年は、ウンウンと首を縦にふる。ふー　安心した。

無人駅について、あたしは、
「お礼をしなくちゃね」
と言って、少年の頬にかるくキスをした。牛飼い少年はいつものいたずらな眼に戻っていた。
「今度また来いよ。体調整えて来い。星空の下で一発やろう」
あーばかだ、あたしはバカだ。こんなバカ息子にキスしたなんて。
軽トラを見送って、ホームで特急を待っていると、神様の視線を

感じた。
「これが第一の天罰じゃ」
あたしは、空を見上げて、視線に答える。
「これが天罰？　なら、いつでも歓迎よ」

牛飼い少年（その３）

五月に入って、風はさわやかに、日差しは強くなった。あたしは、あの日（キューピー課長にコケにされ、励まされた日）以来、時々、屋上で課長と一緒に昼を食べる。課長もあたしもそれぞれの指定席、つまりコンクリートブロックのあちら側とこちら側に、背中合わせに座って黙々と昼を食べる。課長はお弁当を食べ、あたしはサンドイッチをほおばる。

最初のうちは、課長がエースだったころの話をあれこれ聞いたのだが、そのうち、お互いに、しゃべらなくなった。元来、二人ともおしゃべりではないから。

わが社のエースといっても、そんな役職があるわけじゃないんだけど、なんとなく、皆がエースと認める社員がいる。現在のエースは、あたしのいる総合課の課長補佐の十和田幸雄さん（通称ゆきさん）で、その前の代のエースがキューピー課長らしい。総合課自体は、わが社の中でも課員１０人ほどの小さい課。わが社、つまり、黒川電子工房には、３つ部があって、その一つが産業機械部で、産業機械部の中に重機課と光機課と総合課がある。黒川電子工房は、最初は所帯１０人ほどの会社だったらしいけど、だんだん人数が増えいったの。ヒット商品が出るたびに、新しい課や、部が分家のように増えたんだけど、本家にあたるのがあたしのいる総合課。総合課は、悪く言えば、なんでも屋なんだけど、本家ということで、社内でも一目置かれている。それに、なぜか、代々のエースは、総合課の人間か、総合課出身者で占められているわ。そんなわけで、総合課のエースと言えば本家の跡取り息子のようなもので、わが社のエースといってもいいぐらいよ。課長はあたしをエースになる人材と言ったけど、９９％冗談。だって、エースのエースたるゆえんは、クライアントの意向をくみ取って、オリジナルな商品を作ることだから。視線恐怖症のあたしは、クライアントとまともに話し合うこ

ともできない。
　時々、課長は、一服するあたしに
「碧ちゃん、タバコは体に悪いよ」
と諭す。あたしは、
「そうね、結婚するか、エースになったらやめるわ」
と切り返す。すると課長は
「ははは、そうか、じゃ～当分先だね」
と真面目に言う。つまり、あの課長の言葉は冗談だったということ。
それでも、あたしは課長のために頑張りたいと思ってるわ。

　あたしが美の山製作所に一泊した翌日は、風邪をひいていたせいもあって、会社はお休みにした。もちろん、着替えもせずに会社に直行すれば、お泊りだったことがばれるわけで、それが嫌だったのも大きな理由。もう、あの牛飼い少年（ちゃんと歩（あゆむ）という名前がある）にも会うことがないと安心してたんだけど、ゴールデンウィーク明けに、彼は会社までやってきた。

「こんちはー」
長靴は、はいていないし、タオルを首にかけていないし、意外にダンディだわ。課長補佐のゆきさんが
「あれ、美の山さんちの歩君じゃない。久しぶり、元気？　今日はどうしたの？」
と聞くと
「いや～、おふくろの顔を見た帰りです」
なんでも、体の弱い母親を時々見舞っているそうだ。ゆきさんが
「そうか、それはご苦労でしたね」
と言うと、歩君は
「折角、都会に来たんだし、別嬪の顔も見ていかないと損だし」
とわけのわからないことを言う。丁度、総合課では、懸案のプロジェクトが片付いて、皆で、お疲れさま会、つまり、打ち上げをやろ

うかと相談していた所だった。というわけで、課長と諏訪さんを除いた課員と歩君で飲みに行くことになった。あたしは、なんとなく、悪い予感がしたのだけど……　一緒に行くことにした。

　居酒屋に着くと、歩君は当然のようにあたしの隣に座った。仲がいいらしいプーさんがさらにその隣。初顔合わせの桃姫は興味深々で、彼のまん前に陣取る。

　乾杯の後は、先日のあたしの美の山行きの顛末が話題になる。なぜか、あたしが一泊したことを皆知っているらしい。なぜ？　誰がちくった？　歩か？　歩にするどい視線を向けると、プルプルと首を横にふる。あたしの視線の効果か、それとも、彼が紳士なのか、余計なことは言わない。そのうち、プーさんと歩は、プーさんのペットのワニの話で盛り上がりだした。ゴーストさとる君も寄ってきて、彼の熱帯魚（グッピー）の自慢をしている。あたしの危機は去ったわね。安心して、ビール、サワー、焼酎と杯を重ねた。

　いつの間にか、牛の話になって、さらに獣医になったいきさつを彼が語りはじめた。

「ホントは、産婦人科医になりたかったんです」

やっぱり、この少年は変態だ。遠くをみながら少年は言う。

「おふくろが俺を生んだ時に、ひどく出血したらしい。一命は取り留めたんだけど、1年ぐらい寝たきりになった。だんだんと回復したんですけど、今でも体が弱くあまり無理はきかない。それで、りっぱな産婦人科医になって、皆が、おふくろや親父のように苦労しなくていいようにと思ったんです。それに、出産に立ち会うのは、神様になったようなものだし」

　ふと気がつくと、桃姫はうっとりするような眼で歩君を見ている。もしかして、『歩に惚れたの？』　目線で尋ねると、桃姫はとぼけた。あたしが歩に突っ込みをいれる。

「で、産婦人科医になるはずが、どうして獣医なの？」

「あはは、どうしてかな？　牛や家畜の相手も面白いよ。そういう

みどりちゃんもみどりの出産に感動してたじゃないか」
「ややこしいこと言わないでよ。牛の『みどり』の出産に、水上碧（みなかみみどり）が感動したって、言ってよ！」
「みどりはみどりじゃないか」
歩は、話題を変えた。
「あ、そうだ、忘れないうちに渡しとくよ」
と言って、鞄から紙袋を取り出して、あたしにくれた。紙袋の中には上等そうな小箱が入っている。歩は、あわてて
「今、開けなくていいよ。あとでいいよ。後で」
と言う。桃姫が目線で『何もらったのよ。もしかしてプレゼント？』と詰問する。仕方ない、小箱をテーブルの上に取り出す。歩が『あ～あ』という顔をする。コーヒー色の小箱には何やら横文字がかいてある。透明ラップされているので、高価なものではない。チョコレート？　小箱を裏返すと、品名は……　桃姫が顔を寄せてきた。
「コンドーム」
と桃姫がつぶやく。歩が言いわけをする。
「忘れ物を返そうと思って」
あたしが、
「これは、あたしのものじゃないわ！」
と言うと、歩は
「確かに最初に買ったのは俺だけど。みどりが後で使うって言ったじゃないか」
（いつのまにかあたしを呼び捨てにしている。）
「言っていない！」
「言った！」
「言っていないったら言っていない！」
「絶対に言った！」
「絶対に言っていな……」
あれ？　もしかしら、あたし
「……言ったかも」

その後、桃姫による歩の尋問が始まった。
「あなたは、なぜコンドームを買ったのですか?」
「いや、それは……　コンビニに寄ったついでに……」
「あなたは、なぜコンビニに寄ったのですか?」
「いや、それは……　パンティを買うためで……」
「あなたは、なんの目的でパンティを買ったのですか?」
「いや、それは……　碧さんにはかせるために……」
「あなたが、碧さんにはかせたのですか?」
「はい」
「あなたは、その前後にこのコンドームを使いましたか?」
「いいえ」
「ほんとうに使いませんでしたか?」
「はい、誓って、使っておりません」
「証拠はありますか?」
「まだ、封をきっていません」
「なるほど。これは、確かな証拠ですね。それでは、以上で、証人尋問を終わります」
と、最後には、桃姫はおかしそうに締めくくった。
あたしは、コンドームを彼の方に押しやって
「返すわよ」
と言うと、歩は、
「あーそうか、今度うちに来た時に、星空の下でやろうと約束したっけ。じゃ～俺が預かっとくわ」
「そんな約束してないわ!」
「約束していなかったけ?」
「してない!」
「それなら、お前がもっとけよ。後で使うって言っただろ」
あたしは、ぐうの音もでなかった。結局、ほとんどすべてが白日のもとにさらされた。あたしが覚えていないことまで。あの時、ブラとショーツを外して、床に脱ぎ散らしたのはあたしらしい。スーツと

下着を畳んで、新しいショーツをはかせたのは歩。あたしは結構いい加減な女だ。歩は意外に紳士で、意外にいい男だ。でも、コンドーム買うなんて冗談きついわ。やっぱりアイツは変態だ。

しこたま飲んで、おまけにお土産も貰って、あたしは上機嫌で帰宅した。そのお土産は本棚にかざってある。

ぜんまい仕掛けのキツネさん（その1）

ようやく候補者リストが送られてきた。時間がかかったのには、理由がある。あたしは、オンラインということで、てっきり、ネット上ですべて済ませられると思ったの。でも、正規登録をしたあたしにオンラインパートナー紹介システムからこんな要求がきた。

「当システムでは、お客様の安全を確保するために、戸籍謄本をご提出していただいております。ステージAに進むために、至急、ご提出願います。いただいた謄本は、厳重に管理し、……」

どうやら、いわゆる出会い系につきもののトラブルを防ぐために、身分保障としての謄本を預かるらしい。ステージAとは、最初にパートナー候補を紹介する段階で、最大3名の候補者と同時併行でつき合うことができる。ステージBは、候補が絞られ、一対一でつき合っている段階。ステージCになると謄本をお互いに開示することができるらしい。あれ？　ステージCの定義がないじゃないの。まさか、あのA、B、Cじゃないわよね。

というわけで、本籍地の名古屋から戸籍謄本を取り寄せるのに時間がかかったのよ。送られてきた3人の候補には、それぞれの型（タイプ）が記載されている。最初の候補は『シンクロタイプ』、2番目の候補は『シーソータイプ』、3番目のタイプは『サプライズタイプ』。一体どういう意味？　ヘルプを読むと。

「シンクロタイプ：基本プロフィール、性格診断結果において、類似率が高い場合です。うまくいくカップルの基本は、性格や嗜好が似ていることであり、いわゆる似た物同士は、円満な夫婦生活をおくれる可能性が高いです」

そうね。離婚の一番の原因は「性格の不一致」らしいから、似た者同士ならうまくいきそうね、とあたしはうなずく。

「シーソータイプ：基本プロフィール、性格診断結果において相補性が高い場合です。丁度、シーソーでは、自分が地面に降りること

によって相手が高くなるように、場面に合わせて異質なものを組み合わせるとによって、より高い地点へ到達できます。このタイプのカップルは、鍵と鍵穴のように離れられない関係になることがあります」

う〜ん、そうかもしれない。でも、これって似てない者同士ってこと？　さっきのシンクロタイプの説明と矛盾しない？

「サプライズタイプ：基本プロフィール、性格診断結果に関係なくランダムに抽出された候補の場合は、このタイプに分類されます。生物は偶発的な突然変異によって進化してきました。このような偶発性のもつ潜在的な可能性に着目しました」

え〜、ランダム？　ってことはなんでもありってことじゃない。全く、いい加減なプログラムだ！　あたしだったらもっとましなプログラムを作るわよ。こんなプログラムを作ったSE（システムエンジニア）の顔が見たいわ、とあたしは憤慨した。（後日、そのSEの顔を拝むことになるとは夢にも思っていなかったけど。）

さて、あたしは、それぞれの候補に会うか会わないか、「イエス」か「ノー」かを選択できる。注意書きを読むと、3名のうち、2名以上を「イエス」としなければならない。げげ、ということは、ほとんど選択の余地がないじゃない！　さらに読み進むと。

「お互いがイエスと回答した場合に　対面ステージを体験することができます……　このような条件を課すことによって、ほぼ、毎回、対面する機会が得られます」

なるほど。お互いが　2／3　の確率で『イエス』を選択すれば、『イエスーイエス』の確率は　2／3　x　2／3　だから　4／9　。つまり、候補者が3人だと、平均　1．3人と対面（デート）できるわけね。

「対面ステージを終えたら、ただちに関係をキープ（保存）するかどうかをご回答願います。なお、同時には、3名までキープすることができ。キープ候補者数が3名に足りない場合は、新たなパートナー候補を紹介いたします。また、ポイントが貯まりますと、ボー

ナスとして、キープ数の上限と、一度に紹介する候補者数の上限が増えるという特典がございます」

？？　なんだか、ゲームみたいね。ま、いいか。あたしは、ヘビーなプレイヤーに成るつもりはないし。後のことは後で考えればいいわ。

あたしは、３人全部にイエスをつけた。こうしておけば、平均２人とデートできる計算になる。それに、まじめに結婚相手をさがすのが目的ではなく、知らない人と合うのが目的だから、片っぱしからイエスにして、片っぱしからブレイク（キープの反対）していけば、沢山の人と会えるわ。

数日後に「シンクロタイプ」の候補者の有馬さんと対面することになった。写真をみると、髪が長く、顎がとがって、ほっそりした顔立ち。眼もやや釣り上がり気味のキツネ顔だ。すこし、神経質な雰囲気があり、見ようによっては、ハンサム。シンクロタイプなら共通点が多々あるはずだわ。と思って、基本プロフィールを見ると、なんと、職業はプログラマー。プログラマーとは、プログラムを書く人のことで、ＳＥの一種である。つまり、あたしと同業者。他に共通点は見あたらない、とすると、職業が似ているだけでシンクロタイプに分類されるの？　まてよ、もしかして性格が似ているとか。性格診断結果は、ステージＡではお互いに見られないから、何とも言えないわね～　職業がおんなじで、性格もおんなじって、うまくいかない典型のような気がする。まあ、どうせ一度会ったら、すぐにブレイクするわけだし、気にしない気にしない。

有馬さんと２、３度掲示板を通じてやり取りをして、待ち合わせの場所と日時を決めた。気にしないといいつつ、その日が近づくにつれて、あたしは、落ち着かない。どんな服を着ていくか考えていたら、あたしは、重大な過ちを犯したことに気づいた。

登録時に、必ず、自分の写真を数枚アップしなければならない。その時に、あたしは、深く考えもせずに、３年以上前、つまり２５

歳までの写真をアップした。なんとなく、若く見せたい、と考えたのよ。女なら分かってくれるわよね～　ところが、システムはそんなことはお見通しで、こんな注意書きがあったの。

「写真は必ず、半年以内に撮影したものをアップロード願います。また、１枚は必ず、無帽でお願いします」

なんだか、証明写真みたい。まったく注文の多いシステムね！　視線恐怖症のあたしが心配そうに

「どうしよう。対面した時に、若い時の写真を使ったことがばれたらどうしよう」

と言うと、合理性のあたしが分析する

「髪の色は違うし、メガネはしているし、それに肌の張りが違うわよ。ばれないわけがないじゃない」

獣のあたしが吠える

「気にしない、そんな些細なこと気にしない。女は度胸よ」

合理性のあたしが結論を宣告する。

「すぐに新しい写真に交換し、その旨を相手に伝えること」

視線恐怖症のあたしが食い下がる

「でも、どう思われるかしら。いい加減な女と思われたらどうしよう」

合理性のあたしがため息をつく。

「いい加減な女と見られるかもしれないし、ちゃんと訂正した誠実な女と見られるかもしれないし、それは相手次第。でも誠実な男なら、誠実さをわかってくれるんじゃないの」

それから2時間、あたしは、デジカメをセルフタイマーにして、撮りまくった。

待ち合わせの場所は、地下鉄駅そばの喫茶店。時間は午後1時１５分。実にプログラマーらしい時間指定だわ。１５分を指定すると、遅くとも２０分には到着しないといけないというプレッシャーを感じる。携帯電話の番号は、やはり安全上の理由で開示しないので、

待ち合わせ方法はきっちり決めておく必要がある。有馬さんは、喫茶店に入って右奥のテーブルでトランプをして待っていると、あたしは、白のワンピースに赤いポシェットを肩からかけていることにした。もちろん、お互いの写真は見ているので、そこまで決めなくてもいいんでしょうけど。なんだかスパイごっこのようで緊張してきたわ。

ぜんまい仕掛けのキツネさん（その2）

少し歩くと言われたので、ジョギングシューズに麦わら帽子。赤いポシェットに必要最低限の装備を詰め込む。飾り気のない白いワンピースと合わせると、良く言えば、少女って所かしら。でもこの年でこの格好だとコスプレにしか見えない？　気にしない、気にしない。

それにしても、待ち合わせ時にトランプをしているってどういうこと？　トランプ占いでもやってくれるのかしら、それともあたしとトランプで勝負するつもりかしら？　悪いけど、スピードなら、あたしに敵う人はいないわよ。　地下鉄を降りたころから、緊張が高まっていく。最初になんて声をかければいいかしら。『有馬さんでいらっしゃいますか。初めまして、塩原（あたしの本名は塩原、通称は水上）です。よろしくお願いします』と言えばいいの？　う～ん。仕事なら、『黒川電子工房の水上と申します』と挨拶すれば済むんだけど、と考えながら、待ち合わせの喫茶店に入る。最近、流行りのモダンなコーヒー店ではなく、普通の喫茶店だ。ガラス窓はスモークになっていて、中が見えない。扉をあけるとカラン、カランとベルが鳴る。５月の日差しに満ちた屋外から、暗い喫茶店の中に入ると、一瞬、何も見えない。指定された右奥隅に眼をやると、誰かが座っている。近づいていくが、顔をあげない。ちらっとあたしを見ると

「お座りください」

と言う。トランプをシャッフルしている。シャッ、シャッ、シャッ。二山にわけて、タッタッタッタッタ。片手で、サック、サック。速い！　きれい！　まるで機械のようにシャッフルする。こちらをちらりと見る。なるべく、あたしと視線を合わせないようにしているように思える。あたしは、相手の視線を気にせずに、じっくり顔を見ることができた。写真より気弱そうな顔だ。携帯をちらっと見て

ようやく顔をあげる。
「９０秒、予定より早かったですね」
はあ？　もしかして、予定の待ち合わせ時刻になるまで９０秒間無言でトランプをシャッフルしてたの？　カチンときて、こう言ってやった。
「そうなの？　９０秒、遅かった方が良かったかしら？」
「１５０秒以下なら、予定の範囲内です。時間があるので、あなたと私の相性を占ってみましょうか？」
あたしは思わず答える。
「いいえ、結構です！」
ヤバい、つい、『結構です！』なんて言ったけど、最初から険悪な雰囲気では、この後の展開が不安。
「そうですか、それでは、少し予定より早いですが、出発しましょうか？」
アイツ（有馬さん）は、あっさり引きさがる。携帯の画面をチェックしている。今日のスケジュールが入っているのに違いない。
今日のデートは、アイツにすべてお任せ。あたしはただついていけばいい、女に生れて良かったと思う。ただし、いきなり初対面で、あちこち連れまわされるのは不安。一体どんな所に連れて行かれるのか？　まあ、車でドライブするわけじゃないし、大都会の真ん中で、襲われることもないだろうし、なんたって、戸籍謄本をシステムに託している。おかしな犯罪に巻き込まれることはないわよ。きっと。

アイツは分速６０ｍで歩く。ゆっくりと、しかも大股で。あたしもつられて大股になる。あたしの場合、誰かと一緒に歩くと、決まってそのペースに合わせてしまう。何とも癪に触るわ。
最初に行ったのは、古式時計館。江戸時代の時刻制度に合わせた古い時計が展示されている。江戸時代は、昼を６等分、夜を６等分し、一刻としていた。夏は昼が長く、夜が短い。冬はその逆。等分

するということは、昼と夜で一刻の長さが違う。一方、振り子時計の振り子の周期は一定。さてどうするか。昼用と夜用の2種類の振り子を用意した。しかも、季節によって、昼と夜の長さは変わっていくので、振り子の長さも季節によって変えていかなければならない……　アイツは喜々として解説した。面白いのはわかるけど、何もこんなところに連れてくることはないんじゃないの？　あたしはおざなりの相槌をうった。

　次に行ったのは、千代紙のお店。カラフルで、かわいい意匠の千代紙が棚一杯に置いてある。昔の日本にこんなに素敵なデザインがあったとは驚き。同じデザインのハンカチも置いてある。あたしは、手にとって触ってみようとした。

「待った！　だめだよ触っちゃ。お店の大事な売りものなんだから。買う気もない人が触って汚しでもしたらどうするんですか」

と小言を言う。『ちょっとぐらい触ったって、いいじゃないの』と言おうとしてやめた。あたしにも似たような経験がある。学生のころ、女友達に『つき合って！』と言われて、ショッピングにつき合ったことがある。友達と銀座をぶらぶらしながら、ウィンドウショッピングをする。上等な紅茶カップを手にとって、べたべた触っている友達を見て、あたしは冷や汗をかいた。結局、友達は何も買わず、私は、彼女のボーイフレンドの悪口をさんざん聞かされた。あたしの成果は、通りでもらったポケットティッシュだけだったわ。

　千代紙屋を出て、また、分速６０ｍで歩きだす。アイツは時々、携帯に表示した地図を見ながら、墓地の中を突っ切ったり、時々立ち止まって、何かを見つけては、ああだこうだと解説をする。あまりにも杓子定規なので、ガイドブックを読み上げているように聞こえる。もしかしたら、アイツは、何度もこのデートコースを歩いたのかもしれない。そのたびごとに違う相手と。そしてことごとくふられているのに違いない。まるで、あり得ない終了条件を課したために、無限ループに陥ってしまったプログラムのように。そう思う

と、なんだかアイツがかわいそうに思えてくる。
　少女が公園で鉄棒をしていた。逆上がりの練習のようだ。横目でその様子を見ながら歩いていると、少女は、どさっと落ちた。少女は起き上がって、三角座りのような形になると動かなくなった。声をかけようかどうしようか？　周りに友達も誰もいないようだし。どうしよう？　対人恐怖症のあたしが
「とりあえず、起きあがったし、泣いてもいなし、大丈夫なんじゃないの、無視よ、無視」
合理性のあたしが
「泣いていないからといって大丈夫とは限らないわよ」
対人恐怖症のあたしが、
「それに、もし、声をかけられて誘拐と思われたらどうしよう」
合理性のあたしが、
「そんなこと気にするの？　隣の有馬さんはどう思うかしら。かわいそうな子供を放っておく冷たい女と思われてもいいの？」
あたしは、ちらりと、隣のアイツを見る。アイツもあたしと同じように凍っているみたい。
「ねえ、あの子大丈夫かしら、見に行った方がよくない？」
アイツは答える。
「で、でも、いたずらをする危ないオジサンと思われたらどうしよう」
「確かに、男一人ならね。でも女のあたしがいるし、夫婦ものに見えるかもよ。とにかく、行きましょう」
小学校の2年生か3年生ぐらいだろうか？　先ほどの姿勢のままずくまっている。
「どうしたの、大丈夫？　怪我は？」
少女は首を横にふるが、顔は真っ青だ。
「もしかして、頭打ったの？」
少女は首を横にふる。
「もしかして、背中から落ちたの？」

ウンウンとうなずく。あ～　あたしも経験あるわ。まるで、心臓を殴られたみたいな感じ。

「おうちまで帰ろうか？」

ウンウンとうなずく。

「あたしがおんぶしてあげるわ」

そういって、あたしは背中を向けた。有馬さんがおんぶする手もあったかもしれないけど、このシチュエーションだと、女のあたしでしょう。少女は小声で右とか、左とか言いながら指示する。さすがにこのぐらいの子だと重いわ。隣の有馬はぼーっとした顔でついてくる。やっぱ、コイツに背負ってもらった方がよかったか？　少女の家、マンションの玄関に着いた時には、息はぜいぜい、汗はポタポタだった。ポシェットからおニューの真っ赤なタオルハンカチを取り出して汗をふく。少女はインターホンごしに誰かと話している。

「ママ、あたし鉄棒から落ちたの。……大丈夫よ……　親切なオバサンに家までおんぶしてもらったの」

お、おばさんは、ないんじゃないの？　と思いながら、息を整えていると。少女の母親がやって来た。簡単に事情を説明する。少女が元気そうで、あたしたちはほっとする。母親は丁寧にお礼をして、少女をつれてマンションの中に入っていく。その時、少女は、母親に言った。

「ママ、あのおばさん、汗臭かったよ」

ば、馬鹿なこと言わないでよ。アイツは、クンクンと臭いをかいでいる。あたしがキッと睨むと。慌てて言った。

「あ、汗臭くないよ」

わざわざ声に出さなくていいの！　でも、子どもとアイツとどっちが正直なのだろう？

「ふー。疲れた。一仕事したわね。有馬さんは、どう？」

と言うと、

「どうと言われても。僕は何もしなかったし。ただ、予定がだいぶ狂ったし、ここがどこかわからないのが問題だ」

「道に迷ったってこと？」
「その通り」
もちろん、あたしは、アイツについていくだけだったから、あたしも皆目わからない。
「有馬さんの高級携帯にＧＰＳ機能はないの？」
「な、ないのです」
アイツは途方に暮れている。それを見ていてあたしの中の意地悪な野獣が呼び醒まされる。
「じゃ～　このままここで、じっとしているの？、有馬さんあたしを楽しませてくるんじゃなかったの？」
アイツは、オロオロしている。かわいいわね～。このぐらいで許してやるか。
「それじゃー。あたしについてきて」
と言ってあたしはお日様に向かって歩き出した。別に道を知っていたわけではない。分かっているのは、さっきまでお日様に向かって歩いたこと。
　あたしは、毎分６５ｍで歩く。軽快なピッチで歩く。あたしの半歩後ろをアイツが歩く。さっきとは逆の立場だ。自分のリズムで歩けるので、気持ちがよい。すこし、大きな道路へ出る。あった、あった。あたりの地図を示した看板があった。現在地は赤い丸で示されている。
「有馬さん、次の目的地はどこ？」
「えーと、カフェ箱根」
とアイツが答える。
「はあ、何よそれ？」
「湯葉のケーキのおいしい喫茶店」
「湯葉？　住所は？」
「え～と」
「もういいわ。その携帯かして」
と言って、あたしはアイツの携帯を無理やり取り上げた。携帯には

マップが表示されて。予定していたコースがマップ上に赤で示されている。看板の地図と、携帯のマップをじっくり比べた。自分たちがマップ上のどこにいるかを把握する。大分、予定コースから外れている。あたしは携帯のマップを見ながら歩き出した。半歩後ろをアイツがついてくる。ほどなく、目的の「カフェ箱根」に着いた。

店に入って、腰をおろして、お水をもらった。携帯のチェックポイント3「カフェ箱根」と示されているボタンを押す。そうすると、予定到着時刻、お店の説明、湯葉ケーキの説明と写真と値段、予定出発時刻が出てきた。

「何なのこれ？」

と携帯の画面を見せると

「あ、それは僕が今開発しているアプリです」

と答える。

「へぇ―。面白そうね。こんな仕事をしているんだ。丁度いいわ。あたしが、テストしてあげるわ」

と言うと

「そ、それは、困るんですけど」

「気にしない気にしない」

と言って、あたしはアイツの携帯を握りこんだ。早速あたしは、湯葉ケーキなるものを注文した。所が、店員さんが

「申しわけありません。本日の分は、売り切れてしまいました」

どうする？　とアイツに視線を送ると。お手上げとゼスチャーが返ってきた。

ぜんまい仕掛けのキツネさん（その3）

目的の湯葉ケーキがないのなら長居は無用。『出ましょう』と視線を送ると、『何も食べずに出ていくのは店員に悪いよ、イヤな客だと思われるよ』と視線が返ってくる。何度かやり取りするが、まとまらない。あたしはしびれを切らして立ち上がった。

「すいません、湯葉ケーキがあ目当てだったので、また出直させていただきます」

そう言って、アイツの腕を引っ張って、店を出た。アイツは、自分が言えないことを言ってくれてホッとしたという顔をしている。あれ！！　なんでアイツの考えていることが分かるのだろう。テレパシー？　まさかね。（理由は後でわかった。）

あたしは、アイツの携帯を持ってズンズン歩いた。ところどころにサブチェックポイントがあって、解説がある。あたしは読み上げる。その時に予定通過時刻のポイントが点滅しているので、予定より早いのか遅いのかが一目でわかる。浅草に行って、雷門をくぐり、仲見世でおもちゃをべたべた触る。もうアイツは、何も言わない。浅草寺でお参りをして、夕暮れの川沿いを散歩する。携帯をみると「チェックポイント食事」が点滅している。選択すると４つのオプションが出てきた。「寿司」、「中華」、「イタリアン」、「ビアホール」の４つの中から一つ選ぶ仕組み。あたしは「ビアホール」を選択。なんせ、今日は汗かいたし、歩数表示は１万２千歩となっている。元気のないアイツと派手に乾杯して、中ジョッキを２杯。もう、アイツの視線なんか気にしていない。速攻で酔いが回ってくる。アルコールであたしの視線感覚は鈍くなっている。

ふと、握りこんだ携帯を見ると、「ファイナルチェックポイント」が点滅している。４つの項目が現れ、どれかを選択することになっているらしい。あたしは、声に出して読み上げる。

「オプションＡ：にこっとバイバイコース：駅まで送って、にこっ

と笑って、バイバイする。彼女がレベル1以下の女性だった場合、及び、帰りたがっている場合に選択」

レベル1って何？　女性にレベルをつけているの？　あたしは彼をキッ睨んで

「で、あたしのレベルはいくつ？」

アイツは答える。

「レベル3」

「一体レベルはいくつまであるの？」

と聞くと

「レベル0からレベル3までです」

と答える。

「それで、それはどういう意味？」

「レベル0は問題外。レベル1は普通。レベル2は魅力的な女性、レベル3、レベル3はー　とびきり魅力的な女性。レベル1以上の場合は、システムに「キープ」と回答します」

あたしは、思わず笑ってしまった。アイツにどう思わるか全く気にしていなかったのに、レベル3だなんて。アイツはもじもじしている。

「あのー　そろそろ、携帯を返してほしいのですが」

「もうすぐ返すわよ。最後まで見たらね」

さらに読み上げる。

「オプションB：夜景コース：タクシーで夜景のきれいな草津ビルのカクテルバーに行く。彼女がレベル2以上の場合に誘う。タクシーの料金はおよそ、2，500円。カクテルバーは、およそ10，000円から。彼女が飲兵衛の場合は要注意。その後は、オプションC，Dの可能性もあり」

あたしは飲兵衛かも。でも、高級カクテルをガブガブ飲むようなはしたないことはしないわよ。きっと。いや、多分しない。いや、もしかしたらするかも。なんせ、カクテルバーは行ったことないし。

それより、オプションC，Dが気になるわ。

「オプションC：シティホテルコース：レベル3以上の場合で、かつ、彼女にその気がある場合。ツイン一泊、タクシー込で38，000円。とっておきのプレゼントがあると言って誘う。注意：このオプションは未経験。情報整備中」

げげ、何これ。全く、何考えてんだか。でも、未経験という所は、わかる気がする。誰がこんなヤツとホテルに行くか。しかし「とっておきのプレゼント」って何かしら。あらかじめ用意しているのなら、プレゼントだけちゃっかり貰っちゃおうかしら。

「オプションCのとっておきのプレゼントって何？」

「いや、それは、その～」

「はっきり言いなさいよ。男なら」

「コ、コンドーム」

はあ？　思わず、あたしは口走ってしまった。

「ま、間に合っているわよ。コンドームなら」

し、しまった。正直に答えてしまった。あたしは、墓穴を掘ったことに気がつかないふりをして最後のオプションを読みあげる。

「オプションD：ラブホコース：レベル2以上の場合で、かつ、彼女にその気があり、かつ、安上がり嗜好の場合。休憩3時間で5，000円。一緒に汗を書こうと言って誘う。念ため、清潔な下着をもう一枚準備しておく。注意：このオプションは未経験。情報整備中」

なんとまあ、呆れた。でも、よく考えると、あたしも、おニューの真っ赤なショーツをはいている。アイツのことばかり悪く言えないか。

「それじゃーオプションAね」

アイツとあたしは、筋書き通り、駅で、にこっと笑ってバイバイした。あたしは、吹き出しそうになるのを必死にこらえた。

愛機の紅号（くれない）を立ち上げ、システムにログインする。まず、対面、つまりデートした今日の日付を入力する。次に、関係を「キープ」

するか、「ブレイク」するかを選択する。お互いが「キープ」した場合は、次の対面について相談することができ。どちらかが、「ブレイク」した場合は、今後、一切やり取りをすることができない。あたしの予定では、「ブレイク」することになっていた。でないと、次の新しい候補者が送られてこないから。

今日一日、キツネ顔のアイツと何をしたんだろう。あの携帯アプリは、控えめに言ってもすぐれものだわ。きっと優秀なプログラマーなのだろう。筋書きがないと行動できないアイツにはうってつけのアプリだ。でも、鉄棒の少女と会ってから筋書きが崩れ始めた。あたしが携帯を握りこんだのは予想外だったに違いない。結局のところ、アイツは、ぜんまい仕掛けのからくり人形のように、筋書きに沿って、決まり切ったことを何度も繰り返していたに違いないわ。そう考えると、なんだか哀れに思える。しかも、他人の視線を気にして、大胆な行動ができない所なんか、先が思いやられるわ。視線？　他人の視線を気にするって、あたしの十八番（おはこ）のはずなのに、今日は、どうして、あたしは、他人の視線を気にしなかったのだろう？　いや、気にしなかったわけじゃないわ。気にしていたけど、アイツができない分、あたしが頑張っただけ。と言うことは、これから、そう思えば、他人の視線も気にならない？　そうだといいけど。

なんだかんだ言っても、シンクロタイプで、似た者同士というのは本当なのだろう。どうりでアイツの考えることが手に取るようにわかったのね。かわいそうな『ぜんまい仕掛けのキツネさん』を何とかしたいけど、キツネさんのオプションC、オプションDの実験台にあたしがなるのはごめんだわ。悪いけど、『ブレイク』させていただきます。

水上流弁当士2級（その1）

最初に見た時、美少女という言葉はこの子のためにあると思ったわ。

金曜日の夜に時々会社にやってくるのは、霧島課長の一人娘、どこかの私立中学の制服を着ている。学校帰りにピアノのレッスンに行き、課長が忙しくないときは、会社まで来て一緒に帰っていく。一緒に晩御飯を外食するそうだ。何ともほほえましい父娘だわ。ところが、その日はいつもと違っていた。いつもなら、課長の席に直行するのだけど、その日は、総合課の部屋の入り口でたたずんでいた。何かを探しているようだったわ。課長補佐のゆきさん（本名：十和田幸雄）が声をかける。

「あれ、早由美（さゆみ）ちゃんじゃないか。今日は、課長は出張だよ。聞いてなかったの？」

かわいらしい声で

「え、そうなの。パパは何も言っていなかったわ。携帯も通じないし、変だなと思ったんだけど。今晩は、遅いのかしら？」

と少女が答える。課長補佐が説明する。

「う～ん。そうだな、昼から浜松の近くの舘山寺へ出かけたから、今頃、クライアントと打ち合わせの最中じゃないかな」

少女は、残念そうな表情をしたものの、まだ帰るつもりはないようだ。総合課の男どもは、仕事を中断して、美少女に注目している。あたしは、全く関心がない。努力して美少女になれるような歳ではないし。それより眼の前のコードのバグ取りの方が大事。計算時間を半分に縮められる画期的な方法を編み出したと思ったのだけど、バグを作ってしまったみたい。ここは、慎重にじっくり考えて……

やっぱり、紙に書かないと駄目ね。複雑すぎるわ。

少女は声を落として課長補佐と話している。

「……」

「2番目と言われても。私には何とも答えようがありません。うちには3人しか女性がいないし、ご自分で判断されてはどでしょう」
「……」
いつの間にか少女が私の背後に立っていた。あれ、まだいたの？
少女が話しかけてきた。
「水上さん、ちょっと、お話があるんですけど、すこしつき合っていただけませんか？」
丁寧だけど、少しとげを含んでいるような雰囲気。あたし、今忙しいんだけど。『美少女は、なんでも自分の思い通りになると思っているのかしら』とイライラする。（あれ、このセリフどこかで言われたような……）
「悪いけど、あたしは、今、取り込み中なの、１０分ぐらい待っていてくれないかしら、下の階に自動販売機と椅子があるから、そこで」
少女は素直に
「わかったわ」
と答えた。何とか１２分で片をつけた。さて、で、話って何だろう？　課長補佐は何か知っているのかしら。
「ゆきさん。あの子があたしに用があるって、何か聞いた？」
「いや」
「2番目がどうとか言っていなかった」
「あー　あれは、うちの課で2番目にかわいい女の子はだれかって聞いてきたんだよ」
「はあ、2番目にかわいい？　で、あたしが2番目なの？」
「そうらしい。僕は3人ともそれぞれにかわいいと思っていますが」
ゆきさんの意見は聞いていないって。あたしは、自販機のある階下に向かった。一体、2番目ってどういうこと？　あたしが2番目だとすると、1番は桃姫ね。椅子に座って携帯をいじっている少女に声をかけた。
「あたしに、話って、何？」

「水上さんって、パパの浮気相手なの？」
い、いきなり、何てこと言うの！
「それとも、恋人？　それとも単なるお友達？」
一瞬、面くらってしまったけど、深呼吸をしてあたしは答えた。
「浮気相手でも、恋人でも、友達でもないわ。あたしは、課長の部下よ」
「それじゃー　どうして、私のお弁当にミニトマトを入れるように入れ知恵したの？　私、トマトは苦手なの。それに、この間なんか、箸がすべって、ミニトマトが床をころころ転がっていったのよ。もう、男子にも笑われるし、恥ずかしくて、穴があったら、入りたかったぐらいよ」
と、顔を赤らめた。
「あはは、そりゃー　災難だったわね」
美少女が転がっていくミニトマトを追いかける姿は、想像するだけでも可笑しいわ。
「もう、責任を取ってください！」
おっと、『責任』と来たか。あたしの左脳が、ポンと、作戦を出してきた。
「ところで、早由美ちゃん、だったっけ。課長さん、パパは帰ってきそうにもないけど、今晩はあたしと晩御飯を食べない？　あたしの方はもう帰ってもいい時間だし」
「えー　水上さんと？」
まずい、警戒されている。このままだと折角の作戦が……
「パパに電話して、ちゃんと断れば大丈夫よ。それに、あなたのパパと私の秘密をこっそり教えてもいいわよ」
美少女は、心配そうな顔をしながら、興味深々という眼をしている。
やった、引っかかった！
　久しぶりに神様の視線を感じる。
「これこれ、純粋無垢な少女をかどわかしてはいかんよ」
あたしは、

「ばか言わないで。うちに連れ帰ったりはしないわよ」
と答えた。

水上流弁当士2級（その2）

会社から歩ける所にある、中華レストランに連れて行った。炒め物、中華粥、デザートを2人前注文する。何を注文したかは早由美ちゃんには教えない。作戦の要だから。作戦はこうよ。トマトの入ったメニューを頼む。彼女は話に夢中になって、気がつかないうちにトマトを口にする。半分ほど食べた所で、あたしが、『どう、おいしいでしょう。これ、トマトがはいっているのよ』と指摘する。すると、彼女は、『あらいやだ、トマトがこんなにおいしかったなんて知らなかったわ』となって、めでたし、めでたし。名づけて、トマト大作戦。

注文を終えて、あたしは美少女の早由美ちゃんに尋ねた。

「ねぇ、あたしは2番目にかわいい女の人なの？」

「えーと。それはね。パパがそう言っていたの。職場で2番目にかわいい人がお弁当の指南役だって」

「指南役？」

そう言われればそうかもしれない。

「それで、十和田さんにどの人がそうなのか聞いたのよ。そしたら、自分で探しなさいって言われて」

なるほどとあたしは納得してこう言った。

「で、1番かわいい人は、奥に座っていた見るからにかわいい人で、近くに座っていたおばさんは3番目だからと思って、あたしの所に来たのね」

「まあ、そんな感じ」

全く、キューピー課長は、迷惑な表現をするわね。『曖昧な表現はやめて、具体的に表現しなさい』といつも言っている課長らしいけど。早由美ちゃんは切り出した。

「ねぇ、ところで、パパとあなたの秘密って何？」

「ゆっくり教えてあげるわ。でも、ちゃんとご飯を食べてね」

「いいわよ、でも、あたしの質問にちゃんと答えてね」
「もちろんよ」
と早くも軽いジャブの応酬が始まった。先手は早由美ちゃんだった。
「水上さんとパパはいつからつきあっているの」
「そうね、あたしが入社してからだから、3年ね。上司と部下というお付き合いよ」
とさらっと答える。
「パパは好き?」
「もちろんよ大好きよ。あたしが、就職できたのは課長さんのおかげだし、この3年間、色々なことをたたきこまれたのよ」
と、これも難なくクリア。
「じゃー　パパとキスしたことはある?」
いきなり、カウンターパンチを食らいそうになった
「キ、キスなんてあるわけがないじゃない」
「ホントに?」
そう念を押されると、不安になる。あ、そう言えば、そんなことがあったと思いだした。あたしの表情が変わったのを早由美ちゃんは見逃さなかった。
「本当はあるのね。ちゃんと説明してくださる?」
「えーと、酔っていたときだから、あんまり覚えていないのだけど……」
「ちゃんと思い出してください」
「うーん。飲み屋で課長の隣の席に座っていて、何かの罰ゲームで、……課長の頬にキスしたの」
「パパの唇ではなく、頬?」
「もちろん、頬よ」
「本当は酔った勢いでパパの唇を奪ったんじゃないの」
「そ、そんなことはないわよ……　少なくともあたしの記憶では」
ま、まずい、完全に守勢に立たされているわ。早由美ちゃんは容赦しない。

「全く、酔って勝手に無礼講なんて、まるで子供ね」
ガーン。こどもに、子供って言われたら終わりだわ。とりあえず、料理が来たので、早由美ちゃんの分、自分の分を取り分ける。何とか話題を変えないと……　と思っていると、早由美ちゃんの方から話題を変えてきた。
「で、どうして、あたしのパパにお弁当の作り方を教えることになったの？」
「時々、課長と一緒に昼を食べていて……　課長は自分で作ったお弁当で、あたしは、コンビニで買ってきたものを食べるんだけど……　ついつい、お弁当に目が行って、あれこれ、アドバイスしたのよ。例えば、生野菜と魚肉は触れないようにしないといけないとか、ご飯の白以外に、三色、つまり、赤、緑、黄色を入れなさいとか」
「水上さんは、お弁当じゃないの？」
「変でしょう。今は作らないけど、ずいぶん昔、高校3年生のころは、毎日、あたしと弟のお弁当を作ったのよ」
と言うと、早由美ちゃんは
「えー　どうして水上さんのママが作らなかったの？」
「う〜ん。どうしてかなあ。あたしのママは不器用で、パパは器用だったからかなあ。高校2年生までは、パパが作っていたわ。……もしパパも不器用だったら、ママが作っていたかもしれない」
「ふーん。なんだか私のうちと似ているのね」
と早由美ちゃんがつぶやく。そうなの、似ているのよ、課長とあたしのパパは。
　あたしは、昔を思い出しながら、ゆっくり話した。最初に課長のお弁当を見た時から、女の人が作ったのではないという気がしていた。そのうち、課長が自分でお弁当を作っていること、一人娘の弁当を作るついでに自分の分も作っていることを知って、弁当作りのアドバイスをするようになったのよ。なにせ、あたしは、『水上流弁当士1級』ですから。え、どうして水上流かって？　そうね、ちょっと事情があるのよ。最初は、あたしのパパ（本名：水上鉄太郎）

がお弁当を作ってくれた。ところが、高校で3年生にあがるころに、パパとママが離婚することになったの。

それで、弁当作りがあたしにまわってきたのよ。離婚するまでのひと月ぐらいだったかしら、毎日、パパと一緒にお弁当を作ったわ。あたしに水上流のお弁当の作り方を伝授するためにね。パパが家を出て行く日、最後の日も一緒に作ったわ。お昼に教室でお弁当箱を開けた時、定番のミニトマト、甘い卵焼き、塩もみしたキュウリを見て、涙がポロポロ落ちたわ。パパがかわいそうでしょうがなかったのね。今でも思い出すたびに涙腺が緩みそうになるわ。

離婚して、ママが親権をとり、あたしたちはママの旧姓の塩原（しおばら）になった。離婚したのは、パパが浮気したのが原因ということになっているけど、本当は違うわ。だから、あたしはできる限りパパの姓の水上を使うようにしているの。

いつの間にか、二人とも、卵とトマトの炒め物、ここの名物の三色中華粥をきれい食べ終わっていた。三色中華粥の三色とは、トマト、小豆の赤色、チンゲン菜、ネギの緑色、卵、ホタテの黄色の三つのことで、3つの椀によそわれて出てくる。最初のトマト入りの粥は絶品である。かすかなトマトの酸味と中華スープとご飯が何とも言いようのないハーモニーを奏でているの。いつもだったら、おいしいおいしいと言いながら食べるだけど、今日は、話に夢中になって、おいしかったのかどうかはもちろん、ちゃんと自分が食べたのかどうかも思い出せない。（時々、こういうことってあるのよね。披露宴でおいしいとされている料理を食べたはずなのに、どんな味だったか思い出せないとか。）　あれ？　作戦では、あたしがきちんと料理を解説することになっていたんだけど、早由美ちゃんが真剣に話を聞いてくれたので、こちらもつい話に夢中になってしまった。

「ねぇ、早由美ちゃん、ちゃんと味わって食べた？」

「食べたわよ。おいしかったわ」

「トマトが入っていたの分かった？」
とあたしが確認すると
「えー、入っていたの！　全然わかんなかった」
うーん、やっぱりこの子もあたしと同じで、何を食べたか覚えてないのよ、きっと。トマトを認識していなかったということは、作戦は失敗かしら。その時、デザートのトマトシャーベットが出てきた。
「じゃー　トマトたっぷりのシャーベットをしっかり味わってね。ちょっとしょっぱいけどね」
あたしたちは、黙々と食べた。二人とも考え事をしていたみたい。

あたしのパパとママの離婚に原因があるとすれば、パパが出来すぎだったことかしら。仕事もバリバリ、ママにもあたしたちにも愛情を注いでくれた。反対に、ママの方はかわいそうなぐらい不器用だったわ。仕事と家事のどちらかしかできなかった。パパが本当に浮気をしたのかどうかは、わからないけど、パパは、あたしにこっそりと言ったわ。『今のママにはときめかないんだよ』と。かわいそうといえば、ママもかわいそうなのかもしれないわねぇ。

中華レストランを出て、駅まで一緒に行った。別れ際に早由美ちゃんは思いつめたような顔をして言った。
「実は、私のパパとママ、あんまりうまくいっていないみたいなの。もしかしたら離婚するかもしれない。もし、万が一離婚したら、水上さん、パパと再婚してくれる？」
「何をバカなこと言っている。そんなことあり得ないわ。それに、仮にそうなったとしたら、あたしが悪者になるわ」
「そう、残念だわ。水上さんに毎日、お弁当を作ってもらったら助かると思ったのに」
と早由美ちゃんが言う。なんと、打算的。あたしは笑って答える。
「だったら、早由美ちゃんに水上流のお弁当作りを伝授してあげるわよ。いつかね。いつか」

その時は、「いつか」は、永遠にこないと思っていた。

水上流弁当士2級（その3）

翌週金曜日の夕方にあの美少女がまた会社にやってきた。今日はキューピー課長（霧島課長）がいる。ボストンバッグを持ってやってきた。修学旅行の帰りだろうか？　男どもは今日も、美少女に注目している。何やら課長と娘はもめているようだ。

「……ねぇ、いいじゃないの……」

「……早由美、少しは他の人の迷惑も考えなさい」

「もう、いいわ、パパには頼まないわ。自分で交渉するわよ」

例のごとく、美少女はわがままだ。早由美ちゃんは、あたしの方へまっすぐやってくる。その背後で、課長はあたしに、『お手上げ』というゼスチャーをしている。一体何があったの？

「こんにちは、水上さん。先週はどうもありがとうございました」

あたしは、

「どういたしまして」

とおざなりの返事をする。こっちは、忙しいのだ。なんとしても、今やっているシステムの部品構成に目途をつけたい。そこまでできれば、週末は安心してゆっくり休めるわ。少女はジッと待っている。あたしが振り向くと

「ねぇ、お願いがあるの」

「えー、また外食？　今日は課長さん、パパがいるじゃない。あたしの方は見てのとおり、当分手が離せないわ」

とあたしが嫌そうに答えると。

「当分って、どのくらい？」

「そうね、たっぷり1時間くらいかしら」

「それじゃ、終わるまで下で待っているわ」

と少女は答えた。どうあってもあたしを待つ気らしい。それほどまでに頑張る理由は何？

「早由美ちゃん、お願いって何？　レストランに連れて行ってほし

いのではないの？」
少女は、持ってきたバックを指差した。はあ？　仕事でフル回転していたあたしの左脳は一旦止まって、ゆっくり回転し始めた。ボストンバック　↓　お泊り　↓修学旅行　↓　修学旅行ではない？　↓　あたしにお願い　↓　もしかしてあたしのうちに泊るっていうこと？　えー　少女はウンウンとうなずいている。いくらなんでもそれはないでしょう。きっとあたしの想像力が豊か過ぎて、あり得ない発想をしたにちがいないわ。あたしは小声で確かめる。
「もしかして、もしかして……　そのバックはお泊りセット？」
「あたり！」
「もしかして、もしかして……　今晩あたしのうちに泊りたいとか？」
「あったりー！」
「もしかして、もしかして……　お弁当の作り方を習いたいとか？」
「おおあたりー」
課長は、と振り向くと。『ごめん、ごめん、何とか頼むよ』とゼスチャーしている。家の中がごちゃごちゃなのが思い出される。ベットはぐちゃぐちゃ。シンクには朝食の食器がまだ残っていたかもしれない。コーヒーメーカーには冷めたコーヒーが半杯ほど残っているに違いないわ。少女は懇願する眼をしている。はっとするほどの美少女だわ。
「仕方ないわね～　いいわよ。でも、この仕事が終わるまで待っていてくれない？」
少女はこぼれるような笑みを浮かべて
「ありがとう」
と言う。全く、美少女は、苦労知らずで、先が思いやられるわ。いつの間にか、ゴーストさとる君（本名：月夜野悟）が後ろに立っている。
「でしたら、碧先輩のお仕事が終わるまで、私がお相手します。社内を案内してもいいし、近くの喫茶店でケーキを食べてもいいし。

早由美ちゃんは何がいい？」
悟君、下心丸見えよ。社内は無味乾燥だから、喫茶店が無難ね。そう言えば、あの喫茶店だったら、タクシーで行けばすぐの所だわ。
「悟君、この子を連れて行ってほしい喫茶店があるの」
と言って、彼に店の名前「カフェ箱根」と名物の「湯葉ケーキ」を教えた。ネットで住所を調べ、ついでに目的のケーキがまだあるかも電話で確かめてもらった。
「じゃ、悟君お願いね。たっぷり1時間よ、1時間」
1時間後、無事に部品構成が終わっていた。すんなりいったので気分は上々。そこへ、悟君と美少女が戻ってきた。何やら、楽しそうに話している。娘が心配な課長はまだ仕事をしている。悟君に声をかける。
「悟君、ありがとう。おかげで仕事の方はばっちりよ。さて、どうしようか、皆で飲みに行こうか？」
と、いつもの口癖が出てしまう。課長がダメ出しをしている。おっといけないこの子は未成年ね。
「やっぱり、飲みに行くのはやめて、あたしの家で晩御飯食べる？あたしが作ってあげるわ。さとる君も『ついで』に来る？」
しまった、つい、なり行きでさとる君も誘ってしまったけど、彼は、さすがに、遠慮するわよね。と思ったら
「え、いいんですか？　喜んでお供します」
だって。まあ、いいかー　仕事も片付いたし、何も心配することはないわ。多分。なんだか、神様の視線を感じる。あたし、何か悪いことしたっけ？

自宅のマンションは思ったほどひどくはなかった。丁度、今朝、ゴミを出したところで助かったわ。ゴーストさとる君は、ウキウキしている。美少女と一緒にいられるのが嬉しいのか、それとも、もしかしたら、あたしの家に入れたのが嬉しいのか。きっと両方ね。
あたしは、早由美ちゃんと晩御飯の準備を始める。悟君には掃除を

してもらう。
「さとる君、悪いけど、食卓のあたりを片付けてくれる？」
「はい、もちろんです。なんでもやりますよ」
腰が軽いのは彼のいい所。あっという間にかたづけて、台布巾で拭き終わった。
「先輩、ベランダの洗濯物、取り入れて、畳んどきましょうか？」
「そうね、おねがい……」
おっと、下着も干してあるわ。
「やっぱりいいわ。テレビかゲームでゆっくりくつろいで」
あたしは、缶ビールを2本冷蔵庫から取り出して、彼に1本わたし、自分用に1本をあける。さて、早由美ちゃんと晩御飯を作りましょうか。あたしは、説明しながら、テキパキ作業をすすめる。
水上流（みなかみりゅう）で一番大事なことは、拙速。つまり、料理をおいしく作ることよりも速く作ることに重きをおく。手抜きをすると言ってもいいわ。それと贅沢をしないこと。冷蔵庫にある材料で勝負するの。1食だけのために買い出しに行くのは邪道よ。速く作るためには、準備が大事。冷蔵庫、特に冷凍庫の中に、使いやすい材料を常備しておくの。冷凍の鶏・豚の小間肉、ひき肉（牛豚の合挽きなら少し贅沢）、卵、牛乳、豆腐、チーズ、もちろん、シーチキンや果物などの缶詰も便利よ。あたしたちのように時間に余裕がない人は、いつ、買い物に行けるかわからないから、材料をストックしておくの。
さて、今晩はどうしようかしら、まず、ご飯は炊いていないので、スパゲッティを主食にするわ。トッピング次第では豪華になるわよ。冷凍庫の中には、シーフードミックスと、ひき肉があるわ。生のトマトはないけれど、ホールトマトの缶詰があるわ。野菜もチンゲン菜、レタス、大根があるから、サラダは作れるわね。後は、汁ものとデザートね。チンゲン菜のスープに、ひき肉を少々入れましょう。デザートは果物がないので、ヨーグルト。できれば、次の日の朝食、弁当も考えておくのよ。材料を見て何を作るかを決めたら、今度は、時間と温度を考えるの。大抵の温かい料理はできたてのアツアツが

おいしいし、果物だと、冷蔵庫にいれて冷えすぎているとおいしくないわ。デザートにアイスクリームを食べる場合は、早めに冷凍庫から出して、すこし、溶けかかるぐらいの食べごろになるようにしておくの。時間と、温度を考えながら、どの材料をどの順番で加工するのか、どの調理器具をどの順番で使うのかを考える。例えば、まな板、包丁を使って、魚肉を切るのはなるべく最後にして、野菜や果物などの生で食べられるものは先に切るとか。ついでに、調理器具や食器を洗ったり、片づけたりするのも先にできるものは先にやってしまうわ。材料の準備から始まって、食器の片付けまでの全作業工程を意識しながら、短い時間で効率よく料理をするのが水上流よ。実の所、料理人は、様々な要素を一つにまとめたシステム(システムエンジニア)を作るSEと同じね。

　水上流が次にこだわるのは、いろどり。つまり、カラフルな料理を心がけるの。例えば、レタスのサラダなら緑一色だけど、短冊に切った大根の白、トマトやハムの赤、かんきつ系やチーズの黄色、ピンク色の小エビが加わると随分にぎやかになるわ。特に赤は、食欲をそそる色だから、是非入れたい所ね。お弁当の場合は、食中毒の心配が大事だけど、それについてはまた明日ね。最後に付け加えると、電子レンジを使いこなすこと。例えば、出来上がったスパゲッティの上に、こんな風にとろけるスライスチーズを載せて、電子レンジでチンすると……　ほら、おいしそうでしょう。

「悟君、お待たせ、晩御飯できたわよ。缶ビールもう一本出しましょうか」

「あ、ありがとうございます。でもまだいいです。1本目がまだ残っていますので」

悟君は遠慮しているのだろうか？　あたしなんか料理をしながら2本も飲んでしまったのに。あたしたちは、食卓を囲んで、元気よくいただきますを言った。悟君はもりもりスパゲッティを食べ始めた。あたしは、スパゲッティを口に入れようとして、ふと気がついたの。

この雰囲気って、家庭の雰囲気じゃない？　悟君がパパで、あたしがママ、早由美ちゃんが一人娘……　もう１０年以上、こんなことはなかったわ。その時、ホンの一瞬だけ、本当に悟君がパパで、早由美ちゃんが娘だったらいいのにって思ったのよ。

隣をみると、早由美ちゃんが固まっていた。目に涙を浮かべて。あたしとおんなじことを考えていたのかもしれない。あたしは、背中をそっとさすった。

「食べましょう。おいしいわよ」

さとる君は大食いだった。いくら食べても太らないのは羨ましい。最後まできれいに食べて

「あー、碧先輩のご飯、最高です。毎日、僕に作ってくれませんか？」

と言う。ほめすぎた。あたしが

「それって、あたしと結婚したいって言うこと？」

と言うと

「もちろんです」

「半分冗談でしょう。」

「いいえ、半分ではありません。７０％冗談で、残り３０％が本気です」

「それじゃ、７０％本気になったら、考えてあげてもいいわよ」

とあたしは約束した。

その晩、さとる君は名残惜しそうに帰っていった。酔いのまわったあたしは、かろうじて、ママが泊る時に使う布団を出して、ここで寝るようと早由美ちゃんに言って、自分の布団にもぐりこんだ。本当は少女の寝顔をみて、母親になった気分を味わいたかったのだけど……

翌朝、美少女は水上流弁当士２級の資格を得た。

アロハな男（その1）

駅前の蒸気機関車のそばが待ち合わせ場所だ。オンラインパートナー紹介所の分類によると、シーソータイプ、すなわち性格等が似ていないということなので、用心してだいぶ早く来てしまった。もし、几帳面で、時間に厳しい人だったら、遅刻しては印象が悪くなるわ。何と言っても第一印象は大事だし。

予定の時刻を過ぎたが現れない。念のため、周りをじっくり見回してみたが、それらしい茶髪の男性はいない。少なくとも予定時刻に現れないということは、時間に厳しいということはなさそうね。まあ、あたしも、どちらかというと時間にルーズなほうだし、かえって気楽だわ。

５分たっても現れない。少しいらいらしてきたわ。電話ぐらいよこしなさいよ。と言いたいところだが、携帯電話の番号は、システムの規則で開示しないことになっている。アイツは間違いなく、時間にルーズね。

１０分たっても現れない。かなりイライラしてきたわ。アイツは、絶対、いい加減なやつだ。だいたい、あの基本プロフィールに掲載してある第一写真からしてふざけているわ。第一写真は、上半身が写った証明写真のようなものなんだけど、アイツは、なんと裸で写っている。右脳の回転速度は上がる一方。久しぶりに合理性のあたしが発言する。

「まあ、いいじゃないの１０分ぐらい。この程度のことで、イライラしていたら、この先の長い人生、持たないわよ。さあ、リラックス、リラックス。それに、イライラするということは、自分が几帳面で、時間に厳しく、神経質だということを認めたことになるわよ」

そうだ、その通りだ。イライラしないわ。いらいらしないわ……

１５分たっても現れない。遅い！　野獣のあたしが吠える。

「アイツー　今度会ったらただじゃおかないわ。ずたずたに切り裂

いてやる」
合理性のあたしが訂正する
「初めて会うのだから、『今度会ったら』っていうのは変よ」
あたしの右脳はもう爆発寸前だ。視線恐怖症のあたしがなだめにかかる。
「そ、そんなに興奮しないで、周りの人に、『おかしい』って思われるわよ。それに、そんな怖い顔を相手の人に見られたら、どうするの？　相手が現れたら、『すっぽかさなかっただけでもありがたいわ』と考えるのよ。そうすれば、いい表情になるわよ」

『17分！』たって、アイツは、現れた。あたしがどんな表情をしていたかは、確かめようがないけど、多分、にこやかに笑いながら、怒って、安堵して、疲れた顔だったと思うわ。アイツの最初の言葉は
「よ、俺、八丈渡（はちじょうわたる）」
「あ、あたしは水上碧（みなかみみどり）。よろしくね」
とりあえず、右脳も左脳も回転速度は正常な範囲内に落ち着いた。気をとりなおして、状況をチェック。アイツは、赤地のアロハシャツに黒の短パン、茶のサンダル、そして右手には扇子。一方、あたしは、すこしフォーマルな雰囲気で、黒白チェックのワンピースに黒のパンプス。アイツのアロハには絶対合わない組み合わせ。
「あの～、今日はお芝居か何かを見にいくんですよねぇ？」
「はあ？　そんなこと言ってへんよ」
「だって、『観劇や』って、掲示板に書いていたじゃない。観劇ってお芝居か何かじゃないの？」
あたしは、てっきり芝居だと思って、それなりの恰好をしてきたのよ。芝居でなければ、歌舞伎とか？
「かんげき？　おれは、『イエスでかんげきや』、つまり、イエスの返事をもろうて感激しましたっちゅう意味やったんやけど。もしかして、漢字変換、間違えて送ってしもた？」
「『観劇』、劇を観るって書いてあったわよ！」

「あー、悪い、悪い。丁度、別の女といい雰囲気になりかけていたから、慌てて携帯を操作したんやと思うわ」
「べ、別の女？　あたしとは別の女？」
「そう、別の女や。あ、心配せんでもええよ。今回の別の女はキスまでしか進展せんかったから」
あまりの展開の速さに、右脳も左脳もついていけないわ。
４拍おいて、あたしは尋ねた。
「それじゃー　これからどこに行くの？」
「う～ん。何も考えてへん」
「えー　あなたツアーガイドを仕事にしているんじゃないの？　あたしをどこかに案内してくれるんじゃないの？」
「そんなこと言われても、俺、秘境専門やし。都会は詳しゅうないんや」
あきれた。あたしは意地悪な質問をする。
「もしかして、あなた、本当はツアーガイドじゃないんじゃないの？」
「アホゆうな。俺は、有能なガイドやで。なんなら証拠見したろうか？」
「見せてよ」
コホンと咳払いをして、アイツはしゃべりだした。
「えー　眼の前にあります蒸気機関車は、小型の旅客専門のＤ５１（通称でごいち）でございます。戦前、戦後に主として関東のローカル線で活躍しました。一方、この駅、新橋駅は、日本最初の鉄道駅でございます。当時、明治〇〇年に新橋、横浜間で最初の鉄道が走りました。つまり、新橋駅は鉄道発祥の地であり、それを記念し、引退した機関車をこちらに移設展示することになりました」
「うーん。かなりいい線いっているわね。間違っているのはたった２か所。Ｄ５１ではなく、Ｃ１１って所と、活躍したのは中国地方だってこと」
「なんで、おまえはそんなに詳しいんや？」

「あなたが、遅刻したおかげで、たっぷり、２０回は、あそこの看板の説明を読んだからよ」
「おまえ、鉄道オタク？」
「ち、違うわよ！」
あたしは話題を変える。
「さっきから、『おまえ』、『おまえ』って呼ぶけど、ちゃんとあたしには名前があるんですけど。水上碧（みなかみみどり）。水上さんとか、碧さんとか呼んでくれないかしら」
「そういうおまえも、……　そういう碧さんも、『あなた』とか呼んでるやないか」
「じゃー、あたしはあなたのことを渡（わたる）さんって呼べばいいの？」
「わたるさん？　『わたるさん』は、気色悪いわ」
「それじゃー、『わたる』と『みどり』っていうのは？」
「それも変やないか？　まだ、そんな親（した）しゅうないし。あ、もしかしたら、今日が終わるころには親しゅうなって……」
アイツは、突然、一人二役の芝居をはじめた。
『みどり！　おまえのこと好きや！』
『わたる！　あたしを抱きしめて！』
バカバカしい。ついていけないわ。
「お芝居はその辺にして、こうしましょう。あたしはあなたのことを『ガイドさん』って呼ぶわ。あなたはわたしのことを『お客様』って呼ぶの」
「なんか、不公平な感じやけど、まあ、ええか。ほんなら、『お客様』、本日の行き当たりばったりツアーを始めましょうか」
結局、アイツが『お客様』と呼んだのは、これが最初で最後だったけど、あたしは意地になって、アイツを『ガイドさん』と呼び続けた。
「ガイドさん、あたし、海が見たいわ」
「ここは、都会やで、ビルやなくて、海が見たいんか？」

「ビルは毎日見ているから、海、絶対、海！」
「ほなら、近場で、お台場に行こか？」
「えーお台場？　江の島とかじゃなくて、お台場なの？」
「そうや、お台場や、お台場も海やで。川とも違うし、湖とも違う。海や。それに、俺は行ったことないし」
なんだ。本当は自分が行きたいのね。
「ガイドさんって、自分が行ったことない所へ連れて行くの？」
「そういうこともある。それができへんようやったら、秘境ツアーのガイドは勤まらんで」
という次第で、あたしたちのツアーは始まった

アロハな男（その2）

とりあえず、電車に乗った。八丈渡は、路線図を珍しそうに見ている。ぐるっとループを描いてレインボーブリッジを渡る所は、地図の上でも特徴的だわ。

「ガイドさん、本当にお台場行ったことないの」

「さっきそう言ったやないか」

「じゃー　レインボーブリッジも初めて？」

「もちろん。この橋、渡れるんやろうか？」

「当り前よ。そうでなかったら橋の意味がないじゃないの」

「いや、そういう意味やなくて、歩いて渡れるんやろうか？　っちゅう意味」

「はあ？　仮に歩いて渡れるとしても、そんな物好きどこにもいないわよ」

「いや、おるよ」

「どこよ？」

「ここに」

と言って、アイツは自分を扇子で指した。

あたしたちは橋の手前で、電車を降りて、橋を目指す。看板があって、歩いて渡れるのがわかり、なぜだか、あたしは、ほっとする。アイツは自分の話をした。

「どうも、俺は、東京が肌に合わん」

そりゃ、そのアロハシャツは東京には合わないわよ。

「空気は悪いし、せかせかしとるし。ちいと遅刻したぐらいで眼がつり上がる」

つり上がっていて悪かったわねぇ。

「それで、外国に行くようになって、そしたら、東南アジアにはまってしもうて。気がついたらガイドをやるようになったちゅうわけ」

確かに、東南アジアなら、合いそうね。
「けど、普通のガイドは競争激しいし、日本人ガイドの活躍できる余地はだんだんなくなってきて、それで秘境専門のガイドをやるようになったんや」
あたしは尋ねた。
「ふーん。でも日本人ガイドじゃないとすると誰が日本人をガイドするの？」
「現地ガイドや。大抵は、日本に短期留学して、日本語を覚えて現地法人のガイドになる。それで、日本の大手旅行社と契約して、日本人ツアーを受け入れるんや。日本人ガイドはコストでかなわん。アイツらは日本語もうまいし。俺の出る幕はあらへん。下手すっと俺の関西弁より、現地ガイドの日本語の方が通じたりするで」
「あはは、そりゃかなわないね」
「もうひとつ理由は、普通のツアーはシーズン、つまり、夏休みとか、正月とか、ゴールデンウィークとかのシーズンがあって、日本人だけを相手にしていると、やっぱり、コスト的にきびしいんや。そういう事情やから、現地ガイドも日本語だけやのうて、英語、ドイツ語とか喋れるヤツも珍しゅうない」
「そうなの」
「それで、日本人ガイドは、高級ツアーにしかつかないようになったんや。お金持ちや老人相手の高級ツアーか、俺みたいな、大手が手を出さへん秘境ツアーとか」
「秘境って、どんなとこ行くの？」
「アフリカ、中近東とか。アジアやったら、ブータンとか」
「ブータン？」
「インドの北にある国。日本の古きよき田舎っちゅう雰囲気や。ただ、ブータンもだいぶ観光化されてきて、大手が進出してきているんや。それで、うちの社は、より奥へ奥へと、観光地を開拓しながらや。だんだん、だんだん、ホントの秘境に近(ちこ)うなってってるわ」
「そういう所って危なくないの？」

「ホントに危ない所には行かんけど、たまに死ぬ客はおるよ」
「えー　どうして？」
「腹上死や」
「え！」
「まあ、ホントの所はようわからんけど、ツアー客には老人が多いから、持病やなんかで死ぬ確率は高いんや。ツアーに行くときは飛行機の客室で、帰りは、箱詰めされて、ドライアイス詰められて、貨物室っちゅうこともあったわな。ツアーガイドはそういうことにも対応できんと、いかんのや」
ガイドさんもなかなか大変なのね。

橋のたもとに着いた。さすがに下から見上げると迫力があるわ。エレベーターで橋の台の中を通って、上にでる。そこから道路わきの歩道を歩く。横を通る車がうるさいので、あたしたちは、黙々と分速７０ｍで歩く。景色はかなり良い。右前方に台場が見える。昔の砲台のあとだ。
台場とその近くの砂浜を一通り歩いて、ベンチに腰をおろした。
アイツは言った。
「やっぱり、本物の海がええなあ」
「あら，お台場だって海よ」
さっき、そう言っていなかったけ。
「忘れられん風景っちゅうのがたまにあるんや。ジャングルに面した海。砂漠の海。泥河の流れ込む海……」
アイツの頭の中には別の海があるみたい。ひとしきり思いを馳せて
「さて、行こか？」
とアイツは言った。
「どこに？」
「さあ、どこがええ？」
「ガイドさん、あたし、歩き疲れたわ。のどが渇いたし」
と膝をさする。

「あんまし、歩いてへんで」
「そうなんだけど、歩くための靴は履いてこなかったのよ」
「歩くためでないんやったら、何のための靴なんや？」
「見せるための靴」
「靴を見せるんか？」
「そうじゃないの。あたしのこの細く締った足首をみせるの。ねぇ、見て。あたしの足首ってかっこいいでしょう？」
と両足をきれいに伸ばしてみる。
「そう言われればそうかもしれん」
「あたし、顔も胸もお尻も自信ないけど、膝から下は自信があるの」
「おまえ、変わったこと考えるな。交換できる部品やあるまいし」
確かに。アイツもまともなことを言う。
「そんなら、どっか店に入ろうか」
と言って、あたしたちはのろのろ歩き出した。

ファーストフードの店に入った。そしたら、アイツは
「しもた！　財布忘れた。悪い！　俺、今これだけしか持ってへん」
と言って、アイツは、小銭入れと、その中の３２０円を見せた。まったく、なさけないガイドねぇ。
「あたしが買ってくるわ。何がいい？」
「コーラと、チョコリングと、……」
お金がないと言っておきながら、まだ注文するの　とつり上がった眼を向けると
「そ、それだけでええわ」
「じゃ、ガイドさんは、外のテーブル、パラソルのついているテーブルで待っていて」
あたしは、自分用には、トマトジュースとシナモンベーグルを買った。あたしはトマトが大好物なのだ。二人分をトレーに載せて、外へ行こうとした。トレーを両手に持って、ショルダーバックを右肩にかけていた。店内と屋外のウッドデッキの間に少し段差があっ

たのかもしれない。誰かが、あたしの背中を押したような気もする。
あたしは、つまづいてバランスを崩し、右足を小さく踏み出した。その時に、足首をひねったの。その瞬間、あたしの左脳が計算した。アイツのために買ったコーラがこぼれると。いや、本当のことを言うとあたしの大好きなトマトジュースが心配だった。と思って、ひねった足首で踏ん張ろうとした。これが致命的だったわ。
右足に激痛がはしる。踏ん張るのはあきらめ、自然に任せる。1.5秒間の空白。叫んだかどうかは、覚えていないわ。右足首に激痛。痛みで目が開けられない。涙がポロポロでる。ようやく目をあけると、青空がぼやけて見える。メガネはどこかに行ってしまった。周りで人がざわざわしている。
「……　刺されたぞ……　救急車だ、救急車を呼べ！」
刺された？　あたしが？　（メガネがないのではっきりしなけど、）アイツがあたしの顔を覗き込む。
「どないした？　大丈夫か？」
「足が、足が痛くて死にそう」
アイツは、あたしの胸に触った。その手を見ると真っ赤だ。刺されたのだ。なぜ？　誰に？　あたしは死ぬの？　あー　もっと人生楽しんでおけばよかった。明日の朝刊の3面には、きっと通り魔か何かであたしのが名前が出るのね。名前は通称の水上にしてくれるかしら？　きれいに写っている写真を使ってくれるかしら。そんなことは、どうでもいいわ。どうせ死ぬんだし……

アロハな男（その3）

アイツは、真っ赤な手の臭いをかいで、さらに、指先をなめる。
何やってのよこいつは！　吸血鬼か！　やおら、アイツは遠巻きに見ている人だかりに叫ぶ。
「おーい。大丈夫やでー、血じゃない、血じゃない。トマトジュースや。救急車呼ばんでもええよ」
あ、あーそう。そうなの。刺されてないの。あたしは生きているのね。安堵で思考が止まる。
激痛で動けないあたしの上半身をアイツが起こしてくれた。見ると、左胸からお腹にかけて、チェックのワンピースが真っ赤に染まっている。トマトジュース？　ようやく自分がトマトジュースを買ったことを思い出した。
「足が痛いんか？」
「痛いわ、右足首が痛くて死にそうよ」
アイツは、不用意にあたしの右足首に触る。
「痛い！」
また、涙がでる。
「ごめんごめん。折れたかなー」
アイツは叫んだ
「すんません！　やっぱ、救急車呼んでもらえます？」
それから、アイツは、あたしの膝と首の下に手を入れて、今度は、そーっとあたしを横抱きに抱えて持ち上げった。え、ちょっと、恐いんだけど、落とさないでよ！　あたしは、アイツの首に腕をまわしてしがみついた。恐いのと恥ずかしいので、一瞬痛みを忘れたわ。そのままそーっと椅子に座らせてくれた。ついでにメガネもかけさせてくれた。こっちの方は無傷。あたしの足は、まっすぐ伸びている。足先があらぬ方向に曲がっているわけではない。とすると骨折ではなくて捻挫？　わざわざ救急車を頼むほどでないかもしれない。

右足首はすでに腫れ始めてジンジンする。左足首、あたしの自慢の細い足首、と比べると右足首はあたしの足ではないみたい。どこかの彫像のようにがっしりとした足首だ。あたしは、恐る恐る、立ち上がりながら体重をかけてみる。痛い！　だめ、立てない、歩けない。

救急車はすぐやってきた。隊員は、あたしのトマト染めを見て、一瞬ぎょっとする。サイレンを鳴らして近くの救急外来へ連れて行ってもらった。もちろん、アイツも一緒。車いすに載せてもらって、レントゲンを撮って、診察を受ける。会う人誰もが、最初に、ぎょっとする。トマト染めは相当インパクトがあるみたい。痛いのと恥ずかしいのとで、あたしの顔色は、青と赤を混ぜた色、つまり、紫色だったと思うわ。

お医者様の診断では、捻挫。大きな骨折はしていないが、小さなひびはあるかもしれない、明日、再度、どこかで受診し詳しいレントゲンを撮ってもらって下さいとのこと。湿布をして、包帯でぐるぐるに巻いた。あたしは、（昔あこがれていた）松葉杖を借りた。アイツは、あたしのバッグと片方のパンプスを持ってせかせか働いていてくれる。ぼーっとした頭で、考えた。もしかして、あたしが怪我をしたことに責任を感じているのかしら。それで、あたしのために働いてくれの？　責任を感じる必要は微塵もない気がするけど、後でよく考えてみるわ。調子が悪いと、すぐ考えるのをやめるのがあたしの悪い癖ね。

アイツは、どこからか持ってきた手ぬぐいであたしの胸とお腹をごしごしこすったり、診察代のお金を出すために、バッグの中をひっかきまわして、あたしの財布を勝手に取り出したり。勝手放題しているわ。しかも、いちいち声にだす。

「俺は、好きでお前の胸を触ってるやないで、トマトのしみを落とすためやで」

「保険証なんか持ってへんわな」
「ぎょうさん、お金もっとるね」
「さっき脱いだパンストは丸めて内ポケットに入れておくで」
あたしは相手をする気力もない。挙句の果てにアイツは、こんなことを言った。
「あ、化粧道具らしきものがあるで。これで、涙で崩れた化粧、直した方がええかも」
この言葉にあたしはキレた。
「こら、この無能ガイド！　１５分間、黙っていなさい！」
あたしは、アイツからバッグを奪い取って、袈裟がけにすると、松葉杖を使う練習をしながら洗面所へ行った。
　１５分後、化粧を直して、洗面所から戻ってくると、アイツは、しょんぼりしている。あたしが、
「１５分たったから喋ってもいいわよ」
と言うと
「あー、助かった。黙っているのがこんなに辛いやなんて」
と答える。なるほど、アイツは黙り恐怖症ね。
　とにかく、早く家に帰りたかった。そこで、あたしは
「ガイドさん、今日はありがとう。あたしは帰ります」
と言った。
「電車ですか？」
「ええ、電車よ……　でも、この服じゃ……　やっぱりタクシーで……　」
「タクシー代なら、俺が出します」
「ガイドさん、３２０円しかもっていないんじゃなかったの」
「お、おっしゃる通りですわ」
ここから、家までのタクシー代なんて想像できないわ。かと言って、このトマト染めのワンピースで電車に乗るのは……　。いちいち、大声で説明して回るわけにもいかないし。ワンピースを脱ぐわけにもいかないし。かと言って、コイツからアロハシャツを奪って、あ

たしが羽織れば、コイツが裸になるし。う〜ん、どうしたものかしら。

アイツが、おずおずと申し出た。

「あのー。俺の知り合いが近くに住んでるんで、そこに行きましょう。適当な着替えがあるはずですわ」

そう言って、あたしの意見も聞かずに携帯電話をかけた。

「もしもし、あ、俺、渡(わたる)や」

電話から、女性のきゃぴきゃぴした声が聞こえてくる

「あー　わたくん、久しぶり元気？」

何度がやり取りして、車で病院まで迎えに来てくれることになった。

『わたくん』って呼んでいたけど、一体、この女性とアイツはどういう関係なの？　アイツは電話を終え、あたしに言った。

「迎えに来てくれるって」

「誰が迎えに来てくれるの？　また、『別の女』とか言わないでよ」

「女は女やけど、『別の女』ではないんや」

「『別の女』でなければ『同じ女』？」

「そうやないけど。ややこしいから、後で説明するわ」

誰が出てくるのかわからないけど、着替えがあるんならいいわ。そーっと椅子に腰をおろした。疲れたし、お腹がすいてきた。そう言えば、あたしのシナモンベーグルはどうなったのかしら。

「今日は」

威勢のいい声が聞こえた。見上げると、３０代くらい、ショートカットで、見るからに明るい女性が現れた。ジーンズにＴシャツ。その上に白のカッターをはおっている。カッターには、点々とカラフルなペンキ？　絵具？　がついている。よく見るとジーンズにもついている。アイツは言った。

「さゆり姉(ねえ)、早かったやないか？」

「早いでしょう。近いからね」

お姉さん？　でも関西弁じゃないわ。とりあえず、あたしは挨拶をした。
「水上碧（みなかみみどり）です。お世話になります」
「私は、八丈（はちじょう）さゆり。わた君の義理の母よ」
義理の母？　でもあたしとそんなに歳が変わらないように見える。それにさっき姉と言ったように聞こえたけど？
　彼女はあたしの包帯を巻いた足をみて
「痛そうね。大丈夫？」
「あんまり、大丈夫ではないです」
とあたしは答える。彼女は、さらにあたしの頭の先へと視線を移していく。あたしを値踏みする視線だ。
「わた君のガールフレンドがかわいい子で良かったわ」
どうやら、あたしは合格したらしい。でも、いったい何に合格したのかしら。
「それじゃ、行きましょう。わた君、この子をおぶってあげたら？」
なるほどー　おんぶという方法があったわ。さっきの横抱きは怖かったけど、おんぶなら……　するとアイツは
「おんぶしたら、俺のシャツにトマトジュースが付くやないか」
なるほどー　だから、さっきは、横抱きしたのね。ちょっと恐かったけど、なんだかお姫様になった気分だった。また横抱きしてくれるのかしらと、あたしは、浅はかな期待をしていた。
「歩かした方がええよ。松葉杖の練習せなあかんし」
とアイツは、あたしの期待を打ち砕いた。

　あたしたちはかわいいドイツ車で彼女のマンションへ行った。あまりに飛ばすので、気分が悪くなりそうだったわ。最上階に近い一角が彼女の家。家の中は、程よく散らかっている。読みかけの新聞に雑誌。テーブルの上には、紅茶カップにティーポット、何かのデザインを描きとめたスケッチブック。でも、なにか変だわ……　そう、男の人の影がない。彼女の夫で、アイツの父親が住んでいる雰

囲気がないのだ。アイツも珍しそうに部屋を見ている。
「へぇー　さゆり姉は、こんな所に住んでいるんだ」
彼女は答える
「そういえば、わた君、ここに来るの初めてね。何回誘っても、来なかったのに、今日はどういう風の吹きまわし?」
いたずらっぽく彼女は続ける。
「なんなら、今晩、この家をかしてあげましょうか?　私はパパの所に行くから。二人で一泊してもいいわよ」
あたしは、慌てて答えた。
「え、遠慮しておきます」
「そう、残念ね。まあ、いいわ。そう言えば、着替えが必要なのよね。それじゃあたしたちは着替えを探すから、わた君はピザを注文してくれる。その辺にチラシがあったと思うわ。二人ともおなかがすいているでしょう?」
あたしたちはウンウンと頷く。

あたしは松葉杖をつきながら、彼女の後を追いかける。彼女は、全身が映る鏡の前に椅子を置いた。さらに、トマト染めのワンピースとやはり赤いしみのついたスリップを脱がせて、あたしを座らせた。
「足を怪我しているから、ズボンはだめね。ワンピース、いややっぱりスカートとブラウスの方が着やすいかしら。体格は私とあまり変わらないから、サイズは気にしなくていいでしょう。ちょと、待っててね」
そう言って、彼女はウォークインクロゼットの方へ消えた。

アロハな男（その4）

彼女（八丈さゆり）は、沢山の服を抱えてきた。
「上下に分かれたものは、組み合わせがありすぎて、いくら時間があっても足りないから、ワンピースにしたわ」
そう言って、彼女は、順番に服をあたしの胸の所に置いて、選別していく。合いそうなものとそうでないものに。あたしが意見する隙は全くない。半分ほど、選別したところで、彼女の手が止まった。
「しまった。みどりちゃん、靴は何色だったけ？」
「黒、黒のパンプス」
「えー黒？　ちょと見てくるわ」
そう言って、慌てて出て行った。すぐに、悲しそうな顔で戻ってきた。
「うーん。黒で、カジュアルにしようとすると、黒か、グレーね。あいにく、そういうワンピースはないわ。青いジーンズという手もあるけど、怪我をしてちゃ、ジーンズを穿くのは一苦労ね。仕方ない」
そう言って、また、沢山の服を抱えて、ウォークインクロゼットに戻っていった。家に帰る時だけなのだから、何もそこまでこらなくてもいいのに、と思うが、彼女のしたいようにさせる。あたしは、彼女の着せ替え人形だから。
今度は、黒やグレーのスカート、ツーピースを抱えてきた。あたしの腰のあたりに、一通りスカートを置いていく。ようやく選んだのは黒のミニのフレアスカート。
「みどりちゃんは、足がきれいだから、これがいいかしら。はいてみてくれる」
あたしは、松葉杖をつかって、立ち上がり、バランスを崩さないように注意しながらスカートをはく。これが、結構大変。これからしばらく、毎日、こうなのかと思うと気が重い。

彼女は、他のスカートをもどして、今度は、上を沢山持ってきた。結局選んだのは、グレーのシャツ。

「なにか、ピンクのアクセントを入れたいところだけど、まあ、このぐらいで良しとしましょう」

着てみると、鏡の中の自分は、申し分ない。右足の包帯でさえ、コーディネーションの一部のようだわ。あたしが

「ありがとうございます。最高にいいわ」

と言うと

「よかったわ。それじゃー、これを差し上げるわ」

「そんなー　ちゃんとクリーニングしてお返しします」

「いいのよ、この服があなたを選んだのだから」

なんだか、あたしは、最高にほめられたような気がする。

ダイニングでは、アイツ（八丈渡）が、すでにピザを食べていた。ピザの香ばしいにおいが漂ってくる。

「あ、わりぃわりぃ。先、食べさせてもらってます。あまりにもお腹がすいていたんで。お、お前、かわいいやないか」

まるで、今まではかわいくなかったと言っているように聞こえる。

彼女が言った。

「それじゃー。私たちも食べましょう」

右足の鈍い痛みは、相変わらずだけど、食べていると、気分が明るくなる。

彼女は自分たちの話をした。アイツが高校生のころに、パパと再婚した。（彼女の方は初婚）　そのころ、彼女は売れない画家で、パトロンがほしかったこと、一方、アイツの父親（パパ）は、妻を亡くし、家事をする人が必要だった。お互いの利害が一致して結婚したのだと、彼女は自嘲気味に説明した。結婚して、一緒に住むようになって、今度は、別の問題が生じた。彼女とアイツは、１０歳も違わない。お互いを異性として認識しないでいるのが難しい。その結果、

姉弟になった。つまり、アイツは、彼女の子ではなく弟で、彼女はアイツの姉なのだと。そう思うとお互いに気楽になって、家族としてやっていくことができたのだそうだ。アイツが大学に入って家を出ていって、彼女の方は画家として売れるようになって、この家をアトリエとして使うようになった。彼女は姉弟関係についてこう言った。

「その時は、うまくいったように思えたけど。本当の所、この子、わた君は自分を抑えていたのね。それで、今でも女性に対して、踏み込んだ付き合いができなくないのよ」

アイツは、反論する。

「考えすぎやで、さゆり姉(ねえ)。それなら、こんなかわいい、ドジな子を連れくれるわけ、ないやないか」

かわいいは、いいけど、『ドジ』は余分よ。『ドジ』は。それにしても彼女の話は変だわ。アイツは、『別の女』には不自由しないんじゃなかったけ。それもと、『別の女』は架空の女？　ただでさえ、ややこしい家族関係なのに、虚構が混じっているかもしれないとすると、わけがわかんないわ。

彼女は、突然、あたしに話をふってきた。

「というわけで、わた君は、自分の話は盛んにするけど、あなたの話はちっとも聞いていないんじゃないの？」

そう言われれば、そうかもしれない。でも、もともと、あたしは自分の話をするが苦手だから、相手の話を聞くのは苦じゃないわ。

「今度はみどりちゃんの話を聞かせてよ」

そ、そう言われても……　何を話せばいいの？　という眼をすると

「それじゃー　あなたの夢、夢を教えて」

「夢？　夢ねぇー　今は、会社であくせく仕事をする毎日だから、夢なんて考えたこともないわ。学生の頃は、ロボットを作るのが夢だったの。砂漠に木を植える孤独なロボット」

「どうして、孤独なの？」

「1台しかないから」

「どうして1台だけなの？」
「どうしてかしら……　真っ白な砂漠で、真っ赤なロボットが1台、ポツンと置かれているの。だれもいない炎天下で、黙々と木を植えて、水をやるの」
彼女が続きを話す。
「何年も何年も、1台きりで働いて。そのうち、小さなオアシスができ、それがいつか森になる。それ、いいわねぇ―」
そう言って、彼女は、部屋を出ていくと、スケッチブックと、黒鉛筆、色鉛筆を持ってきた。猛烈なスピードで絵を描きだした。黒鉛筆で2枚描いたかと思うと。今度は、色鉛筆で、ところどころに色をつけていく。完成した1枚目は、あたしの説明したイメージ通りの絵。2枚目では、森のなかで、腕がもげて、ぼろぼろになったロボットが大きな木のそばにたたずんでいる。その横で地面からロボットの腕だったものが突き出て、水が湧いている。水は小さな小川となって流れていく。完全に動かなくなったロボットの方は、なんだか安らかに眠っているように見えるわ。
彼女は、『どう？』と眼で聞いてくる。あたしは、驚きと感動で声が出ない。アイツが言った。
「いい、夢や」
あたしは、昔を思い出して、言った。
「でも、この夢は消えたわ。大学院で……　色々あって、あたしは退学したの……　才能がなかったのよ。それで、この夢も終わり。そう、終わったのよ。でも、この2枚の絵を見ていると、なんだか涙が出てくるわ。なぜかしら？」
あたしは、ティシュを眼にあてた。
「まあ、夢なんて、そんなもんや。また、新しい夢をみればいいやないか。でも、ようできた絵やなあー　これ、俺がもろうてもええか？」
「えー　どうして？」
「大事に保管しといたるわ」

とアイツが言うと、彼女が茶々を入れる。
「わた君に預けたら、1年もしないうちにどこかへ行っちゃうんじゃないの？　わた君はものを持たない主義だから」
「うーん、それもそうや。そん時はそｎ時や。新しい夢を、また、さゆり姉（ねえ）に描いてもらえばええ」
とアイツは言う。彼女はにっこり笑って
「みどりちゃん。新しい夢ができたら、教えてね」
と言う。

彼女、さゆりさんはあたしを車で家まで送ってくれた。アイツは、規則では家に行ってはいけないんだけど、と言いながらついてきた。猛スピードの運転で、あたしの顔はまた青ざめたけど、気分は明るい。なぜかしら。

アイツは、車を降りて玄関まで送ってくれた。松葉杖を使って、ゆっくり歩くあたしを。

「ほんま、今日は災難やったな。できたら、この埋め合わせをさせてほしいやけど。なあ、『砂漠の碧ちゃん』」

暗に、この関係を『ブレイク』ではなく、『キープ』したいと言っているのだわ。あたしは曖昧に頷いて

「考えておくわ。どちらにしろ、『泣き虫』で『ドジ』なあたしに付き合ってくれてありがとう」

と答える。アロハシャツを着たアイツは、ここからなら電車で帰った方がいいと言って、2枚の絵を持って駅の方へ歩いていった。

今日は、神様の視線が見えない。天罰ではなかったのかしら。もしかしたら天啓かしら。

ハワイ語のアロハには愛、慈しみなど色々な意味がある。総じて、相手を優しく受け入れることに関連しているように思える。あたしが『砂漠の碧』なら、アイツは『アロハな男』かもしれない。

アロハな男（その４）（後書き）

主人公の碧はアロハな男をキープするのでしょうか、それともブレイクするのでしょうか、作者としても気になるところです！？

道産子ゴースト（その1）

ゴーストさとる君（本名：月夜野悟（つきよのさとる））にかかってきた一本の電話が始まりだった。

「もう少し状況を整理してご説明いただけないでしょうか。それを課長補佐に伝えて……」

「……」

「そう言われましても、課長補佐は、本日は別件で出張しており、丁度、今頃は飛行機内と思われ……」

「……」

「課長は、課長で、たまたま、本日は人間ドックで休暇を取っており……」

ただでさえ、声の小さい悟君は、消え入りそうな声で話している。なにかトラブルのようね。課長補佐のゆきさんも、キューピー課長もいないこの状況で、クライアントのクレーム対応はきついわね。でも、そうやって、成長していくの。がんばってね新人！

本当のところ、さとる君は入社3年目で、中途採用された私と半年ほどしか違わないけれど、下がいないものだから新人と皆から言われる。ほとんど同期ということで、あたしはさとる君に親近感をもっている。何せ、中途採用のあたしには同期はいない。もちろん、新卒のさとる君と、中退とはいえ、大学院でみっちり鍛えられたあたしとは格の違いがあり、あたしは先輩風を吹かせている。さとる君の教育係は課長補佐で、大抵の場合、課長補佐の監督の元で仕事をする。従って、クライアントとのやり取りも課長補佐がやり、さとる君が表に立つことはなかった。痩せすぎで、根は明るいのだけど、声が小さく、覇気がない。存在感がなく、居ても居なくてもだれも気にしないので、ゴーストさとるとあたしは名づけた。でも、仕事の方はきっちりやるタイプで、時々、遅くまで仕事をして、帰りそびれているようだわ。

いつだったか、あたしが珍しく早朝出勤したときのことだったわ。PCに向かって仕事を始めて、しばらくたった時。何か匂うわ、と後ろを振り向いたら、さとる君が立っていた。心臓が飛び出るくらいびっくりしたけど、あの時のさとる君は幽霊そのもののようだったわ。あたしを見るともなく見ていて、視線は、あたしを通り越して、PCの画面を見つめているようだった。よく見ると、ズボンの代わりにジャージをはいて、髪の毛は寝ぐせで派手に立っていて、明らかに1分前に起きたという格好だったわ。おまけに寝起きの匂いがした。あたしは言った。

「ちょっ、ちょっと。ビックリさせないでよ。心臓が止まるかと思ったわ。寝起きのなの？　何を見ているの？」

「起きているような、寝ているような。女神が見える」

「はあ？」

「夢を見ているのかもしれない。碧先輩って、本当は人間ではなかったんですね。コンピューターに住みついた女神だったんですね」

「な、何を言っているの？　寝ぼけていないで、顔洗ってきなさい。ついでにジャージも脱いでズボンをはきなさい。さらについでにシャワーでも浴びてきたら」

「はい、わかりました。女神様」

そう言って、さとる君は、その場でジャージを脱ぎ始めたので、あたしは慌てて言った。

「ジャージは後でいいから、まず、洗面所に行って顔を洗ってきなさい」

「はーい」

元々、さとる君の視線はあたしをブスブスと刺すようなことはないのだけれど、あまりに視線が弱く、さすがのあたしでもわからないことが多い。この時もそうだったけれど、時折、弱く、それでいてやわらかな視線であたしを見つめることがあるの。もしかして、恋愛感情？　と思ったこともあるけれど、今のところ、その気配はない。もし、恋愛感情があるとすれば、さとる君は究極の草食系ね。

おっと、恋愛感情を持つ前に、毎日、シャワーを浴びて、清潔にしてほしいものね。

クライアントとの電話が終わった、さとる君は、いつも通り覇気がなく、いつもより少し憂鬱そうな顔をして思案をしている。どうするのかと思って、ちらちら見ていると、彼は、諏訪さんの所へ行って、相談を始めた。諏訪さんは、うちの課で唯一制服をきているおばさんで、事務を担当している。人あたりがよく、面倒見がいい、噂では、課長と同期で、そうだとすると、この課の最古参よ。うちの課のＮｏ．１、Ｎｏ．２は当然、課長、課長補佐だけど、Ｎｏ．３をあげるとすれば、諏訪さんでしょう。さとる君もそのあたりは心得ていて、相談したのね。まあ、さとる君はさとる君で頑張ってもらって、あたしは、眼の前の仕事に専念、専念。

なにか匂うわ、と振り返ると、さとる君が立っていた。

「い、いつから立っているの？」

「一分前からです」

「何をしているの？」

「立っています」

「そんなのわかっているわよ。諏訪さんと相談したのでしょ。やることあるんじゃないの」

とさとる君にプレッシャーをかけた。彼は、北海道育ちなのだ。あたしの知っている道産子は、皆、彼と同じようにのんびりしている。この忙し世の中、こちらが心配になるぐらいのんびりしてる。それでいて、ちゃんとやっていけるのだから羨ましいわ。さとる君はいつもより少し大きな声で

「１時間５０分後です。クライアントの所に出頭するのが」

とさとる君は言う。

「それで、準備はできているの？」

「いいえ、まだです」

「じゃー準備したら」

と、いつものように冷淡に答える。
「やっぱり、車の方がいいでしょうか？」
どうあっても、あたしのアドバイスをもらいたいらしい。あたしはこう言った。
「持っていく荷物によるわね。クライアントの所で、色々試験して調査しなければならないでしょうから、パソコン以外に、測定器もいくつか必要ね。重いもの、かさばる物、デリケートで慎重に運ばなければいけないもの、そういう荷物がある場合は車でしょう。一番重いものは何キロぐらい？」
「５０キロぐらい」
「結構、重いわね。長さは？」
「１６０ｃｍぐらい。バストは８０ｃｍぐらいかなぁ」
「バスト？　バストって何？」
「胸囲」
「脅威？」
いかん。話が通じないわ。
「怪我をしているので、慎重に運ばなければなりません」
とさとる君は言って、棚に立てかけてあるあたしの松葉杖を見た。あたしも松葉杖を見る。さとる君の話とこの松葉杖が関係あるの？
「……」
「体重５０キロ、身長１６０ｃｍ、バスト８０ｃｍで合っていますか？」
と、彼はあたしに視線を移した。あたしは、思わず答えた。
「し、失礼ね。体重は４７キロ、身長１６１ｃｍ、バストは８５ｃｍよ。よく覚えておきなさい！」
「はい、よく覚えておきます」
ようやく、あたしの左脳が事態を理解し始めた。もしかしたら、あたしも道産子かもしれない。
「つまり、あたしが、そのー　『一番重い荷物』というわけ？　なんであたしが『荷物』なの？」

「『荷物』の話を言いだしたのは碧先輩ですよ。僕は、『車がいいでしょうか?』と聞いただけなのに」
どうやら、話の前提条件が、二人で全く違っていたようね。あたしは観念した。
「つまり、あたしが、さとる君と一緒にクライアントの所に行くということね。それは、諏訪さんの入れ知恵?」
「はい、半分はそうで、残りの半分は僕の希望です」
「高くつくわよ。この『荷物』は」
「はい、何でもします」
「何でも?」
「はい、シャワーも毎日あびます」
あたしは、鼻をヒクヒクさせた。

こうして、さとる君とあたしの二人で、クライアントに対応することになった。

道産子ゴースト（その2）

クライアントは水族館。わが社は、大手の下請けが多く、直接エンドユーザーがクライアントになることは珍しい。なんでも水族館の副館長と課長が大学の同期で、そのつてで持ち込まれた仕事らしい。半年ほど前に通称ペンちゃんを納品したのだけど、それが最近元気がなく、とうとう動かなくなってしまったそうだ。明日、スポンサーの知事が視察に来るのだけど、何とかしてほしいとの副館長からの泣きの電話。

ペンちゃんプロジェクトのヘッドは課長補佐で、システム全体を把握しているのはゴーストさとる君。回路はプーさん（本名：赤倉大輔）が担当し、デザインは桃姫（本名：熱海桃子）が担当。社に残っていたプーさん、桃姫も加わって、システム図、回路図、機械設計図面を見ながら、簡単にブリーフィング。だんだん元気がなくなったことから、システム系ではなく、電気系のしかもアナログ系の問題だろうという結論になった。本当はプーさんにも一緒に行ってもらいたかったのだけど、打ち合わせが予定されていて、一緒には行けないとのこと。結局、あたしとさとる君が先発隊。プーさんは予備隊となる。この時点ですでに２０分経過。今回は、さとる君がペンちゃん治療作戦の指揮をとるべきなのだけれど、いつの間にかプロジェクトには関わっていなかったあたしが指揮官になっていた。さとる君に指揮官を経験してもらうという手もあったのかもしれないけれど、その時は、皆、クライアントに指定された時刻が気になって、考える余裕がなかったの。諏訪さんは、あたしが指揮をとることを見越していたのだろうか？

プーさんとさとる君で社用のバンに七つ道具を積み込む。ドライバー等が入った道具箱。テスター。小型オシロスコープ。ケーブル等の電材の入った箱。ＰＣケーブルと周辺機器。ＰＣ用小型データ

ロガー。PC各1台。それに、今回のペンちゃんプロジェクトに合わせて、照度計、温度湿度計、トランシーバー。プーさんの手持ちのパーツから使えそうなものを適当にみつくろう。

彼らが荷物を準備している間に、あたしは、念のために課長補佐への連絡を試みるが、つながらず、伝言を残す。桃姫に手伝ってもらって、プロジェクトファイル合計5冊を倉庫から探し出して、車に積み込む。なんせ、あたしは松葉杖を使って歩いているぐらいなので、とてもファイルを持ち歩けない。準備を終え後は出発するだけとなった。この時点で残り時間は1時間10分。焦る気持ちを抑えて見送ってくれるプーさん、桃姫に言った。

「それじゃ、遠足にいってくるわ。お土産は何がいい?」

「キャラクターグッズがいいわ。Bの鉛筆とか、紐パンとか」

桃姫の返事にあたしは力なく笑った。

「両方ともあり得ないわね。HBの鉛筆とか、携帯ストラップとか、似たようなものじゃ駄目かしら?」

「だめ! 本当になかったらお土産はいらないわ」

「わかった、聞いてみるわ」

と答えて、すぐに後悔した。水族館のショップで、『紐パンありますか?』って聞かなきゃいけないのか~ プーさんもお土産がほしそうな眼をしている。きっととんでもないものね。仕方なく尋ねる。

「プーさんは何がほしいの?」

「ワニの卵」

「……」

そう言えば、ワニを飼っているのだったけ。一応、答えておく。

「分かったわ。探してみるわ」

「それじゃー、さとる君、あたしとのデートにつき合ってもらうわよ」

そう言ってあたしは助手席に乗り込んだ。本当は、つき合わされるのは私の方だけど、そうでも言わないと、さとる君がかわいそうでしょうがなかったのよ。

高速は順調に流れていた。カーナビが右、左と指示してくれているが、都内のドライブは忙しい。道産子のさとる君が緊張しているのが分かる。運転していないあたしまで緊張して、結局、車中で読んだのは5冊のファイルの目次だけだったわ。

台車に荷物を載せて水族館の通用口を通ったのが、ほぼ指定時刻。もちろん荷物を運んだのはさとる君。あたしは、ワンショルダーバックパックに愛用のＰＣを入れて松葉杖で歩く。連絡を受けたのか、打ち合わせの会議室には、既にスーツ姿の中年の男性が一人、作業服姿を着た若い女性が一人座っていた。二十歳(はたち)そこそこで、きりりとした顔立ちの美人。（同性だとついつい歳を推定しちゃううのよねぇ）　中年の男性はあたしをみるとおやっという顔をした。毎度のことなので、慣れたけれど、やっぱり松葉杖は目立つようね。先手必勝。あたしはまず挨拶をした。

「こんにちは。黒川電子工房の水上です。お世話になります」

あたしは、左手で胸ポケットからすかさず名刺を2枚抜き出して、1枚を渡す。

「初めまして、水上碧(みなかみみどり)と申します」

以前、トランプのシャッフルの見事な男に会って以来、名刺を如何に速くエレガントに渡すかにはまった。それこそ手品のように必要な枚数を片手でさっと出し、一枚だけを前にだし、残りは、小指で手首の所に抱え、同時に左手を添える、この一連の動作を如何に速く、きれいに行うか随分練習したわ。昼休みに屋上で弁当を食べているキューピー課長を相手に練習したのよ。松葉杖を使うようになってからは、さらに難しくなったけど、難しいほどあたしは燃えるの。左手で名刺を取り出し、松葉杖を右わきに挟んで、バランスをとって、右手を添える

中年の男性は、慌てて挨拶を返す。

「ここの副館長をやっております五浦(いつうら)です。これは、現場を担当し

ている飼育員の片品（かたしな）です。あなた、みどりさんとおっしゃるのですか」

「ええ」

「そうですか。霧島がみどりさんのことを『うちの秘蔵っ子のみどり』と呼んでいました」

「そ、そうなんですか」

とあたしは答える。課長があたしのことを「エースになれる人材」と呼んでいたけど、やっぱり本気なのかしら。副館長はさらに

「みどりさんのことを『うちで2番目にかわいい子』とも言っていましたが、うちの片品にまさるとも劣らぬかわいさですね」

と続ける。あの課長め！　こんな所でそんな風に言っているなんて、一言多いわよ！

あたしたちは、早速本題に入る。うちの社が自律応答型ペンギンロボット、通称ペンちゃんを半年ほど前に納品した。実際にペンギンのいる水槽の陸地部分に置かれている。自律応答型というのは、本物のペンギンのように周りのペンギンやり取りができるという意味。もちろんロボットなのでペンギンのまねをするだけなんだけど、一見すると、まるで本物のように見える。周りのペンギンが鳴けば、鳴き返すし、周りのペンギンが羽をパタパタさせれば、ペンちゃんも同じように羽をふる。さらに口ばしがパクパク動くし、首もふる。動かないのは足ぐらいで、これは、電源の関係で動き回ることができないからだわ。詳しいことは知らないが、さとる君はかなり凝ったプログラムを作ったらしく、すこぶる評判がいいらしい。子供たちの人気者というだけでなく、本物のペンギンにも人気があるというから驚きだわ。

それがこのところ調子が悪い。羽はまったく動かないし、鳴き声もおかしい。人気は急落。飼育員の片品さんは、心配で夜も眠れないそうだ。もちろん、ロボットなので、餌をやるわけでもないし、せいぜい、汚れを軽く拭きとるぐらいで、飼育員ができることはほとんどないわ。

ペンちゃんはペンギン水槽の裏側の作業スーペースに置かれていた。あたしが、完成品を見るのは初めて。桃姫の説明によれば、体の模様は水槽にいる王様ペンギンとアデリーペンギンを折衷したもので、表面の素材として水に濡れた時に黒光りするものを苦労して探したそうだ。自慢は目玉で、小樽のガラス工房に特注で作ってもらったそうだ。電源をつないでみると、軽くウォームアップを始める（各部位を一通り動かす）。いわゆる自己診断モードってヤツ。確かに羽が何かに引っかかったように、羽の動作が途中で止まる。その他の目玉や口ばしの動作をチェックし、もちろん鳴き声の基礎となる短いフレーズも一通り（２０種ぐらいだろうか）出す。その後、通常モードに移行するはずなんだけど、動作が停止し、変な鳴き声を繰り返す。

「プープー、クォー、プープー、キュー、ピロロロ、ピロロロ、クァークァー」

あまりに可笑しかったので、あたしは思わず笑ってしまった。すると飼育員の片品さんが

「笑わないでください。ペンちゃんは病気なんです。いつもなら、あたしの呼びかけに応えてくれるのだけど、５日ほど前から、こんな変な鳴き声を繰り返すようになったんです」

「そんなばかな。呼びかけにこたえるなんて気のせいよ。とにかく、分解して調べてみましょう」

とあたしが彼女をばかにし言うと、気の強そうな片品さんも黙っていない。

「すぐに分解しようなんて。まるで、すぐ手術をしたがるヤブ医者ね」

あたしもカチンときて

「ロボットをかわいがる飼育員さんは、きっと恋人も『ロボット』ね」

あたしの視線と彼女の視線のぶつかるところで、派手に火花がバチバチと飛んだ。

道産子ゴースト（その2）（後書き）

ちょっとだけ誤字をなおしました。

道産子ゴースト（その3）

それまで、全く存在感のなかったさとる君がぼそぼそと話しだした。

「あのー、少しは、僕の話も聞いていただけないでしょうか？」

あたしと彼女は一時休戦し、さとる君の解説を聞いた。

「ペンちゃんのこの鳴き声」

『プープー、クォー、プープー、キュー、ピロロロ、ピロロロ、クァークァー』

「は、エラーコードを表わし、数字にすると４－５－４－２－０－３を表現しています」

「どうして、そんなややこしいことをするの？　ＬＥＤで何桁か表示すれば済むことじゃない」

と尋ねると。

「そんなにややこしくはないんです。実はこのロボットのペンちゃんは高機能音声解析チップと自動言語合成モジュール、ＦＭ音源を組み込んでいます。だから、鳴き声のフレーズに０から９の数字を対応させて、それらの組み合わせでエラーコードを表現するのは難しくありません。しかも、この音声解析チップはドイツのシュバルツバルト社製で、個体識別機能付ですので、こんなこともできます」

そう言って、さとる君はペンちゃんに話しかけた

「ペンちゃん、今の体温は？」

するとペンちゃんが答える

『キュー、クァークァー』

「これは、２－３を意味し、この場合、体温が２３度ということになります。この時、開発者である僕を認識して、様々なモニターをできるように仕組んでいます」

「へぇ―、すごいわね」

とあたしは感心した。

「個体識別は人間2名、ペンギン3匹まで記憶することができ、人間1名は、開発者の僕を割り当て、もう一人の人間は、もっともよく会話する人を割り当てますので、おそらく片品さんが割り当てられていると思います」

片品嬢が

「たしかに、あたしが呼びかけると応えてくれるけど、他の飼育員が呼びかけるてもでたらめな応答をするわ」

と言う。さとる君が解説する

「このチップには、長調短調識別機能がベータ版として搭載されています。これを利用して、ちょっとした学習をするアルゴリズムを組み込んでいます。最初はランダムに鳴き声のフレーズを繰り返すのですが、そのうち相手、この場合は片品さんの応答が長調であるような応答を学習によって獲得し、幾つかのフレーズのパターンを記憶します。さらに言うと応答は鳴き声だけではなく、動作、つまり、羽をパタパタさせたり、尻尾をふったりする動作も含みます。大げさに言えば、一種の言語や単語を作成しているとも言えますので、僕はこれを自動言語合成モジュールと呼んでいます。つまり、このドイツ製の高機能音声解析チップと僕の作った自動言語合成モジュールを組み合わせることによって原始的なコミュニケーションモデルを構成します」

片品嬢は??の表情を浮かべている。

「月夜野さんの言うことは難しくてよくわからないわ。簡単に言うとどういうこと?」

「簡単に言うと……　そうですね、友達を作れるロボットと言ったところでしょうか。相手がペンギンでも、まったく同じよう機構が働きますので、ペンギンの友達もできるはずですが……　片品さんから見て、どのようにみえますか?」

「そういわれれば、確かに3匹のペンギンがいるわ。仲のいい友達というよりも喧嘩仲間のように見えますけど」

「そうですか、長調短調による学習は良くないのかもしれません。

もう少し、ちゃんとしたものにしようとすると、ペンギンの振る舞いや応答をじっくり勉強する必要がありますね」
あたしは思わずうなった。ここまで作りこむだけでも相当な努力をしたに違いないわ。さすが、粘りの道産子ね。あたしが指揮を執るつもりでいたけど、あたしがしゃしゃり出るのはおこがましいわね。それに、さっき、片品嬢をバカにしたけど、彼女は正しかったのね。謝らなくちゃ。あたしがそうしようと思ったら、先に片品嬢が話しだした。
「それで、ペンちゃんは直るの？」
「うーん、どうでしょう。まず、このエラーコードですが、数字の４－５－４－２－０－０－３の最初の４はエラーコードの印（しるし）です。次の５は、エラーコード本体が５桁の数字であることを意味します。エラーコード本体の最初の２桁の４２は、羽の動作に関連するエラーで、００３は、羽の動作が目的の位置に達しなかったこと、つまり、指令通りに羽が動作しなかったことを意味します」
「と言うことは、どの辺が怪しいの？」
とあたしが尋ねると
「羽を動作させるモーターを含む駆動系か、あるいは、羽の位置をモニターしているエンコーダーかが故障しているのだと思います。電源投入後の最初の自己診断モードで、すでに羽の動作がぎこちなかったので、駆動系の方が怪しいでしょう」
「そこまでわかれば、立派な医者よ。片品さんには悪いけど、これから先は分解しないといけないと思うわ」
とあたしが言うと、彼女は
「わかっているわ」
と言った。

それから、さとる君はお背中側の蓋をあけて肩に埋まっている駆動系を調べた。ちょっと見ただけではわからなかったけど、一つ一つの部品（クランクや歯車やモーター）を調べると、一つの歯車の

一部が割れて変形し、動作時に引っかかっていることが分かった。
それを見て片品嬢は
「人間で言えば四十肩みたいなものね。動物でも人間でも関節のトラブルはすっきり直らないから厄介なのよねぇ」
と言う。そう言えば私の身の回りで最近そういう人（関節のトラブル）を見たような気がするわ。誰だったけ……　人ではなくてペットだったっけ……　う～ん、もう少しで思い出せそうなのだけれど思い出せないわ。まあ、いいか。それより、ペンちゃんを直さないと
「それで、症状とその原因は分かったけれど、そもそも歯車が割れた原因は何かしら？　歯車を新品に交換すれば、とりあえずは直るけれど、最初の原因がわからないと気持ち悪いわね」
　片品嬢とあたしの漫才が始まった。
「もしかしたら、ビールの飲みすぎによる尿酸値の上昇とその後の痛風？」
と片品嬢が言えば
「ビールは飲まないし、歯車付近に尿酸かなにかが結晶化しているわけじゃないから、痛風はあり得ないわ」
とあたしが答える。
「それとも羽の動かしすぎによる疲労骨折？」
「そうね金属疲労による破損はありえるけど、そのぐらいのことは、わが社の天才デザイナーがチェックしているはずだから可能性は低いわね。それに変形しているのが、力のかかる円周方向ではなく、それに垂直な方向なのが気になるわ」
「それじゃ、寒くて風邪をひいて、関節が痛むとか？」
「極低温では、金属や色々な素材は脆くなって、割れやすくなるけれど、低温と言ってもペンギンの耐えられる低温程度では関係ないと思うわ」
「それじゃ、打撲かしら。転倒して肩をうったとか」
「転倒して肩を打つって、どこかで聞いたことがあるけれど……
それって、こないだのあたしに似ているわね。全く、あれは、ひど

かったわ。お台場でデート中に捻挫して転倒して、血まみれならぬトマトまみれになるし……」

あたしがそう言うと、すかさず、さとる君が言った

「えー、碧先輩、デートしてたんですか？　皆には『ジョギング中に……』って言い訳してたじゃないですか？　あれはウソだったんですか？　デートの詳細を教えてくれなかったら、皆にばらしますよ」

し、しまった。また墓穴を掘ってしまった。あたしは、慌てて言った。

「そ、その話は、とりあえずおいておきましょう。今はペンちゃんの転倒について分析するのよ。つまり、ペンちゃんは地面にしっかり固定され、電源コードも固定されているから転倒することはありえないわ」

片品嬢がいいことを言う。

「あ、もしかしたら、デートじゃなくて喧嘩かも。さっきも言ったように3匹ほど喧嘩仲間のペンギンがいて、時々、口ばしで突っつきあうのよ。本気になると、口ばし攻撃は、強烈で、怪我をすることもあるわ」

あたしは、救いが現れたと思った。

「そ、それよ。きっと、それよ。この毛皮がわりの合成ゴムは、破れはしないけれど、口ばし攻撃の衝撃を防いでくれるわけではないわ。肩のこの位置だと、口ばしで変形してもおかしくないわ」

さとる君もこの推定には賛成しているようだわ。

道産子ゴースト（その４）

　あたしは、発言したいのを我慢して、さとる君が口を開くのを待った。
「さて、どうしよう。碧先輩、どうしましょう」
「そうねー。やるべきことを整理してみて」
「えーと。歯車を新品に交換する。つつかれてもいいように対策する」
「優先順位は？」
「まず、明日の知事の視察に間に合わせるのが大事ですから、それに間に合うようにする必要があります。歯車がすぐ入手できるのであれば、交換します。つつかれてもいいような抜本的な対策は時間がかかるかもしれないので優先順位は劣ります。歯車の方が優先度が高いですが、明日までに入手できないとすると、別の手を考える必要があります。歯車を選定したのは、桃子先輩ですので、まず電話してみます」
　そう言って、電話をした。桃姫の話によれば、特殊なものではないので、模型店、例えば秋葉原の模型店でも入手できるのではないかとのこと。
「秋葉原によって、ここに来るとしても、あと二、三時間は余裕があるわね。さとる君、確実に入手できるよう桃姫にお願いして。それから、口ばし攻撃の件も説明して、いいアイディアがないか考えてもらって」
とあたしは、さとる君に指示した。

「さて、桃姫に考えてもらっている間に、あたしたちも考えてみましょう。歯車を二時間後に入手したとして、それまでにやっておくこと、それからやることは何？」
さとる君は答える。

「まず、壊れた歯車を取り出します。この構造だと、ネジを何本か緩めればいいので難しくはないでしょう。ただ、手持ちの六角レンチのサイズが合うかどうかは心配です。インチ規格は、持ってこなかったので、早めに確かめて、なければ持ってきてもらいましょう。新品の歯車に交換するのも問題はありません。その後は、動作確認ですが、この状況なら、自己診断モードで確認するのが手っ取り早いでしょう。自己診断モードで新たな問題が発見される可能性は低いです。今の所、エラーコードは羽の動作1か所だけですので」

「まだ、すこし、時間がありそうね。口ばし攻撃の対策はどう？」

あたしは、さっきから黙っている片品嬢をちらりと見る。片品嬢はうっとりするような眼でさとる君を見ている。こりゃー完全に惚れたわね。さとる君は考え、考え答える。

「物理的に攻撃を防ぐのが単純だと思います……　なにか硬いもので保護をする……　いっそのこと、防弾チョッキや、鎧を着せるのはどうでしょう？」

片品嬢は論外という眼を向ける。

「では、プロテクター、つまり、ファールカップのようなものをつけてはどうでしょう？」

片品嬢が尋ねる

「『ファールカップ』って何ですか？」

「金的を保護するためのもので、格闘技や野球の選手が身につけます」

「きんてき？」

「つまり男性の急所です。ここを蹴られたり、ボールが当たったりすると、大変なことになるので、プラスチック製のお椀のようなものをかぶせます」

片品嬢は顔を赤らめている。かわいいわねぇ。

「それは、いいわね。薄い金属板か、あるいは滑りの良いテフロンシートか。桃姫に電話して」

とあたしは言った。桃姫とプーさんもほぼ、同様のことを考えてい

た。材料をそろえて、途中、歯車屋によって、こちらに向かうとのこと。

桃姫、プーさん達が到着したのは、二時間ほど後だった。歯車の交換、テフロンのプロテクターの取り付けも滞りなく終わり、さとる君と片品嬢で、ペンギン水槽の陸地部にペンちゃんを設置する。電源コードとモニター用のＬＡＮケーブルも敷設する。周りの生きているペンギンはおとなしく見守っている。あたしたちは、ペンギン水槽の裏側の作業スーペースでＰＣとペンギン水槽を見守る。

「では、電源入れます」

そう言って、さとる君は電源プラグをコンセントに差し込む。ＰＣのモニターでは、ペンちゃんシステムのＯＳが立ち上がるのが分かる。ＯＳのチェックを経た後、ペンちゃんコードが自動起動される。まず、最初に自己診断プログラムが実行される。ＰＣのモニターには、コマンドログ画面があり、指令のリストが表示される。自己診断モードに入ると、ペンちゃんは各部位を動かす。首、眼、羽、尻尾、それから鳴き声も全フレーズをテストする。今の所、順調。羽も問題なさそうね。

「自己診断モードが無事に終わって、通常モードに入りました。片品さん、中に入って、ペンちゃんに声をかけてもらえます」

とさとる君が言うと、わかったと言って片品嬢が中に入っていく。片品嬢がペンちゃんに挨拶をすると、何とペンちゃんは羽と尾をふって、嬉しそうな鳴き声を返す。一方、ＰＣの音声チップモニター画面には、人間2を認識したこと、パターン2－3の応答をしたことが表示される。片品嬢が出ていくと、ペンちゃんはランダム応答を断続的に繰り返す。

「あ、ペンギンが1匹、近づいてきたわ。でもペンちゃんはなんにも応答しないわ」

「ええ、カメラはなく。音だけで外界を認識しているので、鳴いたり喋ったりしてくれないと応答はできません」

その時、近づいたペンギンが『クァークァー』と鳴く。ペンちゃんはジロリと睨む、つまり眼を動かした。
「今、あのペンギンの方に眼が動いたわ。カメラを積んでいないのになんでわかるの」
「それは、ステレオチップのおかげです。耳、つまり音声受信機が2台あって、遅れ時間から方向を特定します。眼は、音の方向に動くようプログラムされています」
ペンちゃんと、そのペンギンは鳴き声と動作でやりとりを始めた。PCには、ペンちゃんの応答パターン名、相手の個体名と鳴き声の判定、長調・短調が表示される。
「ペンギン2は、長調が多いわねぇ。片品さん、ペンギン2は、何を考えているの、攻撃して来るの?」
「答えるのは、難しいわ。何を考えているのかわかるようになれば、飼育員は苦労しない。でも、だんだん距離を詰めているから、要注意ね」
「あれ、もう1匹、近づいてきた。さかんに羽を振っている。ペンギン3だそうだ」
そのうち、ペンギン3が口ばしで軽くペンちゃんを小突く。桃姫が悲鳴を上げる。
「や、やめてー。あたしのデザインした皮が……。眼、眼だけはやめてー、小樽の高級ガラスなんだから……」
「大丈夫よ。ちょっと様子を見ているだけだから。本当に攻撃しているわけじゃないわ」
ペンちゃんはよく防戦している。見えないはずの眼がぎょろぎょろ動いて、相手を威嚇するかと思うと、羽をさかんにぱたぱたさせたり奇声を発したり。

しばらく様子をモニターして、さとる君は言った。
「正常ですね。前と同じです」
飼育員の片品嬢も同意している。桃姫は相変わらず悲鳴をあげてい

るが、我々がやるべきことは終わったようね。
「これで、一段落ね。我々は撤退するけど、さとる君はどうする？」
「もう少しだけ様子を見ます。学習データもコピーしておきたいし。それから、明日は、知事の視察が終わるまでここで詰めていたいんですけどよろしいですか？」
そう言って、あたしと片品嬢を見る。
「会社の方はいいわよ」
「水族館も問題ありません。この作業スペースなら、お客様に見られることはないから。でも、防寒具は用意した方がいいかもしれないわ。水槽の冷気がすこしもれてくるので」

あたしたちは副館長に挨拶をして、社用車で帰った。運転はプーさん。車中で桃姫がぽつりとつぶやいた。
「子供を持つって、あんな気持なのかしら。自分では手出しができないで、はらはら見守るだけ」
子持ちのプーさんが答える
「そうさな。似ていると言えば似ているなあ。子供を公園で遊ばせると、鉄棒やジャングルジムから落ちないかと、はらはらする。他の子がいれば、一緒に遊べるだろうかとか心配する。それも次第に慣れてくれれば、あるいは、子供が成長すれば、別の心配をするようになる。友達からいじめられていないかとか、反対に友達をいじめているんじゃないかとか。自転車に乗るようになれば、車にぶつからないかとか、歩行者にぶつかるんじゃないかとか。教えられることは教えるけど、後は、見守るしかない。心配しながら見守るのが親の役目じゃないのかな」
「あたしにはとても親は務まりそうにないわ」
と桃姫が言うと、ぷーさんは
「そんなに心配しなくてもいいよ。最初から親になるわけじゃないんだ。子供が成長していくと、こちらも成長して自然と一人前の親になるんだ」

と答える。
「そうなの？」
「そうさ。そんなもんさ」
さすがに、子持ちの親は違うわね。なんだかこちらが安心できる。
包容力があるのね。

道産子ゴースト（その5）

結局、その日は課長補佐のゆきさんから連絡はなかった。翌朝、問いただすと

「うん、留守電には気がついたけれど、もう一度電話があるまでは、まかせようと思って」

「つまり、わざと電話しなかったということでしょうか？」

「そういうことになりますね」

「つまり、子供を見守る親に徹していたというわけですか？」

「その表現は、よくわからないけど、そんなものです」

あたしは、やられた―と思った。課長補佐から見れば、あたしたちは子供なのだ。今日はどうするのか聞いてみた。

「さとる君は、朝から水族館に詰めて、知事の視察が終わるまで待機しているそうです。課長補佐はどうされますか」

「行った方がいいのかな？」

「客にまぎれて、ペンちゃんを見守ることはできますが、さとる君は、客からは見えない作業スペースで待機しています。そちらの方は補佐が行かれても邪魔になるだけでしょう」

作業スペースでは片品嬢がさとる君にアタックしているに違いない。つまり、片品嬢にとって課長補佐は邪魔になる。まてよ、わざと邪魔をさせる手もあるわ。そうすれば、さとる君はフリーのままだから、いざとなったら、あたしが食べちゃうこともできるわけだし……

「それで、碧さんの意見では、私は行った方がいいですか、それとも行かない方がいいですか？」

と、課長補佐が、あたしの思考を中断した。あたしは

「い、行かない方がいいです。さとる君に任せておいても大丈夫です」

と答えた。あたしは、善人なのだ。片品嬢とさとる君がいい関係になれば、それはそれでいいじゃない。

昼過ぎに、さとる君が上機嫌で帰ってきた。無事に知事の視察は終わり、ペンちゃんはいつも通りに活躍したそうだ。お土産に水族館の入場券を5枚もらった。現場に行った4人の分と、副館長の旧友である課長の分だそうだ。

結局、次の土曜日にあたしたち4人と課長の娘の早由美（さゆみ）ちゃんの5人で水族館に出かけた。早由美ちゃんはあたしにべったりついてくる。折角だから、あたしのカバン持ちをやってもらった。なんせあたしはけが人ですから。

早速ペンギン水槽に行くと、子供たちがたくさん集まって、ペンちゃんに注目していた。母子が喋っている。

「ママ、このペンギン歩かないよ。えらいのかなぁ」

「このペンギンは本物じゃないのよ、ロボットなのよ」

「えー、でも、こっちを見ているよ」

「ほんとねぇー　賢そうな眼をしているわ」

女子高生が騒いでいる。

「キャー、かわいいー！」

「きっとオスよ」

「そんなことないわ、絶対メスよ。羽の振り方なんか、お嬢様って感じじゃない」

「写真とって、写真」

「ねぇ、見て見て。本物のペンギンとじゃれ合っているよ。きっと恋人よ」

「さすがにロボットはぎこちないわねぇー　あなたの彼氏の方がましね」

「もー、それは言わない約束よ」

早由美ちゃんは、携帯で写真を撮りまくっていた。その時、飼育員の片品嬢がやってきた。

「こんにちは、先日はどうもありがとうございました」
あたしが、
「すごい人気ね」
と言うと、片品嬢は
「あの後、さとる君にいじってもらったら、だいぶ愛想が良くなったのよ。今では、ペンちゃんをいじめるペンギンはいないわ」
と答える。あれ？　片品さん、さとる君を名前で呼んでいる。あたしは小声で、さとる君に
「片品さんとそういう関係なの？」
と聞くと。彼は恥ずかしそう眼を伏せた。
「じゃー、このこと黙っていてあげるから、あたしの捻挫の真相も黙っていてくれない？」
そう言うと、さとる君はうなずいた。やった！　これで一難去ったわ。
片品嬢は、時計を見て
「あと、１０分したら、非番になるから、皆さんに合流するわ。丁度、これから、イルカショーが始まるから是非見て。迫力満点で、今の所、うち館の一番の自慢だから。そのうちペンちゃんが一番になるかもしれないけど。あはは」
そう言って、水槽の裏へ戻っていった。

あたしたちは急いでイルカショーのある屋外ステージへ向かった。確か、あたしの好きな動物はイルカとオンライン結婚紹介所のアンケートで答えた。イルカは海豚（いるか）とも書く。なぜかしらと考えながら、屋外ステージを目指すが、人ごみと松葉杖のおかげでステージに着いたときは、もうショーが始まっていた。でっかいイルカが２匹競争していた。２匹同時に小さくジャンプする。イルカの流線形の体にはほれぼれするわ。
あたしたちは、すいている前の方に向かった。その時、あたしは、手前の一匹と眼が合った。イルカはなんだか自慢しているようだっ

た。あたしたちが座ろうとすると、係員さんがあわててやってきて
「そこだと濡れますよ。こちらへいらしてください」
とあたしたちをせかした。その時、手間のイルカが目の前で大きくジャンプした。おお！　というどよめきが湧き起る。係員さんが
「逃げてください」
と叫ぶが、松葉杖のあたしは急には動けない。水面に落ちてくるイルカとまたもや眼が合う。明らかに笑っている。

三秒後、あたしの前面側は足先からメガネまでずぶ濡れになっていた。あたしは、
「この海の豚やろう」
とつぶやいた。早由美ちゃんがすぐに寄ってきて
「大丈夫ですか？」
と聞くので
「とりあえず、メガネを拭いてくれない。何も見えないから」
と頼む。
「あはは、災難だったわね」
と、桃姫のいじわるな声が聞こえる。メガネをかけて周りを見渡すと、何と！　あたし以外はだれも濡れていないわ。皆さっさと逃げたのね。係員はあたしを端の方の席に案内し、どこからか大きなバスタオルを持ってきてくれた。バスタオルで拭いていると、片品嬢がやってきて
「まあ、どうしたんですか」
「見てのとおりよ。イルカに嫌われたみたい」
「好かれたのかもしれないわ。もう一枚バスタオル持ってきます」
そう言って出で行って、真っ青な地に白抜きでイルカのキャラクターが描かれたバスタオルを持ってきた。お詫びに、差し上げるとのこと。

その後、あたしは青いバスタオルを体に巻いて、水族館をゆっくり見て回った。カバン持ちの早由美ちゃんはけなげにも、あたしを

気遣って、ついてきてくれる。他の４人（もちろん片品嬢はさとる君にぴったり張り付いている）はさっさと行ってしまったのに。

歩いていると、皆の視線があたしにブスブスと刺さる。

「ねぇ、周りの人、あたしをちらちら見ているわよ。恥ずかしかったら、あたしと一緒に歩かなくてもいいわよ」

そう早由美ちゃんに言うと。彼女は

「恥ずかしいってどうして？」

「だって、こんな目立つ青いバスタオルを巻いて、しかも、わかめのような髪の毛の女の人と一緒に歩いているのよ」

「え、そうだったの。私はてっきり、美女と美少女が並んでいるから目立つのだと思ってたわ」

はあー　まったく、美少女はおめでたいわね～　きっと、皆の視線を浴びることが快感に違いないわ。

待ち合わせ場所のミュージアムショップに着いたのはあたしたちが最初だった。列に並んで待たなければならないシアターものをすべてすっ飛ばしたからだわ。早由美ちゃんに2千円を渡して、適当に二人のお土産を買ってもらうよう頼んで、外の喫煙所に向かった。

風が吹いていて気持ちよかった。びしょびしょになってシースルー状態になっていた黄色いワンピースは、すこし乾いてきた。この風でタオルを巻かなくて済むぐらい乾けばいいのだけどと期待して、タオルを取って、風を受けた。

何だが少ししょっぱい気がすると思いながら一服していると、中年のスーツを着た男性がやってきた。あれ！　副館長じゃない。

「水上さん、こんな所にいらしたのですか？探しましたよ」

「あ、すいません」

とりあえず謝っておく。副館長と会う約束はしていなかったけど…

…　こちらから挨拶に出向かなければいけなかったのかしら、と不安になる。

「実は、お願いがありまして……　あのペンちゃんプロジェクトは、

見ていただいたように大成功でした……　あれとは別に長年温めていたアイディアがあって、改めて霧島に相談したんですよ。そしたら、『うちの碧に相談してくれ』って言われました。つまり、碧さんが、この新しいプロジェクトを引き受けるかどうかを決めるそうです」

「え、どうしてあたしなのかしら。プロジェクトの受諾は課長か、課長補佐が決めることなんですけど。それに仮にあたしが決めていいとしても、そもそもロボットなら月夜野君の方が適任だと思います」

「いえ、ロボットではないのです」

そう言って副館長は温めていたアイディアを簡単に説明してくれた。また、後日、現場を見ながらゆっくり相談したいとのこと。最終的な判断は課長がするとしても、資料を集めて、検討して、プロジェクトの成立性を判断できる材料をそろえなければならない。しかも、うちの会社が儲かるだけではなく、クライアントにとって意味のあるプロジェクトでなければ成立とは言わない。責任は重大だわ。やるしかないわね。あたしは、まるでやくざのように青いバスタオルを肩にひっかけてショップに戻っていった。

　ショップでは、皆が買い物を終えた所だった。早由美ちゃんは、あたしとお揃いで、貝殻入りの透明キャンドルを買った。器も透明なガラスなので、まるで、海の底を見ているようだわ。桃姫は

「結局、何も買わなかったわ。『紐パン』はないけどキャラクター入りの『紙おむつ』ならあるって言われたわ」

どうせ、そんなところでしょう。プーさんは

「ワニの卵の代わりに、サケの卵、つまり『いくら』の瓶詰を買ったよ」

と、これまた、笑える。さとる君と片品嬢は、色違いのタオルハンカチを見せてくれた。ペンギンのキャラクターが描かれていて、さとる君は水色地、片品嬢はピンク地だ。とっさに、右脳が２つの未

来を見せてくれた。一つは1年後、さとる君と片品嬢がハンカチを見て、お互いの馴れ初めの頃を思い出している幸せな風景。もう一つは3年後、鍋拭きに使われてゴミ箱に捨てられているピンク地のハンカチ。3年後が幸せかどうかは、ハンカチにもわからないし、あたしにもわからない。きっと誰にもわからない。

あー　あたしの3年後はどうなっているかしら。エースになれるかしら。白馬の王子は現れるのかしら。漠たる不安が風となってあたしの中を吹き抜けていく。肩に羽織った青いバスタオルをはためかせながら。あたしは小声で宣言した。

「変えてやる！　絶対、今とは違うあたしに」

大きな手の男（その1）

対面（デート）当日は、しとしと雨が降っていた。少し、肌寒いけど、夏の到来はすぐのはず。梅雨の終わりは天気が荒れることがあるから要注意ね。

実は、あたしは雨が好き。特に雨音が好き。雨音に包まれていると、他人の視線がシールドされるのよ。この世にあたし一人しか存在しないような錯覚の中で、じっと雨音を聞いていると、雨の息遣いが聞こえてくる。だんだんと激しくなる雨、そして、ゆっくりゆっくりと間遠になっていく雨音。最後の一滴が落ち、雨のやむ瞬間を見つけた時は、嬉しくなる。丁度、バッハのピアノ曲で、抑制された感情の起伏を見つけた時の嬉しさと似ている。

あたしは、お気に入りのブランドものの折り畳み傘を持っていくことにした。上品な赤紫とこれまた上品な水色のツートンカラーだ。服は、傘よりも少し彩度の高いブルーのワンピース。右足のマジックテープ留めのサンダルは、玉にきずだわ。もう松葉杖は使っていないのだけれど、サポーターを巻いた右足は、普通の靴やおしゃれなレインシューズをはける状態ではないわ。しかも、雨が降っているので、濡れることは確実。それでも雨の中を出掛けるのはウキウキする。その日あたしが会う候補者が『リサーチタイプ』だったというのもウキウキした理由かもしれないわ。

オンラインパートナー紹介システムは、『キープ』した候補者も含めて、最大3名の候補者と同時併行でつき合うことができる。候補者は、3つのタイプ、性格の似ている『シンクロタイプ』、似ていない『シーソータイプ』、どちらでもない『サプライズタイプ』となっているはずだが、今回、送られてきた候補者はどれでもない『リサーチタイプ』。一体どういうこと？　と思って説明を読むと

「当システムでは、ランダムに選んだお客さまに、調査への協力をお願いしております。調査は、当社の派遣する異性との対面ステージの形式で行われ、実際に対面が行われた場合は、ボーナスポイントが付加され、ステージＡにおける最大候補者数を１名増やさせていただきます。なお、対面ステージでは、お客様を最大限もてなし、不愉快な思いをさせないよう努力いたしますが、お客様の満足を保証するものではないことをあらかじめご了承ください」

と説明されている。つまり、お客様の満足度向上のための対面調査というわけね。送られてきた候補者に『イエス』と回答したり、『対面』したりするたびに課金されるから、ただでデートできるのは悪くないわね。特に、あまり結婚する気がないあたしみたいにフェイクの結婚願望を持っている場合には。もしかして、そのこともばれているのかしら。その時はその時、今回は、しかっり『おもてなし』してもらいましょう。

　指定された待ち合わせの場所は銀座の宝石店の前。彼は、ベージュのスーツ上下に真っ白な無地のＴシャツを着ていた。くすんだ空のもと、明るくさわやかな印象の服だが、何と言っても背が高い。あたしが１６１ｃｍだから１８０ｃｍ以上に違いない。見上げるようにして、

「こんにちは、初めまして、塩原碧（しおばらみどり）です」

とあたしは戸籍上の本名を名乗った。

「オンライン紹介所の河津耕三です」

と言って、彼は名刺を差し出した。あたしは、条件反射的に名刺を出そうとしたが、生憎、今日は想定してなかったので名刺はない。それを見て彼は

「あ、名刺は結構です。それより、足、大丈夫ですか、少しは歩けますか？」

とあたしを気遣ってくれる。細やかな気遣いは、『おもてなし』を予感させる。でも、左足にはかわいらしい白のローヒールサンダル、

右足には、厚いゴム底の黒のサンダルならだれでも気がつくわね。
「ええ、骨に少しひびが入っていたのだけど、もう大分直りました。ゆっくり歩いていただけるとありがたいわ」
あたしたちは、歩行者天国をゆっくり歩く。雨は上がっているけど、いつ、また降り出してもおかしくない。
「歩いているだけでは、何ですから、お茶でも飲みながらお話ししましょうか？」
「そうね。そうしましょう」
「コーヒーがいいですか？　それとも紅茶がいいですか？」
「いつもはコーヒーしか飲まないけれど、たまには紅茶がいいわ」
「では、おいしい紅茶を出してくれる所に行きましょう。丁度、この道のちょっと先にそのお店があります。ハーブティーもありますし、タルトも色々あります」
「河津さんは随分詳しいのですね」
「ええ、この界隈はよく歩きますので。ここから上野までは、ずっと歩行者天国ですから、はしからはしまで歩くと結構運動になります。僕は歩行者天国が好きなんですよ。普段は車が威張っていますが、歩行者天国のときは、丁度、今みたいに道の真ん中の歩くこともできますし」
言われてみれば、あたしたちは道の真ん中を歩いている。きっと、この人は理系ね。でも、あたしのペースに合わせて歩いてくれるところは、理系にありがちな自分勝手ではないわ。

喫茶店に入り、彼はローズヒップティーにジャムを入れる。あたしはシナモンとミルクをたっぷり入れたチャイを飲む。彼は、話しだした。
「実は、私はオンライン紹介所のシステムを担当しています。つまり、あなたと同じＳＥで、マッチング部分を担当しています」
「え、ということは3人の候補者のうち2名にはイエスをしなければならないというルールを設定したのは、あなたですか？」

「そうです。今は3対2にしていますが、当初は3対1という割合を採用していました。そうすると、自分の好みを反映しやすい反面、対面ステージが成立する確率も下がります。それで、その後、3対2という割合に変更しました。つまり、量より質だったのが、質より量に変わりました。他にもタイプ別分類や、性格診断結果の反映の仕方など、試行錯誤して決めたのも私です」

「ということは、サプライズタイプやボーナスを導入したのもあなたですか？」

「それらは何人かのＳＥで議論した結果ですが、私の意見はだいぶ入っています」

つまり、眼の前の河津耕三が『こんなプログラムを作ったＳＥ（システムエンジニア）の顔が見たいわ！』と思った相手その人なんだわ。もしかしたら今日は一波乱あるかもしれないわね。

あたしは尋ねた。

「この対面調査では何を調査するのかしら？　何のために調査するのかしら？　自分の手掛けたシステムがどう評価されているか知りたいの？」

「もちろんそれもあります。同じＳＥならわかると思いますが」

あたしは、ウンウンと頷く。

「それ以上に、お客様と顔を合わせて、システムが対象としているのは生身の人間であることを再認識するが大きな目的です」

「生身の人間？」

「ええ、オンライン紹介所は、直接対面しなくて済むという意味で、会社としては楽な反面、心配もあります。つまり、実際の対面がどのように行われているのか、どのようなトラブルがあるのか、これが、わかりにくいのが問題です。もちろん、会員の皆様は紳士淑女であって、ルールと常識をわきまえた付き合い、行動をすると信じていますが、それを保証することは難しいのです。確かに、戸籍謄本を使って本人を確認し、また、会員自身にもきちんと会の目的を認識していただいておりますが、それで完璧というわけではありま

せん。中には興味本位で入会している方もいないとは言えません」
あたしはぎくりとした。それって、あたしのこと？　彼は続ける。
「結局のところ、生身の人間である以上、想定外のことは起こるものなのです。システムはシステムでお客様の安全や満足度を向上できるよう努力をするわけですが、肝要なことは、お客様が多くの出会いを体験して人間に興味を持ってもらうことです」
「人間に興味って、当たり前のことじゃないかしら。もちろん、理系の人間は興味が人間よりは物や仮想空間に向いている人もいるけど。少なくともオンライン紹介所を利用している人は人間に興味を持っているはずだわ」
「はたして本当にそうでしょうか？　意地悪な見方をすると、当オンラインシステムを利用する人は、人づき合いが苦手でコンピュータを通してならば、自分の言いたいことが言える人ということはないでしょうか？　幾つかのデータを見て、相手を選別し、決めれた日時に、ほんの短い時間だけ一緒に過ごしてＹｅｓ、Ｎｏを判断する。まるでゲーム、とは言えないでしょうか？　パソコンを買う時にＣＰＵの速度、メモリーの大きさ、ディスク容量、グラフィック速度を見て選択するように、相手の仕事や家事能力、収入や地位、家族構成、趣味やセンスといった定型的な側面のみに注目していないでしょうか？」
なかなか鋭いわね。半分ぐらいにはあたしにも当てはまりそうだわ。
「例えば、電話すれば済むことをメールで伝える。店頭で店員さんに相談しながら服を選ぶ代わりにカタログ販売で注文する。英会話学校に行く代わりにＤＶＤの教材を買って一人で勉強する。などと、色々なことが人と直接対面しなくてもできるようになりました。だんだんと、人間との付き合い方、人間への興味を忘れているのではないでしょうか？　結婚という濃密な人間関係においてさえも、なにか定型化したつき合い方で済まそうとしているということはないでしょうか？」
なんだか、あたしのことを言っているように聞こえる。彼はまとめ

た。

「もし、相手への興味があれば、当然、相手を思いやることができ、悲劇的な破局を迎えることもないでしょう」

あたしは、右脳を金づちで殴られたような衝撃を受けた。

大きな手の男（その2）

その後、彼は持ってきたパソコンを開いて本格的な調査、つまり、アンケートをした。あたしの左脳はまじめに答えつつも彼の最後のセリフ『もし、相手への興味があれば、当然、相手を思いやることができ、……』が右脳の中で何度も響き渡った。もしかしたら、あたしの人生に欠けていたものはこれかもしれない。

物心ついた頃から、人の視線が痛かった。相手の顔や眼を見て話すことは苦手だった。小学校のころは、友達とおしゃべりをするよりも一人でピアノの和音に聞き入っている方が楽しかった。中学、高校では、形だけはどこかの女子グループに入っていたけれど、黙って皆の話に耳を傾けていた。大学に入って、周りを気にしなくなってコンピューターとロボットにのめりこんだ。

彼（河津耕三）は、あたしの回答をカタカタとノートＰＣに大きな手、大きな指で入力していく。いわゆるＡ４サイズと呼ばれる大きめのノートなんだけど、彼の手に比べるとノートが随分小さく見える。大きな手に太い指、隣り合う２つのキーを同時に押すには便利かもしれないけど……　たくましく、それでいて肌にふくよかさの残る若者の手だ。顔は手入れと化粧で歳をごまかせるけど、手の年齢はごまかせないのよね。あたしより確実に３つは若いわ。

アンケートを終え、にこっと笑って彼はこう言った。

「さて、これで、本日の仕事は終わりです。では、ゆっくり楽しみましょう。何がいいでしょうか？　どこでもいいですよ」

「どこでも？」

「予算と時間の許す限りという条件は付きますが、大抵ＯＫです。特に、希望がなければ私の方から候補を３つ、４つ挙げますが」

「そうね。ここの所、足の怪我でおとなしくしていたから、体を動かすというほどではないんだけれど、何かスカっとするようなこと

をしたいわ……　遊園地はどうかしら」
「東京ランド？」
「うーん、アトラクションがあるような所じゃなくて……　クラシカルな、メリーゴーランドがあるような遊園地って、ないかしら？」
「……」
彼は考え込んでいる。しかも眼が上方のあらぬ方向を見ている。なんだか、顔が少し青ざめているようにも見える。後になって、はたと思い当たったのだけど、この時、彼は遊園地でのあの事件を確かに予感していたのだ。
「では、あそこに行きましょう。地下鉄で何駅か行った所で、多分、ここから一番近い遊園地です」

あたしたちは、歩行者天国をもと来た方向へ歩き出した。先ほどよりも少し人が増えたようね。若いカップルもいれば、幼い子の手を引くパパやママ。お揃いのシャツを来た老夫婦。あたしもこんな風になれるのかしら。パートナーが現れ、子が生まれ、何十年と寄り添って趣味まで同じになる連れ合いができるのかしら。
いつの間にか、また、道路の真ん中を歩いた。彼があたしをエスコートしているはずなのに、知らず知らずに彼に誘導されているのだわ。道の真ん中からだと空がよく見える。あたしは天気が回復する兆し（きざ）をみつけた。
「河津さん、空を見て。雲がすごい速さで動いているわ。それに、少し、空が明るくなった。じきに晴れるのは間違いないわね」
彼は空を見上げて少し頷くが、何も言わない。何か心配ごとでもあるのかしら。

都会の真ん中にある遊園地は、色々な乗り物が密集している。天気が悪いのに、結構、人がいる。若いカップルが大半で、家族連れが少々。カップルは例外なく手をつないでいる。あたしは、ちらちらと彼の大きな左手を見るが、全然、手をつないでくれる気配はな

い。あたしたちはカップルでもなければ、見合いをしているわけでもないので、当然と言えば当然だけれど。仕事仲間ですらないわ。彼は接待係で、あたしは接待される側。むむ！　まてよ、接待ならば、手を握るもの接待だわ。頼めば手を握ってくれるかしら。あの大きく、たくましく、それでいてふくよかな手でがしっとあたしの手を握ってくれないかしら。右脳の中を、妄想が、彼の手が、駆け巡る。

彼の声があたしの妄想を止めた。

「さて、どこからにしましょう」

「……　えーと、やっぱり、最初は、クラッシクなものがいいわ」

「では、あそこのティーカップは？」

「え、あれって、ティーカップって言うの？　コーヒーカップって言うんじゃないの？　だって、形が円錐ではなくて円筒に近いし、それに、なにより、ぐるぐる回るところは、ミルクを入れていかき混ぜるコーヒーに似ているじゃない」

「お気持ちはよくわかりますが、この案内図にはティーカップと記載されています」

「もしかしたら、関東ではティーカップと呼んで、関西ではコーヒーカップと呼ぶとか」

と、あたしは食い下がる。

「さあ、どうでしょう。とりあえず、並びましょう」

ほぼ、一回分、あたしたちは並んだ。外から見ているだけで目が回りそう。おかげで、自分たちの番になって歩き出した時によろよろしてしまった。そうしたら、彼はすかさず、あたしの手を、正確には指を、かれの指先でかるく握ってくれた。丁度、王子様がお姫様をダンスに誘う時のように。かれの指は、思ったとおりだった。かさかさでもなく、つるつるでもなく、少し湿り気があり、少し温かみのある指だった。

コーヒーカップ（あたしは絶対『コーヒーカップ』だと思う。テ

ィーカップなんて呼んだら上品すぎるわ）にたどり着くと、彼はさっと手を引いた。あたしの指先から彼の指の記憶が消えていく。あたしは、何が何でも、彼の大きな手をゲットしたくなった。どうすればよいか左脳が作戦を練る。そうだ、簡単だわ、さっきと同じ状況を作ればいいんだわ。これを作戦Ａと名づける。

コーヒーカップは快調に回っていく。快調すぎて気分が悪いぐらい。止まって、立ち上がった時、演技でなく本当によろよろした。ここまでは作戦通り。想定外だったのは、彼もよろよろだったこと。とても相手をかまっている余裕はない。あたしたちは子供達が走って出て行くのを横目で見ながらのろのろと歩いて出て行った。

作戦Ｂの舞台はお化け屋敷。

常々思っているのだけど、世の男性はお化け屋敷を楽しむことを知らない。つまり、本当は怖いんだけれど『こんな作りもののお化けなんて、俺はちっとも怖くないぜ』という顔をする。中には、『この間、行ったお化け屋敷の方がリアルだった』とか『もう少し、血を流した方がいいんだけどなー』などと味気ないコメントをするやつがいる。男性とは逆に女性はお化け屋敷の楽しみ方を知っている。本当は怖くないのだけど怖いふりをする。『キャー』とか『やめてー』とか『もう怖くて先に進めない』とか、ここぞとばかりに演技をする。少々演技が下手でもお化け屋敷の雰囲気が補ってくれる。そうやって、男性の気を引く。男性はころっとだまされるのだそうだ。実は、あたし自身は試したことがないのよ。これは、みんなある女友達の話。彼女は新しいボーイフレンドができるたびに、必ずお化け屋敷に連れて行って、ボーイフレンドに仕掛けて反応を楽しむのだそうだ。ボーイフレンドは十中八九、偉くなったように気になってご飯をおごってくれるそうだ。あたしの作戦Ｂはご飯をゲットするのが目的ではなく、彼の大きな手であたしの手をしっかり握ってもらうのが目的。

この遊園地のお化け屋敷は純和風。火の玉や、墓石、卒塔婆、柳

に、恨めしやという定型的な表情で出てくる幽霊のロボット。文脈のない中では『恨めしい』という表情は絵にはできないのだという気がするのだけど。とにかく、全然、怖くないわ。ライトアップも普通なら、出てくるタイミングも普通。凝っていると言えば、冷風と温風、弱風と強風を使い分けているところかしら。こんなところで、『キャー』とか言わなきゃいけないの……　と最初は思っていた。

　幽霊ロボットも2次元の安直なものがあるかと思うと、立体的で、複雑な動作をするものもある。それでもゴーストさとる君の開発したペンちゃんに比べればレベルの差は歴然としている。その時まではそう思っていた。出てきたその幽霊ロボット（男性）は蝋人形のようにリアルに作られていた。でも動作は単調。あたしの顔のすぐそばまで、恨めしやというこれまでと同じ定型的な表情で出てきた。ここで、『キャー』と叫んで右側に立っている彼の左手を握ろうとしたその瞬間。なんと、その幽霊は、にやっと笑った。口をほんの少し開けたかと思うと、真っ赤な舌であたしのつま先から頭の先までを『ぞぞぞぞ』っと舐めたのだ。本当は舐めていなかったと思うわ。そんなに舌は長くなかったから。でも、何か見えない舌のようなものがあたしを舐めた。と同時に、足先から頭にかけて鳥肌が伝わっていった。あたしは思わず叫ぼうととしたが、言葉が組み立てられなくて、口をパクパクさせるだけだった。夢中で彼の手を握って押していく。一刻も早くその幽霊から遠ざかるために。ゆっくりゆっくり、じりじりと遠ざかるが、視線は、幽霊からはずすことができない。じっとこちらを見ていた幽霊は、こっちへこいと手招きをする。それからはもう、反対を向いて一目散に逃げた。彼の手をひっぱりながら。

　実際には走っていなかったのかもしれない。出口にたどり着いたあたしは、ハアハア言っていたけど、彼は何ともないようだったわ。

「ねぇ見た？　河津さん見たわよね？」

「え、何を？」

「幽霊よ！」
「ええ、幽霊は沢山いましたね」
「そうじゃなくて、最後に見た幽霊。いや、最後じゃないわ。えーと。何て言えばいいのか。あの幽霊。あの超リアルな幽霊」
「ええ、皆リアルで迫力ありましたね」
「そうじゃなくって、一つだけ、一体だけ、違っていたじゃない。そう言えばわかる？　そうだ。あたしがあなたの手を握って、引っ張っていく直前に見た幽霊。そう言えばわかるでしょ」
「いいえ、わかりません。だって、手は握っていませんよ。ほら」
そう言って彼は左手を見せた。その動作につれて、あたしの右手も動いていく。何と！あたしの右手が握っていたのは、かれのベージュのジャケットの左袖だった。慌てて手を離すと、あたしの右手は真っ赤。ジャケットの袖はくしゃくしゃ。よほど力を入れて握っていたのね。
　こうして作戦Ｂは完全に失敗した。

大きな手の男（その3）

今から考えると、あれはロボットじゃなくて人間だわ。だって、おしろいの匂いがしたもの。きっとあれは、プロの幽霊師ね。

あたしは、どっと疲れがでた。

「今のお化け屋敷、怖かったわ。ちょっと休ませて」

あたしは一番近くのベンチにへたへたと座り込んだ。彼はどこかへ行ったかと思うと、ミネラルウォーターを持ってきてくれた。ゴクゴクと水を飲んだけれど、まだ、胸のドキドキは続いている。あたしは、血圧を下げるいつものおまじないをした。目をつぶって深呼吸をして礼文島のあの風景を思い浮かべる。

学生のころ、北海道を一人で周ったことがある。最後に行ったのが礼文島。夏の礼文島は気持ちがいい。さわやかな風、咲き乱れる高山植物、海からそそり立つ巨岩の列。そんな巨岩群がつくる尾根を歩くことができる。遥か眼下には青い海と白いカモメ。頭上には、真っ青な空と、決して暴力的にはならない北国の太陽。巨岩に寝そべると、丁度、空と海の真ん中で時間が止まったような感覚を抱く。これはあたしの忘れられない風景。

社内の健康診断で血圧測定がある時は、深呼吸しながらこの風景を思い浮かべる。そうすると、血圧が１０ぐらい下がってぎりぎりクリアできるのよ。これがあたしの血圧を下げるおまじないであり、また、緊張を解くおまじないでもあるの。

次にあたしたちが行ったのはメリーゴーランド。作戦はしばらく休止。馬は、意外に高い。あぶみのような梯子を慎重に登り、ブルーのワンピースをももまでたくし上げながら馬にまたがろうとした。右足をかばいながらだから、なかなか難しい。係員が後ろからあたしのお尻を支えてくれる。やっと馬に乗れた。係員にお礼を言おうと思って振り返ると、そこには彼がいた。お尻を支えてくれたのは

彼だったのだ。しまった！　薄い生地をとおして彼の手の温かみを感じたのだけれど、その感触の急速に薄れていった。彼はあたしの右隣の馬にまたがる。メリーゴーランドは反時計周りに回り始め、馬は上下にゆっくり動き始めた。

　不思議な感覚だ。周りの馬は上下に動くだけなのに、メリーゴーランドの外の風景はものすごいスピードで後方へ飛んでいく。本物の馬に乗って疾走するってこんな感じかしら。はたとあたしは気がついた。メリーゴーランドは乗馬をシミュレートしているのだと。前方への疾走と上下動で乗馬を模擬しているのだ。ステージ全体を回転させる駆動機構と、おそらく、その回転力を少し分けて直線運動に変えるギヤ群とクランク群があるに違いないわ。それらがメリーゴーランドの本質。メリーゴーランドの発明者に会ってみたいわね。きっと子供好きの技術者ね。彼が、もしかしたら彼女が自慢そうに説明する光景が眼に浮かぶわ。ＳＥならこんな作品を作ってみたいわ。

　メリーゴーランドで元気を回復したあたしは、次にどこに行こうかと見回した。この遊園地に来たときから気になっていたあれに乗りたいと思って、彼に持ちかけた。

「今度は、あの大きな観覧車に乗りたいわ」

そう言うと、彼はなんだか浮かない顔をしている。

「あれ、もしかして河津さんは高所恐怖症？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど。結構人も並んでいるし、待たされるよ。それでもいいのですか？」

「並んでいるということは人気があるということで、人気があるということは面白いってことよ。行きましょう」

そう言って、半ば強引に彼を連れて行った。結局３０分ほど待ったのだけど、待っているうちに黒雲が空を覆い始めた。ポツポツ降ってきたかと思うとすぐにザーザーと本降りになった。遠くの方では雷が光っている。彼は、

「これじゃー　観覧車に乗っても面白くないですよ」
と言うが、あたしは
「でも、折角並んだし、お金も払ったし。乗りましょうよ」
と言って、結局、乗ることにした。あたしってお金貧乏で、時間貧乏だからこういう時は引けないのよね。つまり、お金がないから払ったお金は無駄にできない。おまけに時間がないから待つのに費やした時間は無駄にはできない。本当のお金持ちにはそんなに会ったことはないけれど、皆、お金があるだけでなく、時間もあるように見える。なぜかしら？　そんなことを考えながらゴンドラに乗りこむ。彼も乗りこみ、係員が外から鍵を締める。定員４人の狭いゴンドラに向かい合わせで座る。狭いのは彼が大男だからだわ。ゴンドラはゆっくり、ゆっくり上昇していく。あたしが
「一周で何分かかるのかしら？」
と聞くこともなくつぶやくと、即座に彼は
「１３分。もう、３５秒経ちました」
と答える。なんとなく彼の反応がおかしい。それにジッと時計の秒針を見ているようだわ。やっぱり高所恐怖症かしら。あたしは彼の気を紛らわそうと話を続けた。
「普通のカップルは、１３分間、何を話すのかしら？　天気が良ければ、あれが見えるとかこれが綺麗とか言うのでしょうね。それとも二人きりの空間を確保したのだから、やっぱり愛を語るのかしら……　１３分もあれば、プロポーズはできるわね。逆に別れ話をしたりもできるか……　でも、ここだと逃げ場がないから、別れ話しには不向きね。だって、７分目で別れ話を終えても、あと６分間ここに閉じ込められるのだから、気まずいわねぇ。相手がすんなり納得してくれればいいけれど、そうでないときは、反撃のチャンスを与えることになるから……」
　行儀よくそろえられた彼の両膝とその上の大きな二つの手で留っていたあたしの視線は、『別れ話』という音に反応して、動き出した。視線は大きな手を透過し、背後のシートを透過し、ゴンドラの

薄い壁を透過する。さらに、眼下の電飾を透過し、遠くへ遠くへ、過去へ過去へと視線が伸びていった。

あれも一種の別れ話だった。1つ目の手紙が予兆で、2つ目の手紙は事後、その後の飲み屋は確認だった。相手は高校の同級生で、ガリ勉。なんとなくあたしと同じ匂いを持っていた。だからと言って、好きだったわけでも、嫌いだったわけでもなかった。きっかけは、夏休みの自由課題。彼は自由研究、あたしは自由工作で、高校から県の展示会に推薦された。あたしたちはその時からお互いを意識した。もっとも意識したのは本意ではなく、周りがはやし立てたからだ。『ガリ勉カップル』と呼ぶ男子生徒がいれば、『自由連合』と呼ぶ女友達もいた。

特に付き合っていたわけでないけど、同じ東京の大学に行くようになって、時々、会った。二人だけで会うというよりも、名古屋から高校の友達が来たとか、たまたま同じ講義を取ってレポートで協力した時だとか、何かしら会う理由があった。4年生になって、キャンパスの異なる研究室に行くようになって、全く会わなくなった。

手書きの手紙が来たのは梅雨の頃だったわ。その頃、あたしは、大学院進学を目指す決意を固めていたの。所が、不得意科目でかつ勉強をしなきゃならないものが膨大で愕然としていた。手紙の内容は全く覚えていないけど、『元気ですか?』程度の手紙としか認識していなかったわ。だから、返事も書かなかったの。

夏が終わり、大学院入試が終わり、合格発表をもらい、翌年の春になって、ワープロで書かれた2通目の手紙が来た。曰く『その後、色々あって、今度、アメリカに行ってそこの大学院を目指すことにした。ついては、最期に君に会っておきたい』。そんな内容だった。あたしは大慌てで電話して、居酒屋で会うことにした。だって、最後ではなくて『最期』って書いてあったのよ。彼によれば、最初の手紙の頃、彼は大変な窮状に陥っていたらしい、その後、一度、自殺を試み、やり直すためにアメリカに行くとのこと。必ず成功して

みせるとも言った。肝心な時に、両思いだと思っていたあたしがそばに来てくれなかったと、暗にあたしを非難していた。

地下鉄の駅で別れ際に、彼は握手を求めてきたわ。そして長い長い握手をした。握手をしながら、彼はあたしに男と寝たことがあるかと聞いてきた。彼は、自分は行きずりの女と寝たことがあると言った。それがまるで不潔で恥ずべきことだったかのように言った。あたしは、自分から手を離してさよならを言った。

今から考えると、あの握手をしながらあたしを誘っていたんだわ。もし、そうして一夜を共にしていれば、彼の人生もあたしの人生も変わっていたに違いない。でも、そうはならなかったわ。最初の手紙をきちんと読めなかったあたしが悪いと言えば、悪かったわ。でも、きちんと自分の窮状を伝えられなかった彼にも責任があるわ。若者特有の鈍感さと不器用さの典型ね。言われたことを正しく理解できない。言いたいことをはっきり言えない。したいことをできない。今だったら、もっとストレートにもっとスマートにできたと思う。あたしの思い、彼の思いがお互いにどれだけ伝わったのかは確かめようがないけれど、あの時、あたしたちは確実に別れた。それだけは二人の共通認識だわ。もし、別れの握手をしたのが衆目の集まる駅ではなくて、こんなゴンドラだったら、違った展開になったかもしれないわ。

でもよく考えると、これが、河津さん言う『もし、相手への興味があれば、当然、相手を思いやることができ、悲劇的な破局を迎えることもないでしょう』の見本のような気がしてくる。あたしは、若者という理由をつけたけど、本当の理由は『相手に興味がなかった』かもしれない。

一つ目の雷が、過去をさまよっていたあたしを現実に引き戻した。かなり近い。２つ目の雷はもっと近かった。光と音がほぼ同時だった。光はほんの一瞬で伝わるから、光と音の時差は、音速で決まる距離を反映するの。時差が１秒なら３４０　ｍという具合に。２つ

目の雷の光と音の時差はせいぜい０．２秒、つまり７０ｍ以内に雷が落ちたことになる。雷の光は、彼、河津さんの蒼白な横顔を映し出した。そして、電気が消えあたしたちは暗闇につつまれた。停電したのだ。

大きな手の男（その４）

この時の停電は、長かった。

雷で短時間（数秒程度）の停電が起きるのは珍しくない。業界ではこれを瞬停という。今のように無停電電源（ＵＰＳ）が普及していなかった頃、たった数秒間停電が起きるだけでコンピューターは停止し、やりかけの仕事がパーになることは珍しくなかった。だから、あたしたちＳＥは皆、瞬停に敏感なのよ。と同時にＵＰＳの普及した今では、瞬停や停電に対しても落ち着いて行動できるようになった。あたしもＳＥなら、彼もＳＥ、たかが停電に慌てることはない。止まったゴンドラの中でゆっくり待てばいいと思ったの。

ところが、次の瞬間、目を見張るようなことが起きたの。暗闇の中で、彼（河津さん）は立ち上がると

「あ、あ、」

と言葉にならない声を出して、ゴンドラのドアノブをガチャガチャいじり始めた。あたしは、異様な雰囲気を感じ

「ちょ、ちょっと何やってんの！」

と叫んだ。彼は、

「で、出たい。ここから出たい。誰かこのドアを開けてくれ！」

と悲痛な声をあげる。

「ば、バカなこと言わないでよ。地面は何十メートルもしたよ。落ちたら即死よ！」

あたしの声は一気に１オクターブ高くなった。

「と、とにかく出してくれ」

とまたもや悲痛で哀願するような声。

そして、彼はドアや窓を叩き出した。大きな手でばんばん叩き出した。あたしの右脳はパニック寸前。幸い左脳は冷静だった。左脳の状況分析によれば、彼は『閉所恐怖症』。だから遊園地や観覧車を嫌がっていたのだ。観覧車が一周する時間を覚え、時計の秒針を

見ながらひたすら終わるのを待っていたのだ。一周すれば、狭いゴンドラから解放されると。ところが、雷で停電し観覧車は動かなくなった。秒針を見て耐えていたその緊張の糸が切れたのだ。

とにかくやめさせないと、そのうち本当にゴンドラのドアを蹴破って飛び降りかねないわ。そうなったらあたしもただでは済みそうにない。彼に引きづられてあたしも一緒に落ちるかもしれない。左脳は冷静に明日の朝刊の見出しを予知した。『男女カップル、ゴンドラを破壊して飛び降り、死亡、別れ話のもつれか、停電との関係は不明』。右脳が叫ぶ、そんな不条理な死に方は絶対受け入れられないと。

あたしは、暗闇の中でドアを叩く彼の腕をつかもうとした。でも、触れるだけで精一杯。丸太のように太い腕は、とても手でつかめるような太さではない。そこで、両腕で彼の右手を抱えこんだ。右手を腕と体全体でがっちりホールドすることに成功。ところが、彼の右手はあたしを体ごと振り払い、シートにしたたかに打ちつけられた。

「いったー」

お尻と背中が痛い。その時、左手がペットボトルに触れた。さっき水を飲んだミネラルウォーターのボトルだ。まだ水がだいぶ入っている。あたしの中の野獣が呼び醒まされた。両手でボトルのふたのあたり握り、大きく上段に構えて気合いを入れた。

「小手(こて)ー」

と叫んで、彼の右手にボトルを打ちおろした。剣道は学校の体育でしかやったことがないけれど、素早く竹刀を打ちこむのとは逆に大きく振りぬいたから相当な打撃のはず。

「イタター」

と言って、彼はシートに座りこんだ。彼は左手で右手をしきりにさする。暗闇の中では、はっきり見えないけれど、右手を閉じたり開いたりしてちゃんと動作するのを確かめている。まるで不滅のターミネーターね。あたしはその右手の生命力に恐怖した。反対に、久

しぶりに呼ばれたあたしの中の野獣は不敵な笑いを浮かべてこう言った。
「小手でだめなら、次は金的ね」
視線恐怖症のあたしが出てきた。
「ちょっと、暴力は解決にはならないわ。ここはあたしに任せて」
あたしは、開こうとする彼の右手をさっと両手でくるんで、言った。
「待って！　ここから出たいんでしょう？」
彼はコクリと頷く。
「だったら、あたしが出してあげるわ」
そう言って、閉じた彼の右手をゆっくり開いて、両手で挟んだ。表側の手の甲の上にあたしの左手を載せ、裏側の手のひらをあたしの右手で支えた。
「さあ、目をつぶって。あたしがいいって言うまで目を開けちゃだめよ。それじゃ、まず、大きくゆっくり深呼吸をして」
あたしも目をつぶって深呼吸をした。
「河津さんは、北海道に行ったことがある？」
「ある」
「どこに行った？」
「富良野」
「じゃー　紫のラベンダー畑は見た？」
「見ました」
「そう、だったら、その時の空の色は覚えている？」
「さあ、晴れてはいたと思うけれど」
「青よ。東京の白く濁った青とは違う、もっと深い青よ。漆黒の宇宙が透き通って見えそうな青よ。
さあ、想像して、あたしたちはラベンダー畑の真ん中に、こうして手をつないで立っている。
濃厚なラベンダーの香りが立ち込めている。
これから空を飛ぶから振り落とされないようにあたしの手をしっ

かり握って」
そう言って、あたしは彼の手を強く握った。かわいそうに彼の手の甲には鳥肌が立っている。
「ゆっくり、ゆっくり、あたしたちは上昇していく。地面は、だんだん遠ざかっていくわ。もうラベンダーの香りはしない。
上昇スピードが上がってくる。
ほら、真四角のラベンダー畑のへりが見えるわ。
その周りにのますっぐな道路が縦横に延びていく。
道路の先は遥かかなたの山にまで届いている」
あたしは、彼の手の甲をゆっくりとさする。
「さあ、もっともっと高く昇るわよ。
右手には藍色の海が見えてきた。
水平線がだんだんと丸みを帯びてくる。
左手の地平線も丸くなっているわ。
今度は、昇るのはやめて、南へ南へ、海峡を渡って本州の上空に行くの。
山々が見えてくる。
雲も出てきたわ。
太陽光線で輝く真っ白な雲よ。
だんだんと雲が広がってもう地上も海も見えない。
さて、東京の上空はこのあたりかしら。
それじゃ今度は雲の中を降りて行くわよ。
ほら、足先が雲に触った。
ちょっと寒くなるけど我慢してね。
そうっと、そうっと降りて行くわよ。
周りは冷たく白い霧、だんだんと霧が濃くなっていくわ。
太陽の光も弱くなって、暗くなっていく。
さあ、ここから雲の底まで一気に降りるわ。
そら、抜けた。

真下には停電で暗い街が見える。
赤や青の信号機だけは点灯している。
遊園地が見えるわ。
遠くの街が灯りを取り戻している。
停電が終わったのよ。
そら、灯りの波がだんだんとこちらへ押し寄せてくる。
もうすぐ遊園地の停電も終わるわ。
さあ、観覧車の方へ降りて行きましょう。
あたしたちの乗っていたゴンドラは、丁度、真上にあるやつね。
よく見て。
ゴンドラの壁がすけているわ。
ほら壁を触ってみて」
そう言って、あたしは彼の右手を立てて、前後に動かした。
「ね、壁はすり抜けられるのよ。
さあ、壁を抜けて元のゴンドラへ戻ってきたわ。
まだ、目を開けちゃだめよ。
目をつぶっていても、ゴンドラの壁をすかして見えるでしょう。
あたしたちが乗ったメリーゴーランド。
お化け屋敷。
それにティーカップ」
あたしは、そう言いながら、自分だけ目を開けた。まだ、周りは暗いわ。停電したのは遊園地だけではないようね。でも、おかしいわね。さっきは、確かにすぐそばに雷が落ちたと思った。もし、観覧車や、そばのビルに落ちたのなら、こんなに広い範囲で停電が起きるかしら？　どちらにしろ、停電は、すぐに復旧するはず。問題は、観覧車がすぐに動くかどうかだわ。もし、観覧車の制御系統がやられていたら厄介ね。雷の電流自体は避雷針を通ってアースに流れたはずだから、駆動系がやられることはないと思う。でも雷につられて流れる電流、誘導雷は、時として被害をもたらすの。最近のインテリジェントな制御システムは、意外にこういうものに弱い。

でも、観覧車はそんなに多く出る製品じゃないし、一定速度で回るだけだから、そんなに複雑でやわな制御システムは持っていないはず。だから、停電が復旧すれば、すぐにでも動くわ。

あたしの妄想幻術で、いつまで彼をおとなしくさせられるかしら。あと、3分？　10分？　やっぱり10分は無理ね。長くても3分ぐらいね。その時は最後の手段の『金的』狙いね。

そうだわ、その前に忘れていたことがあった。神様に祈らなくちゃ。

「神様、神様、一生に一度のお願いですから……」

あ、やっぱり、一生に一度というのは勿体にないわね。一生に十度くらいの内の一度分にしておこうかしら。それでももったいない気がするわ。それじゃこうしましょう。

「神様、神様、今年度、最初で最後のお願いですから、一秒でも早く、観覧車が動くようにしてください！」

自分で言っていて、恥ずかしいわ。本当に、あたしってケチというか強欲というか。まあ、貧乏の星の元に生まれたから仕方ないわね。

その時、灯りがついた。あたしは、ホッとするとともに、これからが勝負だと思った。さあ、早く動いてちょうだい！　あたしのかわいい観覧車ちゃん！

灯りがついたのを感じた彼は

「もう、目を開けてもいいですか？」

と聞いた。やっぱり『金的』狙いか……　と考えながら、ペットボトルを目で探す。

「いいわよ」

と返事をした。目を開けた彼は、周りを見回して、それから右手に視線を落とした。あたしはまだ、彼の右手を両手で包みこんでいる。まだ、自由にさせるわけにはいかないわ。鳥肌はもう消えている。そのかわり、右手首の少し上には大きな青あざができている。あたしの『小手』の痕（あと）だ。

彼は、息を殺して、じっとあたしの両手に包まれた右手を見てい

る。あたしの幻術が効いていて、手をすかしてその先を見ているかしら。それとも何も考えないように、何も見ないようにしているかしら。あたしもじっと手を見て秒を数えた。

「1、2、3、……」

「…、156、157、158、……」

あたしはだんだん焦ってきた。もうすぐタイムリミットの3分。神様にお願いをするのに、貧乏根性を出したのはまずかったかしらと反省した。

「…、175、176」と数えた所で、ガタっと小さく揺れて、観覧車は動き出した。あたしは、ふー　と小さく息をした。彼の方は、さっきと同じ姿勢のまま、じっと耐えている。

　ようやくゴンドラは下まで降りてきた。あたしが、彼の手を離すと、係員がドアを開いて、ペコペコ謝った。あたしたちは、無言で、濡れていない一番近いベンチに向かった。そして、二人ともへなへなと座った。深呼吸を3回して、彼に飲みさしのペットボトルを無言で差し出した。彼もまた無言で受け取り、一気に飲み干した。

大きな手の男（その5）

雨は上がり、また、空が明るくなってきた。河津さんはポツリとつぶやいた。

「すいません」

あたしは、答えた。

「無理しすぎよ。最初から（閉所恐怖症だって）言ってくれればよかったのに」

「そうですね。反省しました」

「でも何とかなったじゃない。ぎりぎりだったけど」

「あと、４秒でしたね」

と彼が言う。あれ？　確かに、秒を数えたけれど、声には出してないわ。どうしてタイムリミットまで４秒だってわかったの？　あたし自身、まだ幻術にかかっているかしら。

時として、妄想は現実よりもリアルになり得る。そして、妄想を抱く者を蝕んでいく。閉所恐怖症も視線恐怖症も病的な妄想と言えなくもない。幻術は、毒を持って毒を制するようなもの。深入りすると取り返しのつかないことが起きるわ。彼に問いただすのはやめた。

神様のやわらかな視線を感じた。

「お前の幻術もなかなか面白かったわい。こっちへ来れば、次は、わしがいいものを見せてやろう」

「誉めてくれて光栄だわ。でも、こっちってどっち？　天国？」

しばらく考えて、ピンと来るものがあった。きっとあそこだわ。目星がつくと、今度は居てもたってもいられなくなった。あたしは、彼に声をかけた。

「河津さん、疲れたでしょう。今日は、これでお仕舞いにしましょう。私はどうしても今すぐ行きたい所があるの」

「もう少し、あなたのそばにいたいのですが……」
「私のそばに？」
と、あたしは怪訝な表情を浮かべた。
「ええ、そうです。一期一会ですから」
「一期一会？」
その意味を理解するのにたっぷり１０秒かかった。『一期一会』つまり、彼とあたしのこの対面は最初で最後の一度きりのもの。調査だから、普通の候補者のようにキープすることはできない。かと言って、再度、調査を設定すれば、それは、職権乱用。特にシステムの設計責任者としては絶対にできないこと。さっき、気軽に『今日は、これでお仕舞い』と言ったけれど、明日はないんだわ。明日以降、あたしたちが会うことはおそらく一生ない。なんだか辛いわね……　あれ、そう言えば、彼の大きな手をゲットしたいと思っていたんだっけ。さっきのあの幻術の間、たっぷり握っていたはずだけど、覚えている感触は鳥肌だけだわ。あの大きな手とも一期一会なのね。何とももったいないわ。
「それじゃ、私と一緒に来てくれる？」
「どこへ？」
「内緒。あ、でも、エレベータは大丈夫？」
「大丈夫です。少なくとも今までの経験では」
「じゃ、決まりね」

下から見上げると、東京タワーは高い。赤い鉄骨は力強くカーブを描いて空へ雲へと延びていく。伝説のバベルの塔も、こんなには高くなかったのではないかと思う。まさに人間の偉業だわ。
「私、名古屋出身なの。大学から東京に来たのだけど。私のような地方出には、東京タワーは東京の象徴なのよ」
「象徴ですか？」
「そう、象徴よ。東京の象徴であり、また、昭和の象徴よ」
エレベーターで、展望台へ向かう。そっと彼の左手を握った。大き

く、そして、やわらかな手だ。
展望台に上ると、雲が遠くまで広がっている。その下に関東平野の街並みが見渡せる。徐々に雲が退いて、街が明るくなっていくのがわかる。あたしたちは西を向いた窓の前に陣取った。
「さあ、始まるわよ。よく見ていて」
「何が始まるんでしょうか？」
「神様のお絵かきタイムよ」
「お絵かきタイム？」
「いいから、黙って見ていなさい」
もこもこした雲は次第に小さな塊になってちぎれていく。
「来た来た！」
雲と雲の切れ間ができた瞬間、一本の太陽光線がその切れ間から筋となって斜めに降り注ぐ。筋は次第に太くなっていく。そのうち、別の切れ間からも光の筋が延びる。雲の切れ間に近い部分は赤く輝き、雲本体は黒い。そのコントラストと光の筋は神様にしか描けない絵だわ。人間がどんなに頑張っても、神様にはかなわないことを知らしめようとしているみたい。あたしたちの周り人が集まってくる。皆、この光景に見とれている。
「この光の筋は天使の梯子と呼ばれるの」
「天使の梯子、ですか？　どうして、そう呼ばれるのでしょう？」
「さあ、私にもわからないわ。でも、すごいと思わない。三千万以上の人の頭の上で、神様が絵筆をふるっているのよ」
「三千万？」
「そうよ、そのぐらいの人がこの平野に住んでいるのよ。この数に感動しない？」
「いえ、べつに」
と彼は答える。まったく、東京人は鈍感なんだから。当たり前すぎるのかしら。彼にも、東京タワーへのあたしたち地方出の思いをわかってほしいと思った。
「最初にここに来たのは大学の入学式の前日だったかしら。引越し

の荷物を寮の部屋に放り込んで、すぐにここに来たの。一人で来たのよ」

「それで、その時は、この関東平野を見てどう思ったのですか？」

「この景色を見て……　今日から私は三千万人の中の一人になるんだと思ったわ。つまり……」

「つまり？」

「つまり……　三千万人のざわめきが聞こえない？　この大都会で……　頑張らなくちゃ、と思ったの」

「頑張る？」

「そうよ、頑張るのよ」

「ふーん」

あー、どうしてわかってくれないのかしら。この胸の高まりを。

「田舎者は、大都会に出てきて、ここで一旗あげたいと思うのよ。東京は、あたしたち地方出にとってあこがれなのよ。と同時に恐怖でもあるわ。大都会に押しつぶされるかもしれない。失意のうちに帰郷するかもしれない。東京タワーは、あたしたちが初心を抱き、それを思い出す特別な所なの」

「なるほど、ここへ来て、褌（ふんどし）を締めるわけですね」

「あはは、いい表現ね。そう、それよ。やっとわかってくれたみたいね」

もう潮時だわ。それは、彼もわかっているはず。あたしは彼に頼んだ。

「ねぇ。握手してくれない？　長い握手を」

あたしは確信した。これは彼の願いでもある一期一会の別れの握手よ。彼の眼を見ないで、長い握手をした。あたしの視線は、握手した彼の手に注がれる。彼の視線はあたしの顔を向いている。見なくても彼の視線は感じられる。そしてその視線が語る彼の本心と葛藤も。だけど、この関係はキープできない。それはご法度（はっと）。これが彼の仕事である以上、あたしたちは、会社と顧客の関係以上にはなれ

ない。

あたしは、身動きができず、息苦しさを感じる。閉所恐怖症のように。でも、彼は顧客のことを『生身の人間である以上、想定外のことは起こるものなのです』と言ったわ。そうよ。あたしは『生身の人間』よ。彼のルール、彼の職業意識に縛られる必要は微塵もないわ。あたしは、この大きな手だけを考えればいいわ。

彼の手は、あたしをやさしくエスコートしてくれたわ。そして不滅の生命力を持っていたし、弱さもあった。あたしならこの弱さを救ってあげられるかもしれない。さあ、どうする？　考えるのよ。アメリカに行った同級生との握手の時は、衆目の集まる地下鉄駅だから、周りの視線が気になってゆっくり考えられなかったけど、今は違うわ。

あーやっぱりだめ。結論は出せないわ。あたしは、コンピューターじゃない。いつでもＹｅｓ，Ｎｏが判断できるわけじゃないわ。

あたしは、彼に頼んだ。

「ねぇ、ちょっと目をつぶってくれる」

握手していた右手を離し、左手で持ち直した。彼の右手の甲を上にして支える。右手で、バックから素早くボールペンをとりだした。彼の大きな手はちょっとした手帳よりも大きい。あたしはゆっくり大きく書いた。

「もう、目を開けてもいいわよ」

彼は、手に書かれたものを不思議そうに見た。２秒後に、それがさかさまに書かれたメールアドレスであることを認識した。あたしは言った。

「あたしは、生身の人間よ。想定外のことは起こるわ」

「確かに想定外だけど……」

「あなたの手の甲は、仕事用の手帳でもないし、パソコンでもない。全くプライベートな領域よ。その情報をどう使うかは、プライベー

トなあなたに任せるわ」

結局、あたしは自分で判断しなかった。

帰宅途中でコンビニによって、缶ビールとたばこを買った。あたしは『生身の人間』だから。

白板の好きな男（その1）

社内キックオフ会議、つまり、今回のプロジェクトの初会合は、光機課の課長の司会で始められた。つまり、これは、隣の光機課とわが総合課の合同プロジェクトだけど、受注し責任を持つのは光機課であることを意味するの。合同プロジェクトといっても、実際に動くのは光機課の1名と総合課の1名プラスアルファ。総合課の1名プラスアルファは、あたしと回路のプーさん（本名：赤倉大輔）。会議メンバーには、さらにうちのキューピー課長（霧島課長）が加わる。

総合課のキューピー課長と光機課の課長（金山謙一）は、犬猿の仲という噂があるわ。わが社の本家と利益部門の分家を代表するわけだから、仲が悪くてもおかしくないのだが、噂は二つある。もともと本家にいた二人は、ライバルで、光機課を立ち上げる時のごたごたで仲が悪くなったというのが一つ。もう一つは総合課の諏訪さんをめぐって激しい争いがあったというもの。でも、表面上は仲が悪いようには見えないし、諏訪さんが結婚した相手はどちらでもないので、この二つの噂の信ぴょう性は怪しい。

金山課長は、光機課の立ち上げのきっかけになった製造業向けのレーザーを用いた測定器を開発したそうだわ。だから、自分が光機課を引っ張って行くんだという意識がある。よく言えば、リーダーシップとカリスマ性を備えているけど、悪く言えば、ワンマンで強引と言える。この分野で利益を出し続けるのは、並はずれた努力が必要で、ちょっと気を緩めると、すぐに大手に追い付き追い越されてしまうわ。その点、光機課はよくやっていると言えるし、金山課長にたいする社内の評価は高い。光機課の目下の課題は、新商品の開発。そのために、有能と思われる課員には、積極的に新しいプロジェクトを引き受けさせているが、今の所は、売れそうな商品はで

きていないみたい。

あたしと一緒に仕事をすることになった光機課の１名は、鶴巻望（つるまきのぞむ）。小柄で、一見するとおとなしそうな男。年齢は、３０半ばのようにも見えるが、繊細な手の年齢はあたしと同じくらい。ちょっと変わっているのが、上から下まで黒づくめの服を着ていること。黒の半袖ポロシャツ、黒のスラックス、黒のウォーキングシューズ。髪は黒で、ところどころ白髪の束がまじっている。同じ社内なので、以前、見かけたような気がするが、はっきり印象に残っているわけじゃないわ。だいたい、光機課の人間は、みな、地味で同じように見えるよ。反対に、光機課の金山課長は、１００m離れていても、すぐ分かるぐらいの金ぴか主義。金ぶちのメガネ、金のネクタイ、金の腕時計、金の結婚指輪、ピカピカに磨かれた革靴。スーツは明るい色で、絶対に紺や黒は着ない。

世の男性は２つに分類できる。あたしの恋愛対象、結婚相手となり得るのか。なり得ないのか。実に単純な分類。この分類は、かなり機械的にできる。恋愛対象、結婚相手であるためには、まず、独身であること（不倫は論外。大抵の不倫では、不幸になる人が必ず一人はいるから）。また年齢が適正な範囲にあること。それから、日本語でコミュニケーションできること（あたしは、日本語以外はほとんどできないので。もし、相手が対象であれば、次に値踏みをする。つまり値段をつけていく。３２，０００円ぐらいであれば、高値。４，９８０円なら、お買い得という具合に。相手が自分で値段を表示してくることもあるわ。後が恐ろしい１円入札なんてこともあるから、できる限り自分で値段をつけていく。

金山課長は明らかに恋愛の対象ではない。会議中、あたしは、光機課の鶴巻望をちらちら見ながら分類する。はたして、あたしの恋愛対象、結婚相手となり得るのか。結婚指輪はしていないので、今の所、対象となり得るわ。もう少し情報がほしいところだけど、後でうちの課の誰かに聞いてみればいいわ。まあ、これからいやでも

顔を合わすから、ゆっくり考えればいい。そう思って、あたしは会議に集中した。

受注した仕事は、『ホームシアター用プロジェクターのリフレッシュ機構の試作』

金山課長がプロジェクトの説明を始めた。ホームシアター用には液晶プロジェクターが多く使われている。この心臓部は、光源となる超高圧水銀灯と色を作るための透過率可変の液晶パネルである。この両方とも経年変化で劣化する。その劣化を補償する機構を試作してほしいと懇意にしている大手メーカから依頼があったのだ。アイディアはしごく素朴で、劣化して特性が変化するのをモニターして、光源の電流や液晶パネルの印加電圧を補正するというもの。それができるようになれば、品質を落とさずに、メンテナンス、つまり光源交換等の頻度を下げることができ、コストダウンになる。ただし、注意しなければならないのは品質。ユーザーの目が肥えてきて、色の再現性にうるさくなったとのこと。受注した仕事（試作）で求められるているのは、（1）そもそもこのアイディアが実現可能なのかどうか。（2）可能だとして性能（色の再現性）はどのくらいなのか、（3）製品にする場合のおおよそのコストと大きさ、の三つだ。説明と簡単な質疑を終えて、金山課長は最後にこのプロジェクトの指揮は鶴巻君が取ると付け加えた。これだけ、境界条件を明確にしてくれると、こちらはやりやすい。後は、彼（鶴巻望）との役割分担を決めて前に進むのみね。

会議が終わって、鶴巻望は、あたしとプーさんに声をかけてきた。

「あらためて、よろしくお願いします」

彼は、なにが嬉しいのか、にこにこしている。指揮をとれるのが嬉しいのかしら、それとも仕事が楽しそうなのかしら？　もしかして、もしかして、あたしと仕事ができるが嬉しいのかしら。あたしは、この所、社内で知名度を上げている。昔からの『総合課のザル（酒

豪）』に加え、最近では、『イルカに好かれた女』とか『松葉杖の女』とか、『屋上で脱いだ女』とか言われることもある。

「こちらこそ」

とあたしは、軽く、力まずに返答する。

「明日の朝一で、うちの課のブリーフィングコーナーで、打ち合わせをしたいのですが、赤倉さん、水上さんよろしいでしょうか」

「ええ、いいわよ」

「それまでに、この資料を勉強して、必要な部分のコピーを配布し、役割分担を決められるようにしておきます」

「分かった、任せるわ」

と、早くもあたしは、お任せモードに入る。

「ところで、主に水上さんと仕事をすることになると思うのですが、水上さんは光の3原色は、知っていますよね」

と彼が聞いてきた。

「えーと、RGBとかに使われているんじゃなかったかしら。今まで白黒の世界で生きていたから、色については自信ないわ」

と正直に答える。少なくとも、仕事で色が出てきた記憶はない。

「なるほど。それじゃ、ちょっとしたデモも準備しておきますね」

そう彼は答えた。また、にこにこしている。いやらしい笑顔ではないので、心配していないけれど、にこにこする理由が分からないので、あたしは落ち着かない。

課に戻ったあたしは、早速、桃姫の所に行って、聞いた。

「ねぇ。光機課の鶴巻望（つるまきのぞむ）って知っている？」

「ああ、彼ねぇ。碧の知りたいことで、教えられることはあまりないわ」

「まるで、あたしの知りたいことが何か分かっているみたいな言い方ね」

とあたしが聞くと

「その眼を見れば、すぐ分かるわよ。（1）既婚なのか独身なのか。

（2）恋人はいるのかいないのか。（3）悪い噂はないか。と言った所でしょう。普通なら（4）仕事はできるのかどうか、も聞きたいはずだけど、その物欲しそうな顔からすると、当面（4）は気にしていないようね」

と答える。いつもながら、桃姫の読心術には感心するわ。

「大当たり。で、答えは？」

「（1）は独身」

あたしは心の中で『ラッキー』と叫んだ。桃姫は続ける。

「（2）は、よほどステディな相手がいるか、あるいは、女には関心がないゲイかのどちらかと思うわ」

「ええー　どうして、そんなことわかるの？」

「だって、あたしの3種類の流し目に、全く動じないから」

「はあ？　3、3種類もあるの？　今度、あたしに教えてよ。ご飯おごるから」

「むり、無理。碧には、せいぜい1種類もできればいい方よ」

と、桃姫はすげない。

「とにかく、あまり期待しない方がいいってわけね」

「そういうこと。期待率は10％ぐらいね」

「じゃ、（3）の悪い噂は」

「それはないから、安心していいわ。でもいい噂ならあるわよ」

「それは、今は、聞かないことにする。後で、落胆したら、聞いても仕方ないから」

とあたしは、断った。この時、それを聞いておかなかったことを、後で後悔することになった。

白板の好きな男（その2）

予定通り朝9時から打ち合わせが始まった。既に机上には、鶴巻望がコピーした資料が配布されている。ユーザー向けのカラーのカタログ、取説に加えて、マル秘印の押された発注元の大手メーカーの社内資料。そこには、機械図面、回路図、主要部品の仕様書がある。鶴巻望が立ち上がって口を開いた。

「おはようございます。それでは、これから打ち合わせを始めたいと思います。最初にこの打ち合わせのアウトラインを示します」

そう言って、かれは、背後の白板（はくばん）、いわゆるホワイトボードに向かって、喋りながらマーカーで書き始めた。

「自己紹介、〆切等の境界条件の復習、（3原色の体験）、方針と素案、必要な部品機材の検討、役割分担、今後の予定。こんな感じでしょうか。何かつけ加えることはありますか？」

プーさんが「いいえ、ありません」

とはきはき答える。

「私の方もありません」

「では、最初に自己紹介から。えー　私、鶴巻望（つるまきのぞむ）は入社5年目で、最初から光機課でした。ずっと、金山課長の元で、うちの売れ筋商品の性能アップとコストダウンに従事してきましたが、今回、初めて、試作と言うゼロからに近い仕事をすることになりました。どうぞよろしくお願いします」

と彼は自己紹介した。それから、彼の示したアウトラインに沿って打ち合わせは進んだ。

白板に書くのはもっぱら鶴巻さんの役割。ところどころにきれいな図や絵を書いていく。しかも、黒、赤、青、緑を使い分けているようだ。赤は要注意点や問題点。青は予定。緑はメンバーへの宿題という具合らしい。白板には、印刷機能がついており、一面に書いては印刷、を何度も繰り返した。ＰＣベースの打ち合わせやメモと

違って、白板は図を簡単に描けることがいい点ね。記録を保存し、配布するのは、不便だけど、彼のようにきちっと書いてくれれば白板も悪くないわ。

一通り打ち合わせを終え、括弧付でリストされた『3原色の体験』を、別室、彼の仕事スペースで行うことになった。そこは、小さな会議室ぐらいのスペースで、入口の扉の小窓も外に面した窓も黒い紙で目張りされている所が変わっている。大きめの作業机が真ん中に置かれていて、何やら大きな機械が幾つか載っている。壁には、小さめの白板と小さめのスクリーンが掛けてあるわ。

「まるで、映画館のような部屋ね」

とあたしが冗談で言うと

「なるほど、そういう使い方は考えもしませんでした。でも、そのためには、ふかふかの椅子が必要ですね。スクリーンももう少し大きい方がいいですね。どうせ、今回の仕事は、ホームシアター用のプロジェクターのためのものですから、ここをホームシアターにすることをまじめに考えてみます」

そこから鶴巻望とあたしの『変』な漫才が始まった。

「プロジェクターはどうするの」

とあたしが聞くと、彼は、

「発注元から、試験用に、昨シーズンの最新機種を貰い受けています」

と答える。

「昨シーズンの最新って、変じゃない？」

「変かもしれません。貰い受けたのは、発注元で寿命測定用に特別に長時間使用した機材です。光源の超高圧水銀灯の方も、寿命と同じ、すなわち推奨交換時間だけ点灯したものから、その5倍の時間点灯したものまで色々もらってきました。性能が劣化した最上のセットです」

「劣化していて最上と言うのは変じゃない？」

「変かもしれません」
「それはそうと、劣化したセットだけだと、正常な状態が分からないじゃないの？　つまり、私たちの開発は、正しい色を復活させるのが目的だから、正しい色が分からないといけないんじゃない？」
「さすが、水上さん、いい所に気がつきましたね」
あたしは、ちょっと誉められて嬉しくなる。そして、調子に乗って例のごとく墓穴を掘るのよねぇ。今日は気をつけないと。彼は続ける。
「実は、発注元の工場の倉庫に眠っていた新品同様の同機種も借りています。それと比較することで色の再現性を確認します」
「ねぇ。どうしてぼろぼろのお古は貰い受けて、新品同様は借りるの」
「悲しいかな、それがわが社の立場です」
「うーん。何とかしたいわね。大手が目をむくぐらいの成果を出して、ギャフンと言わせたいわね」
「全く同感です」
「所で、テスト用には何を映すの？　やっぱり、通のためのホームシアターだから、映画のブルーレイとか？」
「映画ですか、それはいいアイディアですね。さすが『黒川のマドンナ』と呼ばれる水上さんですね」
「え、『黒川のマドンナ』ですって。誰がそう呼んでいるの？　初耳だわ」
「私がそう呼んでいます。私にとってはマドンナですから」
とにこにこしながら彼は言った。つまり、彼の『あこがれ』の対象ということ。あたしは、誉められて、完全に調子に乗って謙遜した。
「はあ、ちょっと鶴巻さん、勝手に名前つけないでよ。『松葉杖の女』とか『屋上で脱いだ女』とか根も葉もある呼び方ならわかるけど。もっと根拠のある呼び方はないの？」
と口が滑ると、彼は驚いて言った。
「えー！　『屋上で脱いだ女』って本当なんですか？　僕はてっき

り、根も葉もない噂だと思っていました。どうして脱いだんですか？　詳しく教えて下さいよ」

あたしの脳は3秒間停止した後に動き出した。

「教えられないわよ。恥ずかしいから」

と小声で答えた。それから普通の大きさの声で言った。

「とにかく、話を戻しましょう。えーと、えー　映画のブルーレイ。ブルーレイを経費で買えない？」

「いいですねぇ。どんな映画がいいですか？」

「そうね。古典的なチャップリンは？　例えば『街の灯』とか」

「あ、もしかして、マドンナは映画通だったりして。『街の灯』はいいですよね。手配をお願いします」

もしかして、もしかして、彼も映画が趣味なのかしら？　これは、いい兆候。その後、あたしたちはふかふかの椅子をどうやって調達するかで盛り上がった。そして、彼はあたしのことを『マドンナ』と呼ぶようになった。プーさんは、つまらなそうに聞いている。肉体派には映画の素晴らしさがわからないのよ。

あたしたちだけで盛り上がった所で、今度は彼の『3原色体験教室』が始まった。

「色、正確には、光の波長の正体を突き止めたのはニュートンです」

「ニュートンって万有引力の？」

「そうです。こんな風にプリズムを使って、光を七色、つまり波長ごとに分けました」

そういって、彼は、窓の黒紙にあらかじめあけていた小さな正方形の蓋をあけた。太陽光線を筋となって室内に入り、大きな机に当たった。彼が、そこにプリズムとレンズをセットすると、壁のスクリーンにきれいな虹が現れた。

「あら、きれいね」

「当時、プリズムで虹ができるのは、知られていましたが、プリズムが白い光に色をつけるのだという説がありました。丁度、ミルクにジャムを入れて混ぜると薄赤くなるように」

「その表現は、わかりやすいけれど。ミルクにジャムは変じゃない」
「変ですかねー。おいしいのですが……　とにかくニュートンが偉かったのは、こんな風にもう一度プリズムを通しても赤は赤のままで変わらないこと、それから、こんなう風にもう一度虹を集めると白ができることを示した点です。こうい実験をして、白い色は、実は色々な色が混ざったものだと説明したのです」
「確かに白は無色、色がついていないように感じるけれど。ほら、白無垢って言うように、けがれのない白って言うけれど、本当は色々混ざってるのね」
「実は、光の波長は無限に沢山ありますが、人間の目は3つの異なる波長領域を感じる視細胞があります。つまり3種類の視細胞があって、赤っぽい光を感じる細胞、緑っぽい光を感じる細胞、青っぽい光を感じる細胞があります。3種類の細胞の感じた強さで色を判断します。逆に色を作りたい時は、赤っぽい光、緑っぽい光、青っぽい光を出す光源を用意して、それらの強さ、あるいは割合を変えていけば、人間の感じる色を作り出せます。では、それを実演してみましょう」
そう言って、彼は、３つのＬＥＤと３つのスイッチがつけられた基板を持ちだし電源に繋いだ。それから室内の照明をほんのり周りが見えるぐらいまでに暗くした。この部屋の照明は調光できるのだわ。
彼は、一つの目のスイッチを押して赤いＬＥＤを点灯させた。二つ目のスイッチで緑色のＬＥＤが点灯し、三つ目のスイッチで青色のＬＥＤが点灯する。
「これら、赤、緑、青にたいして、赤を感じやすい細胞、緑を感じやすい細胞、青を感じやすい細胞が、それぞれ反応します」
次に彼は、３つのＬＥＤを覆う1つの白い箱をかぶせた、上面には半紙のような薄い紙が張ってある。もう一度、それぞれのＬＥＤを点灯させると、半紙が赤、緑、青を映した。丁度、行燈か、影絵の背景のように。こうすると、もはやＬＥＤは直接見えず、３つのＬＥＤの光は半紙を照らすので、３つの光を混ぜることができる。

つまり、絵具を混ぜ合わせるパレットの役割を担うのがこの半紙なのね。

「では、ここで、クイズです。赤と青を混ぜると何色になるでしょうか？」

「簡単だわ、絵具と同じで紫よ」

「正解！」

そう言って、彼は赤のスイッチと青のスイッチを押した。そうすると半紙は紫色に染まった。

「第２問は、赤と緑を混ぜるとどうなるでしょう？」

「えーと……、何色かしら？」

とあたしが答えられないでいると、プーさんは

「黄色か黄緑」

と答えた。

「正解！　このＬＥＤの場合は黄緑になります。では最後の問題です。青と緑を混ぜると何色でしょう？」

あたしが

「青緑」

と答えると、彼は、

「安直ですね。そもそも青緑ってどんな色ですか？　説明できますか？」

「青緑は、青緑だわ。それ以上の説明はないわ」

「本当ですか？　まあ、いいことにしましょう。このＬＥＤの場合は、ほら、こんな風に水色になります。もう少しバランスを変えると青緑になります。つまり、青緑も正解です。　そして、この３つのスイッチを全部押すと……　こんな風に白ができあがります」

「へぇ―、色って面白いのね」

とあたしは、素直に感心した。

総合課に戻って、早速、桃姫（本名：熱海桃子）に報告をした。

「ねぇ、桃子、聞いてくれる？」

「いや！　今、忙しいから」
「いやでも聞いてよ」
「どうせ、鶴巻君に、誉められたとか言うんでしょう」
「えー、どうしてわかるの？」
「そのにやついた顔を見れば、わかるわよ」
そう言って、桃姫は、視線を図面が映った大きなモニターに戻した。
「じゃー　聞かなくていいわよ。あたしが勝手にしゃべるから」
そう言って、あたしは話した。
「鶴巻望はあたしのことを『黒川のマドンナ』って呼んだのよ」
桃姫は眉をピクピクさせて反応した。
「どうして、碧がマドンナなの？」
「さあ、どうしてかしら。桃子の流し目も効かなかったのにねぇ」
あたしは、少しだけ勝ち誇って答えた。挑発された桃姫も黙ってはいない
「『黒川のマドンナ』はあたしよ。マドンナの座は渡さないわ」
「いいじゃなの、一つぐらい。桃子は、『プリンセス黒川』とか、『総合課の姫』とか、いっぱい名前を持っているじゃない」
「いっぱいでもないわ。数なら碧の方が上よ。『いるかに好かれた女』とか『屋上で脱いだ女』とか、色々あるじゃあない」
「あ、もしかして、『屋上で脱いだ女』って、桃子が言いふらしたの？　ひどいわ」
「それはないわよ。碧の味方のあたしがそんなこと言いふらすと思う？」
あたしは、首を横に振る。
「あたしの見立てでは、『屋上で脱いだ』を言いふらしたのは、客観的事実が好きなうちの課長じゃないかと思うだけど」
そう言って、桃姫は視線をキューピー課長に向けた。
「たしかに、客観的事実が好きな課長なら、ありえなくもないわね……　とにかくマドンナの座はいただいたわよ」

白板の好きな男（その3）

チャップリンの映画を入手したあたしは、早速、作業スペース兼ホームシアターに持ち込んだ。彼は、この日も上から下まで黒づくめだった。丁度、ＲＧＢモニター用の検出器（フィルター付ホトダイオード）をセットしている所だった。新旧の2つのプロジェクターは無残にも外箱から取り出されて、中身が露出していて、どちらが新品同様かわからないほどだった。あたしは、彼に声をかけた。

「鶴巻さん、例の映画、持ってきましたよ。そっちが一段落してみたら上映してみない？」

「お、早いですね。１０分ほど待っていただけますか？　その間に、そこにある自作のふかふかの椅子を試してみてくれます？」

あたしは彼の指差す方を見るが、何もない。正確に言えばゴミが積んであるだけだわ。

「ねぇ、その自作の椅子って、どこにあるの？」

「それです。それ」

と言って指差した。今度は間違いなくそのゴミを指差していた。

「これ？　椅子なの？」

「もちろん」

と彼は自信ありげに答える。あたしは、恐る恐るそのゴミに近づいて調べた。何と、ゴミと思っていたのは緩衝材を巻きつけたパイプ椅子だった。確かにふかふかそうだけど。

「座ってみてよ。マドンナが最初の使用者だよ」

彼の『マドンナ』と呼ぶ声がぎこちない気がする。なんだかとても無理をしているよう。それに、やっぱり『マドンナ』は、あたしには似合わないわ。万が一彼と結婚することになったら、一生『マドンナ』とか『マダム』と呼ばれるのか、と思うとなんだか急に不安になってきた。

「ねぇ、『マドンナ』じゃなくて、別の呼び方をお願いできないか

しら」
「別の？　例えば？」
「例えば、普通に『水上さん』とか『碧さん』とか」
「それじゃ、『碧さん』と呼ばせてもらいます。その代り僕のことは、『望（のぞむ）』と呼んでください」
「分かったわ望……『望君』でいい？」
「いいですよ」
「望君…　それで、この椅子もどきに座ってみればいいのね」
あたしは恐る恐る座ってみた。確かに緩衝材を集めただけあって、弾力はあるわ。でも『ふかふか』の触感はない。最大の問題は音。座る時はもちろん、お尻を動かすたびに『プチプチ……プチプチプチ……』と音がする。エアーキャップ、いわゆるプチプチだ。彼は笑った。
「あはは、やっぱりプチプチはまずかったですかねぇ」
「まずいわよ、これじゃうるさくて映画に集中できないじゃない。他に緩衝材はないの？」
「随分探し回ったんですけど、生憎これしか見つかりませんでした。しょうがないですね。それじゃパイプ椅子で我慢しますか」
結局、あたしは彼が巻きつけた緩衝材をはぎ取って、もとの姿に戻した。

彼はにこにこして言った。
「さて、お待ちかねの映画上映といきますか？　新旧、どちらのプロジェクターがいいでしょうか？」
「まずは、古い方で見て、その次に新しい方で見たら、感動が大きいんじゃないかしら？」
「では、そうしましょう」
「『街の灯』なんて何年ぶりかしら。花売りの売る真っ白な花が印象的だったわ」
あたしたちは、それこそ、わくわくしながら映像を見た。

あれ？　なにかおかしいわ。
「色がほとんど出ていないわ。真っ白なはずの花がくすんでいるわ」
「確かに、これは酷いですね。ここまで酷いと補正しようがないような気がします。では、ちゃんとした色の出る新品同様のプロジェクターで見てみましょう」

「……？　やっぱり色が出ないですね……」
あたしたちは顔を見合わせた。
「……　もしかして、もしかして……」
「そうですよ、きっと、その『もしかして』です」
「つまり、チャップリンの映画って『白黒』、白黒だったんだわ」
どうりで色が出ないのね。あたしたちの映画熱は急速に冷めていった。

その後、映画は使わずに、ＲＧＢの純色をテストに使いながら開発を進めた。あたしは、毎日違う服を着ていく。望君は相変わらず黒しか着ない。
試行錯誤してだんだんわかってきた。アナログ的な方法は、家電レベルの機器には荷が重い、つまり、小さなスペースには収まらないし、コスト的にもバカにならない。一方、デジタル的な方法は、８ｂｉｔだと、微妙な補正ができないが、１２ｂｉｔであれば、それなりの補正ができることもわかったわ。残る問題は、画素の劣化にムラがあることと、各画素の劣化をモニターするのが現実的でないこと。商品化の障害になりそうだわ。もちろん、今回は商品化するのが目的ではなく、実用化、商品化できそうか見極めるのが目的だから、商品化が無理と判断できれば、それはそれで意味がある。でも、折角なら商品にしたいと思う。開発や試験に携わっている人間はそう願うのが自然。あたしたちは、商品化は困難という結論を出して仕事を終えるべきか、それとも、もう少し頑張ってみるかを

決めかねていた。彼があたしを花火に誘ったのはそんな時だった。
「明後日の土曜日にうちの実家のそばで花火大会があるんです。碧さん、一緒に見に行きませんか？」
「花火大会？　花火大会なんて子供の時に行ったきりだわ」
あたしは、彼との関係が進展しそうな気がして、即座にＯＫした。
あたしを『マドンナ』と呼んで以来、てっきり、望君がアプローチしてくるものだとばかり思っていたのだけど、全くその気配はない。毎日、顔を合わせているけれど、仕事仲間以上の親密な関係にはなっていなかったし、映画の話も全くしなくなった。

白、ピンク、紺、赤紫、黒、と地も色々。柄も花、草、蝶、大きさも色々。さらに帯、下駄、と考え出すとキリがない。価格もピンキリ。あたしは、駅前のスーパーの浴衣コーナーの前で３０分ほど思案していた。浴衣なんて子供のころの盆踊りで着たきりだったけど。花火と聞いて、あたしはどうしても浴衣が着たくなったの。女の子というほど、若くはないけれど、このチャンスを逃すと、一生、着れないかもしれないと思うと、いてもたってもいられなくなったのよ。
「う～ん。やっぱり左脳で選ぶのは無理ね。しょうがない右脳の直感よ、直感」
そうやって選んだのは、紺地に朝顔の柄の浴衣。帯はスミレ色の平帯。下駄もセットで税込５，９８０円。それに、前から欲しかった房州うちわが３，６００円。なんだか、値段のバランスが変な気もするけれど。
家に帰って、袋を開けて考え込んでしまった。一体どうやって着るのだろう。眼の前に困難があると、別のことがやりたくなるのがあたしの悪い癖。浴衣に比べて、うちわはあおぐだけだから簡単ね。それにしても１本の竹から、よくこんなものが作れるわね、とほれぼれする。うちわの骨を数えてみたら６４本。なるほど、２のｎ乗ね。と言うことは、骨を作る時は、１本の竹から始めて、２等分を

６回繰り返して作るのに違いないわ。６４かー　いい数字ね。
浴衣の方は、結局、ネットで動画を探して、それを見ながら3回練習した。洋服と違って、浴衣を着るにはコツというか慣れというか、アナログ的な要素があるわ。丁度、折り目の決まっていない折り紙のような感じ。練習すると外見はかなり良くなる。難しいのは、着崩れしないように、かつ、太り気味の体を圧迫しないように、結び加減を調整すること。あまりきつくすると、後が怖いので、とりあえず、少しだけきつめにして、崩れた時は、化粧室で直す方針にする。とにかく、食べすぎ、飲みすぎは要注意ね。ほら、『武士は食わねど高楊枝』って言うじゃない。あたしの場合は、『女は食わねど浴衣美人』って所かしら。こうして、金曜日の晩にはすでにハイになっていた。

待ち合わせの大きな提灯の前に集まったのは、望君とあたしだけではなく、なぜかゴーストさとる君（本名：月夜野悟）と片品嬢もいる。桃姫は、最初は、
「あたしも行く。絶対、行く。４種類目の流し目を試したいの」
と、バカなことを言っていたけれど、都合が悪くなってキャンセル。
さとる君はいつものさえない恰好。でも、最近は、清潔そうな服を着ている。一方、片品嬢はあたしと同じ、浴衣。白に大胆な花柄、帯はピンク、髪をアップにしている。小柄な体に浴衣がよく似合っている。二人はしっかり手を握っている。望君の方は、いつもの黒づくめではなく、明るい色の麻のシャツに、同色の麻のスラックス。涼しそうな格好だ。あたしは彼に尋ねた
「あら、今日は、黒じゃないのね？」
「そう言えば、そうですね。あれは仕事用ですから」
「え、そうだったの？　でもどうして仕事用は黒なの？」
「黒だと色がきれいに見えるんです。明るい色の服だと、そこに光が当たった時に、目ざわりになるのです」
「ふーん。そうだったの」

「碧さんも浴衣を着ると一層かわいいですね」
「あら、久しぶりにほめてくれたわね」
「そうでしたっけ。浴衣はよく似合っていますよ。平帯もきちんと形になっているし、慣れない中で頑張って着ていますね」
「え、どうして、慣れないってわかるの？」
「ああ、しまった。つい、口が滑りました。実は、うちの実家は呉服問屋なんですよ。和服に慣れているか慣れていないかは、着こなし方の微妙な違いでわかるんです。どこがどう違うのかはうまく説明できないのですが」
「ええー　呉服問屋だったの？」
それが分かっていたら、望君に浴衣選びに付き合ってもらったのに。ついでに手取り足取り、浴衣の着方を教えてもらえれば……　あーもしかしたら、一生に一度のチャンスを逃したかもしれないわ。そう言えば、桃姫が、『いい噂ならあるわよ』と言っていたけれど、呉服問屋のことを言っていたんだわ。あたしは、一気に３ｍほど、落ち込んだ。

望君は、皆に声をかけた。
「皆さまお揃いのようですから、これから特等席にご案内します」
あたしたちは仏壇屋のビルの屋上に案内された。高校の同級生の家が仏壇屋で、その屋上は花火の打ち上げ場所に近く、花火観覧には絶好の場所らしい。屋上には、テーブル、椅子が並べられ、ビールや食べ物もあって、即席のビアガーデンになっている。望君の同級生とその家族に挨拶をして、用意していた和菓子を、お世話になりますと言って渡す。と、奥のテーブルから関西弁が聞こえてくる。誰、こんな大声で話しているのは？　と思って視線を移すと、男女のカップルがいる。男の方は特徴のある服装だ。あたしは、顔が蒼白になった。鏡で自分の顔色を確かめたわけじゃないけど、蒼白になったのは間違いないわ。

白板の好きな男（その４）

見た瞬間にアイツだとわかった。浴衣よりもはでな黄色のアロハシャツを着て、扇子であおいでいる。アイツの名前は八丈渡（はちじょうわたる）。秘境専門のツアーガイドだ。なんで、アイツがいるの？　なんで仏壇屋の屋上にいるのか、つまり、誰とどういう関係でここに花火を見に来たのか？　もう一つの疑問は、なんで今、日本にいるのか？　ということ。

オンラインパートナー紹介所の対面ステージで、一度、アイツとデートをした。その時にひどい捻挫をして色々世話になったわ。それで、デートの結果は「キープ」、つまり、今後も関係を保ちたいと紹介所のシステムに回答した。アイツの方も「キープ」と回答したので、あたしたちは再度、対面ステージ、つまりデートをする予定だったの。ところが、６月はあたしが忙しかったのと、７，８月はアイツの方が（観光）シーズンでほとんど日本にいないということで、次のデートは当分先のはずだったわ。

なのに、今、シーズン真っ最中のはずが、日本にいる。しかも『別の女』らしい女性と楽しそうに話している。野獣のあたしが吠える。

「どういうこと！　お仕置きよ！」

合理性のあたしが引きとめにかかる

「ちょっと、自分の立場をよく考えてからにしてくれない？」

「？？」

野獣の動きが止まる。左脳が状況を整理する。

ここに、望君に連れられてやってきたあたしがいる。望君との距離を縮めようとして、浴衣を着て、おめかしをしたあたしがいる。

一方、あそこには、２か月ほど前に、ちょっといいと思った男がい

る。形式的には、結婚も視野に入れた付き合いをしている。これって、『二股』？　『三角関係』？　いやいや、まだ、ちょっと唾をつけたぐらいだから、そんな大げさなものではないわ。何も後ろめたいことはない？　いや、ある？

それよりも、問題は、八丈渡とあたしの関係を望君に知られてもいいかどうか？　アイツのことだから、知らないふりを押し通そうとしても、無理ね。だけど、オンライン紹介所を通してつき合っていることまで言う必要はないわ。アイツが余計なことを言わなければ、『単なる知り合い』で済ませられないかしら？　逆に、望君とあたしの関係は、八丈渡に知られてもいいのかしら。これは、いいはず。単なる会社の同僚だから。でも、花火を一緒に見るって、単なる同僚には見えないかも。さらに、ややこしいことに、ゴーストさとる君がいる。彼には、あたしが『ジョギング中に捻挫した』のが嘘で、本当は『デート中だった』ことがばれている。しかも、そのデートの相手が八丈渡だ。極めつけは、八丈渡と話をしている『別の女』だわ。暗くて顔は見えないが、ミニのスカートからすらりとした生足が伸びている。この状況って、『修羅場』？　『天罰』？　それとも『試練』？

これだけ複雑だと、ちょっとやそっとでは、解けそうもないわ。少なくとも図を描いて整理したい所ね。あたしは思わずつぶやいた。

「やっぱり、白板とマーカーが必要ね」

そのあたしのそのつぶやきを望君が聞いていた。

「え、やっぱり、碧さんもそう思います。そうでしょう。必要ですよね。ちゃんと持ってきましたよ」

はあ？　あたしは、彼の文脈が読めない。

彼はカバンからノートサイズの白板と多色マーカーを取り出して、あたしの前に出した。

「あ、後で使うから置いておいて」

とりあえず答えた。この答え方、どこかで聞いた様な気がするけれ

ど。ろくなことにならない予感がちらっとした。

望君は八丈渡に声をかけた。

「先輩！　お久しぶりです」

先輩？　ということは、望君とアイツは、高校か大学の先輩後輩の関係ね。アイツは関西出身だから、きっと大学が一緒なのね。

「お、望やないか？　元気にしとったか？」

望君は、アイツのテーブルに近づいていく。あたしは、仕方なく彼の半歩、いや、一歩後ろをついていく。アイツが言う。

「お、彼女を連れてきたんか？　この子が例の女かー」

例の？　『例の女』って、どういうこと？

「ええ、そうです。紹介します……」

と望君が言うので、あたしは顔をあげてアイツの眼を見た。

「あ！おまえ、あの、あの……　名前をど忘れした……　そうや、おまえやないか！」

まったく、アイツは、『おまえ』としか呼べないのかしら。この調子だとホントにあたしの名前を忘れているんだわ。あたしは眼をつりあげて言ってやった。

「『ガイド』さん、久しぶりね。あたしの名前は『おまえ』じゃなくて、水上碧よ」

「あ～、そうやった。そうやった」

望君は不審な顔をしている。

「お二人とも知り合いだったのですか？」

そこで、あたしは間髪をいれずに答える

「ええ、捻挫をしたときにお世話になったの」

これは嘘ではない。これで、切り抜けられると思ったら、アイツが余計なことを喋り出す。

「あの時は災難やったな。全くデー……」

まずい！　『デート』なんて言ったら、ばれちゃうじゃない。と、その時、どこからか

「ヒュルルルル～」
と音が聞こえてきた。そして
「ドーン」
と腹に響く大きな音がした。近くなのですごい迫力。同時に空が明るくなる。見上げると火の粉が頭上に降りかかってくる。あたしはひっくり返りそうになった。まるで、天が落ちてくるようだわ。あたしは、そばのテーブルに手をつく。生足の女の子は耳をふさいで目をつぶっている。

「おおー」
とどよめきが起きる。
「始まりましたね。ここからだとすごい迫力でしょう」
望君は、にこにこして言った。何かを思い出したのか、すぐにどこかに行ってしまった。隣では、アイツが生足の女の子に声をかけている
「大丈夫か、サラポ。ビックリしたやろう。俺もビックリやで」
生足ちゃんは目の大きな女の子。髪は漆黒で長い。歳は、大学生ぐらいかしら？　一体アイツとは、どういう関係？　名前は「サラポ」？　とにかく敵を知り己を知れば百戦百勝危うからずって言うぐらいだから、情報を集めないとね。
「ガイドさん、そのかわいい子を私に紹介して下さらない？」
「あーわかった、分かった。それより、今日は、ガイドやなくて、渡(わたる)って呼んでくれや」
それから、アイツは、生足ちゃんを紹介した。
「コイツは、俺がタイにいた時に世話になった社長さんの娘で、今は東京の大学に留学しているんや」
「はめまして、さらぽーんです。さらぽとよんでください」
彼女は合掌して日本語で挨拶をした。あまりにも自然できれいな合掌をしたので見とれてしまった。
「で、コイツは……　じゃなくて、この人はみどり、碧さんや。こ

の人とは……」
アイツもどう説明したものか迷っているのね。変な説明をされる前にあたしから説明する。
「この人、渡さんと、あたしは、この間、救急車でご一緒した仲なのよ」
とあたしは文脈不明の説明をした。間違ってはいないわ。生足ちゃんは半分だけ理解した。
「……　えー！　きゅうきゅうしゃをよいしょしたのですか？」
「いや、そうじゃなくて……」
とあたしは焦る。曖昧な日本語でごまかすのは難しそうね。何て説明すれば、あたりさわりがないかしらと考えていると。
「ヒュルルル～」
と音が聞こえてきた。生足ちゃんは
「あ～　だれかたすけて！」
とさけぶ。アイツが応える。
「サラポ、こっちへこいや、俺が抱っこしてやるで」
生足ちゃんはすぐに反応する。
「わたる、どさくさはだめ、どさくさはだめ」
その時、「ドーン」とまた、大きな音がした。生足ちゃんは
「きゃー」
と言ってあたしに抱きついてきた。顔をあたしの胸にうずめ、外を見ないようにしている。まったく、大きな子供ね。とにかく、アイツの『別の女』ではないし、あたしのライバルでもなさそうね。
　花火の光が完全に消えて、生足ちゃんは顔をあげた。一瞬、目と目が合った。なに？　なによこの視線は？
「みどりさん、ありがとう。みどりさん、しずかちゃんがにている。とらえもんのしずかちゃん」
「トラえもん、しずかちゃん？　……浴衣を着ているから？　あーそう言えば、髪、髪を左右で結(ゆわ)えていたわね」
そうなのよ。髪をアップにしようと思ったのだけど、面倒になって、

結えたのよ。こうすると、少し子供っぽく見えるわ。
「にている、にている」
「似ているの？　ホント？」
ウンウンと生足ちゃんは頷いて言った。
「とらえもん、すき。にんじゃもすき。だからにほんにきた。いま、だいがくでとらえもん、べんきょうしている」
「えー、大学でトラえもんの勉強しているの？　どうして？」
「とらえもん、にほんごじょうず。とらえもんのにほんご、べんきょうする」
「あ～そう言うこと。トラえもんを教材にして日本語を勉強しているのね」
「にほんごがおわったら、とらえもんつくるべんきょうしたい」
「ええー　トラえもんを作りたいの。それは難しいわね……　でも、やりがいがあるわね」
「やり？　がい？　やりをかうの？」
「いや、そうじゃなくて……　トラえもんを作りたいって、とてもいい夢よ。頑張ってね。あたしもトラえもんを作りたいわ」
「うれしい。みどりさんともだちね」
「そう、友達よ」
というわけで、あっという間に生足ちゃん、サラポちゃんと友達になった。

「ヒュルルル～」
あたしはサラポちゃんの手を握って
「綺麗だから、よく見てご覧」
と言った。
　まるでロケットのように火を吹きながら上昇したかと思うと、一瞬光が消える。そして、大きな音ともに、放射状に光の筋が伸びていく。赤や、緑、黄色と色を変えながら、光の筋は短くなり、点になる。近くで見ると、光点群が立体的な球面を作っているのがよく

わかるわ。その後、光は弱まり、綺麗な球が重力と風で崩れていく。他にも、開いた円錐状に光が伸びていくものもあるわ。パチパチはでな音を立てるもの。幾つもの花火が続けて打ち上げられて、朝日を浴びて次々と開花する朝顔を表現しているものもある、でも、あたしは、やっぱり球が好き。だって、いかに完璧な球を作るかという職人さんの意地と誇りが伝わってくるじゃない。

サラポちゃんも花火のパターンが分かってきたのか、もう驚いていない。首が痛くなってきたあたしは、彼女に言った。

「ねぇ、座らない。それに、何か食べない？」

「うん、おなかすいた」

「ビールは飲んでもいいの？」

「びーるもおちゃもだいじょうぶ」

あたしは、屋上への出入り口のそばでビールとトウモロコシを二人分もらった。その灯りの下で、望君が座って、上空の花火を見ている。何をしているのかと思って覗き込むと、白板に花火の絵を描いている。さっき見せてくれたノートサイズの白板に、多色マーカーで絵を描いている。

「白板に絵を描く人は初めてだわ。でも、色も、形もうまく描けているわ。真黒な空で光る花火が、真っ白な背景に描かれているので、変な気がするけど」

「ええ、全然別の印象でしょう」

「それは、そうと、白板だから、最後は消すんでしょう。白板じゃなくて紙の方がいいじゃないの？」

「さすが、碧さん、いい所に気がつきましたね。消す前にこうやって、デジカメに記録するんですよ。どうせ電子化してしまうんだったら、紙はなくてもいいでしょう。それに、白板だと修正するのが簡単ですし」

そう言って、望君は、デジカメで撮って、白板を消して、また、新しい絵を描き始めた。

「望君って、ほんとうに白板が好きなのね？」
「碧さんも、描きます？」
「今は遠慮しておくわ。後で描いた絵を見せてね」
そう言って、ビールとトウモロコシを持ってサラポの所へ戻った。

白板の好きな男（その5）

サラポは、円筒状に切られたゆでトウモロコシにむしゃぶりつく。あたしは、そうしたいのを我慢して、上品に食べる。今日はべったり口紅を塗ってきたから。軸方向に一列のトウモロコシ粒を除くと、後は、親指で一列を倒して、粒をはぎ取ることができる。ちょっと面倒だけれど、綺麗にはぎ取って、食べることができる。そうやって一列一列ゆっくり食べて、チビチビ、ビールを飲む。何せ、今日は、『女は食わねど浴衣美人』ですから。

望君がやってきた。白板に新しい花火の絵が描かれていた。サラポは

「きれい。きれい。ほんものみたい」

と喜んでいる。さらに

「あたしもかく。とらえもんかく」

と言って、描き始めた。盛り上がる二人をおいて、あたしは八丈渡と探す。二人だけで話をつけておかないといけない気がしたのよ。

花火が頭上でドンドンやっている。アイツは、右手に枝豆が山盛りになった皿、と左手には缶ビールを2本持って歩いてくるところだった。あたしは声をかけた。

「おいしそうね。あたしにも分けてくれない」

「ああ、ええよ。どっち？　枝豆？　ビール？」

「どっちも」

「そら、贅沢やな。まあ、ええか」

あたしたちは、手近な灯りの下のテーブルに二人だけで陣取った。アイツが切り出した。

「ところで、お前、望とはどういう関係や？」

「知りたい？」

「知りたいかって言われれば、そら、知りたくなるわな」
と、アイツは、微妙にはぐらかす。
「その前に、『例の女』ってどういう意味か教えてくれない？」
「知りたいか？」
「そりゃ、知りたいかって言われれば、知りたいような気もするわ」
と、あたしも、微妙にはぐらかす。アイツは少しだけ勝ち誇って言った。
「まあ、望の過去も絡んでくるから、プライバシーも尊重せなあかんし……　何でも教えるわけにはいかんわな」
「そうね。あたしの方も、望君の『現在の』プライバシーが関係するから、よく考えないといけないわねぇ」
そう言って、あたしたちは3秒間にらみ合った。
アイツの方が折れてきた。
「わかった、わかった。俺の知っていること喋るから、お前と望のことも教えてくれや」
「いいわよ。約束するわ」
「『例の女』っちゅうのは、お前のことなんやけど。1カ月ぐらい前やったかな……　望と電話で話した時に、望が初めて惚れた女がいるっちゅうて、盛り上がったんや。望にとっては、つまり、お前がまっとうな初恋の相手や」
「ええー　初恋？　初恋には10年……　いや、20年、遅いんじゃないの？」
「お前、俺のゆうたこと、ちゃんと、正確に、聞いてないやろ」
「？？」
「俺は、ちゃんと言葉を選んだんやで……　初めて惚れた『女』、『まっとうな』初恋」
「？？」
「女では初めてっちゅうことや」
「つまり、女ではなくて……　『男』なら……　エー、もしかして、望君ゲイだったの？」

「そういうこと。俺も惚れられたことがある。大学のころや。タイまで追っかけてきたから相当なもんやった…」
「その関係、今も続いているの？」
「アホゆうな。関係も何も最初からあらへんよ。おれはちゃんと操を守ったで」
そう、アイツは言った。この場合の操って何かしら？　アイツは続ける
「それで、望は、俺に振られて、『恋はかなわなかったけれどずっと友人でいて下さい』っちゅうことになって、今に至るわけや。アイツはホンマに純情やから、そうまで言われると知らんぷりもでけへんかったんや」
「ということは、どういうこと？」
「そう言うことや」
あたしは、まだ事態をちゃんと理解できていない気がするわ。
「つまり、望が初めて女に惚れたんや。珍しいちゅうか、画期的ちゅうか…　どんな女やろうかと興味深々やったんや」
「あなたが興味深々だったのね」
「いや、俺やなくても世間一般に興味をもつと思わへんか？」
「そういうこと？　つまり、あたしは、ゲイがほれる珍しい女ってわけね」
とあたしは目をつり上げて言った。
「そう、その通りや。　いや、そうやなくて……　ま、ややこしいことは考えんでええよ。と言うわけで、望とお前はどこまで進展したんや。おまえもまんざらでもない顔をしとったやないか」
「進展もなにも、キスは、おろか、デートもまだよ。しいて言えば、今日が初デートかしら」
「そうか、それは、良かった……　いや残念やったっちゅうた方がええかなあ……」
そうか、なるほど。アイツにはアイツの思惑があるのね。

「ヒュルルル〜　ドーン、ドーン」
花火が盛大に上がる。あたしが
「ややこしいわねぇー」
とつぶやくのと、アイツが
「ややこしー」
とつぶやくのが同時だった。あたしたちは、同時にため息をついた。
「ふー」
　やっぱり、整理する必要があるわね。あたしは、望君の所へ言って白板をかりた。望君とサラポは、今度はアンパンボーイで盛り上がっている。八丈渡のいるテーブルにもどって、アイツが見ているのもかまわず、白板に書き始めた。まず、登場人物は3人、『碧』を真ん中上に、『望』を左下に、『渡』を右下に書く。皆1文字ね。それぞれを赤マル、青マルで囲む。女は赤マル、男は青マル。まず、あたしと八丈渡は、互いに好意を持っているのは確かね。「キープ」って回答したぐらいだし。『碧』から『渡』へ、赤い矢印を描く。そして、『渡』から『碧』へ赤い矢印を描く。次に、『碧』から『望』へオレンジ色の点線矢印を描く、その逆も描く。最後に、『望』から『渡』へ青い矢印を描く。アイツは、
「その青矢印は消えたで」
そう言って、あたしが握っていた多色マーカーを奪って大きな×印を青矢印の上に描く。あたしは、
「そう言えば、別の女を忘れていたわ」
そう言って、アイツからマーカーを取り返して、右下隅に、『別』マル、『別』マルを2つ描いて、『渡』から『別』マルに赤い矢印を描く。そうしたら、
「それは、ずるいんやないか、お前にも『別の男』が2，3人おるんちゃうか？」
とアイツは言って、マーカーを奪って、『別』マルを3つ、『碧』の周りに描いて、矢印も描く。あたしが
「どれにしようかな、天の神様のいうとおり」

と言って、『碧』からで出ている5つの矢印を順番に爪先でこつこつ叩くと、アイツも
「どれにしようかな、えんま大王のいうとおり」
と言って、渡からでている3つの矢印を順番に爪先でコツコツ叩く。
「なんで、えんま大王なの？」
「そらー　神様に対抗できんのは、えんま大王だけやから」
「なるほどね。それはそうと、『望』と『碧』は、会社で毎日顔を合わせるのよねぇ」
と言って、白板の『望』と『碧』を大きなオレンジ色のマルで囲んで、アイツの顔をみる。そしたら、アイツは渋い顔をして、
「そんなこと言っている場合やないで。あっちを見てみぃ」
と言って、顎先を前方に向ける。なんと、望君とサラポちゃんがぴったり寄り添って花火を見上げている。しかも望君の右手がサラポの腰に回っている。が～ん。ショック！　この1月あまりの楽しい会社生活はなんだったの？　何のために毎日おしゃれをしていたの？　なんために浴衣を買ったの？　ショックのあまりあたしの脳は5秒間冬眠した。
　アイツは、八丈渡は、さぞかし、喜んでいるにちがいない。それ見たことかと思っているに違いないわ。そう思ってアイツを見ると、さっきと同じように渋い顔をしている。あれ？　なぜ、嬉しくないの？　あたしの左脳は即座に答えを出した。
「あれー、もしかして、サラポちゃんは、あなたの『別の女』の一人だったんじゃないの？」
そう言うと、アイツは
「そんなことあらへんよ。俺は、逆玉の輿なんかねらってへんで」
と言う。
「あら、あたしは、逆玉の輿なんて、一言もいってないわよ」
「そ、そうやったけ？　……　こうゆうのを『漁夫の利』ってゆうんやろうか？」
「ちょと違うんじゃない」

「それやったら、『鬼のいぬ間に洗濯』？」
「それも違うわ……　とにかく、すこし、整理ができたわね」
あたしは、『碧』と『望』の間のオレンジ色の矢印を消し、『望』のそばに『サ』マルを描いて、赤い矢印で結んだ。さらに、『渡』のそばの『別』マル一つと矢印を消した。望君が言うように白板はすぐ修正できるのがいい所ね。

あたしは、白板とマーカーを机の上に放り出して、ビールをグビグビ飲んだ。アルコールがすぐに汗になって出てくる。背中にさしていた、新品の房州うちわを出して、一心に仰いだ。もう浴衣美人なんてどうでもいいわ。
右隣では、アイツが黙って枝豆を食べている。しかも汗をかきながら。アイツが黙っているなんて、よっぽどショックだったのね。あたしは、うちわを柄の先で持って、おおきく、ゆっくり仰いだ。アイツとあたしに風が来るように。

「ねぇ、『残り物には福がある』ってことわざ知っている？」
「ああ、知ってるで」
「じゃー　『残り者同士には福がある』っていうのは？」
「うーん、聞いたことあらへんで」
「そりゃ、そうでしょう。あたしが作ったんだもの」
「で、どういう意味や」
「こういう意味よ」
そういって、あたしは、白板の『渡』と『碧』を大きな赤マルで囲んだ。

白板の好きな男（その6）

さあ、ここが肝心よ。あたしは、白板に描かれた『碧』から『別』な男に出ている矢印を消していく。アイツはそれをじっと見ている。

昔のあたしだったら、白板を見せてわかってくれるのを期待して終えていたわ。でも、今のあたしは違う。あたしは一語一語、はっきり、ゆっくり言う。

「ちゃんと、まじめに、あたしと付き合ってくれる？　あたし一人と、付き合ってくれる？」

そして、自分に言い聞かせるように続けた。

「思いは言葉にしてこそ形になり、その言葉には魂が宿るわ。あたしは、もう、子供じゃない。昔の失敗は繰り返さないわ。もう一度言うわ。あたし一人と、つき合ってくれる？」

「そんな、何度も言わんでええよ。まるで、俺がアホみたいやないか。おれの返事はイエスや」

そう言って、アイツは、白板の『渡』から出ている余分な矢印を消していく。あたしは、ほっとした。もし、アイツの返事がノーだったら、ほんとにあたしは残り物ね。そして、残り物人生を送っていたかもしれないわ。アイツは、言った。

「一つだけ、訂正させてくれや。碧も俺も『残りもの』やない。碧はおれにとって最高の女や。俺は碧にとって最高の男や」

「そうね。なら、乾杯しなくちゃね。ビールを取ってきてくれる？」

そして、乾杯した。

「俺たちの未来に乾杯！」

「乾杯！」

あたしは、『女は食わねど浴衣美人』と言っていたことは忘れて、グビグビ飲んだ。

「ねえ、確かめておきたいんだけど」

「何を？」
「7月、8月は、仕事で忙しくて、日本にはほとんどいないって言っていたわよね。どうして今日本にいるの？」
「あー　それはやな……　会社を辞めることになったんや」
「えー！」
「引き継ぎやら、何やらで、ツアーガイドはセーブ、減らしたんや。それで今は日本におる。今の会社では、ツアーガイドは今シーズンが最後や」
「じゃー　どうやって生活していくの？」
とあたしは余計な心配をする。万が一結婚したら、あたしがこの能天気なアロハ男を養っていかなきゃならないのかと思って焦ったわ。
「おまえ、やっぱり、俺のゆうたこと正確に聞いてないな」
「え、どうして？」
「そやから、『今の』会社では最後やってゆうたやないか」
「ということは？」
「『別の』会社に移るんや。そこで主任になって、ツアーガイドをやりながら、ツアーの開拓・企画をやるんや」
「ということは引き抜き？　昇任？」
「まあ、そんなとこや」
「へー　すごいじゃない。それじゃ、デートもちゃんとできるのね」
「もちろん……　いや、たぶん大丈夫や」
あたしは、アイツの視線が一瞬、宙をさまよったのを見逃さなかった。
「……　渡、今、考えたでしょう？」
「そんなことあらへんよ。『別の女』のことなんか考えてへんよ」
「あたしは、『別の女』なんて言ってないわよ」
「しもた！　おまえ、引っかけたな」
「引っかけたわよ」
「ずる～」
「ずるいわよ、女はいつでも。それより、あたしの言ったこと正確

に聞いていないじゃないの！」
「正確に？」
「あたしは、こう言ったのよ。『あたし一人と、つき合ってくれる？』って」
「一人と？」
「そうよ、『一人』よ。浮気は厳禁！」
「厳禁？」
アイツは少しさびしそうな顔をした。それを見てキレた。
「もう知らないわ！　ガイドさん、今日はありがとう。あたしは帰ります。もうガイドさんには二度と会いません！」
あたしは勢いよく立ち上がった。が、ビールを飲みすぎたのか、足元がおぼつかない。アイツはあたしをギュっと抱きしめた。一瞬にして、抱きしめられる感覚、快感と安心感の混ざったような感覚におぼれた。耳元でアイツが囁いた。
「浮気はせん」
「ほんとに」
「ああ、ほんまに」
「じゃ、神様に誓ってよ」
「えんま大王やなくて神様に誓うんか？」
「そう、神様よ。神様はあたしの知り合いなの。でも、えんま大王は知り合いじゃないわ」
「ややこしいなあ。似たようなもんやと思うけど。まあええか。ほんなら神に誓って、私、八丈渡は、水上碧一人とつき合い、浮気はしません」
「上出来よ」
「じゃ、誓いのキスをしてもええか？」
「ええ！　キス？」
「神様に誓うときはキスをするんとちゃうの？」
「なんか、違うような気もするけれど……　いいわよ。ちょっとだけ。舌は入れちゃだめよ」

「なんでや？」
「だって、さっき食べた、トウモロコシの皮が歯に挟まっているかもしれないし……」
口紅がつくかもしれないって言おうとしたら、渡がキスをしてきた。しかも舌を入れてきた。あたしは歯で軽く舌を噛んでやった。そしたら、アイツはあわてて舌をひっこめたわ。そして、言った。
「おまえ、ほんまは、えんま大王やないか。舌、引っこ抜かれるかと思ったで」
「よくわかったわね……　ねぇ、もう一度抱きしめて。くせになりそう」
アイツは、あたしをギュっと抱きしめてくれた。

「ヒュルルル～　ドーン、ドーン、ドーン」
そして静寂が訪れた。あたしたちはまだ抱き合っている。あたしは、この人、八丈渡と行けるところまで行こうと、神様に誓った。

「先輩、碧さん、花火終わりましたよ」
と望君が声をかけてきた。その声にあたしとたちは、磁石のNとNが反発するように離れた。まわりを見回すと、望君、サラポちゃん、悟君、片品嬢、それに望君の同級生もいる。なんだか皆ニヤニヤしている。あたしは真っ赤になって目を伏せた。アイツは扇子でいかにも暑いという顔をしてあおいでいる。
「皆さん、楽しまれたようですね。では、これでお開きにしましょう」
と望君はにこにこして言った。あたしたちは望君の同級生に礼を言った。

土と炎の人（その1）

その日の議論（バトル）は、いつもよりも激しかった。桃姫（本名：熱海桃子）が

「どう考えても、この配置はおかしいわよ。入力端子のそばに出力保護のつまみがあって、出力端子のそばに入力切り替えスイッチがあるのよ」

と声を荒げると、回路のプーさん（本名：赤倉大輔）も負けてはいない。

「おかしいのは、承知しているさ。だけど、低電圧系と高電圧系を分けてノイズ耐性をあげるには、これが一番いいんだ」

「ユーザーの立場に立ってよ。この配置じゃ使いづらいじゃない」

「ユーザーの立場に立てば、誤動作するよりは使いづらい方がましさ」

「使いづらさにも限度があるわ。これは、限度を超えているわ」

「そんなことないさ。パネルデザインで、わかりやすい表示をしてくれれば……」

「あー、パネルデザインに、つまり、あたしに押しつけようっていうの？」

桃姫とプーさんのバトルは収まりそうにない。別に仲が悪いわけじゃないんだけれど、いい仕事をしようとすれば、ぶつかるのは自然。あたしはＳＥの役割を果たす。

「はい、そこでストップ！　二人とも、簡単には妥協できそうもないのはわかったから。問題を整理してみましょう。プーさん、部品を一通りこの会議室に持ってきてくれる。作りかけで配線されているものがあれば、そのまま持ってきてくれる？　桃子、もうパネルデザインは始めたの？」

「少しだけね」

「それじゃ、それを実寸大でプリントアウトしてくれる」

１０分後、プーさんは部品を抱えてきた。そして、それを会議机の上に並べ始めた。桃姫はボール紙にパネル図を貼って、ハサミとカッターも持ってきた。すぐにでも自分の思い描くデザインの通りにつまみやスイッチの入る穴を開けたそうな雰囲気だわ。

全体を収める箱（シャーシ）は弁当箱大ほどの大きさ。モジュールタイプで外形はもちろん電源供給ライン、データ通信ラインも規定されているので、部品配置の自由度は限られている。

ブロック図を見ながら、部品を並べていく。配線すべき部品間は細い針金で緩く結ぶ。ユーザーが操作するスイッチや入出力は、すべて前面のパネルに配置しなければならないからパネルへ延びる配線は多い。配線と言っても、微小信号、デジタル信号、ＡＣ１００Ｖ等の種類があり、不用意に配線を近づけるとノイズで誤動作することがあるわ。

例えて言うなら、道の配置みたいなものね。車、歩行者、自転車の道を配置する時に、なるべく同じ種類の道を束ねる。そうして、自動車専用道路、自転車専用道路を作る。１本の道を車と自転車、歩行者で共有すると思わぬ事故が起きる可能性がある。プーさんが考えることはこういう思わぬ事故の可能性を減らすための実装。この実装は、システムを作る時に見過ごされがちな点だけど決して侮ってはいけない点よ。

いつもならそんなに悩まないけれど、今回のモジュールは特殊で何種類もの配線が錯綜する。プーさんと桃姫の議論が白熱するのもわかる。

「さて、どうしましょう」

とあたしが二人に問いかける。

「決まっているじゃない。こういう風に並べ替えてみるのよ」

桃姫はそう言って部品を並べてみる。それに対してプーさんは、こことここが近いのが気になると指摘する。１０通りほどを試してみるが、プーさん、桃姫の両者が納得する解は見つからない。あたしは、見切りをつけた。

「どうやら、完璧な解はなさそうね。ねぇ、桃子、最初から2番目の配置をもう一回作ってみてくれる？」
「えーと、こうだったかしら？」
「そうそう。プーさんこれはどう？」
とプーさんの顔色をうかがうが、
「さっきも言ったように、ここの所で、デジタル系と小電力系が交差する点が問題だ」
とプーさんは難色を示す。そこで、もう一押しする。
「でも、他のケースに比べればましな方よ。ここの所だけ、厳重にシールド対策できないかしら？」
「簡単に、シールドって言うけれど、それ用のテストをして試行錯誤しないといけないから、大変なんだよ」
プーさんは不満そう。
「分かっているわよ。でもプーさんならできるでしょう？」
「もちろん、できるさ。しょうがない。今回は、俺が妥協するよ」
プーさんが納得して一段落ね。桃姫はフォローを忘れない。
「ありがとうプーさん。やっぱり、プーさんと仕事をすると気持ちがいいわ」
プーさんは軽く愚痴を言う。
「あー　会社も家庭も心休まる所がないなぁー」
「えー　どうして？」
とあたしが尋ねると
「そりゃ、どちらも、怖い女神がいるからさ」
「あはは、本当は、綺麗すぎて、ドキドキして心休まらないじゃないの？」
と桃姫が笑いながら、まぜっかえすと。
「ははは。まあ、そういう面もないことはない」
とプーさんも笑いながら答える。

一段落したころに、諏訪さんが会議室にやってきた

「碧さん、桃子さん、お客さんよ。名前は松島さん」
「松島さん？」
あたしたちは、顔を見合わせた。そもそもあたしたちのどちらかへのお客なら、出入りの業者、クライアントとかいっぱいいるけれど。あたしたち二人への訪問者は珍しい。
「碧は知っているの？」
「さあ、心当たりはないわ。桃子は？」
「あたしもないわ」
それを見ていた諏訪さんは、こうつけ加えた。
「品のいいおばあさんよ」
桃姫は言った。
「もしかして、化粧品の押し売りかしら？」
あたしは言った。
「あー　さては、桃子、試供品をもらうためにあたしの名前使ったんじゃないの？」
「それはないわよ。いくら、あたしでも碧の名前を使うほど図々しくはないわ。妹の名前を使ったことはあるけれど。それより、碧の方が怪しいんじゃないの。まさか、ネズミ講もどきの婚活セミナーに入会して、新会員を勧誘しているんじゃないでしょうね。あたしは、そんなセミナーに頼る必要なんてないから、余計なお世話よ」
「ば、バカ言わないでよ。ネズミ講だなんて。あたしの入会しているのは、もっときちんとした結婚紹介所よ」
とあたしは、不用意に答えてしまった。
「あー　セミナー通り越して、努力しないで、紹介所に頼るなんて！　まったく、最近の若い子は安直なんだから」
「桃子の方が若いわよ」
とあたしが訂正する。この調子で、この話は忘れてくれれば……と思ったが、桃姫は頭がいい。機関銃のように喋った。
「それより、碧が紹介所を利用しているなんて……　どうして教えてくれなかったの？　今まで何人とデートしたの？　うまくいって

いるの？　あー　もしかして、捻挫の時の相手はその紹介所の会員？　花火の時の相手は？　一体、何人を同時に相手しているの？時間をかけてきっちり説明してもらいますからね」
全弾、急所に命中して、あたしは息も絶え絶え。その時、黙っていた諏訪さんが口を開いた。
「押し売りもネズミ講も心配しなくていいわよ」
「え、どうしてわかるの？」
「眼をみればわかるわ」

あたしたちは小さな応接室でその品のいいおばあさんにあった。諏訪さんが眼を見ればわかると言ったけれど、あたしにはよくわからない。ただ、センスがいいことはわかる。白のスーツに紫柄のインナー、胸にワンポイントブローチ（よく見るとアオスジアゲハをモチーフにしたもの）、指には結婚指輪のみ。先方から挨拶をしてきた。
「お会いするのは初めてですね。松島と申します。前に電話でお礼を申し上げましたが、改めてお礼を申したく、職場まで押しかけてしまいました」
そう言って、おばあさんはにっこり微笑んだ。なんともかわいい笑みだわ。おばあさんは続けた
「本当に、主人の命を救ってくださってありがとうございました」
そう言って頭を下げた。
おばあさんのその言葉で3カ月ほど前のパスタ屋での事件を思い出した。

土と炎の人（その2）

3カ月ほど前に、あたしと桃姫はパスタ屋に出かけた。その日は朝から二人で、ステンレスの構造材の強度計算をしていたの。ようやく、コンパクトでかつ剛性のあるデザインの目途が立った時には、もう、お昼の時間をとっくに過ぎていた。たまには違うものを食べたいということで、会社から地下鉄で一駅のパスタ屋に二人で行く事にした。もちろん、課長には、『血糖値が下がりすぎて頭が回らなくなったので、しっかり補給してきます』と断ったわ。

人気店らしいが、お昼を過ぎていたので、すいていた。桃姫は、明るい店内に入ると、さっと見回して、窓際で奥から2番目の、既に別の客がいるテーブルの隣の席に座った。『すいているのに、わざわざ、他の客のそばに座ることはないんじゃない』と思ったけれど、すぐに気にならなくなった。あとで、桃姫から理由を聞かされるまで、そのことは忘れていた。

ここのパスタは一風変わっている。メニューには写真と説明がついているのだけれど、すべてオリジナルで、食べたことがあるものがない！

見た目重視の桃子は、『イカスミパスタ』を注文する。イカスミの黒を背景に、トマトとトウガラシの赤、オリーブの緑が映える。あたしは、桃姫に言った。

「イカスミなんて食べて大丈夫なの？　食べ終わったらお歯黒になるのは目に見えているわよ」

「大丈夫よ。どうせ、今日はろくな人と会わないから」

「つまり、あたしや課長は気にしないってことね」

「そう言うこと」

と桃姫は、わざと白い歯を見せてニヤッと笑った。これからのこの

歯が真っ黒になるのを御覧なさいと言わんばかりだ。
チーズと魚の好きなあたしは、ピザ風揚げパスタを注文する。平べったくしたパスタの上にチーズやアンチョビを載せて、軽く揚げて形を整えたもの。桃姫は逆襲してきた。
「そんなに、高カロリーなものを食べて大丈夫なの。出っ張り気味のお腹に脂肪がたまるわよ」
「お腹じゃなくて、胸につかないかしら。これって脂肪じゃないの？」
とあたしは、自分の乳房を両手で持ち上げる。
「碧のは、垂れているからきっと脂肪よ。ますます垂れるわよ。あたしのはつんと立っているから筋肉よ」
と桃姫は、親指と人差し指で乳房をつまんでみせる。自分の方が硬くしまっていると言いたいらしい。あたしは、ばかばかしくなってこう言った。
「分かったわ。脂肪が減って筋肉がふえるよう、後で運動するわ」
この後、すぐに運動する機会はやってきた。

あたしたちは、とりとめもない話をした。今年もうちの課には、新人が配属されなかったこと。それに対して、隣の光機課には、男女1名ずつが配属され、勢いがあること。桃姫は話しながら、ちらちらとあたしの背後の客を見る。あたしのすぐ後ろには、初老の男性。そのさらに向こうには若い青年。残念ながら、あたしは背中をむけているので、それ以上のことはことはわからなかったし、事件が起きるまでは、まったく関心がなかったの。

「うっ、うっ」
と低いうめき声が聞こえたかと思うと
「ゴト、ガシャ、ガシャ、ガシャーン……　コロコロ、コーン」
とコップや器が床に落ちて割れる音が背中でした。何事かと思って振り返ると。老人がテーブルに突っ伏している。テーブルの上には、

紅茶がこぼれ、床には、ガラスコップ、小皿、お椀が割れて転がっている。不思議と食べ物は散乱していない。青年は立ち上がっており、大きく目を見開いて老人と、床に散乱した食器を交互に見ている。青年は後で聞かれても色しかわからないような地味な服装。それに対して老人は肌触りのよさそうなジャケットを着て赤いスカーフを首に巻いている。立っていれば、おしゃれな初老の俳優がカジュアルウェアを宣伝しているという絵がぴったり当てはまりそうね。突っ伏した老人の白髪とスカーフの赤の対比が眼に焼きつく。

すでに桃姫は立ち上がっていて、老人のそばによって、あたしの眼を見た。

「この人、具合が悪いんじゃない」

あたしは、はっとわれに返った。あたしも立ち上がって、老人の肩をたたきながら声をかけた

「大丈夫ですか?」

返事はない。不自然にテーブルの上に伸びた右手は青白く、ピクリとも動かない。

「大丈夫じゃないみたい。桃子、手伝って」

あたしは、老人の重い頭を起こして顔を覗き込む。目をつぶって苦痛にゆがんだ顔が凍っている。そのまま、二人であおむけにして、上半身をシートに寝かせる。やっぱり、ピクリとも動かない。あたしは、緊急事態を発令した。

「誰か! 店員さん! 救急車を呼んで」

店員さんどこかに行くのがちらっと見える。テーブルをどけて、作業スペースを確保。仰向けの老人の口元に耳を近づけ、息を聞く。ジャケットの前を開けて、胸の動きを見る。息をしていれば、胸が上がったり、下がったりするはず。

「呼吸していなわ」

いつも冷静な桃姫が目をおおきく見開いている。そりゃーびっくりするわよね。あたしも似たような状態だったと思うわ。

「心臓は動いているの?」

と桃姫が聞く。あたしは、ワイシャツをはだけ、その下の下着もたくし上げ、胸を出す。手を直接心臓のあたりにおいてみる。
「よくわからないわ」
「ということは、止まっているってこと」
と桃姫がきく。
「さあ……　呼吸していない時は、心臓も止まっている可能性が高いらしいわ」
「じゃー、人工呼吸するの？」
「しないわ。道具がないから。道具なしだと病気がうつる可能性があるから、人工呼吸はしない」
「それじゃーどうするの？」
と不安そうな桃姫。あたしも不安。
「とりあえず、心臓マッサージ。それとＡＥＤ。桃子、ＡＥＤを取ってきてくれる」
あたしは、立ち上がって、右手のひらを乳頭と乳頭の真ん中、心臓の上に置く。さらに、その左手を重ねる。桃子が冷静さを取り戻す。
「ちょっと、待って。その前に気道確保」
そういって、老人の首の下に桃子が持ってきた自分の大きめのポーチを入れ、顎を上げさせる。そうだった、気道確保を忘れていた。こうして、心臓マッサージをすれば、その動きで人工呼吸の効果があるのだったわ。それから、桃姫は言った。
「心臓マッサージは確か４、５センチよ」
そう言って、人差し指を出して、その先から第二関節までの長さを示した。なるほど、体で長さを覚えているのね。
「じゃー、あたしは、ＡＥＤを探してくるわ」
そう言って桃子は周りを見回した。店員さんを捕まえて、救急車を呼んだかどうか確認している。ＡＥＤは近くにはない模様。桃姫はどこかに出て行った。あたしは、眼の前の老人に集中した。一度、胸を押してみる。４、５センチは結構な深さ。それからはずみをつけて、軽く体重をかけながら何度も押す。

「えーと、どのくらいの速さだたっけ？　普通の人の脈は1分間に60拍だから、そのくらいかしら？　もっと速かったような気がするけれど」

とあたしは呟く。全く、死にかかった人を相手に一人でこんなことやっているのはさびしいわ。そう思っていると

「1分間に100回ぐらいです」

と青年が答える。えっと思って、見上げると地味な青年、心配そうな眼をした青年がいた。そう言えば、老人の相手のこの青年がいたっけ。家族ではなさそうね。

「ありがとう」

と答えて、心臓マッサージに専念した。結構重労働ね。でも、こうやって、血液がめぐっていくと思うと、苦にならない……　やっぱり、大変だ。早く桃子がＡＥＤを持ってきてくれないかしら。早く救急車が来ないかしら……

　数を数えようと思ったけれど、集中できない。時々、顎が上を向いているかを確かめる。

　桃子がＡＥＤを抱えて戻ってきた時、あたしは、このまま、世界が終るまでずっと心臓マッサージをしているのかしらと思っていた。

「とってきたわよ。地下鉄の駅まで行ってきたわ」

駅員さんもいる。

「さて、エーと、何をすればいいのかしら。まず、説明を読むわね……。『蓋をあける』。はい開けました……　『電源を入れる』。はい電源を入れました」

そうすると、なんと！機械が喋り出した。それからは、機械の指示通りに行動する。パッドを胸に貼る。機械が自動的に診断する。あたしは、感心した。パッドで電位を測定して、心臓が動いているのかどうか、電気ショックが使えるのかを判断しているのね。完全に心臓が停止していれば、もう電気ショックの出番はないから、ＡＥＤの判断が一つの山場ね。『電気ショックを与えるので、体から離

れるよう』指示が出る。ということは、まだ望みがあると言うこと。桃子はショックボタンを押した。

何も変わらないみたい。機械は蘇生を続けるように言う。あたしは、心臓マッサージを続ける。ほどなく、救急隊員が到着した。隊員は、ストレッチャーに老人を載せ、テキパキと救急車に載せる。あたしは、重労働から解放される。青年は、隊員に経緯を説明する。いつの間にか荷物はまとめられている。青年が、連絡先を教えてくれと言ったので、あたしは名刺を渡した。

あっという間に、隊員も老人も青年も駅員さんもいなくなり、後には、ぼーっとしたあたしたちと店員さん、コックさんが取り残された。桃子は言った。

「さあ、あたしたちも出ましょう」

店員さんに謝って、パスタ屋を出た。外にはさわやかな4月下旬の風が吹いていた。木々が緑を濃くしていく季節だ。あの老人は助るのだろううか？

その晩、あたしたちは、ＡＥＤを肴に、飲み屋で2食分のカロリーを補給した。あたしは、ＡＥＤの部品構成と診断プログラムを想像した。桃姫は、素材とデザインを議論した。作るだけなら自分たちでもできそう。でも、医療機器だから、規格の遵守、信頼性の確保、各種安全審査・試験のクリアが必須に違いない。結局、あたしたちは、わが社（新参者）には難しいだろうという結論に達した。それでも、人の命を救う製品というのは魅力的だわ。

桃姫は、パスタ屋で、老人と青年のそばに席をとった理由を教えてくれた。

「カフスボタンよ。そのおじいさんはすごく素敵なカフスボタンをしてたのよ。それで、近くで見たいと思って、そばに座ったの」

「そんな小さなものよく気がついたわね。目がいいというか、鼻がきくというか、大したものね」

「ほんとに、素晴らしかったわ。手に取ってみたかったのだけど…

…　もし亡くなったら譲ってくれないかしら？」
「縁起でもないこと言わないでよ……　でも死んだのか、生き返ったのか知りたいわねぇ……」
「2、3日すれば、わかるわよ」
「えー、どうして？」
「碧、名刺渡したでしょう」
「ウン」
「生き返ったなら、お礼の連絡があるはず。連絡がなければ、死んだっていうことよ。死んだら連絡しづらいじゃない」
「ふーん。それもそうね」

翌々日に、会社に松島と名乗る女性から連絡があった。命をとりとめ、意識も戻ったそうだ。後日、お礼に伺うと言った。

土と炎の人（その3）

以上が3カ月ほど前のことの次第。目の前の女性は、あの老人の妻らしい。だいぶ回復してきて、今は自宅で養生しているそうだ。ついては、お礼を兼ねて自宅に招待したい。食事を楽しんでいただきたいのはもちろんだけれど、ゆっくりリフレッシュしてほしいのでまる1日のつもりで来てくださいとのこと。あたしたちは、次の日曜日に、朝から三浦半島の家に行くことになった。

彼女、松島夫人が部屋を出て行って、あたしと桃姫は顔を見合わせた。

「どういうこと？」

とあたしがきくと、桃姫は

「そういうことよ」

と答える。例によって、会話になっていない。

「つまり、自宅に招待するのって変じゃない？」

「それじゃ、碧ならどうするの？　命を救ってもらったお礼に、チョコレートケーキでも持っていく？」

「そんなことはしないわ」

「それじゃ、ウナギ？」

「それも変よ」

「やっぱり、伝統的な羊羹？」

「伝統とかではなくて、とにかくこの場合は、食べ物でお礼をするのは変よ」

とあたしは主張する。桃姫も

「普通のお礼なら菓子折り、食べ物と決まっているじゃない。なのにどうしてこの場合は変なの？」

と反論する。

「命を救ってもらったのに、菓子折りでは、安すぎるんじゃないの

かしら」
「つまり、命という高価なものに対するお礼として菓子折りは安すぎると」
「そう言うと、なんだか品がない気がするけれど、やっぱり、そういうことじゃないかしら」
「でも、命に値段をつけるのは難しいんじゃないの？」
と桃姫が言う。数字の得意なあたしは、試算してみる。
「サラリーマンの生涯賃金は2億円ぐらいと言われているから、若い有望なサラリーマンが死んだら、そのぐらいの損害ね。でもよぼよぼの老人であれば、あまり稼ぎはないので、金額は随分下がるはず。別の算定方法として生命保険があるわ。あたしのパパはいつだったか、3千万円の生命保険に入っているって言っていたから、命の値段は数千万円ぐらいが相場じゃないかしら？」
「とすると命を救えばそのぐらいのお金をもらってもいいということ？」
と桃姫が尋ねる。
「そんなことはないんじゃないかしら。例えば、落し物を拾った場合はその1割程度が謝礼の目安と言われるから、命の場合も1割だとすると数百万円ってところね」
「だとすると新車が買えるわね」
と桃姫は嬉しそうに言う。きっと、新車をもらえると想像しているのね。あたしは、桃姫を、がっかりさせるつもりだ。
「高めに評価するとそのぐらいだけど、もっともっと安く見積もることもできるわよ」
「というと」
「例えば、お医者さんが患者の命を救うたびに新車をもらえるとおもう？」
「そんなことはないわ」
「救急隊員だって同じことが言えるわ。つまり、報酬は、労働の対価なのよ」

とあたしは説明する。
「もう少しわかりやすい表現をしてよ」
と桃姫が注文をつける。
「働きに応じてお金をもらうということ。今回の場合、あたし達はお昼の1時間を使ったのだから、1時間分の労働をしたということ」
「とすると、いったいいくらぐらい？」
「あたし達の時給は、ボーナスを入れて2000，3000円ぐらいだから。そのぐらいよ」
「ということは、うな重ぐらいね」
「うな重から新車1台の間となると、相場はあってないようなものね……　自宅に招待するってのは、それなりに心のこもったお礼ができるわね」
あたしは松島夫人の招待に話を戻す。
「でも、リフレッシュできるって、どんな自宅かしら？」
と桃姫が新たな疑問を出す。
「あ！　わかった。きっと温泉があるのよ。もしかしてホテル経営者で、自宅と言っているのはホテルだったりして？　リゾートホテルなら、リフレッシュと言うのも納得できるわ。温泉があって、プールがあって、カクテルバーがあれば、ちょっとしたバカンス気分よ」
とあたしが言うと、桃姫はべつのリフレッシュを考える。
「リフレッシュと言えば、やっぱりエステとかマッサージじゃないの。エステサロンの経営者だったりして」
「もっと、ハードな、リフレッシュかもしれないわ」
「ハードって？」
「例えば、富士山の7合目の山小屋が自宅で、そこに行くまで、3時間登山しなければならないとすれば、究極のリフレッシュができそうよ。『まる1日のつもり』って言っていたから、ありえなくはないわよ」
とあたしが脅すが、桃姫は冷静だ。

「そんなことはあり得ないわ。三浦半島には富士山はないわ。あるのはハイキング程度の山だけよ」

あたしは、八丈渡（はちじょうわたる）も一応誘ってみる。正式につき合っているのだから、可能な限り誘うようにしている。桃姫に紹介しておきたいという気持ちもあったわ。だけど、アイツは、『忙しい』と断ってきた。本当に忙しいのかどうか怪しいものだけれど、そうやってあたしがアイツを疑うこと自体、情けないことだと思う。まあ、細かいことを気にしていては、アイツとつき合うのは不可能だけどね。

結局、あたし達は、水着も登山靴も持たずに松島宅を訪ねた。駅からタクシーで１０分程の所に、大きな屋敷があった。表札の下には2枚の古びた看板が掲げられており、こう書かれてあった。『陶芸教室』、『料理教室』。それ以上の説明はなかった。

敷地内には純和風の母屋に、プレハブのはなれがあり、その奥は畑と竹林になっている。松島夫人はあたし達を和室に案内してくれた。和室からは、こぎれいな庭が見える。手前には、明るい日差しを浴びた芝生が広がっており、その向こうには小さいな池、そのさらに向こうには低木が広がっている。この家の主である松島氏と青年がやってきた。あたしの知っているのは苦痛にゆがんだ表情の松島氏だが、眼の前にいるのは、あたたかいまなざしをした初老の男性。杖をつき頬はやせているが、元気そうだ。隣の青年は、見覚えのある地味青年。松島氏の紹介によれば、笠間市在住、売り出し中の、つまり売れていない陶芸家だそうだ。

松島氏は丁寧に礼を言って、どうやってお礼をするのがいいのかよくわからないので、自分たちの得意なことでもてなしたいと言った。結局、午前中は畑に出て食材を確保し、松島夫人の指導のもとあたしと桃姫で料理作る。午後は、松島氏にギャラリーの案内をしてもらい、さらに地味青年の指導のもと陶芸を体験することになった。

畑に出て、ウリ、青いトマト、ブドウ、みょうがを採る。夫人は数年前まで、自宅で茶懐石や精進料理を教えていたそうだ。厨房はひろく立派で、使いこまれた道具は手入れがゆき届いている。料理の好きなあたしは、夫人の説明が頭に心地よく浸み込んでいく。微妙な味付けの違いの解説は、まさに母から娘にその家の味を伝授しているようだわ。あたしのママは、そんなこと教えられるほど料理ができないし、パパはパパで、拙速を至上とするとから、微妙な味付けはできない。結局、あたしは今まで、母の味、家の味を知らずに育ったのよ。松島夫人の手ほどきは新鮮だった。好みの味を作っていく様は、芸術のようでもあるし、化学のようでもあったわ。桃姫はあたしと同じくらい、つまり、かなり舌が敏感で味の違いはよくわかるけれど、それを実現するのは不得意みたい。いつもやられっぱなしのあたしは、少しだけ優越感に浸る。

豪華と言うわけではないけれど、納得する昼食を皆で食べた。松島氏は、桃姫のだし巻き卵、あたしのウリの挽肉あえをきちんと評価した。良い点を誉め、悪い点も指摘する。まるで、生徒を指導する先生のようだわ。

昼食後に松島氏の案内でギャラリーを見て回る。半分くらいは氏の作品。残りは、お弟子さんや親交のある陶芸家の作品、それに古陶が少し。明言はしないが、氏はかなり名の通った陶芸家だったらしい。今は、引退して後進の育成に関わるとともに、地域の子供や愛好家のための陶芸教室を主宰している。あたしたちは、途中までは、各作品の解説をのんびり聞いていたのだけれど、氏が

「命を救っていただいたお礼ですから、どれでも好きなものを差し上げますよ」

と言ったので、それからは、もう、眼を見開き、耳を澄まし、頭の中でメモを取りながら、氏の解説を聞いた。あたしの左脳は『釉（うわぐすり）、

還元性、高台（こうだい）、織部（おりべ）……』と耳新しい単語でオーバーフローを起こした。

「松島先生、あたしには選べそうもありません。もっと気楽な、普段使えて、割れてもいいような食器はないでしょうか？」

とあたしは音をあげた。

「ははは、そうですね。お見せしたものは、それぞれ、偶然のたまものであったり、努力と汗の結晶だったり、それこそ、命を張って守ってきたものだったり、します。一方、水上さんのおっしゃる気軽に使える食器もありますよ。あとで紹介しますから、ちょっと待ってください。熱海さんはいかがですか？」

と、今度は桃姫に問いかける。

「あたしも、碧、水上と似たようなものね……　最後の方に見せていただいた、超モダンなデザインの古陶に感動しました。ああいうものを自分でデザイン、自分で作ってみたいです」

さすが、桃姫らしいわ。

「熱海さんのその熱意はよくわかります。そうやって、陶芸に魅せられていくのです。納得できるものができるかどうかはわかりませんが、できる限りお手伝いしますよ」

「それと、忘れないうちに聞いておきたいのですが、あの時の緑色のカフスボタンと奥様の身につけていらしたアゲハ蝶のブローチ。この二つ、本当はもっとあるのだと思うけれど、じっくり見せていただきたいのですけれど」

そう桃姫が言うと、松島氏は一瞬、驚いた表情を見せた。

土と炎の人（その４）

桃姫の言っている緑色のカフスボタンは、松島氏が心臓発作で死にかけていた時に身につけていたもの。桃姫がパスタ屋で、松島氏のすぐそばに座ったのは、それを近くで見たかったから。亡くなったら譲ってほしいと言っていたものだわ。アゲハ蝶のブローチは、先日、奥さんがわが社にやってきたときに身につけたいた物で、こちらの方はあたしも覚えている。松島氏は、少しびっくりしたようだけれど、ちゃんと説明してくれた。

「両方とも、娘が作ってくれたものです……　娘は一時期、アクセサリーを作って画材を買うお金の足しにしていたのです。本業は画家なんですが、なかなか売れなくって、趣味を生かしてアクセサリーを作っていました」

「とても趣味とは思えないレベルのようでしたけど」

と桃姫が言うと、松島氏は答えた。

「いやいや、売り物にはほとんどならなかったんですよ。結局、私たち親にアクセサリーを作って、画材の費用を出させていましたから。芸術で身を立てるのは、至難の業です。女の子なんだから、絵はあきらめて、結婚して家庭に入って子供を育てるもの悪くない。悪くないどころか、次の世代を育てるのは大事な仕事だし、趣味で絵を描いたっていいじゃないかと言ったんですが……」

「それで、娘さんはどうなったんですか？」

「それが、皮肉と言うか、お恥ずかしい話なんですが……　親子ほども違う男、しかも大きな連れ子のいる男と結婚して、その男に画材の費用を出させたんですよ。相手の男は、私とほとんど変わらないくらいの歳ですよ。連れ子の方が年齢が近いぐらいですし……全く何を考えているんだか」

「それで、娘さんは今でも絵を描いていらっしゃるんですか？」

「ええ描いています。最近になって、絵が売れるようになって、美

術展でもたまに入選します。まあ、プロの画家のはしくれになったんですから、その努力と才能は買ってやるべきなんでしょうけど……これからが大変ですよ。昔の自分のことを考えると……」

松島氏の表情が曇る。よほど苦労した昔があったのかしら。桃姫が話題を戻す。

「それで、娘さんの作ったアクセサリーは他にもあるのですか？」

「ええ、ありますよ。妻がまとめて管理していますので、妻に見せてもらいましょう。とにかく玉石混交で、身につけても恥ずかしくないものはわずかです」

夫人はひらたい箱を持ってきた。蓋を開けると敷き詰められたワタの上にアクセサリーが３０個ほど綺麗に並べられていた。件のカフスボタン、アゲハ蝶もある。女性用のブローチやペンダントトップが大半で、指輪、ネックレス、キーホルダー、カフスボタン、ネクタイピンもある。素材も製法も雑多だ。針水晶があるかとおもうと金属製の瓶のふた（王冠）があるし、木工細工があるかと思うと七宝焼きがある。

「最初に作ったのは、この星型のヒスイ。高校生の頃だったかしら」

と夫人は、箱の隅に置かれたブローチを指差した。

「作った順番に並べてあるの。最初のころのものは酷いわ。だんだん上手になってきたけれど、売れたのは１０個ぐらいかしら。ここにあるものは売れ残ったものか、売り物にもならなかったものよ。大事に使ってくれるのなら、持って行っていいわよ」

こうやって、きちんと整理しているところは、アルバムみたい。夫人の優しそうな眼を見ると、娘をかわいがっているのが分かるわ。

『持って行ってもいいわよ』の言葉を聞いて、桃姫の眼は爛々と輝きだした。まるで獲物を狙う獣のよう。あたしも、つられて、品定めをする。氏が言うように玉石混交だ。粗悪で、夏休み最後の一日で作った自由工作と言われてもおかしくないようなものから、洗練されたデザインで、高い値がついてもおかしくないものまで様々だ。

桃姫は、チャート（石）のキーホルダーを選んだ。勾玉（まがたま）のような形状に、穴があけられていて、もともとのチャートの層状の赤い文様が不思議なアクセントになっている。あたしは、針金細工の人魚のブローチを選んだ。剛性のある針金らしく、握っても形が崩れない。また、防錆加工を施してあるのか、銀色に美しく輝いている。あまり派手ではないので、モノトーンのスーツに合いそう。

午後のメインイベントは、陶芸体験。地味青年の案内でろくろを体験することになった。地味青年には、宇奈月貴司（うなづきたかし）という名前がある。色褪せた青いジーンズに白のワイシャツ、本当に地味な服。ただし、声はハスキーで、声だけ聞いていればセクシーと言えなくもない。粘土をろくろの上に載せる。ろくろを回転させ円筒状にして、優しく親指を上面にあてて穴を深くしていく。そして、指でつまみあげるようにして茶碗の形を作っていく。青年のお手本を見ると簡単そうに見える。一生懸命、説明しようとする青年を桃姫が邪魔をする。

「ねぇ、あの時、松島氏が心臓発作を起こした時、床を見て茫然としていたでしょう。どうして？」

「あの時の僕の行動は、思い出してもお恥ずかしいかぎりです。本当なら真っ先に師匠の心配をして、何かをしなければならなかったのですが、僕の幻の作品が割れて、それで茫然としていたのです」

「幻の作品って？」

「幻っていうのは大げさに聞こえるかもしれませんが、もう二度と作れないのではないかという意味で、幻なのです。ここ数年、僕は古陶の名品を再現しようとしていたのです。耀変（ようへん）天目茶碗といって、世界中に数えるほどしかないとても珍しい文様の茶碗です。県立のセラミック研究所と組んで、どんな素材、土と釉（うわぐすり）を使ったのかを推測しながら、色々条件、焼成条件を変えて試しているのですが、なかなかうまくいきませんでした。もう、2年ぐらいためして、やっと一つ、再現できたのです。ほとんど偶然と言っていいでしょう。

それをあの店で師匠に見てもらっていたのです」
「それは凄いじゃない。よかったわね」
「ええ、そこまではよかったのですが、あの時床に落ちて割れてしまったのです。もちろん、師匠は、謝ってくれましたが、どうしようもありません。でも、あれが割れて古陶の再現に踏ん切りがつきました」
「それも一つの通過点よ。新しい目標を見つければいいのよ」
桃姫はいつになく優しい。毒舌がまったく出て来ない。病気かしら？　とあたしは心配する。青年の目はは遠くを見る目つきから、輝く眼に変わった。
「そうなんです。今まで、古陶の再現に時間を取られていたのですが、今はその呪縛がなくなり、やりたいことを自由にでき、幸せです。実は、今日の午前中は、ここ最近試作した作品を持ってきて師匠に見てもらっていたのです。よかったら後でお見せしますよ。お話はこのくらいにして目の前の土に集中してください。余計なことを考えると、ろくろはうまくいきませんから」
　たしかに、宇奈月青年の話を聞いていると、きれいな形はできない。ちょっとした加減で容易に形は崩れる。桃姫は最後の質問をする。
「それじゃ、集中する前に、１つだけ教えて。宇奈月さんは結婚しているの？　恋人はいるの？」
まったく、桃姫は単刀直入ね。
「え、結婚はしていませんが……　２つ質問があったようですが」
と、青年は動揺しながらも、鋭い点をついてくる。桃姫は
「２つまとめて１つと思ってくれればいいわ」
と返す。
「えー恋人は……　土と炎です。器を作るための土とそれを形にする炎です」
「ふーん」
と桃姫は、考え込み、そして、青年の眼をまっすぐ見つめる。桃姫

の眼は、誘惑するような流し目ではなく、真摯な眼差しだわ。その眼差しに青年はたじろぐ。

「熱海さんが、僕にこういう質問をするということはどう解釈すればいいのでしょう?」

あたしは、空気が緊迫するのを感じた。

「素直に解釈してくれればいいわ」

二人の視線は真ん中でぶつかったかと思うと絡み合い、そして、ゆっくりフェードアウトしていく。一瞬燃え上がった炎が、静かな種火になったみたい。あたしは、遠くない未来に種火が盛大な炎に変わるのを確信した。

土と炎の人（その5）

ろくろは意外に難しく、また面白い。力加減だけでなく、土の粘り、指や手の表面の水分、色々な要素を肌で感じないと思った形にはできないわ。最初は、薄くきれいに作ることを心がける。そのうちに、少し、形を崩そうとしてみるが、こちらの方がきれいに作るより難しい。宇奈月青年は、時々見に来るけれど、何も言わないし、あたしたちも何も聞かない。土と向き合う時間が静かに過ぎていく。

あたしは、2時間ほど何度も作っては壊し、最後にこれはと思うお椀を残した。隣の桃姫は、まだねばっていた。平たい皿に文様を刻んでいる。しかも驚いたことに、皿をわざと偏心させている。つまり、回転対称な皿の中心とろくろの回転中心が一致していない。そうして不思議な幾何学的模様を刻んでいる。まるで、さっき松島氏に見せてもらった古陶の抽象デザインの絵付けを、刻みで再現しようとしているみたいだわ。桃姫のその執念に感心した。宇奈月青年が一言二言声をかける。

暇なあたしは青年の作品を見せてもらった。華やかな絵付けの食器があるかと思うと、対称性が大きく崩れた大胆な形の花器、何に使うかわからない抽象的なオブジェ、子供が喜びそうな怪獣。本当に自由に遊んでいるのが感じられる。と同時に松島氏の評、売れていない、というのが妙に納得できる。確かにどれも素晴らしいけれど、どこかで見たような感じがする。売れるためにはそれだけでは不十分で、もっと強烈な個性、スタイルが必要なのだと思うわ。

松島夫人が作った夕食を皆で食べた。昼食が草食系だとすると、夕食は肉食系だわ。豪華な海の幸をふんだんに使った料理に満足した。結局、午後に松島氏が見せてくれた陶磁器はいただかずに、後日宇奈月青年の工房を訪ね、絵付けを体験する約束をして、蛍の飛ぶ松島宅をあとにした。

帰り道に、桃姫に話しかけた。
「で、あの青年はどう？」
「どうって言われても……」
「隠したってわかるわよ。桃子の眼は真剣そのものだったわ」
「そうだったけ？」
「そうよ。桃子に惚れた男は何人も見たことがあるけれど、桃子が惚れた男を見たのは初めてよ」
「それじゃ、まるであたしがアルテミスみたいじゃない」
「アルテミスって？」
「ギリシャ神話に出てくる、狩りと純潔の女神よ」
「ふーん。狩りの方は桃子にはふさわしそうね。それにしても、あんな地味な青年がどうして桃子のメガネにかなうのか、全く理解できないわ」
とあたしは、桃姫の自尊心を痛ぶってやる。
「見た目が地味かどうかは問題じゃないわ。彼は美男よ。それに……碧は、彼の陶磁器に対する情熱がわからなかった？」
たまには素直な桃姫もいいわね。
「わかったわよ。でも、土と炎が恋人だって言っていたし、桃子が入り込む余地はないんじゃない」
「う～ん、そうかもしれない。でも、彼の情熱を手伝ってあげたい気がする」
「桃子は、本当は彼ではなく、土に惚れたんじゃないの？」
「土に？」
「だって、ろくろでねばっていたじゃない」
「そうね、土に惚れたのかもしれない。今度、彼の工房に行けばはっきりするわ。彼に惚れたのか土に惚れたのか」
そう言って桃姫は黙ってしまった。もともと、桃姫は芸術系だから、これを機に陶芸にのめりこんでもおかしくないわ。もしかしたら、会社を辞めてしまうかもしれない。そうでなくても宇奈月青年と結

婚するかもしれない。そうなれば、やはり会社を辞めるかもしれない。あたしは不安を覚えた。

翌週、久しぶりに八丈渡に会うことにした。彼の義母の八丈さゆりの家に夕飯に招かれたのよ。濃紺のミニのワンピース、生足に松島宅でもらった人魚のブローチをつけた。ミニにしたのは彼女があたしの足をきれいだと言ってくれたからだ。ついでに生足にしたのは、アイツの好みかもしれないから。

彼女が玄関を開けて迎えてくれた。

「今晩は。ごちそうになります。これ、つまらないものですけれど、後で皆で食べられればと思って」

そう言って、あたしは、沖縄マンゴーを彼女に渡そうとした。

「ようこそ、いらっしゃい……　そ、それ！」

と彼女が驚きの声をあげる。

「え、何？」

「そのブローチ！」

「あ、これ？　この人魚のブローチ？」

「そう、それ！　どうしたの？」

「これは先週、ある人にもらったの」

「まさか、松島の家に来たって……　あなただったの」

彼女は2秒間絶句した。

「松島はあたしの実家なの。つまり、あなたが命を救ったじじいは私の父なの」

「えー　ということは……」

今度はあたしが1秒間絶句した。その1秒間、あたしの左脳は高速で回転した。

あたしの彼氏が八丈渡で、その義理の母が八丈さゆり。彼女の実の親が松島氏。その松島氏は著名な陶芸家だった。そして、今、あたしは、彼女が作ったらしいブローチを身につけている。

「それじゃ、松島さんが嘆いていた娘が……」

しまった、口が滑った。八丈さゆりは笑いながらあたしの言葉を引き継いだ。

「そう、その娘が私。確かに嘆いていたわ。はるかに年上で父と変わらないぐらいのじじいと結婚した私を」

「いや、そう言うつもりでは……」

「ないことはないでしょう。しかも、そのじじいには大きな連れ子がいた。嘆かない親はいないわねぇ」

「でも、松島さんはさゆりさんのことをプロの画家で、努力と才能は買っていると……」

あたしは、なんとかフォローする。

「そうね。最近やっと認めてくれたわ。でも、本当にありがとう。何とお礼を言ってよいやら」

「え、このブローチ？」

「いや、ブローチを身につけてくれたのもありがたいけれど、あなたは父の命の恩人よ。『女神が助けてくれた』と父が言っていたけれど、私たちにとってはあなたは女神よ」

「女神？」

そういえば、前にも、だれかにも『女神』って言われたけれど……そうそうゴーストさとる君に『コンピューターに住みついた女神』と言われたわ。あたしって、もしかしたら女神の才能があるかしら。でも、女神の才能って何？　妄想を八丈渡（アイツ）が吹き飛ばす。

「お、ひさしぶりやな碧。今日はかわいいやないか」

アイツの言葉にカチンとくる。さゆりさんがすぐ横で聞いているもかまわずに、言い返してしまった。

「久しぶりに会ったのに、『今日は』って、どういうこと。この間の浴衣は、かわいくなかったってこと？」

「そ、そんなことあらへんよ。あの時もかわいかったで。もっとも、舌をかまれた時は、エンマ大王に見えたけど。今日の料理にはトウモロコシはあらへんから、安心してディープキスができるで」

渡の『ディープキス』という言葉で、一気に顔が紅潮する。全く、渡は恥ずかしくないのかしら？　隣でさゆりさんが笑っている。
「あはは。立ち話はそのくらいにして、中へお入りなさい。おいしそうなマンゴーは後で出さしてもらうわ」

さすがに松島夫人の娘だけあって、料理は絶品だ。洋風メニューなのだけれど、どこか和の風味が混じっている。おいしい赤ワインを控えめに飲みながら、松島氏の命を救ったパスタ屋の事件について話した。さゆりさんは感想を述べる。
「ほんとにすごいわね。心臓マッサージをするなんて」
「前に救急救命の講習を受講したことがあって、そこで、心臓マッサージやらＡＥＤの使い方を習ったの。でも、忘れていた点もあって、周りの人に教えてもらいながらやったのよ」
「でも、どうして講習を受けたの？　会社で皆習わされるの？」
「いや、そういうわけじゃないんだけれど……　自主的に受講したの。だいぶ前に、目の前で人が亡くなったことがあって、ＡＥＤぐらい使えなくっちゃって思ったの」
「そう言えば、ＡＥＤって何の略？」
とさゆりさんが聞くと、渡が答える。
「そりゃ、決まっているやないか。『ア』ホでも『生』き返る『電』気ショックやで」
「？？」
さゆりさんとあたしは一瞬、顔を見合わせて、ぷっと吹き出した。
「あはは、それはいいわね。でもホントは英語の略なんじゃないの」
あたしは答えを言った
「Ａｕｔｏｍａｔｅｄ　Ｅｘｔｅｒｎａｌ　Ｄｅｆｉｂｒｉｌｌａｔｏｒ　自動体外式除細動器よ」
「おまえ、頭ええなあ」
と渡が言う。
「誉めてくれるのはいいんだけれど、いい加減に『お前』って呼ぶ

のやめてくれないかしら」
「あ、わりぃわりぃ。砂漠の碧ちゃん」
と渡は呑気だ。

「ところで、今度、松島さんのお弟子さんの所で、同僚と陶芸の絵付けを体験することになっているんだけれど、渡、一緒に行ってくれない？」
と渡に頼むと
「俺に、行けと？」
という冷たい返事。
「そう。渡と一緒に行って楽しみたいの」
「会社、移ったばかりで色々あって、忙しいんやけど……　スケジュール帳確認して返事するわ」
これだけ頼んでいるのに、なんとも渋い返事ね。そこへさゆりさんが割り込む。
「あれ、ワタ君、スケジュール帳なんて持っていたの？　いつもスケジュールに縛られたくないって言っていたけれど」
「いや、俺も少しは大人になったし。責任もあるし」
「ところで、その絵付け体験、私も行きたいな。そのお弟子さんって名前は？」
「えーと、確か、宇奈月さんという青年よ」
「あー　貴司君ね。彼は父の陶芸教室に小学生のころから出入りしていたのよ。小さい頃は、それはかわいかったわ。でも、今は陶芸一筋のまじめな青年よ。髪をカットして、服を着せれば、アイドルといってもおかしくないぐらいの美男なんだけれど……」
「美男？　そう言われればそう言う気もするけれど……　とても地味だったから、そんな印象はなかったわ。でも声がハスキーで素敵だった」
と感想を言うと、さゆりさんは
「そうそう、声がね……　それに歌もうまいし。かわいい子がいれ

ば紹介したいぐらいなんだけれど」
となぜかいたずらっぽい眼であたしたちを見る。渡が言う
「あ、お、俺も行くで。万難を排して行くで」
「あれ、スケジュールがどうのこうのとか言っていなかったけ？」
と聞くと
「いや、どうせ暇やし」
と答える。
「さっきは、新しい会社で色々あって忙しいとか言っていなかった？」
「そうやったけ。まあ、日本の伝統工芸も一通り勉強しとかんと、外国行った時はずかしいやろ。絶対行くで」
あたしは、さゆりさんに感謝の視線を向けた。
「それじゃ、貴司君に断りの電話を入れておくわ」
そう言って、さゆりさんは手帳を見て電話をかけだした。

「あ、私、さゆりよ」
「……」
「久しぶり。元気？」
「……」
「そう、それはよかった。ねぇ、今度、父の命の恩人の水上さんたちを、貴司君たちの工房に招待するでしょ。私も行っていいかな。それから、陶芸に『ものすごく』関心のある男を一人連れていっていいかしら」
「……」
「水上さんと私の関係？　そうね、水上さんは、もしかしたら、私の義理の義理の娘になるかも知れない子よ」
「……」
「ぎりぎりじゃなくて、義理の義理の、よ」
「……」
「ややこしいことは考えなくてもいいわよ。それじゃ行くからね」

「……」
「ばいばい」

陶芸にものすごく関心のある渡と、義理義理の娘になるかもしれないあたしは、顔を見合わせた。皆、さゆりさんのペースに巻き込まれたのだわ。

土と炎の人（その6）

３台のレンタサイクルが縦一列に並ぶ。先頭を走るのは、赤いバンダナ、黄色のアロハ、黒のバミューダといういでたちの渡。さすがに男だけあって速いわ。後ろから見るとふくらはぎの筋肉が盛り上がっているがよくわかる。２番目につけているのがデニムのショートパンツにタンクトップ、野球帽という少年のような桃姫。健康的な色気の足と形のいい胸が強調されている。しんがりを務めているのがあたし。６分丈のパンツに麻のチュニック、ボタン２つはずして胸元を大きく開いている。機嫌がわるかったうえに重い荷物を背負ってふらふらだった。

あたしが６分丈のパンツを穿いているのは、自慢の足首を見せたかったから。チュニックはゆったりしていてお腹のラインが見えないのがいい。しかも、ボタンを２つ開けると胸の谷間が綺麗に見える。斜め４５度までなら、ブラも見えない。もちろん見えてもいいブラをしていったわ。でも谷間作戦は失敗だった。

この日は最初から渡とぎくしゃくしていた。

あたしたちは３人は、電車で行くことにして、ローカル線で合流することになっていた（さゆりさんは一人で車で行く）。どうせ特急を使うのだから自由席で待ち合わせてもよかったのだけれど、あたしは途中駅からの乗車、桃姫と渡は始発駅からの乗車。初顔合わせの桃姫と渡が、あたしのいない所で会うのは避けたかったの。万が一、二人が意気投合して必要以上に親しくなったり、あたしのいない所で、あたしの噂をする危険性は避けたかった。もちろん、親友の桃姫を信頼していないわけじゃないわ。でも、桃姫の魅力は侮れないし、渡はまだ信用できない。

予定通りローカル線に乗り込むところで合流した。あたしは二人

を互いに紹介した。
「こちらが、あたしの同僚の熱海桃子。それからこちらが彼氏の八丈渡」
「よろしく。桃子さんと呼んでええかな」
と渡が言うと
「もちろん。こちらこそよろしく渡さん」
と桃姫が答える。
「それにしても、碧に劣らず別嬪やねぇ」
と、ここまではよかったけれど、その後、渡は
「二人とも立派な胸やわ。まるで富士山と大根を見ているようやわ」
と言った。
「どこが富士山で、どこが大根なの？」
とあたしが問いただすと
「いやぁー　桃子さんの胸は富士山のように凛々しく立っていて、碧のは、大根のようにたれ……」
「大根のように垂れさがっていると言いたいの？」
とあたしが詰問すると
「だ、大根のようにた、た、たいそう白い肌！　やで」
とかわした。そりゃー桃子の形のいい胸にはかなわないけど、あたしの胸の谷間だって魅力的なはずよ。でも、それが『垂れている』ことになるとは……

今日は、宇奈月青年の工房に行く予定。世話になるのだからと思って、前日に缶入り水ようかんを一箱買った。缶入りなら日持ちがするし、夏らしいしと思ったのよ。それを見て渡が
「碧、その袋はなんや？」
「これ？　お土産よ。世話になるだから。何か持っていかないと悪いじゃない」
「別に持って行かんでもええんちゃう。世話になるっちゅうことは、心を預けるっちゅうことやから、気を使う必要はあらへんのに」

「あなた、礼儀ってものを知らないの。菓子折りの一つや二つ持っていくのが常識じゃない」
と、少しだけ言葉が荒くなった。この時に、あたしは一線を越えたのよ。あとで後悔したけれど……
「常識とちゃうで」
「なに言っての、日本の常識よ！　外国では違うかもしれないけれどね」
「あ、お前、外国をバカにしとんのか？　まあええわ。　日本の常識かどうか確かめてみようやないか？」
そうアイツは言って、桃姫の方を向いて聞いた。
「桃子さん、碧はあないに言ってるけど、どう思われます？」
「え、あ、あたし？　あたしは持ってこなかったわ」
渡はあたしに向き直って
「ほら、見てみい。桃子さんも持ってこなかったで。どこが日本の常識や！」
「あ！　桃子を巻き込むなんてずるいわよ」
とあたしは、桃姫を巻き込んだアイツに無性に腹がったった。桃姫がとりなそうとする
「あ、あたしはそこまで気が回らなかったのよ。工房でどうするか気になって、そこまで気が回らなかったのよ。碧はえらいわ」
「ほら、桃子だって、言っているじゃない。誰が電車の時刻を調べて、誰がレンタサイクルを手配し、誰がコースを考えたと思ってんのよ！　皆、あたしよ！　あたしがこうしてお土産買ったからみんな丸く収まるのよ」
「おまえ、A型やろ。いちいち細かいことを気にするタイプやな」
「そうよ、あたしはA型よ。まじめなで気配りができるA型がいるから日本は成り立ってんのよ。そういう人がいるから、電車も時刻通り動くし、そういう人がSE（システムエンジニア）になるのよ」
「A型がいるから日本は駄目なんや。日本人に自殺が多いのもA型が追い詰めるからやで。俺みたいなB型が日本に潤いを与えるんや

で」

「違うわよ。B型の不始末の尻拭いをさせられるのがA型。B型がいなければ自殺も減るわよ」

「逆やで、多数派のA型に虐げられているのがB型やで。A型のやり方を押し付けられていい迷惑やわ」

「むむ……」

「むむ……」

あたしとアイツは睨みあい、視線がぶつかった所で火花がパチパチ飛んだ。

「えー、そこまで！　続きは二人だけの時にやってね」

桃姫がぼやを消しにかかるが、種火は残ったままだわ。

駅に着いて、予約していたレンタサイクルを借りた。ところが、困ったことに、かごが小さく水ようかんの箱が入らない。幸い持ってきたワンショルダーバックパックにぎりぎりはいったので、それを背負うことにした。宇奈月さんの工房に何人いるかわからないから、水ようかんは多めに持ってきた。そのせいでかなり重い。アイツは何も言わない。さっきからあたしたちは口をきいていないの。予定したコース、途中で美術館によって工房へ行くコース　を描き入れたマップを二人にわたす。アイツは無言でマップを受け取ると勝手に出発した。それを桃姫が追いかけ。さらにあたしが追いかける。

美術館への坂道をふうふういいながら登る。強い日差しとセミの鳴き声の中で汗がぽたぽた落ちる。

空調の効いた美術館を見て回る。3人とも黙っている。怒りの収まらないあたしは、あっという間に展示室を出てしまった。しょうがないので、自販機でコーヒーを買って、日陰でタバコを一服する。もともと美術に関心がないアイツもさっさと出てきた。自販機で炭

酸を買う。アイツは飲み終わって、扇子で仰ぎながら、口を開きかけた。謝ろうとしているのだわ。でも、こっちは、垂れ乳と評された。しかもA型をバカにした。そう簡単に許す気はなかったから、アイツの視線を外した。そしたら、何も言わなくなった。

お日様がカンカンと照り、セミがうるさく鳴く典型的な暑い夏。その中で、アイツとあたしは夏とは異質の空間を作りだしていた。

美術館を堪能した桃姫がやっと出てきた。

「あんたたち、まだ喧嘩しているの？」

とあきれる。

「別に喧嘩しているわけじゃないわ。大根のように垂れた乳房を陰干ししていたのよ」

とあたしが答えると。渡は、

「そうそう、喧嘩してるわけやないで、A型の執念深さをじっくり鑑賞しとったんや」

と応じる。またもや視線がぶつかり、火花が飛ぶ。

工房では、地味青年（宇奈月貴司）が迎えてくれた。今日は、休日のため、彼しかいない。整頓のゆき届いた工房を案内して回る。土こね、ろくろ、整形、下絵付け、ガス窯、上絵付け、施釉、電気炉と、それぞれの行程（作業場）を紹介していく。

この工房は3人の若者で運営され、組合からもらった仕事で稼ぎながら、創作も行う。今は、来年の干支の試作をしているところ。組合の仕事以外で、唯一稼げる商品だ。昨シーズン、つまり今年の干支はウサギで、ウサギの置物は結構売れたそうだ。

「でも、本当は創作の方で稼げるようになりたいんじゃないの？」

と桃姫がきく。

「ええ、そうなんです。3人が競いあって、創作し、色々な所に出品しています。売れるようになったら、独立しようとしているのですが、今の所、3人ともだめです。一方、干支の置物はもう少し売れれば、工房（うち）のブランドが確立し、経営も安定しそうな所まできま

した」
「つまり、微妙な状況なのね。創作で売れるようになって独立したいと思いながら、その一方で、３人の工房ブランドを盛りたいてたいと」
「ええ、そうです。若いときは土と炎のことだけを考えていれば済むのですが、そのうちパンのことを考えないといけなくなる」
「で、宇奈月さんはどうなの？」
と桃姫が真剣な眼差しを地味青年に向けると
「どうって？」
青年は桃姫の眼光におののく。

「彼女は、貴司君がどのくらいパンのことを考えているかをききたいのよ」
と背後から声が聞こえる。振り返ると、さゆりさんがいた。
「あ！　さゆり姉やないか。びっくりさせんなよ。いつの間に来たんや？」
とアイツが言う。
「今、来たのよ。貴司君、久しぶり」
「ご、ご無沙汰しております。工房に来ていただいたのは、３年ぶりぐらいでしょうか。先ほどの質問ですが、僕はこの工房を取りまとめる立場上、皆の生活のことも考えなくてはいけません。つまり、パンのことを考えています」
「甘いわね。創作で生きたいのなら、なりふり構っていちゃ駄目よ」
さゆりさんは手厳しい。
「僕には僕のやり方があります。もう少し、見ていてください」
地味青年の眼が燃え上がった。
「『皇国の興廃、この一戦にあり』よ」
とさゆりさんが古い一節を持ちだす。
「わかっています」
地味青年が口元を引き締める。

「その『こうこくのこうはい……』ってなんや？　広告会社の後輩は、一銭も無駄にしたらあかんっちゅう意味？」
と、アイツがきく。
「？？」
皆、理解できない。
「そうやないと、先輩社員のようにいい広告は作れへんっちゅう意味？」
と、アイツが自信なさげにきく。
「あはは。ワタ君には、芸術は無理ね。別の才能があるから心配しなくていいけど」
とさゆりさんがなぐさめる。あたしもくすくす笑ってしまった。
「あとで、教えてあげるわよ。渡の才能は、皆を和ませることね。B型も捨てたもんじゃないわ」
あたしはそう言って渡と仲直りした。

土と炎の人（その7）

あたしたち４人は、絵付けを体験することになっていた。作業机の上には、商品になる前の無地の磁器が何種類かと、１０色程の絵の具が置かれていた。腰を下ろして目の前の磁器を一つ一つ手にとってみるが、肝心なことを考えていなかったので途方に暮れる。つまり、何を描くか全く考えていなかった！　電車の時刻表を調べ、地図を調べ、レンタサイクルを手配し、お土産を買うところまでは、考えていたのだけど、その先を考えていなかったわ。

あたしの座っている向こう側に腰を下ろした桃姫は、あらかじめ持ってきたデザインの素案を見ながら丸い大皿を選んだ。絵の具とデザインを交互に見て少し思案したかと思うと、絵筆をとって素案の紙に点々と色を落としていく。配色を考えているのね。

右隣に座った渡は、あたしと同じようにぼうっとしている。それを見た宇奈月青年は、

「あまり難しく考えなくてもいいですよ。夏休みの宿題だと思って、自由に絵を描けばいいんですよ」

と言うと、渡が難しい顔をして応える。

「宿題？　宿題と聞いただけであかんわ」

渡は宿題アレルギーね。

「すいません。宿題と言わない方がよかったですね」

「なんかお手本、例えば、ぬり絵とかありませんか？」

と安直なことを言う。塗り絵だとしたら幼稚園レベルの宿題ね。

「塗り絵ですか。いいことを言いますね。実際、我々の作業は塗り絵そのものですから。型を磁器に転写して、そこに色を載せていくのですよ」

「えー、本当にそんなことしているの？」

とあたしが聞くと

「そうですよ。何百と同じ絵柄の製品を作るのですから、そうでも

しないと同じ物を高い品質で作ることはできません」
「なるほど」
とあたしは納得するが、渡が余計なことを聞く。
「面倒やなぁ。カラーコピー機でできへんの？」
「コピーのように転写することは、できなことはありませんが、邪道です。うちの工房ではやっていません」
と宇奈月青年は毅然と答える。
その時、奇声が聞こえた。『へぇー』　さゆりさんが独り言をつぶやきながら工房内をうろうろしているのだわ。『すごい！』、『これが木の葉天目か』、『なるほどー』、『これは、やりすぎね』とか、わざと聞こえるように大きな声で呟いている。宇奈月青年は開きかけた口を閉じて、さゆりさんのつぶやきに神経を集中している。そして
「ちょっと、待っていてください」
と言ったかと思うと、さゆりさんの後を追いかけ始めた。遠くから彼と彼女の会話が聞こえる。『まあまあね』、『どこが、まあまあなんですか？　何か足りませんか？』……『やっぱり紅志野はかわいいわねぇ』、『かわいいですか？　エレガントには見えませんか？』……『スーラのまねね』、『まねしたつもりはないですが』……『あたしの使っている香華社の方が上品ね』、『そうですか？　口縁の金の縁取りなんかいいと思いません？』……『ここの掻き落とし、わざとらしいわね』、『わざとですから当然ですけれど』……

あたしたちは取り残された。相変わらずぼおっとしている渡を肘でつっつく。
「ねぇ、どうするの？　ここの商品の型紙もらって、そこに塗り絵をするつもり？」
「よう、わかったなぁ」
「わかるわよ、そのぐらい。楽することしか考えていないんでしょ

う？　それじゃ、陶芸にものすごく関心のある青年には見えないわよ！」
「もうばればれやで」
「何がばれているの？」
「つまり、俺は陶芸が好きな男やなくて、ガールフレンドにいやいや付き合わされている男やって」
「いい加減にしてよ！　渡がそう思っていることぐらいお見通しよ。そう思うのは勝手だけど、そう思わせないように振る舞うのが大人じゃないの！　また、怒るわよ！」
「いや、それは堪忍やで。A型が怒ると後引くから」
「今日は、もう怒らないわ……　それよりあたしにいい考えがあるの」
「どんな？」
「つまり、お手本があればいいのよ」
「碧は、今さっき、型紙はあかんちゅうたやないか？」
「型紙じゃないわ。これよ」
そう言って携帯電話を取り出した。
「携帯？」
「そう、携帯の中には自分が撮った写真があるわ。その中にお手本になりそうなものが1枚や2枚あるはずよ」
「なるほどー　でも面倒やな」
「なんなら、渡の携帯から適当な写真を見つくろいましょうか？　渡の携帯、かしてくれる？」
「俺の？　いやや」
と渡は拒否する。そりゃそうよね。携帯にはきわめてプライベートな情報が入っているから、たとえ恋人でも見せられないでしょうね。でも、夫婦なら携帯を見せあいっこするのかしら……　まあ、それはその時考えればいいわ。あたしは、意地悪を言った。
「渡の携帯には、人に見せられないものが入っているの？」
「いや、それはそのう……」

「まさか、『別の女』の裸の写真が入っているんじゃないでしょうね」
「そ、そんなことはあらへんで」
渡の目は一瞬、宙をさまよった。
「ホントに？」
「ああ、絶対や」
「それじゃ、自分で探して」

あたしは、何カ月か前に撮った弁当の写真を選んだ。美少女と一緒に作った弁当の写真だわ。渡は、茶色の湖に浮かぶ家を選んだ。なんでも東南アジア最大の湖で、１００万人もの人が船を家にして、水上で生活しているそうだ。あたしも行ってみたいわ。
「連れて行ってくれる」
と頼むと
「もちろんや」
と頼もしい返事。

おにぎりを描き終え、ミニトマトを描き始めた時に宇奈月青年が戻ってきた。桃姫の紙のデザインを見ている。最初は、二人は穏やかに会話していた。
「いいデザインですね」
「ありがとうございます」
「もう少し青々とした配色はどうでしょう」
「そうですか。落ち着かないような気もしますが」
「青を使うと夏らしくなりますし、このデザインの生き生きとした所、植物の生命力、が表現できますよ」
「えー　植物の生命力ですか？　このデザインは無生物的で、抽象的なものですよ」
「そんなこと、ありませんよ。この線なんかは……　こういう筆のタッチで描けば、青々としげる植物の葉に見えるでしょう」

だんだんと二人のトーンが上がってくる。
「それは、おかしいわ。ここの線は……　こう。こういう感じがいいわ」
「そのタッチだと、折角のデザインが台無しですよ。やっぱり夏らしくした方がよくありませんか？」
「季節は関係ないわ。しいて言えば冬よ。真っ白な雪を背景に、散在した枯れ木がつくる不思議な模様。そしてそこに太陽の烙印が押されていく。だから、ここは黒か茶色、で、ここは、黄色。そうね、赤をアクセントに少しいれてもいいかもしれない」
「そうですか、どうやら、配色に関しては意見が合わないようですね」
と宇奈月青年はため息をつく。桃姫は、ため息を聞き逃さなかった。
「宇奈月さんは、あたしの配色がお気に召さないようね。何なら勝負しましょうか？」
「勝負？　あなたと私が勝負ですか？　アマとプロが勝負ですか？」
「そうよ。勝負が怖いの？」
「いいえ。勝負は展示会で慣れていますから。それより、桃子さんにいやな思いをさせたくないのですが……」
「あ、あなた、今、あたしをバカにしたわね。あたしが負けるのが当然と思っているのでしょう。こうなったら、絶対、勝負よ！」
と桃姫が興奮する。
「いやそんなことを言ったつもりではないんですが……」
桃姫が怖い眼で青年を睨んでいる。
「しかたありません。この勝負受けて立ちます」
と宇奈月青年があきらめる。

あたしは、卵焼きを描き始めた。そこへさゆりさんが戻ってきた。
「あ、面白そうね」
「面白くはないですよ」
と青年が答える。

「あたしも入れて！」
「ええー　さゆりさんも加わるんですか？」
「そうよ。えーと、ルールは？」
「配色の勝負ですから……　ルールは桃子さんのデザインを使うこと。それから、この皿を使うこと。それから……　ここに並べた絵具を使うこと……　ぐらいでしょうか」
「いいわ。配色の勝負ね」
とさゆりさんは楽しそう。
「面白いことになってきたわ。手加減なしよ。はい、これが予備の紙」
と桃姫がデザインを印刷した紙を宇奈月さんとさゆりさんに渡す。
宇奈月青年は桃姫から一番遠い椅子に腰をおろすと、青い絵の具のついた絵筆を握った。しばらく、筆とデザインを交互に見ていたけれど、皿に描き始めた。その時、彼の眼は、田舎者の純朴な目から、職人の妥協を許さない眼に変わった。
さゆりさんはどこかへ出て行った。

あたしはピーマンの挽肉詰めを描き始めた。そこへさゆりさんが戻ってきた。
「あ、貴司君。冷蔵庫にストックされていた水ようかんもらったわよ。『腹がへっては戦はできぬ』って言うしね」
「あのー　多分、その水ようかんは、あたしがお土産に持ってきたものだと思います」
「碧ちゃんが？」
「ええ」
「気を使わなくてもいいのに。でも、おいしかったわ。ごちそうさま。さて、あたしも戦に参加するか」
そう言って、桃姫と宇奈月青年の間に座った。しばらく宙をにらんでら、描き始めた。その時、彼女の眼は、詩人の眼からいたずら少年の眼に変わった。

あたしは、たこウィンナーを描き始めた。レースの方は先行する桃姫が、じっくり慎重に筆を運ぶ。それを、慣れた手付きの宇奈月青年が追いかける。大幅に出遅れたさゆりさんは無駄な動きが全くない筆運び。隣の渡は、何をしているかと思ったら、鼻毛を抜いている。

「ちょっちょっと。渡、何やってんの？」

「え？」

「恥ずかしいからやめてよ」

「何？　何を？」

「その、鼻毛！」

と小声でささやく。

「碧が恥ずかしがることあらへんやないか？」

「恥ずかしいわよ。一応、あなたの恋人なんだから」

「ふーん。そんなもんかなぁ」

「とにかく洗面所行って！」

とティッシュを持たせて、洗面所に送りだした。

あたしは、煮豆を描き始めた。戻ってきた渡は相変わらずぼーっとしている。まだ、絵付けは途中だ。

「どうしたの。もう飽きたの？」

「いや、考えているんや」

「何を？」

「いや、そのー　ワニの指は5本で良かったかどうか？」

「そんなの5本に決まっているじゃ……　5本じゃなかったけ……　どうでもいいじゃない！　5本で描きなさい！」

「はいはい、わかりました碧様」

「よろしい。ところで、なんで湖にワニがいるの？　危ないじゃない」

「ワニを飼っているんや。つまり、養殖。養殖して肉は食べて、皮

は売るんや」
「わお。本当？」
「ほんとうや」
「やっぱり、あたし、そこには行きたくないわ」
とあたしは前言を翻した。

あたしがオレンジを2切れ描き始めた時、さゆりさんが叫んだ
「終わったわ。あたしが一番よ」
「え、もう終わったんですか？　ちなみに、速さの勝負じゃなくて、配色のよさの勝負ですから、一番に終わったからといって、勝ったわけじゃありませんよ」
と青年が諭す。
「え、そう？　そうだったわ。まあいいわ」
とおおらかなさゆりさんの答え。隣の渡が叫ぶ。
「やった。2番。2番やで」
「もう、渡は競争の中には入っていないのよ」
「あ、あーそう」
としょんぼり。それからは、立て続けに、宇奈月青年、あたし、桃姫という順に終わる。

土と炎の人（その8）

あたしたちは作品を机に並べた。丸い大皿が3つ。同じデザインを元にしているが印象は全く違う。抽象画を思わせるもの、伝統的な和の様式、そして小人が踊っているような絵。その横に渡の水上生活の絵。ワニが愛嬌を添えている。最後にあたしの弁当の絵。自慢じゃないけれど3m先から見れば、本物の弁当に見える。

さゆりさんが評する。

「ワタ君の絵、なかなか好いわね。よく言えばカンディンスキーね。悪く言えば幼稚な絵かしら」

「その『漢字が好きー』ってどういう意味？」

とまた、渡が余計なことを聞く。だんだん、あたしは恥ずかしくなってきた。

「『漢字が好き』ではなくて、カンディンスキー。抽象画の画家の名前よ」

とさゆりさんが教える。

「碧ちゃんのは、本当においしそうね」

「でも、それやと、食べ物を盛る時に邪魔になるやないか？」

と渡が鋭い指摘をする。なるほど、それは考えていなかったわ。卵焼きの絵を背景に本物の卵焼きを置くのは変だわ。失敗かしら……

「それは、心配しなくていいですよ。飾り皿として本棚にでも飾って置けばいいのですから。これなら、立派な飾り皿ですよ」

と宇奈月青年が誉めてくれた。あたしはほっとした。

「ところで、勝負の方はどうしましょう。2つほど問題がありますが」

と青年が言うと、桃姫が

「どこが問題なの？」

と聞く。

「一つは、焼成する必要があります。そうやって本当の色が出ます。今の色は仮の色ですから、配色の勝負は、きちんと出来上がってからになります。そうですね。週明けに焼成するとして、今度の週末以降でしょうか」
「それは、しょうがないわね」
「もう一つの問題は、誰が判断するのか。つまり誰が勝敗を決める審判となるかです？」
うーん。確かにそれは問題だわ。年長でプロのさゆりさんが審判になるのが良かったけれど、彼女自身が選手だから……　と考えていると渡が恥ずかしいことを言う。
「あ、お、俺はでけへんで。審判なんかでけへんで」
「だれも渡に審判なんか期待してないわよ」
とあたしは小声で諭す。さゆりさんが切り出した。
「私に考えがあるわ。２週間後に銀座で個展をやることになっているの。私の絵の展示会よ。その後、皆で集まらない？　銀座なら皆集まりやすいでしょう。審判は、心当たりの人がいるから、頼んでみるわ」
「いいでしょう」
「あたしもそれでいいわ」
と他の二人が同意する。
「それじゃー、２週間後に会場で。終わったら、皆で飲みに行きましょう。あ、貴司君、出来上がったら、会場宛てに宅配便であらかじめ送っておいてくれない？」

その日、あたしは、渡との距離をすこし縮められた気がした。一方、桃姫と青年の距離は縮まらなかった。『勝負』とか言いだす前は、結構いい雰囲気だったんだけれど。またみんなで会うし、なるようになるでしょう。

２週間後の日曜日夕方、待ち合わせ場所の銀座の画廊に一人で向

かう。本当は、昼間、渡とデートしたかったのだけど、都合が合わない。転職先の旅行社は休日も忙しいらしい。あたしの方も今年の夏はさんざんだったわ。社外でのプロジェクト、急ぎの仕事が幾つかと、名古屋での法事が2件。ママの方のばあちゃんの三回忌と、パパの方のじいちゃんの新盆、それで夏休みはなくなった。結局、渡とつき合いだして1カ月と少し、数えるほどしかデートはしていない。夏の恋は激しく燃え上がるんじゃなかったっけ。それは若い時だけ？　あーあたしの28歳の夏が終わる。

もっと積極的に攻めないのと駄目なのかしら。念のため勝負下着を身につけてきたけれど、今晩もあまり期待できないわね。明日は月曜日だし、台風も来ているし。

そんなことを考えていたので、画廊に着いた時、少し憂鬱な気分だった。入口に貼り紙がしてある。『八丈さゆり個展　ー展示即売会ー』と書かれている。個展終了までにはまだ30分ほどある。受付で記名して絵を見ていく。

展示即売会なので、『売約済み』の札が半分ほどにかかっている。ほとんどは人物画。いろいろな場面があるけれど、車の組立工、ウェイター、バスの運転手、働く人が多い。『現代社会で生き生き働く人々』とでも表現できそうな主題があるようね。ろくろを回している少年は秀逸だ。顔は見えないのだけれど、手には緊張感、背中には高揚感が漂っている。パソコンに向かう女性には笑ってしまった。メガネをかけてすこし猫背で、口を尖らせながら画面に見入っている。まるで、コンピューターと喧嘩しているみたい。あれ？これって私？　絵の中のメガネがあたしのと似ている。髪型も少しウェーブがかかっている所は似ている。念のためと思って、ワンショルダーバックから手鏡を取り出して、鏡の中の髪型と絵の中の髪型を比較してみる。ほとんどぴったり一致する。唯一一致しないのは、おでこの所の髪の分け方。左から右にかけて七三に分けているのが、絵とあたしで逆になっている。ということはモデルはわたし

じゃない？

「よ、碧、元気？」

渡が後ろから声をかけてきた。ちょっとびっくりした。

「元気かって、あんまり元気じゃないわ。でもこの絵を見ていると、笑えて元気が出そう」

「ふーん。なるほど、ちゃかり碧をモデルにしたんやな」

「あ、あたしがモデル？」

「一目瞭然やで。特にこのちいと怒った時の表情、そっくりやで」

「でも髪型はあたしと少し違うわよ」

「髪型？　髪型も同じやで」

「だけど、前髪の分け方がちょっと違うでしょう。ほら、この絵とこの鏡の中の私と……　も、もしかして鏡ということは……　絵の方が正しくて、鏡の方は逆？　そうか、鏡だと左右がひっくり返るから……　やっぱり、あたしがモデルかぁ」

「なに、ぶつぶつ言ってるんや。それよりこの碧の絵、売約済みになってるで」

「ええ！　だ、誰が買ったの？」

「お、俺やないで。そ、そんな怖い顔すんなや」

「財布の中に千円も持っていない渡が買えるわけないでしょう。一体どんな人が買ったのかしら？」

「ＩＴ企業の社長さんよ」

とさゆりさんの声。振り返ると、ゆったりした服を着たさゆりさんが立っていた。

「随分気にいって、会社の玄関ホールの目立つ所に飾りたいとおっしゃっていたわ。社員が元気になれそうだって誉めてくれたわ。これも碧ちゃんのおかげね」

はあ、嬉しいような嬉しくないような。さゆりさんの話では、働く人の絵はちょっとお金のある中小企業の社長さんに人気があるそう

だ。見ていると元気が出る絵、見ている人の心が明るくなる絵を描くのが好み。客の依頼通りに描く依頼制作はお金になるけれど、自分の描きたいように描けないから、めったに依頼は受けないらしい。売れなくてもいいと思うものを描き続けるのが大事だそうだ。利益ありきの会社とは全く違う世界ね。

画廊を一通りめぐった最後のコーナーには、見覚えのある3枚の皿が飾ってある。『非売品。気に入ったものがあれば、上の瓶に飴を一つ入れてください』と小さな字で書かれてある。ガラスの器に盛られた飴玉を、皿のそばに置かれた缶の中に入れていくのだわ。

「この3日間に来たお客さんが投票したのよ。あなたたちも投票していいわよ」

とさゆりさんが言う。

「飴玉使って投票するんか。勝てば飴玉を仰山もらえるわけや。俺も参加しとったら良かったなぁ」

はぁー　やっぱり、渡のそばにいると恥ずかしいわ。

「あたしが、たくさん買ってあげるから落ち込まないで」

まるで子供をあやすように言葉をかける。

「そうか、やっぱ碧はええ女や」

あやすだけでいい女になれるの？　あたしの方が落ち込みそう。

「1、2、3、……」

あたしは数をゆっくり数える。さゆりさん、宇奈月さん、桃姫が、各自の瓶に入った飴玉を一つ一つ取り出していく。要するに運動会の玉入れの数え方と同じだわ。

「9、10、11、……」

「お、さゆり姉、もう少しやで」

「ワタ君、黙ってて。そば屋じゃないんだから」

「そば屋？」

「……、16、17」

「１７でおしまいです」
とさゆりさんが最初に上がる。
「１８、１９、２０、……」
「２４で、あたしはとりあえずおしまいよ」
と桃姫が言う。
「とりあえず？」
「……、２５、２６、２７、…、３２、３３」
「３３です。僕は３３です」
と宇奈月青年のハスキーボイスがすこしだけ勝ち誇った。
「ということは、宇奈月さんが優勝ね」
とあたしが言うと、さゆりさんが異議を唱える。
「とりあえず、貴司君が優勝は優勝なんだけれど、桃子さんの所に名刺が入っていたでしょう」
「これね」
「そう、読んでみて」
「名前は、飛島洋平。肩書は川治商事社長秘書室長」
と桃姫が名刺を読みあげる。
「川治商事って言えば、業界５指に入る総合商社じゃない」
とあたしが言う。
「手書きの字も読んで」
とさゆりさんがうながす。桃姫はゆっくり読む。
「初めまして、飛島です。貴殿の作品を是非ともお譲りいただきたく、ご一報いただければ幸いです。失礼ですが、１２万円の値段をつけさせていただきました」
「１２万！　そんなにするんかー　俺のもそのぐらいするんやろうか？」
と渡が余計なことを言う。あたしは小声で渡に言った。
「するわけないでしょう。渡やあたしの作品は、材料費込みで１万円もしないわよ。とにかく黙っていて」
さゆりさんが説明をする。

「まあ、一種のオークションね。美術品の値段はあってないようなもの。材料費にもならないぐらいの値段がつくこともあれば、こんな風に高い値段がつくこともある。１２万円というのは、この名刺の人が適切な対価と考える値段よ」
「１２万円ですか、すごいですね。私の完敗です」
と宇奈月青年がうなだれる。
「１２万円って、すごいの？」
とあたしが聞くと、宇奈月青年は
「作品をたまにオークションに出すんですけれど、これまでの私の作品の最高の値段は１１万円でした。それをアマの桃子さんにあっさり破られるとは……　桃子さん！　この作品、私に譲っていただけませんか？　もっといい値段をつけますから」
と興奮する。桃子が
「どうして譲ってほしいの？　さっきまでは、自分の作品に自信たっぷりだったじゃない」
と聞く。
「これを枕元に飾って臥薪嘗胆（がしんしょうたん）としたいのです」
渡が口を開きかけたので、あたしは手でふさいだ。
「臥薪嘗胆ねぇー　いいわよ。でも、お金では売れないわ」
と桃子が返答する。
「お金やないとすると、もしかして、か……」
あたしは、また、渡の口を手でふさいだ。
「宇奈月さんのこの皿と交換ならいいわ」
と桃子が条件をつける。
「交換ですか？　僕はそれでいいですが、本当に交換でいいのですか？」
「あなたが売れるようになったら、価値が出るじゃない」
「決まりね。じゃ、片づけて、皆で飲みに行きましょう」
とさゆりさんがまとめた。

あたしたちは絵付けの皿5枚と、松島さんの所で成形し工房で施釉・焼成してもらった器2つを肴に、日本酒を味わった。あたしの絵付け弁当を見ながら渡が言った。

「ほんまの碧の弁当が食べたいわ。今度作ってくれへん?」

「お昼の弁当?」

「もちろん、昼や」

「……それって、平日の昼? それとも休日の昼?」

「平日用と休日用で違うんか?」

「内容も違うけれど…… 作り方が違うわ」

「どっちでもええよ」

はぁー やっぱり渡には通じないわね。弁当を朝作るという条件を課すと、平日用なら平日の朝、休日用なら休日の朝に作ることになる。平日は仕事があるので、いちいち昼に渡の職場まで届けるのは無理。ということは、平日の場合は、朝弁当を渡すことになる。つまり、どちらかの家にお泊りをして、弁当作って朝ごはんを一緒に食べて、一緒に出勤するということ。一方、休日用の典型はピクニックね。ピクニックでなくても、お昼にデートしてそこで食べればいい。

「それじゃー 近いうちに休日用を作るから期待してね」

と答えた。

ほどほどに飲んだあたしは、渡の頬におやすみのキスをして帰った。明日は月曜日。仕事だ! あの地味青年は、毎朝、桃姫の作品を見ながら雪辱を期すのだろうか。だとしたら、心穏やかな日がなくて大変ね…… あたしも頑張るわ。仕事も! 恋も!

橋を架ける女と橋を壊す女（その1）

やっぱり、おかしい。キューピー課長（霧島課長）の様子が変だ。先週と同じパターンだ。

金曜日午前中、クライアントのメーカーとの打ち合わせがあった。先方の会議室に5名集まった。黒川工房からは、課長とあたしの2名、先方は営業1名を入れて3名。あたしたちが営業の人と打ち合わせするのは珍しいのだけれど、今回はユーザーインターフェースの仕様をチェックしてもらった。ユーザーインタフェースといっても様々なレベルがある。ユーザー側の機能についてはすでに決まっており、各スイッチ、ダイヤル、メーターの決定が今回の目的。例えば、電源スイッチ一つとっても、押しボタンスイッチ、スライドスイッチ、シーソースイッチ、トグルスイッチ、ランプ付など様々なものがある。もちろん、うちが担当するのは組込モジュールなので、他の部分に合わせて自然に決まってしまうスイッチ類もある。そうでないものについても、定格が満たされて見た目が良ければいいわけではないわ。耐久性、これが大事。経験的には押しボタンスイッチは何年も使用していると不具合が起きることが多い気がする。多分、押すという操作が乱暴になりがちだからだと思うわ。

あたしが好きなスイッチはトグルスイッチ。それも操作棒が銀色のやつ。1，２ｃｍの細い銀色の棒を上下に倒すことでＯＮになったり、ＯＦＦになったりする。中には上中下の3つのポジションがあるものもある。なんとなくレトロで機械らしい所が好きな理由かしら。直立したかわいい銀色の棒は、ちっちゃな男性器みたいね。艶めかしさでピカ一なのはシーソースイッチ。昔の電灯のスイッチは大抵これだわ。谷間を人差し指で探り当てて上あるいは下になぞるように押す。この動作が何ともいやらしいのだけど、そう感じるあたしは異常かしら。是非とも使ってみたいと思いつつ、その機会

に恵まれないのがピアノスイッチ。１　ｃｍぐらいの小さな小さなスイッチなのだけれど、その中に鍵盤のようなスイッチが並んでいる。女の子なら絶対かわいいと思うはずだわ。とにかく、迷いだすとキリがないくらい多種多様なスイッチがある。

今回の仕事では、スイッチやダイヤルを楽しむ余地はほとんどない。クライアントの意向（趣味）で選んでいった。特にもめることもなく、予定より早く打ち合わせは終わった。クライアントの入った高層ビルを出た時はお昼少し前だったわ。課長はいつものパソコンバッグ。あたしは、捻挫して以来愛用しているワンショルダーバッグと丈夫な紙袋。打ち合わせではほとんど使わなかったリングファイルが３冊入っていて結構重い。黒川（うち）電子工房のいい所は男女平等な所だけど、目上の課長はもちろん、後輩のゴーストさとる君でさえ、女のあたしが重い荷物を抱えていても気にしない。この時も、うちはつくづく『いい会社』だと思った。

さて、社に直帰するにはもったいない時間だけれど、今日はどうするのかしら。

「課長、もうすぐお昼ですけど、今日もお弁当ですか？」

「いや」

「それじゃ、どこかでお昼にしましょうよ。この辺に新しいレストラン街があったと思うのですけれど」

あたしは、お腹をすかした子犬のような眼でキューピー課長を見つめた。

「あ、悪い。碧ちゃん、一人で食べてくれる。私はちょっと用事があるから。それじゃね」

あたしの眼を見ないでそう言ったかと思うと、課長は社に帰るのとは反対方向へ歩き始めた。先週と同じパターンだ。おかしい！

先週の金曜日も同じクライアントと打ち合わせをして、やはり昼前に終わった。そして、その時も、今とほとんど同じ会話をしたのよ。

あたしは社に直帰したけど、課長が社に戻ってきたのは、確か、３

時ごろだったかしら。社に戻る時間を差し引いても2時間以上どこかで何かをしていたことになる。お昼を食べるには、十分すぎるほどの時間だわ。一体何をしていたのかしら？　そして、今日もどこかに行こうとしている。野獣のあたしが吠える。『なにかある！絶対に、何か人に言えなことがある』

あたしは、課長の後方１０　mを歩くことにした。つまり、尾行。久しぶりに神様の視線を感じる。やっぱりやめた方がいいかしら。

課長は、誰かに電話しながら地下鉄の駅へ降りていく。ホームをズンズン歩いていく。ホームの端に到着した時に左から車両が入ってくる。そばの車両、つまり先頭車両に乗り込む。あたしは、２両目に乗る。程々に混雑した車内の向こうに、課長の薄い頭がちらちら見える。あたしは、重い紙袋を床におろして、左９０度に課長を置いて観察。課長は２駅目で降りる。あたしも慌てて降りる。駅は結構混雑していたわ。重い紙袋を左手に持ち替えた一瞬、前方不注意となった。そして何かにぶつかった。

紙袋は床に投げ出され中身が床へ滑り出た。０．３秒で、リングファイルが２冊、多色ボールペンが１本、緑色のＵＳＢメモリー１個が１　m四方に散らばったことを確認し、さらにその向こう側に私のものではないノートやリングファイルやコンパス等が散らばっているのを認識した。次の０．２秒で、どうやらあたしは若い女性とぶつかったらしいことに気がつき

「すいません」

と謝ったら、その声がユニゾンになった。ちょっと驚いて、相手の顔をじっくり見たいと思ったけれど、まずは、わが社の無形資産の安全確保を最優先にして、散らばったものを元の紙袋に入れていく。特に緑色のＵＳＢは重要。前に、あたしの手を離れて線路まで旅をした前科があるから要注意だわ。ぶつかった相手も同じことをして

いる。ようやく顔あげてみると、女の子というには、ちょっと無理がある女性がいた。繊細な指、まじめそうな服装、緊張した眼、実務的な髪型。ぶつかったのが変な人でなくてホッとする。

「さっきは、ごめんなさい」

と先手を取られる。

「あ、あたしの方こそごめんなさい。慌てていたもので……」

そして、2秒間無言で見つめ合う。どこかで見たような顔……

「どこかでお会いしたことありませんか？」

「あたしも、そのように思います……　差支えなければお名前を教えていただけますか？　私は塩原、旧姓、水上と申します」

「……　私の名前は入来（いりき）です……」

いりき？　知り合いではない気がする。念ために聞いておく

「あのー　いりきさんとおっしゃるのですか？　どのような字を書くのでしょう？」

「入るに、来る、と書いて入来（いりき）です」

「お会いしたことはないと思われます」

あたしは、はっきり判断した。先方も同じ結論に達したみたい。

「失礼しました」

「こちらこそ、失礼しました」

彼女は、あたしと同じように紙袋いっぱいの書類を抱えて行ってしまった。

それにしても、なぜ、『どこかで見たような顔』と思ったのかしら。あたしだけならまだしも、向こうも同じことを考えていたなんて……　それが入来美帆（いりきみほ）との出会いだった。

しまった、課長を尾行していたのだったわ。周りを見回しても見あたらない。先頭車両にわざわざ乗りこんだのだから、こちらの出口、長い長いエスカレーターのある出口を使ったのは間違いないわ。改札をでると、出口は、左右に分かれる。右は閑静なオフィス街。もしかしたら秋葉原まで歩く？　それはないわね。秋葉原が目的な

ら、あたしと別れた所から、この地下鉄を使うはずはないわ。左はちょっとした駅ビルでレストランも入っている。適当な待ち合わせ場所もあったと思うし、ＪＲの駅もある。ＪＲ？　ＪＲに乗り換えた？　その可能性は低いわね。やっぱり、この地下鉄を使うはずがない。とりあえず、駅ビルまで行ってみよう。改札を出て徒歩１分もしないで、駅ビルの中心、吹き抜けに来た。ここに来るのは久しぶりね。学生の頃以来かしら。ここから先は、若者の街、課長には似合わない街。南、西、北どちらに行った可能性もあるわ。尾行もここまでね。しょうがない、帰りますか。

「呼びだしたみたいで申しわけないね」

右手３　ｍ先の至近距離で課長の声がした。あたしは飛び上がりそうになるのをぎりぎりの所で抑えた。ここで、課長に見つかったら、どうなるかわかったもんじゃないわ。横目でそろりと課長を探す。

「そんなことないわ。すぐ近くだし、丁度お昼だし……」

課長の背中が見える。その向こうに夏をまとった女性がいる。つばの広い帽子、白のワンピース、柄は緑の草と、紫の花、白いサンダル、、白い日傘、そして気品のある顔。これで、サングラスをかけていたらお忍びのセレブという言葉がぴったりくる。

「行こうか？」

「ええ」

最低限の言葉数でも十分意思疎通ができるほどの仲ということ？　あたしは凍りついたまま。息すらできない。二人は前方の階段を上って、ビルの外へ消えた。背中が汗で貼りつく。深呼吸をした……

これが通称『Ｂ子』との一回目の遭遇だったわ。

一体あの女性はだれ？　以前見かけた課長の奥さんはもっと小柄だったから、奥さんではないわね。どういうこと？　先週もあの女性と会っていたということ？　もしかして不倫？　あたしの左脳は『？』で埋めつくされた。

橋を架ける女と橋を壊す女（その2）

課長を尾行したのは、『女の勘』が働いたのだけが理由ではないわ。二つの予兆があったのよ。

もう何カ月も前、そう、梅雨の間の晴れ間。いつものように屋上で課長とお昼を食べていたの。相変わらずお互いに背を向けて、時々ポツリポツリと会話していた。その日、課長は左薬指の結婚指輪を外していた。前日までは気がつかなかったから、その日から外したのだと思う。指輪があった所にははっきりとわかる跡がついている。

「課長、結婚指輪はどうされたんですか」

「ああ、これ？」

そう言って指輪の跡を右手の人差指と親指でつまむ。まるで指輪があるかのように。

「外すことにしたんだ。前から家では外していたのだけど、外でも外すことにした」

「どうして？」

「どうしてって、やっぱり指が太くなってきたからねぇ。認めたくないけれど、指まで太ってきた。それが一つの理由」

そう言って、指輪の跡をさする。

「一つってことは、他にも理由があるんですか？」

課長は直接答えずに昔の話を始めた

「……　結婚指輪を最初にはめた時、実は、結構嬉しかったんだよ。僕らの世代の男は、指輪なんて恥ずかしいと思っているヤツが大半なんだけれど、僕は内心、結婚指輪が嬉しくて仕方なかったんだ」

「当たり前じゃないの」

「そう言われると身も蓋もないじゃないか。まあ、少しは話を聞いてくれ。結婚指輪は、本人が独身ではなく既婚であることを対外的

に公言するけれど、もう一つ隠れた役割がある」
「というと？」
「お互いがお揃いの指輪をすることによって、パートナーであるという意識が共有される。極端に言うなら、指輪は一種の通信装置になっていて、身につけている限り絶えず愛情信号を双方向に伝えている。いわば、心と心を直接つなぐ橋のようなものさ。そう思わない？」
そう思うけれど、こっちの方が本来の役割のような気がする。
「結婚当初は、自分の心と妻の心がつながっているかと思うと嬉しくて仕方なかった。でも、指輪の通信機能は指輪を外すと機能しない」
「ということは、課長の場合どうなるんですか？」
と尋ねるが、はぐらかされる。
「結婚指輪は、お互いの関係を保つための重要なアイテムだけれど、結婚を維持するための必要条件でも十分条件でもない」
「？？」
「つまり、指輪をしていれば結婚が維持できるわけではないし、結婚を維持していれば指輪を必ずするわけでもない」
「ということは、課長の場合どうなるんですか？」
さっきと同じ質問をする。
「必要条件でも十分条件でもないということさ」
課長はそれ以上何も言わなかった。

もうひとつの予兆は夏休みにやってきた課長の娘、早由美ちゃんの情報。お昼にふらっとやってきて、ランチをおごらされた。どうやら、あたしはこの子に気に入られたみたい。どこが気に入ったのか全くわからないけれど。お昼を食べながら、クラスメートの女友達、男子の話、テレビで話題のイケメン俳優の話を一方的に聞かされる。あたしはクラスメートは当然知らないし、テレビは見ないので、イケメン俳優もチンプンカンプン。テレビは嫌いじゃないけれ

どニュースの残酷さには耐えられないのよ。
　最後のコーヒーを飲みながら、早由美ちゃんはトーンを落として話し出した。これが本当に聞いてもらいたかったことらしい。
「最近、ママとパパが喧嘩しないの」
「いいじゃない」
「それが、不気味なのよ。前は、『もっと早由美に勉強させなきゃだめじゃないか』『そんなこと言うならパパが勉強を見れば』とか『ゴミ出しぐらいしてくれたっていいじゃない』『ママの方が朝が早いんだからそのぐらいやっていけよ』とか、そうやって喧嘩が始まって、ひどい時は週末まで口を利かないこともあったわ」
「あはは」
早由美ちゃんの声色は妙にリアルで笑ってしまった。
「ところが、最近はこうなのよ。『もうすこし早由美に勉強してもらいたいもんだ』『そうね、自覚してくれるといいのだけれど』とか、『明日は出勤が早くて、生ごみの封をする前に出なきゃいけないの』『了解。僕がやっておくよ』という具合に会話がすぐ終わってしまうの」
「別におかしくないじゃない。ママもパパも大人になったってことよ」
「そうかしら？　ものわかりのいい大人ってのとは、ちょっと違う気がするの。ほら、夫婦って欲深いじゃない。独占欲、専有欲って言うのかしら、『俺のものは俺のもの、お前のものも俺のもの』、『あなたにとって女は私一人。他の女に手を出すのは百年早いわ』、そんな感じがあるじゃない。でも最近のママとパパは、専有欲が薄くなっているように見える。密な夫婦関係から、関係の疎な同居人に変わったように見えるのよ」
あたしは彼女の観察眼と達観に驚愕した。美少女って早熟って言うけれど、彼女の場合は、熟すを通りすぎて枯れてきているわ。
「ねぇ、深読みしすぎよ。二人は結婚してもう十年以上よ。いい加減、慣れてきたんじゃないの。これからあの二人は熟していくのよ」

「そんなものかしら」
「そんなものよ、大人は」

あの時、半分、自分に言い聞かせながら早由美ちゃんを説得したの。でも、今日尾行して2次元ではない実体のある女性を確認した。やっぱり、早由美ちゃんの読み通りだったのかもしれない。結婚指輪をしなくなったのも傍証の一つだわ。でも、女性が実在したからと言って、それがやましい関係を意味するわけではない。プログラミングで言えば、ｗａｒｎｉｎｇ警告レベルかしら。つまり、今後の動静に要注意ということ。当然、女性の名前はわからない。そう言えば、課長の奥さんも名前も知らないわ。奥さんが『A子』だとすると、あの女性は『B子』ね。

社に直帰したあたしは、最近見つけたクリームメロンパンをほおばりながら、そんなことを考えていた。元々、クリームパンも、メロンパンも好物なのだけれど、その両方のいい所を1個のパンに凝集させたのがクリームメロンパンだ。よくメロンクリームパンと間違う人がいるそうだけれど、これは、クリームメロンパン。これが、信じられないくらいおいしい。つくづく生きていてよかったと思う。

『プロジェクトB子』の作戦は後で考えるとして、午前中にもらった宿題をさっさと片付けてしまわないと。明日は渡と映画をみて、公園でお弁当を食べることになっている。休日を心おきなく楽しむためにも今日のうちに片付けてしまいたいわ。

紙袋に放り込んであった緑色のＵＳＢメモリーを8コアの社機に突っ込む。

『さあブンブン回すぞ……』

『あれ？　なにか変』

『フォルダーが一つしかない！？』

メモリーにはクライアントの社名のフォルダーを置いてあったはず。だから、約１０社分、つまり約１０個のフォルダーをＵＳＢメモリ

ーのトップに置いていた。それが今は1個しかない。他は消してしまった？　それとも間違えて一つのフォルダーの下に他のフォルダーを移動した？？？　あたしはフォルダー名を読んで目が点になった。

『八王子工区第三橋』？

橋を架ける女と橋を壊す女（その3）

『八王子工区第三橋』？

フォルダーを開いてみると、あたしの使わない拡張子．ｄｘｆが並ぶ。ＣＡＤファイルね。念のため、ＵＳＢメモリーを引きぬいて、手に取ってみてみる。色は同じ緑色、それ以上の違いは……　そう言えばあたしのものは８　ＧＢｙｔｅだったはず。でもこれは、１６　ＧＢｙｔｅと書いてある。やっぱり、これはあたしのＵＳＢメモリーじゃないわ。それじゃ、あたしのメモリーはどこ？　紙袋をひっくり返し、リングファイルをさかさまにして、資料をぱらぱらやってみるが、資料の間には何も挟まっていない。だんだん顔が蒼くなっていくのがわかる。ワンショルダーバックの中、ポケットの中、メガネケースの中、財布の中、右足のローヒールの中、左足のローヒールの中、どこにもない！　左脳が状況を整理する。

『ここにあるメモリーは誰か知らない人のもの』

『あたしのメモリーはどこにもない』

『午前中、打ち合わせが終わった時に、さっさと出て行く課長を追っかけようと思って、メモリーを紙袋に入れたのが最後の消息』

『いや、その後に、駅で紙袋の中身が床に散らばった時が最後ね』

『もしかしたら、あの時に回収したのは、私のではなく、このメモリーだった？』

『とすると、あたしのメモリーは、ホームに転がったまま？』

『いや、多分、ぶつかった女性がひろったに違いないわ』

『つまり、あの時、メモリーがすり替わった』

『だとすると……』

ゴーストさとる君がいきなり話しかけてきた

「先輩、先輩！」

「え？」
「さっきから呼んでいるんですけど」
「あ、ごめん。気がつかなかったわ」
「頭、おかしくありません？　この暑さで熱暴走したんじゃないですか？」
「あ、頭？　熱暴走？　な、何ともないけれど」
「何ともないはずありませんよ」
「どうして？」
「だって、ほら、右手と左手」
「右手？　左手？」
右手には件のメモリー、左手には、左足のローヒール。ローヒール!?
「あはは。へ、へんよねぇ」
桃姫があたしのおでこを触った。
「熱はないようね。でも顔色が悪いし、脂汗で化粧が落ちかかっているわ。何かあったの？」

簡単に解決できそうな問題でないことは明らかだった。メモリーがすり替わった経緯を説明する。もちろん、尾行したこと、B子を見つけたことは黙っていた。

「バックアップもあるし、社としての損害は大したことないですね。問題は、クライアントの内部資料が入っていたことですね」
と課長補佐のゆきさんが冷静に判断する。万が一紛失して情報がネットに漏れれば、うちの信用問題になる。泣きたくなるわ。そう言えば、神様の視線を感じたっけ。罰があたったのね。あーどうしよう。ゆきさんに助けてもらうしかないかー　とゆきさんに視線を向けると。なぜか、にっこりほほ笑んでいる。嘲笑しているわけではない。温かい眼差し。え？　どういうこと？　ゆきさんは見守るっていうこと？　……あたしは、コクリと頷いた。

「みんな！　あたしのために一肌脱いでくれる」
「碧先輩のためなら何でもしますよ」
ゴーストさとる君が真っ先に手をあげる。
「言われなくっても、皆そのつもりですよ」
いつの間にか諏訪さんもいる。
「それじゃ、こき使わせてもらいます。諏訪さん、念ため、駅に電話して、緑色のＵＳＢメモリーが届いていないか確認してくれますか？　桃子、ファイルを解析してくれる。ＣＡＤファイルを開けば、会社名が分かるはずよ。それともしかしたら設計者名……　あれ？　名前はなんだったけ？」
「名前が分かるの？」
「聞いたのよ。でも忘れちゃった。確か入江さん……　じゃなくて、入口さん……　じゃなくて。えーと、えーと……　さとる君、あたしが思い出すのを手伝って。それからプーさん、駅のそばにある建設会社と設計事務所をリストアップして。コンパスを持っていたのと、ＣＡＤファイル、八王子工区第三橋というフォルダー名から考えて、設計に関わっている人だと思うの。そうだ。『八王子工区』に関わっている建設会社をネットで検索して、さっきのリストと照合してくれる。それから他にすべきことは……　」
課長補佐のゆきさんに視線をむけた。
「課長には私から連絡しておきます」
ホントに助かるわ。

「それじゃ、さとる君、あたしが名前を思い出すのを手伝って」
「どうやって手伝えばいいのですか？　僕は何一つ覚えていませんよ。だって碧先輩の頭の中にしかない情報ですから」
「もちろん、そうなんだけれど。あたしにアドバイスをちょうだい。まずは、あたしの言うことを聞いて」
「はいはい」
さとる君はあまり期待していないみたい。

「それでは、始めます。まず、非常に珍しい名前だった」
「それでは、ヒントになりませんね」
「でも、かっこいいというか、なんか数学的な名前だった」
「それもヒントにはなりません」
「最初の文字は『入る』で『いり』と読むの」
「それは大きなヒントですね」
「もう一文字ついていたわ。『入江』さんのような名前で、いりえさんではないの」
「例えば」
「いり、いり……　いりこさん、でもないし……　いりでさん、でもないし……」
「それなら簡単かもしれません。全部試してみればいいのですよ」
「全部？」
「そう全部です。あいうえお順に全部試してみるんですよ」
さとる君は、白紙にあいうえお、を書きだした。
「それじゃ碧先輩、目をつぶってください」
「わかったわ」
「それらしいと思ったら止めてください。いきますよ……　いりあ、いりい、いりう、いりえ、いりお、……　……いりき、」
「それ！　それだわ。思い出した。いりきさん、入来さんよ。入るに来ると書いて入来さんと呼ぶのよ」
「うーん。確かに珍しい名前ですね。でも、数学的な名前ですか？」
「十分、数学的じゃない。とりあえず、入来さんで検索してみて。写真なんかが出てくると最高なんだけれど」
検索してみるが、やはり下の名前がわからないとどうしようもない。
「あ、碧先輩の写真がありますよ。若い時の写真ですね」
「何バカなこと言ってんの。もしかして、あたしの写真を無断でどこかにアップしたとか？」
「まさかー」

そこへ桃姫がやってきた。
「成果は？」
「中ぐらいかしら」
「というと？」
「まず、ファイルは暗号化されていて、パスワードがないと開けないようになっていた」
「ええ！　だとすると何も情報はわからない？」
「そんなことはないわ。そうね、一群のファイル名から、橋の設計、工程管理、構造計算に関わっていることは間違いないわ。ファイルの更新日付が新しいものは、みな構造計算だったわ。ところが、工程管理のファイルはずっと古いよ。不思議だと思わない？」
「不思議？」
あたしには、日付のどこが不思議なのかわからない。
「普通は、設計して、構造計算をして、ゴーサインが出てから作り始めるわ。だから工程管理は、設計、構造計算の後よ」
「とすると」
「変でしょう。おそらく、一番古い工程管理のファイルは2年前だから、そのころから橋を建設を始めたのよ。ところが何か問題があって、構造計算を再度行った」
「なるほどね。素晴らしい推理ね」
「そうでしょう」
「でも、今の問題には役に立ちそうにないわ」
あたしは、少しがっかりした。
「まあね。それから、フォルダーの整理の仕方から、わりと几帳面な性格であることもわかるわ」
「性格がわかってもしょうがないわ。なんとかして暗号を破れかしら？」
「そんな簡単に破れる暗号なら役に立たないじゃない」
「それもそうね。ファイルが開けないとすると情報は引き出せないか……」

「そう思ったんだけれど、ファイルが暗号化されていても、プロパティは見れるのよ」
「プロパティ？　何か書いてあったけ？」
「ファイルの作成者とか、ライセンスの所有者名とかね」
あたしの期待が膨らむ。
「で、何が書いてあったの？　会社名？　作成者名？」
「どちらでもないわ。書いてあったのは課の名前で、『第三設計課』と書かれてあったわ」
「第三設計課？　それじゃ抽象的すぎて情報にならないじゃない」
あたしの期待はしゅるしゅるしゅるとしぼんでいった。
「そんなことないわ」
「？？」
「考えてもみてよ。うちの社には設計課はないわ。図面を描いているのは、うちの課ではあたしだけだし、隣の光機課にはせいぜい３人よ。設計課があって、しかもそれが３つ以上あるってことは、大手も大手、超大手の建設会社よ」
「なるほど！」

あたしたちは、プーさんの一角に行った。プーさんは部屋の四隅の一つを専有しているのだ。
「プーさん。超大手の建設会社よ。ありそう？」
「超大手？　それなら絞り込めるかもしれない。「八王子工区」の方は２年ほど前から作っている高速道路だと思われます。地形図から考えて、橋も何本かありそうですね」
「え、地形図からわかるの？」
「そりゃそうでしょう。等高線と垂直に道路が計画されていれば、よほどの坂道か、橋やトンネルでしょう。高速道路では、勾配のきつい坂は避けようとするので、橋やトンネル以外の部分は等高線に平行にはしる傾向があるはずです。等高線から谷を拾って、等高線と道路が垂直に近ければ、橋だと考えてまず間違いないでしょう」

「プーさん。地形図を見るのが面白いのはわかるんだけれど、今、役に立つ情報はないの？」
「あ、失礼、失礼。ついつい、ハイキングに行った気分になっちゃって。で問題の『八王子工区』ですけれど、ＪＶ、つまり、複数の建設会社で請け負っていて、超大手と言われるのは、この２社です」
「それで？」
「一方、あの駅のそばにオフィスがある建設会社や設計事務所のリストはこれで……　あったあったこの会社、Ｋ社じゃないかなぁ。ＪＶにも入っているし」
「これよ！　Ｋ社第三設計課の入来さんのはずよ」

電話番号を調べて受話器を取ったまでは良かったのだけれど、そこで、固まってしまった。電話は苦手なの。何て言えばいいかを考えてからでないと電話ができない。しかも今回は、ちょっと込み入った状況。最初に自分の名を名乗って、それから、『第三設計課の入来さんをお願いします』と言えばいいのかしら。もし『どのようなご用件でしょうか？』と言われたら、何て言えばいいの？　第一、あのＵＳＢメモリーについては何て説明するの？　『拾った』？、『間違えて持って行ってしまった』？　『盗んだ』わけじゃないけれど、怪しまれないかしら……

「私が電話しますよ。苦手なんでしょ」
諏訪さんが助け舟を出してくれる。甘えたいけれど、そうすれば、いつまでも電話恐怖症は克服できないわ。どうしよう。
「無理しなくていいわよ。碧さんには、まだまだやらきゃいけないことがあるんだし」
あたしは、コクリと頷いて受話器を渡した。

「あ、もしもし。黒川電子工房の諏訪と申します。実は、御社のものと思われる資料が、ある事情で手元にあります。これを持ち主に

お返ししたくお電話しました。持ち主は第三設計課の入来さんとおっしゃる方と思われますが、探していただけませんか？」
「……」
「ええ、そうです」
「……」
「わかりました。お願いします」
諏訪さんが小声でささやく。
「今、第三設計課に聞いてもらっているの」
と言うことは、第三設計課があるのね。諏訪さんは再び受話器に耳を傾ける。
「……」
「そうなんですか」
「……」
「はい、電話番号をおねがいします」
「……」
「復唱します。０４……。ありがとうございます。お手数をおかけしました」
諏訪さんが受話器をおく。
「確かに第三設計課はあって、入来さんという女性が在籍していたのだけれど、今は現場事務所らしいわ。これがその番号よ」
「ほぼ捕まえたわね。それじゃ、今度はあたしに電話させて」

橋を架ける女と橋を壊す女（その４）

あたしは、諏訪さんの電話をまねた。現場事務所の電話のそばには彼女はいないということで、あたしの名前と電話番号を伝えて折り返し電話してもらうことにした。

「もう少しで捕まえられるわ」

待つこと5分。呼び出し音がなって0．2秒で受話器を取って耳を澄ます。

「もしもし、K社の入来と申します。水上さんをお願いしたいのですけれど」

やっと捕まえたわ。

「はい、私が水上です」

「もしかして、お昼に駅でお会いした方でしょうか？」

なんだか、先方の電話が騒音で聞きづらい。向こうは大声でしゃべっている。

「ええ、そうです。あの時は失礼しました」

こちらもつられて大声でしゃべる。

「どういったご用件でしょうか？」

明らかにこちらを不審に思っている口調だわ。そりゃそうよね。ほんの一瞬会っただけの人が、電話番号調べて連絡してきたんだもの。ストーカーと思われても仕方ないわ。

「実は、床に資料が落ちた時に、ＵＳＢメモリー、緑色のＵＳＢメモリーが、すり替わったようなのです」

「？？」

「あたしの手元によく似た緑色のＵＳＢメモリーがあって、てっきり自分のメモリーだと思っていたんですけれど、開いてみたら、八王子工区のフォルダーがあって、あたしのではないとわかったんです。つまり、入来さんのメモリーを私が持っていて、私のメモリーを入来さんが持っているのではないかと……」

「えーそうなの！」
と耳が痛くなるぐらいのとんでもない大声。
「ということは……　分かったわ。私が水上さんのメモリーを持っているかどうか確かめるのね。ちょっと待っていて、　そうね5分、いや7分ぐらいかな。リフトに乗ったダンプが上がりきるのを見届けてからパソコンとメモリーを取ってくるから」
そう言って、電話を一方的に切った。ダンプがリフトに乗るの？
リフトをダンプに載せる方がまだ想像できるわ。
　待つこと10分。呼び出し音がなって0．5秒で受話器を取って話した。
「はい、水上です」
「あったわ。確かによく似ているけれど、私のではないメモリーがあったわ。中を見て確かめてもいい？」
「ええ、お願いします」
「えーと、PCはスリープだから、直ぐに立ち上がって……　パスワードは『けんじ』で……」
パスワードを声に出すなんて、しかもボーイフレンドの名前？　もしかしてあたしと同じくらい間抜けかしら。
「……あたしの好きなベイブリッジの背景が出て……　わけの分かんないツールが立ち上がるのよねー　何とかならないかしら……」
こっちは、ドキドキ、イライラしてきたのに、悠長なこと言わないで。
「緑色のUSBを差し込んで……　あたしのメモリーは『緑べぇ』って名前をつけているんだけれど、この子の名前はどうしようかしら……」
あーやめて、あたしの緑ちゃんにへんな名前つけないで。
「あ、なんか出てきたわ。一番上にあるフォルダーは『水族館』？、他は会社の名前かしら？」
あたしは思わず叫んだ。

「そう、それよ！　あたしのＵＳＢだわ！」
涙が出そうになった。
結局、あたしが現場事務所の最寄り駅まで行って、そこで、メモリーを交換することにした。

田舎ではないけれど郊外と呼ぶのははばかれるような駅の改札を出たところで、彼女に会った。メモリーを交換し、会社に電話を入れる。安堵したあたしは、自重でベンチに座り込んだ。彼女の方はケロッとしている。それもそうね。気がついた時は、もう『緑べぇ』の所在は分かっていたのだから。化粧の乱れたあたしを見て彼女は言った。
「お疲れのようね。お茶でも飲んでいく？　これも何かの縁だし」
しゃれた喫茶店に入って、名刺を交換した。『入来美帆（いりきみほ）』、それが彼女の名前だった。高速道路の橋の建設に関わっていて、１年前から現場事務所に勤めている。今日は、リフトの耐荷重の見直しのための資料を本社で受け取った。事務所に戻る途中で、あたしとぶつかったらしい。リフト？　彼女に疑問をぶつけてみる。
「ねぇ、確か電話で、リフトをダンプの載せるとか言っていなかった？」
「？？」
「リフトってスキー場にあるようなヤツ？　４人がけのベンチみたいな」
「あはは。確かにあれもリフトね。うちには特大のリフトがあるのよ。人間ではなく、ダンプを載せるリフトがあるのよ」
「ダンプに載せるのじゃなくて、ダンプが載るの？」
「エレベーターみたいなものよ」
「ますます、想像できないわ」
「それじゃ、見てみる？」
「え、見れるの？」
「もちろん。いつでもいいわ。今でも……　あっ、でも、もう暗く

なってきたから、今日はやめておいた方がいいわね」
「ねぇ、現場って山の中？」
「そうよ、山間（やまあい）の谷よ。自然が豊かな所。なるべく景観を損なわないように作っているのよ」
「ハイキングとかできる？」
「うーん。あたしはしたことないけれど、裏山には、手頃なコースがあって、頂上は結構いい眺めらしいわ」
「あのー、明日は？　本当は明日は、ボーイフレンドと映画をみてお弁当をだべることになっていたの。でもハイキングの方がお弁当を美味しく食べられるわ」
「明日？　午前中なら、午前中なら非番じゃなけれど現場の案内ができるわ。なんなら、この駅まで迎えに来るわよ」
「そう。じゃお願いするわ」
「それにしても、ボーイフレンドとお弁当なんて、羨ましいわね。あー　だれかあたしにお弁当作ってくれるボーイフレンドを紹介してくれないかしら？」
「？？」

恐る恐る渡に予定変更の電話を入れたら、あっさりＯＫしてくれた。あたしは、張り切って弁当を作ったわ。入来さんの分も。

昨日と同じ改札の前で二人を紹介した。
「こちら、ボーイフレンドの八丈渡。こちら昨日知り合った入来美帆さん」
「いもっとさん？」
と渡が変なことを言う。
「イモさんじゃなくて、いりきさんよ」
「いや、そうやなくて、妹さん？」
「はあ？　なんで、昨日知り合った人が妹なの？」
「妹やないんかぁー　それにしてもよー似てるわ」

「誰と似ているの？」
「決まっているやないか。お前ら……　美帆さんと碧が」
「美帆さんとあたしが？」
あたしたちは顔を見合わせた。
「えー！」
とユニゾンで反応。もう一度、顔を見合わせて、あたしは言った。
「そう言われれば……　ちょっと待って。そのままの顔で待っていて」
「そのままの顔って、どういうこと？」
あたしは、手鏡を取り出して、美帆さんと鏡に映ったあたしの顔を比べた。
「に、似ている！　えーそうだったの！」
「ねぇ、あたしにも見せて！　鏡をかして！」
「あ、ごめん。ハイ」
鏡を彼女に渡す。今度は、あたしがそのままの顔で待つ。
「ホント……　気がつかなかったわ」
呆れた渡が口をはさむ。
「お前ら、今まで気がつへんかったんか？　鈍感ちゅうか、抜けているっちゅうか……」
彼女が提案をする。
「ねぇ。あそこのトイレに、大きな鏡があるわ。そこで見てみない？」
「面白そうね。渡も来る？」
「俺は、遠慮しとくわ。女子トイレやし」
「そ、それもそうね。じゃーちょっと待ってて」

あたしたちは、大きな鏡の前に並んだ。彼女はポニーテール、あたしは、メガネをかけている。どうせならと、ガーゼハンカチをシュシュ代わりにしてあたしもポニーテールにする。ついでにメガネをはずした。そうするとよく見えないので、顔を鏡に近付けてもら

った。目元が似ている。鼻の形とあごのライン、薄い唇も似ている。でもあたしより若いわ。昔のあたしはこんな顔だったかもしれないし、妹と言っても全然おかしくない。どおりで、『どこかで見たような顔』だったわけだわ。そういえば、さとる君がネットで入来さんを検索した時にあたしの若い時の写真があるといっていたけれど、彼女の写真だったに違いないわ。

「ほんとに似ているわねぇ」

「ねぇ、こんな風にちょっと口をとがらせて、怒ったような拗ねたような顔をしてみて」

とあたしは、表情を作ってみせる。彼女はそれを正確にまねる。

「あはは、似ている！　似ている！」

「ちょっとずるいわよ。笑ってちゃ比較にならないじゃない」

そう言って彼女は、怒ったような拗ねたような表情を作る。あたしも笑いたいのをこらえてまねをする。

「くっくっくっ、　あははは、似てる！　似てる！」

今度は彼女がこらえられなくなって笑いだす。その笑っている顔が似ているの。まるであたしが笑っているみたい。

「あははは、わ、笑った顔も似てる！　あははは、　ど、どうしようもないわね。あははは……」

あたしたちは涙を流しながら腹を抱えて笑った。

「笑いすぎて、お腹が痛いわー　」

そう言いながらあたしたちはトイレから出た。

「外からでも笑(わろ)うてるのが聞こえたで。お前ら、ホンマにどうしょーもないなぁ」

「どうしようもないわよねぇー　」

そう言って、あたしたちは顔を見合わせてまた笑った。

美帆さんの運転する車で現場に向かう。車中で、遠い親戚ではなさそうなことを確認して、話題は別に移る。渡と美帆さんが話して

いるのをうわのそらで聞きながら、親戚ではなく、別の可能性を考えていた。異母姉妹、異父姉妹、パパ、ママの様子から考えて、どちらも可能性は低い。でも、もし、パパとママがしめし合わせて、異母姉妹、異父姉妹の存在を隠していたら、あたしにはわからなくて当然。究極の可能性は、双子だわ。なんかの理由で双子が別の家庭で育つことは、あり得なくはない。例えば、彼女が、養子だったら……　逆にあたしが養子かもしれないわ。そう言えば、お弟はパパ似だけれど、あたしは、パパともママとも似ていない。あたしが双子の片割れで養子？　そんなことってあり得るかしら？　彼女の方が若いと思ったけれど、もし歳が同じだったら。でもどうやって確かめればいいのかしら……　簡単だわ、生年月日を確かめればいいのよ。それが同じだったら双子の可能性はずいぶん高いわ。聞いてみようかしら？　でも、もし生年月日が同じだったら……　もし本当に双子だったら……　あたしの人生の重要部分が崩れていくような気がするわ……　やっぱり、聞くのはやめておこうかしら？　彼女が伝説を話し始めた時、あたしはそんなことを考えていた。

「このあたり一帯には『橋鬼』という古い伝説があるの」

「橋鬼の伝説？」

橋を架ける女と橋を壊す女（その5）

入来美帆は『橋鬼伝説』を教えてくれた。

随分昔、戦乱が収まりつつあるころ、たいそう力持ちで、それでいて内気な鬼がいた。めったなことでは人里に下りてくることはなかったけれど、時折、木や木工細工を人に売って、酒や着物と交換していた。村人も長年の付き合いで心得たもので、鬼を怖がることもなく、必要最低限の付き合いをしていたの。

ある時、鬼が愛用の大斧を振るって大木を伐っていた時に、背中に小さなとげが刺さった。丁度、鬼の手の届かぬ背中の真ん中だった。最初は放っておいたのだけれど、そのうち膿みだし、さらには、高熱を発し、寝込んでしまったよ。そこへ、薬草を採っていた若い娘が通りかかった。最初は鬼を怖がっていたのだけれど、かわいそうに思ってとげを抜いて、薬を塗って介抱した。回復した鬼は、娘の住んでいる村のそばに居つくと、何かと娘や村人のために働いた。そしていつしか二人は愛し合うようになり夫婦（めおと）となった。

その村は平家の落人達の村で、険しい地形で周りから隔絶されていたの。谷は険しく、ちょっとした雨でも川は濁流となり、橋を作ってもすぐに流されたわ。村が賊に襲われることはなかったけれど、村人、特に女子供は、容易に川を渡ることができなかった。だから、男どもは、時折、川を越え街に出て必要物資を手に入れた。ついでに女を買うこともあったかもしれない。そんな不便を見かねた鬼は、丈夫な橋を作ることにした。鬼の怪力をもってしても大変な工事だったわ。苦労の末、橋は完成し、村人は自由に谷を渡ることができるようになったわ。

あたしは興味がわいて聞いてみた。

「ねぇ、鬼が作った橋ってどんな橋だったのかしら」

「伝説には、何も述べられていないけれど、深い谷なら、相当なス

パンの橋、つまりこちら側から向こう側までが長い橋だったはずよ。だから吊り橋かしら？」

「昔の吊り橋ってかずら橋みたいなもの？」

「よく知っているわね。かずらは丈夫な蔓で、大きな張力に耐えられるから吊り橋に使われたのよ。木工の得意な鬼だったから、立派な木製のアーチ橋かもしれないわ」

「アーチ？」

「そう、西洋建築、例えば、教会の円弧状の柱や天井がいい例だわ。小さな材料で大きく高い天井を作り出せる優れた構造よ。アーチの反対がせり出し構造」

「せり出し構造？」

「平積みのブロック状の石が少しずつせり出して天井を作るの。アンコールワットが典型だけれど、どうしても作り出せる空間の大きさに限界があるのよ」

それまで『？』の顔をした渡が口を開いた

「アンコールワットやったら見たことあるで。確か千年近く前の建物や。でも崩れている部分も結構あったわ」

「でも千年ってすごいわね」

「千年も残る建物はすごいわ。地震、火災による劣化、雨風による風化、建物自身の重みに耐えたものだけが残っていく。橋の場合も重量を支えなければならない点は建物と同じよ。橋の自重と橋を通る人や車の重量をどうやって支えるかで、色々なタイプがあるわ。吊り橋の場合、こちらから、向こうへ渡した綱の張力が鉛直方向の橋の重量と水平方向の向こう岸と引っ張り合う力を支える。張力に耐えらる綱、蔓、ワイヤーがあればいいから、ある意味単純な橋で、これから案内する剛性をもつ部材が必要な橋とは随分違うわ。そろそろ目的地よ。『橋鬼伝説』にはまだ後半があるんだけれど、それは橋を見てからね」

狭い山道を抜けると突然、視界が広がる。現場はドーム球場がす

っぽり収まりそうな広さと深さがあり、沢山の重機、作業員、ダンプがうごめいている。その喧噪の中心に大きなコンクリートの塊、そう、『やじろべえ』があった。あたしたちは車から降りて、ヘルメットをかぶって歩く。美帆さんが丁寧に解説をする。真ん中のコンクリートの足（橋脚）は地下深くまで打ちこまれている。そこから両側へ長い長い腕を出してそれが橋となっている。建設中なので橋はまだ、両岸にはつながっていない。そこで、バランスを取りながら腕を左右に少しずつ延ばしていく。この現場では、地面から橋まで届く足場を作らずに、腕の先端に近い所に、先端から少しせり出すやぐらを立ててそれを足場に新しい部分を作っていくのが特徴。もう一つの特徴は橋の一部に鉄を使っていること。吊り橋の場合は橋を沢山の綱（ハンガーケーブル）で吊っているから、橋げたは薄く剛性は要求されない。この橋の場合は、橋の重量をやじろべえの真ん中の足で支えるから、橋げたが自重でたわまないようにしなければならない。そこで、橋げたを高さ方向に厚くする。断面は丁度箱のようになる。こうすると断面二次モーメントが大きくなって、たわみにくくなる。

『？』の顔をした渡が疑問を口にする。

「途中までは、何とかついていけたんやど……　『断念、2時、モニュメント』ってなんや？」

「『断面2次モーメント』よ。渡には難しいから理解しなくていいわよ」

優しく言ったつもりだったんだけど、どうやら渡の癇にさわったらしい。

「あ、またお前を俺をバカにしたやろ。理系やからって、最初っから説明せんのは、人をバカにしとるんちゃうか？」

こっちもカチンときて、『そういうあんたは臥薪嘗胆も知らないで文系のつもりなの？』と言い返そうとしたけれど、前回の喧嘩、いやなことを思い出したあたしは、さっさと謝ることにしたわ。

「あ、謝るわ。ごめんなさい。それじゃーあたしがわかるように説

明するわ」
「碧先生、よろしくお願いします」
先生と言われるとまんざらでもない気がする。
「剛性、つまり、物が変形しにくいかどうかは材質だけでなく、形に依存するの。同じ断面、例えば直径１ｃｍの円、の棒を考えて。木の棒と……　そうね魚肉ソーセージ。どっちが変形しくいい？」
「もちろん、木の棒や。木の棒でたたかれたら痛いけど、魚肉ソーセージなら何ともないわ。それはそうと魚肉ソーセージは苦手なんやけど……　普通のソーセージの方がええんやけど……　今日の弁当にはいっているとか？」
「そう？　あたしは好きなんだけれど。今日のお弁当には入っていないから安心して。とにかく、材質が違えば剛性が違うのは当たり前だけれど、同じ材質、同じ断面積でも形が違えば、変形しやすさは違うわ」
「断面積？」
「そう、断面積が同じ場合を比較したいの。例えば、プラスチックの箒を作る工場で、長さ１ｍの箒の柄を作る時に、中が詰まった円柱状のプラスチックの柄と中が空いているパイプ状の柄とどちらかを作るとするわ。どっちが丈夫かしら？」
「そりゃ、中が詰まっている方が丈夫に決まっているやないか」
「直径が同じならそうよ。でも材料費、材料のプラスチックの量が決まっているとするとそうじゃないわ。材料の体積が同じで、長さが決まっているとすると、断面積が同じだわ」
「だんだん、難しゅうなってきたわ。でも体積が断面積かける長さなんはわかるで」
「そうよ。断面積が同じなら中が詰まった円柱の方がパイプよりずっと直径が小さくなるわ。この場合はパイプの方がはるかに丈夫になるの。この断面の形状で決まる変形しやすさしにくさを表わすのが、さっき美帆さんが言った『断面２次モーメント』なの」
「何とのうわかってきたけど、もう少し分かりやすくできへん？」

「そうね。例えば、ティッシュの箱。箱は丈夫だけれど、これをつぶすとぺらぺらになるわ。断面積は同じだけれど変形のしやすさは違うわ」
「それっやったら分かるわ」
「本当のことを言うと、方向にもよるのよ。ぺらぺらになるのは厚み方向だけれど、それと垂直な方向は変形しにくいわ」
「垂直って、どっちや？」
「ごめん、垂直って言わない方がいいわね。それじゃ別の例で説明するわ。プラスチックの下敷きを想像して」
あたしは手の平を下敷きに見立てて、ての平で顔を仰ぐ動作を見せる。
「下敷きは、下敷きの面と垂直な方向にはぺらぺら、つまりやわらかく変形しやすい。下敷きでこんな風に顔をひっぱたいてもそんなに痛くないでしょう？」
そう言って、手のひらで渡の頬をぺしぺしする。
「いや、十分痛いで」
「でも、面の方向に振って、頭をこつこつすれば、かなり痛いでしょう」
手のひらをたてて、渡の頭に手を載せる
「あ、堪忍、堪忍。相当痛いで」
「変形しにくいから、力が和らぐ間もなく、ダイレクトに伝わって痛いのよ。つまり変形しようとする方向に長ければ長いほど変形しにくくなるわ」
「あ、分かったで。つまり、平手打ちと空手チョップとどっちが威力あるかっちゅう比較やな。もちろん空手チョップの方が威力があるで」
「う～ん。それはわからないけど。長さと威力の関係は正しいわ」
「それにしても、碧に下敷きでチョップされてヤツは痛かったやろうな？」
「あたしがそんなことすると思う？」

渡はウンウンと頷く。そう言えば、中学の時に、クラスの男子にそんなことをして泣かした覚えがある。

「それで、橋の話と空手チョップとどういう関係や？」

今度は美帆さんが説明する。

「碧先生の話は分かりやすかったわ。この橋でも側面の鉄板、黒い部分が空手チョップの手の役割をするのよ。これによって面の方向に変形しにくくなる。それで、橋の重量によるたわみを防ぐのよ。変形のしやすさは幅の3乗で効くから、相当丈夫よ」

「3畳？」

「3乗は、3回かけること。例えば、幅が2倍になれば、2の3乗の8倍、変形しにくくなるのよ」

「それはそうと、何で鉄を使うや。全部コンクリで作ってもええんちゃう？」

「性能と値段の問題ね。コンクリートは圧縮方向には強いけれど、引っ張り方向には弱い。鉄は引っ張りにも強いから、コンクリートの中に鉄の棒を埋め込んで、鉄筋コンクリートにすれば、圧縮にも引っ張りにも強い部品ができるわ。だから大抵のコンクリートには鉄筋が入っているのよ。全部鉄で作った橋もあるわよ。鉄の方が軽くて丈夫でしかも工事期間が短いから性能がいいわ。でも値段が高くなるのと、錆びないようにメンテナンスをしなければならないから、道路関係では鉄筋コンクリートが圧倒的に多く使われるわ」

「それやったら、この橋は何年持つんや？」

「普通にメンテナンス、つまり時々検査して、劣化した所があれば、補修する程度で１００年は持つわ」

「じゃー　千年やったら？」

「千年？」

「そう、千年や。アンコールワットは千年近く前、ピラミッドやったら４千年以上前や」

「多分、持たないわ。千年後には今みたいな車は走っていないと思

うの。だとすると高速道路はメンテナンスされないわ。メンテナンスされないと、中の鉄筋がさびて膨張してコンクリートの塊はぼろぼろになるわ。残念だけど、千年は難しいと思う……　それでも、あたしは橋を作るわ。今、橋を必要としている人がいる限り、橋を作れと言う人がいる限り、できる限りいいものを作るわ。それがあたしの役割」

なんだか、美帆さんがうらやましい。

「橋はまだいいわよ。あたしの作っている回路モジュールなんか１０年使ってもらえればいい方よ。でも美帆さんの言う通り、必要としている人がいればいいのかもしれない」

「二人とも、落ち込んだらあかんで。ぼろぼろになっても形が残っとったら、俺みたいなガイドが解説するんや」

「そうね。千年後のガイドさんに期待しましょう」

「あ、あそこにダンプが来たわ。見てて、これからリフトに乗って下まで降りるから」

でっかいダンプが塔の中に停車したかと思うと、床ごとゆっくりと降りていく。確かに巨大エレベーターだわ。近くで見ると圧巻ね。

「そうそう、忘れないうちの『橋鬼伝説』の後半を話さなくっちゃ」

美帆さんは、鬼が橋を作った後の話を始めた。橋ができて、村人は街へ行って作物と様々な品を交換するようになり、少しずつ豊かになっていった。鬼の妻となった娘も薬草を売って、反物を仕入れて鬼の衣を縫ったりしたのよ。そして、村人は、鬼が橋を作ったこと、橋がどんなにありがたいものかを次第に忘れていったの。村人が橋を使って街へ行くのとは反対に、鬼は橋を使うことはなかったわ。ある日、娘は、街へ行き、帰ってこなかった。翌日、娘は帰ってきて、心配で一睡もできなかった鬼にこう言ったのよ。『ごめんなさい。調薬道具を直してもらったら、遅くなって、道具屋さんの家に泊めてもらったの』　橋はできても、街に行くのは一日がかり

だったし、街道も安全とは言えなかったから、娘の言い分はもっともなことだった。でも、そんなことが何度かあって、鬼は気がついたのよ。娘が街で浮気をしていると。そして、ある時、翌日帰りの娘が村に帰ってきたとき、鬼は愛用の大斧を持って橋のたもとで待っていた。それこそ仁王立ちと言うのかしら。怒りに燃える眼は、今にも不貞の妻を手にかけようとしていた。娘は一心に命乞いをしたのよ。それを見て鬼は気がついた。娘はもう鬼を愛していないし、そんな娘を自分も愛してはいないことに。悲しい眼をした鬼は、渾身の力で大斧を一振りしたの。その一撃で、橋はばらばらに壊され、娘は橋の向こう側に取り残された。そして鬼は姿を消し、人の前に現れることはなかった。

「どう思う？」

と美帆さんはあたし達に問いかける。

「どうって言われても……　あたしは娘に同情するわ。確かに浮気は悪いことだけど、豊かになりたい、自由になりたいと思うのは自然よ。それを橋がかなえてくれた。何も橋を壊さなくったてよかったじゃない。娘を罰すれば済んだじゃない？」

「俺は、鬼に同情するわ。橋がなけりゃ、二人は幸せやった。橋によって物質的に豊かにはなったけれど、悪いことも覚えた」

「そうかしら？　鬼はそうかもしれない。でも橋ができる前の娘は鳥かごの中の小鳥みたいなものよ。餌は与えられるけれど自由はない。鳥かごの中の小鳥は、仮の幸せを与えられているのよ」

「逆に、かごから放たれた鳥は、自分で餌を採らんといかんし、鷹に襲われる危険もある」

だんだん、渡とあたしの議論は熱してきた。それを美帆さんが冷ます。

「まあ、そのぐらいにしたら。これは、簡単に白黒つけられる問題ではないし……　肝心なことは、あたしが橋を作る人だということ。いい橋を作るために最善の努力をする。そして、百年、何百年と風

雪に耐え、人の心と心をつなぐ橋になってくれるよう祈るのよ」
美帆さんは、橋を愛おしげに見上げた。

橋を架ける女と橋を壊す女（その６）

入来美帆と別れたあたしたちは、現場近くの裏山を登り始めた。天気は快晴、風がさわやかで気持ちいい。渡を先頭にかなり急勾配の林の中をゆっくり登っていく。登り方にも色々ある。短距離走を何度も繰り返し、休みも何度もとるタイプ。休みの回数と時間を最低限にして、ゆっくり登るマラソンタイプ。渡は、後者のタイプ。もしかしたらあたしに合わせているかしら。頂上に近づくと、林は低木群に変わり、じりじりとした日差しで汗がでる。背中の荷物の重みが気になる。弁当とペットボトルは渡に持ってもらったのだけれど、アフターハイキングを考えて、余計な荷物を持ってきたの。弁当をつくるよりも、作戦を考えて、荷物を考える方がよほど大変だったわ。だって、リュック１個に入る荷物で作戦Ａから作戦Ｃまで対応できなくっちゃならないんだもの。

頂上は、聞いていた通りの素晴らしい展望だった。こちら側には建設中の橋が見え、反対側には山々が見える。ビニールシートを敷いて、橋を見ながら弁当を食べる。

「現代の橋鬼伝説ね。千年たったらどうなるのかしら？　ねぇ、ガイドさん」

コホン、と咳払いをして渡が説明し始めた。

「えー、皆様、このジャングルの中に埋もれている遺跡は、千年前の日本を象徴する鉄筋コンクリート製の自動車専用の橋であります。昨日ご覧いただいた砂漠の中のアンコールワットはブロック状の石、砂岩で作られていましたが、千年前は鉄筋コンクリートが主要な建材でした」

「ねぇ―、どうしてアンコールワットが砂漠で、ここがジャングルなの？」

「温暖化の影響に決まっているやないか。もっとも砂漠は、人の影

響が大きいんや。ピラミッドのある砂漠かて、昔は緑豊かな穀倉地帯やったんやで」

「ふーん、そうなの」

「お客さん、説明の続きをさせてもろうてよろしいですか？」

「あ、ごめん。続けて」

「千年前の日本は、物欲と物流の時代でした。今では、考えられないでしょうが、この本が欲しいと思ったら、次の日には手に入るような時代でした。そういった物欲を満たすために、物流に多大な投資をしておりました。その主役は地上を走る車であり、車が走るための道路が網の目のように整備されていました。それも液体燃料や電気ではしる車です。また、当時の日本では毎年１万人程度が車の事故で亡くなっていたといいますので驚きです。今では、道路の跡は、野生の象のけもの道になっております。時々崩落することがありますので、皆様は決して近づかないようご注意願います。この橋の特徴は断面が箱型になっているところで、これから撮影ポイントをご案内します」

「まるで、今が酷い時代みたいな言い方ね」

「そりゃそうやで、昔は不潔だったとか、身分社会やったとか、男女差別があったとか、いつの時代になっても、今が昔よりいいと信じてるんや」

「あら、男女差別なら今でもあるじゃない」

「そうやった。現代は、男が女の尻に敷かれる時代やった」

はあ？　男女差別って別の意味なんですけど……　まあいいわ。

「じゃ、渡はあたしの尻に敷かれたくないの？」

「４５キロまでなら大丈夫やで」

「定格荷重が４５キロだとすると、あたしは２キロ減量しないといけないわね。それとも……　片手で２キロ分支えればいいのだから……」

ダメダメ、余計なことは考えない。今は目の前の作戦Ａに集中せねば。

「ハイ、これ」
弁当を食べ終わった渡にはっか飴を渡した。あたしも1個を口に入れた。
「これは？」
「糖分補給よ」
本当は匂い消し何だけれど。渡は、飴をバリバリ食べる。
「……」
舐めてほしかったんだけれど。
「ハイ、もう一つ」
2個目もバリバリ食べる。仕方ない、作戦Aは少しだけ変更するわ。
渡はねっころがって空を見上げる。
「あ、鰯雲（いわしぐも）が見えるで、千年たってもこの空は同じやろうか？」
「さあ、どうかしら？　でも、鰯雲はすぐには逃げないわ。だからあたしが飴を食べるのを手伝って」
「手伝うって、どういう意味や？」
「こういう意味よ」
そう言って、ねっころがっている渡の顔にあたしの顔を近づけて、口移しに舐めかけのはっか飴を移す。ついでにディープ……
「ん、ん……　」
渡が何か言いたそうにしている。あたしは顔をあげる。
「どうしたの？」
「飴と舌の両方いっぺんに舐めるのは堪忍してくれ。喉に飴が詰まったら大変やないか。ちょっと待ってて」
そう言って、渡は3個目をバリバリ食べて、彼の方から先ほどの続きをした。この時ばかりは、バリバリ飴を食べるもの悪くないと思った。だって、1分も2分もかけて丁寧に飴をなめていたら興ざめじゃない。作戦A完遂。AはアメのAよ。
頂上から降りる時は、登ってきた橋側ではなく、反対側の路を下

る。そこからバスに乗る。駅に着いた時は丁度いい時間だったわ。この駅からだと、あたしが帰る途中に渡の最寄り駅がある。作戦Ｂを開始するタイミングだ。Ｂには２つの意味がある。一つはＢｅｅｒのＢ。もう一つは『別の女』のＢ。もし、渡とＢの間に橋がまだかかっていたら……　これは、完全につぶしておかないといけない。そのためには、是が非でも渡のアパートに行く必要がある。

学生のころ、ロボット研究会というサークルに入っていた。そこには、男も女もいたけれど、女は近所の他大学、大抵は女子大の子が多かった。ある時、同期の飲み会の後で、ある子のアパートに皆で行ったの。どういう経緯だったのかは忘れたけれど、女の子が自分のアパートに皆を招くなんて、と不審に思ったのは覚えている。アパートには、どこかで見たようなジャケットと男物のズボンがハンガーにかけられていた。彼女はこう言った『あ、これはＦ君のものよ。時々忘れていくのよねぇ』。見え透いた嘘だ。だってジャケットなら分かるけれど、ズボンを忘れていくことってあり得ないじゃない。Ｆ君は、その場にはいなかった同期の男だ。つまり、Ｆ君とは、ズボンを脱ぐぐらいの間柄であることを彼女は言いたかったらしい。あたしには、彼女の意図が理解できなかった。でも、大学卒業と同時に二人が結婚して、やっとわかったの。彼女は、他の女を牽制するために、ズボンを見せたのよ。そうすることで、他の子は、Ｆ君に手を出す気がなくなる。全く、女は恐ろしいわ。

作戦Ｂは、渡のアパートに行って、『別の女』の痕跡がないか確かめること。そして、あたしがアパートに居たという痕跡を残すこと。なにもズボンを忘れていく必要はない。キッチンを綺麗に掃除するだけでもいいのよ。この作戦の要は、渡のアパートに行けるかどうか。しかも、Ｂの痕跡を消されては意味がないので、不意打ちでなければならない。あたしは慎重に言葉を選んだの。

「お腹がすいたわ。それに喉も渇いたわ」
「お、碧もそうか。俺もさっきから、どこぞでビールを飲もうか、考えとったんや」
「そうね、汗もかいたし。ここいらで、ビールをクーっといきたいわね」
自分の言葉で、よだれが出てきたわ。
「待ちきれんのやったら車内、電車の中で飲んでもええやけど」
「でも、他のお客さんの手前、派手に飲むわけにはいかないわ。やっぱり、電車の中は、ビールじゃなくて、日本酒かチューハイをちびりちびり飲むのがおつじゃない？」
「もしかして、碧はオヤジギャル？」
「おやじギャンブル？」
「いや、知らんかったらええよ。気にせんといて」
「あたしが使っている通勤電車は結構遠くまで行くの。だから、たまにボックス席でちびりちびりやっているオジサンがいるのよ。周りのサラリーマンに遠慮しながら静かに飲んでいるの。それをみると、なんだか幸せな気がするの」
「碧が幸せ？　それともそのオジサンが？」
「もちろん、オジサンよ。ささやかな幸せをかみしめているようで、こっちがホッとするのよ。その路線には特急も走っているの。特急なら、1時間で行けるところが、通勤電車だったら2時間はかかるわ。特急料金を払って、一刻も早く帰って、怖い奥さんに顔を見せなきゃいけない男と、特急料金分のお金でお酒とスルメを買ってのんびり帰れる男とどっちが幸せ？」
「でも、のんびり帰った先が誰もいない寒々としたアパートかもしれんで」
「そうかもしれない。でも、少なくとも、飲んでいる間は幸せよ」
「まあ、他人の幸せを喜べるところが、碧のええところやな」
「ありがとう。でも、いつもそういうわけじゃないわ」
そう、これから実行する作戦Ｂは悪女でないとできないわ。『別の

女』の幸せを破壊するのだから。いればの話だけど。
「それじゃ、K駅、確か、渡の家の最寄りの駅。あそこで降りて飲まない？」
「うん、それはええなぁ。餃子のうまいラーメン屋があるから、夕飯も食おうや」
「いいわ。でも最初にビールで乾杯よ」
作戦Bの第一ステージクリア。

駅そばの雑居ビルの1階にラーメン屋はあった。最初にジョッキで乾杯。それからラーメン、餃子をいただく。餃子もおいしかったけれど、こってりしたスープのラーメンはよかった。疲れた体に栄養が行きわたり、体力がみるみる回復するのが感じられる。体力は大事、特に作戦Cには。
「ごちそうさま。おいしかったわ」
「そうか、それは良かったで」
「でも、なんか飲み足りない気がするわ」
「へ？」
「渡は、外ではあんまり飲まないみたいだけど、家でも飲まないの？」
「そんなことあらへんで。暑い夏やったらビール。寒い冬やったら、焼酎とか。まぁ、ビールと蒸留酒が好きやったら、世界のどこ行っても困らんで」
「ビールって、国によって違うの？」
「ああ、違うで。日本のビールとは大分違うビールもあるで。そういや、家に同僚からもらったタイのビールとベルギーのビールがあったなぁ」
「あ、それ、飲んでみたい」
「しもた！　言わんかったらよかったわ」
「どうして？」
「そりゃ、碧にビール飲まれたら……」

「渡の飲む分が減るっていうの？」
「それもそうやけど……　なんか……　えらいもったいない気がする。碧がビール飲んでんの見ると、象が鼻から水を吹いて水浴びしてるところを想像してしまうんや」
「な、なんであたしが象なの？　し、失礼ね。怒るわよ！」
「あ、堪忍、堪忍。半分飲んでええから、許して」
「飲ませてくれるのなら、許すわ」
「それはそうと、家にあるビールを飲むっちゅうことは、家に来るっちゅうこと？」
「当然よ」
「当然かー　まぁ、ええか。ほんなら今から行こうか。歩いて１０分ぐらいや」
作戦Ｂの第二ステージクリア。

途中でコンビニによって、つまみとお酒を渡がおどろくぐらい沢山仕入れた。この時は、備えあれば憂いなしと思ったのよ。

橋を架ける女と橋を壊す女（その7）

渡が住んでいるのは、築３０年以上のマンションだった。造りはしっかりしているようだけれど、何しろ古い。エレベーターもなんとなく古風だし、廊下の照明も暗い。

「ここが俺の城や。人並みに散らかってるけれど、気にせんといて」

そう言って、渡は鉄の扉をあける。少しカビ臭いような気がするわ。玄関には、脱ぎ散らかした靴が５足ほど、スニーカーから軽登山靴までである。さらに靴箱から靴があふれている。

「一体何足あるの？」

「さあ、数えたことはあらへんけど、２０足ぐらいやろうか？　靴は商売道具やから」

なるほど、あたしがＰＣを3台持っているようなものね。幅の広い廊下には自立式のハンガーラックが幾つも並べられていて、アロハシャツからもダウンジャケットまであらゆる種類の服が揃えてある。全天候、全気候に対応できそう。この分だと、部屋の中は物であふれかえっているに違いないと思ったのよ。でもその予想は１００％外れた。

廊下の突き当たりに広い和室、その手前に狭いダイニングキッチンがある。あたしは、目をきょろきょろさせながら不審なもの、つまり『別の女』の痕跡を探す。手を洗うために洗面所を借り、長い髪の毛、色の違う髪の毛を探す。鼻をひくひくさせ、匂いを嗅ぐ。香水はもちろん整髪料の匂いもしない。かすかに歯磨き粉の匂いがするだけ。コンビニで余分に買ったビールを冷蔵庫に入れるついでに、中もチェックしたけれど、がらがらで、件のビールと、瓶が若干あるだけ。キッチンには、包丁が1本、鍋が1個、フライパンが1枚、お玉が1本。食器も数えるほどしかない……　要するに自炊はしていないのね。とにかく、洗面所、キッチンには『別の女』の痕跡はない。

和室では、渡が、マットレスを押し入れにいれ、和机を台布巾で拭いていた。和室の隅に旅行誌が積み重ねてあるほかはほとんど物がない。

「ねぇ、テレビはないの？」

「テレビ？　そんなもんあらへんよ」

「ねぇ、本棚はないの？」

「本棚？　そんなもんあらへんよ」

「ラジオとかＣＤプレーヤーとか、ゲームとかは？」

「もちろん、あらへんよ」

「何にもないのね」

「そんなことないで、ほら、こっちを見てみい」

渡の視線の先には壁があり、そこに２枚の絵がセロテープで貼ってある。

「さゆりさんの描いた絵、あたしの夢じゃない」

「ああ、そうや。ええやろう」

「貼るのがあたしの部屋でなくてよかったわ」

だって、そうしたら、毎日、見るたびにプレッシャーをかけられるじゃない。まあ、臥薪嘗胆をやるんだったら別だけど。

「それにしても何もないわねぇ。あるのは、靴と服だけねぇ」

「シンプルやろ？」

「普通、歳をとれば、その分、ゴミと言うか、捨てられないものが溜まっていくと思うんだけど」

「過去は見ない、思い出さない主義やから。すべての物は、俺のそばを通過していくんや。だから溜まらんのや」

「行く川の流れは絶えずして……　とどまりたるためしなしって所ね」

「なんやそれ？」

「方丈記よ」

「あ、なんかそれ、習うたような気がする。漢文やったけ？」

「古文よ。方丈記は、余分なもの、しがらみを捨てていくこのと大

事さを説いているのよ。若者向けじゃないけれど、渡は案外共感できるかもしれないわ。短いからすぐ読めるわよ」
「いや、俺は遠慮しとくわ。古文、漢文は苦手やから」
「方丈記は教養よ。渡ってもしかして、今、この刹那にしか関心がないんじゃないの？」
「そういうことになるわなー　過去のことは苦手やし、ついでに先のこともあんまり考えへから」
「あたしが渡を好きなのは、そういう所かもしれない。反対に、あたしは、先の先、起こりうることすべてを考えないと気が済まない。そうして、不安で頭がいっぱいになって、安らぐことがないわ……
　本当のことを言うと、強引に渡の家に来たのは『別の女』、『別の女の痕跡』をがないかどうかを確かめるのが目的だったのよ」
「で、どうやった？　痕跡はあったか？」
「見つからない」
「そりゃそうやろ。『別の女』なんか最初からおらへんのや」
「本当？」
あたしは、眼を輝かせた
「ああ、本当や。少なくとも『今』はな」
「今は？　じゃ過去には居たの？」
「過去は忘れた。未来は誰にもわからん」
「え！　未来がわからないって？　約束したじゃない？」
「？」
あたしは、だんだん興奮してきた。
「あたし一人とつき合うって花火の時に約束したじゃない！　神様に誓ったじゃない！」
「あ、そういえば、そういう約束したわ。忘れたわけやない。けど……　さっきゆうたように先のことを考えのるは苦手なんや。だから、約束とか契約とか苦手なんや。俺の未来を約束や契約で縛りたくないんや」
「じゃー、結婚は？　究極の契約である結婚は？」

「結婚？　さあ、結婚したくないわけやないで、生涯を共にする伴侶が現れたら、結婚すると思う」
顔がだんだんあおざめてくる。そして、思わず聞いた。
「じゃ、あたしは？　あたしとは結婚したくないの？」
言ってしまって後悔した。渡の返事いかんによっては……　ゴクリと唾を飲み込む。
「碧と？　碧と結婚？」
ウン、ウンと頷く。
「結婚できたらええなぁとは思うけど、エンマ大王に舌を抜かれてでも結婚したいかちゅうと……　どうやろうか？」
閻魔大王？　一体どっちなの？　結婚したいの？　したくないの？
あたしが目を吊りあげるのを見て、渡は言い足した。
「正直、あんまり、まじめに考えてへんわ。碧はどうなんや？」
「え、あたし？」
「そう。是が非でも俺と結婚したいんか？」
沸騰しかけた頭に冷水を浴びせかけられる。そう言えば、あたしはどうなんなんだろう。渡と結婚したいのかしら？
「わ、分からないわ……　だから、それを確かめるためにここまで来たのよ」
渡の眼をまっすぐ見つめる。渡はちょっと驚いたような表情を見せる。あたしがここへ来たもう一つの目的、作戦Ｃが何かわかったようね。
「どうやって確かめるんや？」
ガク、やぱっり、作戦Ｃが何か分かっていなみたい。
「……後で教えてあげる……　とりあえず、ビールを飲む前にシャワー浴びさせてもらっていいかしら。今日は、汗かいたし。少し、頭も冷やしたいわ」
「シャワー？　そうやな。あ、うちのシャワーは普通のシャワーやから」
「普通の？」

「そう。お湯も出るし、真水やし」
「お湯が出ないシャワーとか真水が出ないシャワーってあるの」
「ああ、そういう国もある。水しか出ないシャワーとか、塩水がでるシャワーとか」
「そ、そうなの。あたしには想像できないわ」

あたしは、急いで、だけど、しっかり、くまなく洗った。持ってきたショーツ、短パン、Tシャツを身につける。できるだけ、荷物を減らしたかったから、短パンとTシャツにしたの。それに、肌の露出が多いし。あたしに続いて、渡もシャワーを浴びる。その間に、買ってきたつまみ、件のビール、グラスを和机に並べる。

渡と乾杯をする。タイのビールはちょっと苦味があった。反対にベルギーのビールはチェリーの果汁が入っていて、甘かった。それにしても、『結婚』かぁ。結婚って何なんだろう。なんとなく憧れていたけれど、その実、あたしはまじめに結婚を考えたことなかったわ。

殺風景な和室。枝豆と冷やっこを黙って食べている渡。あたしも黙って食べる。壁に貼ってあるさゆりさんの絵、あたしの昔の夢を見上げる。結婚すれば、この部屋も変わるのかしら。あたしの視線は絵を突き抜け、未来へ、過去へと伸びていく。

１０年後。さゆりさんの絵のあったところには、クレヨンで描いた『わたしのママとパパ』が掲げてある。キッチンには、湯気をたてている鍋。魚をグリルで焼くにおい。和室を所狭しと駆け回る男の子。配膳を手伝う利発そうな女の子。そして、和机にはビールを飲んで上機嫌なパパがいる。

２０年後。『わたしのママとパパ』があったところには、サッカーの賞状と自由工作の賞状が掲げてある。体だけは大きくなったニキビづらの男の子は、夕飯も食べずにゲームに夢中になっている。

大人の色気が出てきた女の子は、パパとロボットの話で盛り上がるが、ママとは話が合わない。

３０年後。壁には黄ばんだ賞状が掲げてある。子供たちは独立し、老年にさしかかろうという夫婦が静かに夕飯を食べている。風鈴がさびしげな音を響かせる。急須からお茶を注ぐ妻の手には静脈が浮き出て、しわが刻みこまれている。そして、夫は、茶碗に残った最後の一粒のコメを口にいれ、静かに箸をおく。

渡が口を開く。

「あんまり、先のこと考えん方がええんちゃう？」

はっと我に返ったあたしは、頬を一筋の涙がつたっているのに気づいた。

「未来がどうなるかは、誰も知らん。それに備えるのも大事やけど、今を楽しむ、今を味わうのも大事やで」

そういって渡は、座っているあたしの背後に回り込んで、後ろから抱きしめてきた。渡の温かい体があたしをすっぽり包み込む。その瞬間、涙が止まらなくなった。別に悲しいわけじゃない、かといって嬉しいわけじゃない。ただ涙がでるのよ。渡は、そっと涙を拭いてくれた。そこまでは良かったんだけれど。

「ちょ、ちょっと！　何これ！　さっきこの机を拭いていた台布巾じゃない！」

「そうやで。雑巾やないからええやないか」

「よくないわよ。この不潔野郎！」

「ふ、不潔野郎とはなんや！　お、女のくせにもう少し上品な物言いはでけへんのか！」

「女のくせにって、女をバカにしたわね！」

そして派手な喧嘩が始まった。でも、すぐ仲直りしたのよ。ただ、その後が……

気がついた時には、窓からあかるい日差しが入っていた。そしてあたしは布団の上に寝ていた。お腹の上にはタオルケットがかけてある。すぐ左にはお腹をだした渡が静かに寝息を立てている。とりあえず、メガネを探す。予想通り、メガネは部屋の隅へ押しやられた和机の上にあった。メガネをかけて辺りを見回す。机の上には、ビールの缶が１０缶ほど、空の焼酎のボトルが１本、ポテトや柿の種といったつまみの袋、が散在している。左脳を無理やり回転させて記憶をたどる。

確か……　飲み比べをしたのよ。どうしてそういうことになったかって言うと、……　思い出せない。とにかく、どっちがお酒に強いか勝負になって……　あたしが勝ったんだったけ？　最後に渡もあたしもフラフラになって、シーツをしくのももどかしく布団に倒れこんだんだったわ。

しまった、作戦Ｃのことをすっかり忘れていた。渡の無防備な寝顔を見ていると、自然と魔性の笑みが浮かんでくる。時刻はまだ７時前だけれど、こんなに明るとさすがに恥ずかしいわ。どうしたものかしら。あ、そうだカーテンを閉めればいいのよ。厚手のカーテンだから、しめれば結構うす暗くなるわ。

そーっと、カーテンをしめる。それにしても汚いカーテンね。

寝ている渡の服を脱がせようとすると……

「ジリリリリー」

ものすごい音が部屋の外で、建物中で鳴り響く

「ジリリリリー」

渡が飛び起きる。

「な、何なの？」

あたしが尋ねると

「うーん。何やろ？　火災報知機やな。つまり、火事ってこと」

「ええ！」

「避難するで」
そう言って、渡は、あたしの手をつかんで部屋を出た。

マンションの玄関ロビーに、住民が続々と集まってくる。パジャマを着た眠そうな人、新聞を持っている人、歯ブラシを持った人、乳飲み子を抱えた女性、なぜかスーツをバシッと決めている人、サバイバルキットを背負っている人。１０分程経っても、火災報知機は鳴りやまない。誤報じゃないか、警備員さんは、と言った言葉がちらほら聞こえる。ようやく警備員が現れ、『確認しておりますので今しばらくお待ちください』と声を張り上げる。
「ねぇ、誤報なの？」
「多分、そうやと思う」
「よくあるの？」
「おれは、ここに４年住んでるけど、これで２回目や。まあ築３０年やし、こういうこともあるやろう。外国では珍しゅうないで」
「誤報なら迷惑もいいところね」
「まあ、ベルがちゃんと鳴るっちゅうことが確認できたわけやし、避難訓練と思うたら、なんてことないやろ」
「そう？　渡は寛容なのね」
「碧は、焦りすぎや。もっと気楽にし。生き急いだらあかんで」
そういって、寒さに震えるあたしの肩を引き寄せる。
「あたしの住んでいるところは、築５年よ。今度はあたしの家に泊って？」
しばらく渡は、考え込んでから返事をした。
「お酒は、ほどほどにしてくれるか？　昨日は飲みすぎたで、もう勘弁してくれや」
「そう言えば、どっちがお酒に強いか勝負したんじゃなかったかしら？」
「ああ、確かに勝負した」
「で、どっちが勝ったの？」

「さあ」
「さあって覚えていないの？」
「ああ、覚えてへん。で、どっちが勝ったんや？」
「あたしも覚えていないのよ」
「あははは。それやったら、碧が勝ったことにしとこうや。俺はもう碧と飲み比べはしとうないわ」
「あたしもよ。なんだか、コーヒーが飲みたくなってきたわ。それに、お腹がすいてきたわ」
「俺もや」
あたしの頭の中で、妄想と食欲が膨らみ始める。香ばしい焼きたてのトースト、ジューシーなオレンジ、ほんのり甘いスクランブルエッグ……　こうなると作戦Ｃはもう駄目ね。

結局、作戦ＣはＣをｃｕｒｔａｉｎのＣに変更して完遂。カーテンがあまりに汚かったから洗濯したのよ。元々のＣの方は開封せずに持ち帰った。

橋を架ける女と橋を壊す女（その8）

二度あることは三度ある。

金曜日、例のクライアントとの打ち合わせを午前中に終え、先週と同じように課長は帰社する方向とは反対の方向に歩いていく。まったく、同じパターンが3度目となるとあたしのすることは決まっている。そう『尾行』だわ。先週のメモリーすり替わり騒動に懲りたあたしは、課長の1分後方を落ち着いて歩く。課長は完全に視界の外。それでも心配はない。先週のパターンと同じであれば、どこに行けばいいかはわかっているから。

先週、あたしが駅ビルの吹き抜けのほぼ中央で課長を発見した時、課長は西を向いて、西側のB子は東を向いて課長と話していた。あの時の配置からすると、課長は地下鉄駅から、そのままっすぐ西に歩いてB子に相対したと思われる。吹き抜けに来るルートは東からの地下鉄駅からのルートのほかに、西からと北からがあるけれど、吹き抜けの中央に居たことと、相対していた向きの関係からB子は西からやってきたはずだわ。普通は、待ち人の来る方向を向いて待っているから、課長は西を向いていて、あたしが後を追って吹き抜けに来ても、課長の死角なので見つかる心配はない。そう予測したの。

もちろん、予測はあくまでも予測だから、外れることもあり得る。吹き抜けが近づくにつれて、ドキドキしてきた。もしも課長がこっちを向いていたらどうしよう。変装しているわけじゃないから、視認された瞬間にばれるのは間違いない。とすると、課長に気づかれないよう物陰からコッソリ観察するしかないわ。あたしは、あと1歩踏み出せば吹き抜けが視野に入る角で立ち止まった。そして、秒を数えながら、そおっと角から顔を突き出して、吹き抜けの様子を探った。どうして秒を数えたかって？　そりゃ何十秒もそんなこと

をやっていたら不審に思われるじゃない。人の往来の激しい所だから、せいぜい10秒がいい所だったわ。

1，2，3。最初の3秒で、課長を視認。

4，5，6。しかも向こうを向いているからこっちは死角だわ。あたしは予想が的中してにんまり笑う。

7，8，9。B子は居ない。

10。離脱。その時、あたしのすぐ横をヒールをコツコツ響かせた女性が通り抜け、視界をふさいだ。香水の匂いがほのかに漂う。女性の『青い背中』が視野の課長を覆い隠す。

その女性に1，2秒、気を取られたけれど、もと来た駅方向へ10m後退した。さて、とりあえず、B子はいなかったけれどどうしよう。課長が向こうを向いていたんだから、もう少し大胆に様子を見てもいいでしょう。そうか！　『背中』があったわね。人の流れをしばし観測する。幅5m程の通路の左側2mは、角を曲がって吹き抜けの方へ行く人の流れ。残りの右側3mの人は階段を上がって、JRの駅の方へ向かう。左側2mを歩いている人の中から背の高い大柄な男性を一人見つける。そしてその男性のすぐ後ろついていく。そう背中を利用した遁術ってところかしら。このまま、この背中に隠れて、ターゲットに接近して、どこかで反転離脱する作戦。

大柄の男性をピッタリ追走しながら、吹き抜けに侵入。背中の向こうに課長を発見。さらにその向こうにB子らしい女性を発見。大柄の男性はそのまま、吹き抜けの中央へと近づいていく。このままだと、接近しすぎるわ。どこかで離脱しないと……。そうだ、確か左方にお手洗いがあったわ。ターゲットまで3mという地点まで、大柄男性を追走し、そこから左へ離脱し始めた。そしてこの時に、たっぷり1秒間、B子を観察するつもりだった。

最初の0．5秒は予定通り、先週見たB子であることを確認する。この時B子は、青い服を着ていた。そして香水の匂いが風にのって拡散していた。ところが、0．5秒経過した時に、不意にB子が切れ長の目をあげてこちらを見た。その瞬間、聖女の眼は狼の眼に変

わった。そしてニヤっと笑った。え！　そんな馬鹿な、あたしに気づいていた？　顔をこわばらせたまま、あたしは、計画通りお手洗いに向かった。

女子トイレで左脳がフル回転する。B子はあたしに気づいていた？　あたしの気のせい？　いや、でも、あたしを見て笑ったわ。偶然？　そう言えば、最初に吹き抜けの様子を伺った時にあたしの視界を遮った女性は、青い服を着て、香水を漂わせていた。つまり、B子だったのだ！　ということは、あたしは不審者としてマークされていた？

１０分間女子トイレにこもった後に、おそるおそるトイレを出た。吹き抜けに課長もB子もいないことを確認して安堵した。この後に起きたことを考えると、本当は安堵どころではなかったんだけれど。これがB子との2回目の遭遇だった。

天災は忘れたころにやってくる。B子も忘れたころにやってきた。本当にやってきたのだ。

水曜日夕方、課長は出張中。あたしは、ぼーっとしながら、あたしと顔がそっくりな入来美帆のことを考えていた。似ているのがもし偶然でないとしたら……　異母姉妹の可能性が一番高いと思うの。つまり、パパが不倫をして、入来美帆が隠し子だった。それがママに発覚して、離婚の原因になった。そんなことってあり得るかしら。そう言えば、パパもママも、離婚の原因をはっきり教えてくれなかったわ。考え出すとキリがないけれど……　少なくとも不倫相手の母子家庭は随分違うはずだわ。だって、離婚してパパが居なくなってからのあたしたち母子家庭は随分寒々としたものだったから。だからといって、離婚せずに、形だけの４人家族の方が良かったかと言われると、何とも言えないわねぇ。離婚直前のあのギスギスした雰囲気は、二度と体験したくないわ。

電話が鳴って、あたしは妄想から現実に引き戻された。受付から

で、あたしに面会だという。相手は聞き覚えのない社名、人名だった。社名はＩＨＣ、名前は矢立奈緒美（やたてなおみ）。なんとなく、気味が悪から、ネットで検索してから応接室に向かおうかと思っていたけれど、どのみちすぐ会うのだからと思ってやめたの。応接室で待っていた女性は、Ｂ子だった！

「初めまして……　では、ないわね。３回目かしら、水上碧さん」

立ち上がったＢ子は、そう言ってはニヤっと笑った。血の気が引いていくのが、自分でもよくわかったわ。会社まで来るって、もしかして、ストーカー？　でもよく考えると、あたしの方がストーカーかしら？　課長を尾行したのは確かだし。でも３回目ということは、２回ともばれているってこと？　これってかなりヤバい状況では？

とりあえず、条件反射のように名刺を交換する。

「総合課の水上碧です。よろしくお願いします」

「ＩＨＣの矢立奈緒美です」

名刺にさっと目を通し、役職名を拾い上げる。『取締役社長』、え！　社長？

「お、お座りください。ご用件をお聞かせ願えますか？」

「あら、用件があるのはあなたの方じゃなくって？」

この言葉が決定的だった。あたしは完全に打ち負かされた。野球で言えば、１回表で敗北が決まったようなもの。

「それより、こんな趣味の悪い応接室じゃなくって、外の喫茶店でも、お話しません？」

高飛車な物言い、誰が見ても美人とわかるぐらいの美人。年齢は４０前後、そして、実務的とは対極の貴婦人のような装い。あたしは同意し、彼女についていった。

喫茶店に入ってコーヒーを注文する。この場合、割り勘かしら、とどうでもよいことが気になる。どちらにしろ、あたしの打てる手はほとんどない。ならば、策を弄さずに真っ向勝負あるのみ。あた

しの方から口火を切る。
「お言葉に甘えて、あたしの用件を言います」
「どうぞ」
と彼女は聖女の眼で答える。まるで、自分がけがれとは無縁だと言わんばかりね。
「あたしの杞憂だとは思いますが、大変失礼な事をお聞きいたします。矢立さんは、霧島課長の不倫相手ではありませんか？」
「あはは、面白いことを言うわね。その質問に答えるつもりはないわ」
「え、なぜ？　やましいから答えられないですか？」
「さあ、子供の質問、探偵ごっこをするような子供の質問には答えないということ」
「探偵ごっこ？　……確かにそうね。答えないのなら、なぜ私に会いに来たのですか？」
あたしは、食い下がった。
「たまたま、寄ったのよ。黒川の社長さんに用があって、それを済ませてから寄ったのよ」
「え！　うちの社長に用？」
「そう。社長さんと最後の交渉をしていたのよ。黒川を買収したいという会社があって、あたしはその仕掛け人。もう情報は公開されているから、あなたも知っているはずよ」
そう言えば、今朝、誰かが敵対的ＴＯＢがどうのこうのと言っていたけれど、丁度、電話に出ていて、詳しいことは聞けなかったけれど。
「本当に、うちは買収されるんですか？」
「実の所、５０（フィフティ），５０（フィフティ）ね。だからあたしが呼ばれたんだけれど」
「もし、買収されたらどうなるんですか？」
「そうね、スリム化して、つまり、リストラして、利益率が高くなったら、転売するのよ」

「り、リストラ？」
「利益をあげている光機課は２０％ぐらい削って、総合課は廃止ね」
「は、廃止ですか」
あたしは、力が抜けていくのを感じた。それからは、彼女の眼を見ることができなくなった。
「あ、水上さんは心配しなくてもいいわよ。光機課に移ってもいいし、別の会社に転職してもいいし。あたしの査定では、水上さんが他社に移った場合、中途採用という点を考えても、年収２０％アップは堅いわよ」
「査定までしているんですか？」
「当然よ。会社の価値は人材よ」
彼女は、コーヒーに形だけ口をつけた。
「さて、無駄話はこのくらいにして、あたしは行くわ。勘定はあたしが持つわ。子供に払わせるわけにはいかないからね」
こちらは、反論する気力すらなくなっていた。
「最後に、子供が喜びそうな情報を教えてあげる」
そう言って、彼女は昔の話をした。
「昔、霧島課長とは恋人同士だったの」
「え！」
「それをあの女が邪魔した。霧島を誘惑したのよ。奪われたものを奪い返しても、何も悪くはないわ。だから、それは不倫とは言わないのよ」
「で、でも、課長には一人娘がいます。かわいがっている一人娘がいます。不倫、離婚は、何の罪もない娘さんには酷です」
「罪なら、大ありよ。私は、あの女に堕ろせって言ったのよ。霧島には、堕ろさないならほっときなさいって言ったのよ。だけど霧島はあの女と結婚した。おかしな世の中よねぇ。避妊具つけたまじめな女が不幸になって、避妊具つけない尻軽女が幸福になるなんて」
あたしは、彼女の眼を見ずに、最後の問いをなげた。
「それじゃ、課長を取り返すつもりですか？　課長の家庭を崩壊さ

せてまで、課長を取り返す気ですか？」
「さあて、どうしましょう。今の霧島は腑抜けだからねぇ」
「腑抜け？　課長は、腑抜けじゃありません！」
あたしは、思わず大声で反論した。
「あら、かわいいこと。ご主人様に甘える子犬みたいね。いいこと、腑抜けでも私なら立ち直らせることができるわ。とにかく、子供の出る幕はないわ」
「子供ですか？」
「そうよ、子供よ。でも、勘違いしないで。あなたの仕事能力は買っているわ。そのうち、引き抜きの打診があるかもしれないから覚悟しておいて」
そう言って、彼女は去っていった。最後まで、彼女の眼を見ることはできなかった。でも、狼の眼をしていたのは確実だわ。その眼光に射ぬかれたあたしは、５分間立ち上がれなかった。

それから半年ほどは、黒川（うち）電子工房は、上へ下への大騒ぎだったわ。結局、ＴＯＢは失敗におわって、リストラの心配もなくなった。それでも、外部から役員が何人か乗り込んできたし、光機課では、５人引き抜かれた。最初から、これが彼女の目的だったんじゃないかと思える。幸い、総合課は無傷。課長、課長補佐に引き抜きの話があったらしい。あたしには、引き抜きの話は来なかったけれど、課長が防波堤になったことを後で聞いた。
課長の家庭がどうなったかは、不明。少なくとも、まだ、何かが続いている。とにかくプロジェクトＢ子は失敗だった。橋を壊す女にはとても歯が立たないわ。

白手袋とひっつき虫（その1）

月曜日、午後からD大学に行く。そう、ここの所、毎週月曜日、水曜日はD大学の研究室に行って仕事をしているの。今日は、白手袋試作2号機、略して白手2（ハクシュツー）の初試験日だ。この2カ月の努力が報われるかどうか？　あの子たちが喜んでくれるといいんだけれど……

2か月ほど前、丁度、学校が夏休みに入ってすぐのころ、あたしと桃姫は会社の応接室に呼ばれた。そこには、キューピー課長と背の高い男性と小柄な高校生の男の子がいた。男性の方は40前後で、フレームの細い銀縁眼鏡をかけており、少し知的な感じがする。結婚指輪はしてない。きちんと制服を着た高校生の方は長めのさらさら髪の色白の子。制服を着ていなかったら、かわいらしい女の子と間違われるのは確実。緊張のせいか口を真一文字に結んでじっとあたしの眼を見つめているけれど、右手はポケットに入れたままで、なんだか態度がでかいわ。課長が紹介する。

「こちら、うちの課のSEの水上とデザイナーの熱海です。そしてこちらは、D大学准教授の加古（かこ）先生と今回のエンドユーザーの花巻（はなまき）優君（ゆう）です」

先生が名刺を出しながら、早速、口を開く。

「霧島先輩、先生はやめてくださいよ。いつも通り加古君でいいですよ。水上さん、熱海さんよろしくお願いでいしします」

ノリのよさそうな先生である。課長を先輩と呼ぶところからすると、大学の後輩かしら。それにしても、高校生がユーザー？　桃姫もあたしもよく事情が分からないけれど挨拶をする。だって、わが社の仕事と高校生がどう関係するのか皆目不明。

皆が座ったのを確かめて課長が口を開く。

「さて、ごちゃごちゃ説明するよりも、見てもらった方が早いでしょう。優君、右手を見せてくれるかい？」

少年は無言でうなずくと、ポケットに入れていた右手を机の上に出した。白い手袋、多分木綿の手袋をはめている。はて？　手とあたしの仕事とどう関係するのか？　少年はあたしの眼をみている。さっきもあたしを見ていたけれど、どうして、桃姫じゃなくて、あたしの方ばっかり見るかしら？　しかも、その眼はあたしを試す眼、あたしに挑戦する眼だわ。

少年はゆっくり手袋をはずす。左手で右手の４本の指をつかんで、手袋を脱ぐとよりは手袋を引っこ抜くといった方が正しい。

そこにはふくよかな色白の右手があった。ただし、指がないの。正確に言うと、４本の指とそのつけ根あたりがない。親指と親指の半分ほどまでの手があるのだけれど、その先がない。初めて見る不思議なものに言葉が出なかった。少年の顔をみると、視線をそらして唇を噛んでいる。課長が事務的に説明する。

「我々が請け負った仕事は、優君の手を作ること。要素技術は加古先生の研究室にあるけれど、それは、あくまでも基礎研究のレベル。実際に使える義手を作ってほしい。ユーザーの『意思のままに』動く義手だ」

それって、まだ基礎研究の段階だと思うんですけれど……

加古先生の調子のいい演説が始まった。

「霧島先輩の言うように、研究室でやっているのは、どちらかというと基礎研究でして。今の技術でできる最上のものを作ること、実用的なものを作るのは得意じゃない。ましてや個々のユーザーに対してカスタマイズするのは、不得手でして……」

なんだか、やりたくないような仕事をこちらに押しつけているようにも聞こえるわ。でも、誉めてもくれた。

「実は、水上さんのことは、前から存じ上げているのですよ。確か、新潟での学会だったと思うのですけれど、素晴らしい発表をされたように記憶しています」

え！　学会？　新潟？　それって、あたしが大学院にいた時のこと？　確かに、あの頃は、神経活動を検知して機械を動かす研究をしていたけれど……　あの頃のいやな思い出、忘れてしまいたい思い出がよみがえる。そう言えば、新潟の学会でボコボコにされたこともあったわ、って言うか、その時の相手がこのノリの軽い先生だ！

「水上さんの才能で、うちの研究室の要素技術を統合すれば、それは、それは素晴らしいものができあがるのは確実です。というわけで、早速、週明けの来週から、うちの研究室に来ていただいて活動していただきたいのですが」

ええ！　あたしが行くの？　なんで、そんなに話の展開が早いの？

「ちょ、ちょとお待ちください。急にそんなこと言われましても……」

とあたしは、抗弁を試みようとした。だって、まったく経緯が分からないじゃない。少年が義手を必要としているのはいいとして、少年と先生の関係も分からないし、そもそも、なんでうち（黒川）がその仕事を受けないといけないのか不明。うちは、個人相手の仕事はしないし。先生の研究室でやれば済むことじゃない。そう抗弁しようとしたの。そうしたら、それまで、黙っていた少年がこう言った。

「水上さん！　この手を触ってみてくれます？」

「え！　いいの？　それじゃ、お言葉に甘えて」

両手で彼の手を包み込む。そうして本来の手があるべき断面をそうっとなでてみる。滑らかな肌は、若者特有のもちもちしたもので、特に大きな傷があるわけではない。眼を近づけてみると、うっすらと傷跡があるようね。ということは、先天的なものではなく、後天的なもの？　目線で少年に尋ねると、彼はコクリと頷いた。だんだん大胆になったあたしは、彼の手を揉みほぐすようにして、皮膚の中を探る。そうすると骨があるのが分かる。４本の指に対応した４つの骨がある。じいっと見ていると、そこから４本の白い骨が皮膚を突き破って伸びてきた。遅れて、皮膚の方が伸びて白い骨を覆っ

て、ほっそりとした指が出来上がる。今度は、指が次第に太くなっていく。きっと肉、筋肉がついてきたのね。少年には似合わないほど太くなる。そして最後に爪が根元からずずずっとのびる。正常な位置まで爪先が伸びて、ピタッと成長がとまる。少年は、眼を大きく見開き驚いている。ということは、あたしと同じ妄想を見ている、つまり、妄想幻術にかかったということかしら。少年が視線を向けてきたので、あたしはにっこりほほ笑んだ。そして、彼は今までとは真逆の柔らかな笑みを見せてくれた。決意は固まった。

「やらせてください。この水上にやらせてください」

「よし決まった。来週から碧ちゃんは週2日、先生の研究室にこもってやってくれ。それから桃姫は、ハードのバックアップをしてくれ。メカも大事だからな」

二人が帰った後、課長は経緯を説明してくれた。元々は、ある個人が加古先生の研究室に持ち込んだ話しで、受託研究と言う形でスタートした。所が、基礎研究レベルと実用レベルには結構ギャップがあって、課長に泣きついてきたということらしい。ソフトが一番問題だったのだけれど、ハードも苦戦していて、そこで、あたしたちに声がかかった。会社の方には直接お金が入るから、そっちの方は心配しなくてもいいらしい。

課長がわざと説明しなかった点をあたしは尋ねた。

「それにしても、それだけの資金を、よく個人が用意できたわねぇ。もしかしてあの子の親？」

「いや、違う。その個人スポンサーのことと、それとそもそもの発端である事故については、そのうちわかるだろうから、私からは説明しない」

そう言って、課長は話を切り上げた。どういう契約形態なのか不明だけれど、お金について心配しなくていいのなら、余計なことで頭を使わない分楽だわ。

桃姫と二人で行った緑豊かなキャンパスは、若者であふれていた。彼らのかわす言葉は、若者というよりも子供に近いわ。あたしは、その雰囲気を懐かしがりながら、キャンパス隅の古い建物に入った。研究室では、加古先生自ら今回のプロジェクトを丁寧に説明してくれた。製作する義手は、筋電制御義手の一種であり、筋肉の活動にともなう電位の変化を検出し、それに応じて義手を動作させるというもの。大きく分けて3つの部分から構成される。電位を検出し、そこから目的とする動作命令を抽出する検出識別部。動作命令をもとに、実際に指を動かすハード。そして動作の詳細をコントロールする制御部。筋電義手自体は市販品もあるぐらいだけれど、大抵は手首から先の手全体の義手。ところが、今回は動かすのは指だけで、その分コンパクトに作らなければならない。しかも子供だから、見た目と使い勝手は妥協できない。これまでの開発経緯と問題点を要領よく、しかも楽しそうに説明する。大学の先生とは思えないほど威圧感がない。ちなみに独身だそうだ（早速、桃姫が聞いたのよ。）

加古先生はさらに研究室の案内をしてくれた。どこにでもありそうな雑然とした実験室、沢山の義手のパーツ。関係しそうなパーツを先生が説明し、桃姫が質問を浴びせかける。それに先生はすらすらと答えていく。膨大な知識が桃姫の頭にサクサク吸い込まれていくのをあたしは唖然として見ていた。

研究室の院生は5人で、留学中の博士課程の学生1名を除けば、皆、修士課程。課長に泣きついた一番の理由は博士課程の学生がいないことじゃないかしら。今回のプロジェクトは修士課程の学生には無理ね。博士課程の学生ならいいものを作れると思うけれど、期限を守るという点では社会人にはかなわないでしょう。自分自身が学生だった時のことを考えれば当然ね。

あたしは院生部屋に机を一つもらって、全員に挨拶をする。皆に溶け込んで、のんびりした学生生活を楽しみたいものだけれど、今回はそこまでの時間的余裕はなさそう。

プロジェクトの第一ステップは筋電信号のデータから埋もれている動作命令のパターンを抽出すること。そのためには、本人（花巻優君）に来てもらってデータを採る必要があり、メールで都合を問い合わせる。筋電信号の取得はやったことがないので、誰かに手伝ってほしいと先生に相談すると、先生自らが手伝うと申し出で、あたしはただただ恐縮してしまった。

研究室にやって来たのは、例の少年、花巻優だけではなかった。もう一人、髪の長いぽっちゃりした少女もついてきた。

白手袋とひっつき虫（その2）

その女の子の印象を一言でいうと、愛らしい西洋人形。一見して高級と分かる白いワンピース、ふくよかな胸、少し緊張した大きな目と厚く小さな唇。その唇は紅をつけていなくても十分あかく、優君と同じ年頃の子だとわかる。

女の子はあたしと眼が合うと、ポケットに右手を入れた優君のその肘から慌てて手を離した。そして、名乗った。

「はじめまして、舞（まい）です。優ちゃんがお世話になっています」

それを聞いた優は顔をしかめる。姓を名乗らないし……ということは、この二人の関係は姉弟かしら。

「水上、水上碧です。今度、優君の手を作ることになりました。よろしくね。えーと、それで舞ちゃんは……　優君のお姉さん？」

それを聞いて優はずっこけた。舞はまた優の右肘をつかんで、もじもじしている。ということは、ハズレね。とすると……

「それじゃ、妹さん？」

「あははは。妹か、それはいいね」

と優は大口をあけて笑う。舞はその顔を見ながら顔を赤くしている。

「妹でも、姉でもありません。優ちゃんの幼なじみの五色舞（ごしきまい）です」

優が反論する。

「いや、幼なじみでもない。舞はおれの奴隷や」

「奴隷？　優ちゃん！　いくら物理部の部長だからって、奴隷は酷いんじゃない？」

ほー　この子たち物理部、高校の物理部なんだ。

「舞！　『ちゃん』はやめろ、今度、『ちゃん』をつけたら、即退部だぜ。部長の権限で舞を退部にする」

舞がシュンとする。

「はい、わかりました、優ちゃん」

全然、わかっていないみたい。

「とにかく、わかったわ。要するに二人は恋人同士ね」
と言うと、二人が同時に（ユニゾンで）
「違います！」
とむきになって答えたので笑えた。
「わかったわ、二人は兄弟でもないし、主人と奴隷でもないし、恋人でもない、どれでもない関係だけど……　幼いころからの知り合いで、同じ高校、同じ物理部の同級生ね」
「まあ、そんなとこ」
「で、同級生の舞ちゃんが、どうして、ここにいるの？」
「えーと、それは……」
舞が返答に困っている。そして、まだ優の右肘をつかんでいる。あたしは、その手を見ながら言った。
「わかった。舞ちゃんはひっつき虫ね」
「えー、ひっつき虫？　私は虫じゃないよー」
あのー　ひっつき虫って虫じゃないんだけど。

「とにかく、今日は、優君とあたしは『いいこと』をするから、おとなしくしていてね」
「え～　私もその『いいこと』の仲間に入れて！」
しびれを切らしたらしい優が不届きな発言をする。
「舞はあっち行って、さあ、オバサン、早く始めようぜ」
「優君、今、オ・バ・サ・ンって聞こえたような気がするんだけれど、あたしの気のせいよね～」
睨みを利かせると優は視線を外した。
「き、気のせいです」
「そうよね。２８歳のお姉さんを捕まえて、オバサンはないわよね。あたしのことは『お姉さま』と呼びなさい。二人とも分かった？　返事は？」
「ハイ、お姉さま」
「はい、一回り年上のお姉さま」

「優！　一言多い」
ポカ。

あたしは加古先生に教えてもらいながら、電極を優の右手に貼っていく。その時、水色のリストバンドを外してもらったのだけれど、ウェイト付でびっくりした。優はトレーニング用と言っていたけれど、何のトレーニングかは不明。

小さな金属電極を全部で１６個ほどテープで留めていく。電極の先はアナログフィルター、アンプ、デジタイザー、コンピューターへとつながる。最初に力を抜いた状態にしてもらって、バックグラウンドを測定。さらに、指を一本ずつ曲げてもらう。もちろん、人差し指から小指の４本はないから、曲げるように意識してもらう。それから、曲げた状態から伸ばす動作、同時に曲げる動作、曲げたまま力を入れる、力を抜く、そういった動作をしてもらう。ＬＥＤの点灯を合図に動作を開始し、また同時にデジタイザーが信号の記録を開始する。およそ3秒間、信号を記録し、すぐにコンピューターのモニター上にその波形が表示される。加古先生が時折、解説する。すべての動作の基本は、関節の両側の筋肉の収縮と弛緩で、片方の筋肉が収縮、もう一方が弛緩して、関節が曲がる。関節を伸ばすときは、２つの筋肉の収縮と弛緩が逆になる。指も同じで、義手を動かすには、各動作ごとにこの２つの命令（意思）を信号から読み取らなければいけない。目標は明確だけれど、実際の信号は単純ではない。例えば、ある電極の信号は、人差し指を曲げる時も中指を曲げる時も大きく反応するとか、同じ動作でも、ある時の信号の波形と次の同じ動作の時の信号の波形が異なるとか、電極の位置がほんのわずかずれるだけで信号の大きさが変わったりすることもある。

１時間ほどかけて一通りの動作の信号を見てみる。それぞれの指に近い電極の信号が大きく反応するのを確かめる。電極によっては、信号が非常に小さかったり、パターンがないように見えるものもあ

る。そういう電極は使わないことにする。それから今度は、一つの動作を１０回繰り返して波形の平均を計算する。次に電極を前後左右に２ｍｍずつずらして波形を見る。さすがにこのころになると優は疲れてきたみたい。一方、舞はとうに興味をなくし、マンガを読んで、時折、くつくつくつと笑っている。気が散るから、あっちに行くか、静かに勉強しないさいと言ったら、勉強道具を持っていないと言う。とりあえず、紙と鉛筆を渡して、これで何とかしなさいと言う。

途中からいなかった加古先生が、コーヒーとまんじゅうを持って戻ってきたので、お茶にする。饅頭はなぜかアメリカ土産らしいが、よく見るとＭａｄｅ　ｉｎ　Ｊａｐａｎと箱に書いてある。

「先生、これ日本のものですよ」

「あ、本当だ。同僚からのもらいものだったから気がつきませんでした」

「賞味期限とか大丈夫ですか？」

「えーと……　箱には１１／１２／１０と書いてあって……　２０１１年１２月１０日だから、まだ大丈夫ですよ」

そう言われて、あたしたちは安心してむしゃむしゃ食べたの。でも、後でよく考えると、２０１１年１２月１０日ではなく、１１月１２日、２０１０年だったと思うわ。だって、あの後、あれだもの。あれ。

夕方までに、なんとか必要なデータをとった。優もあたしもふらふら。とにかくデータの数と種類が多い。優の方は当面お役御免だけれど、あたしの方は、明日からのこのデータの山と格闘しなくちゃならないわ。

お腹がすいて死にそうと言っている優と一食ぐらい食べなくても平気だと言う舞とあたしの３人で、大学の正門の向かいにあるファ

ミレスに行った。
「お姉さまがご馳走するから、何を注文してもいいわよ」
「ラッキー。やっぱ、肉、ステーキがいいなあ」
と優がメニューをほとんど見ないで決める。あたしはハンバーグ定食を選ぶ。
「舞は、焼き魚定食がいいわ」
「また、おじん臭いメニューか」
と優が舞を冷やかす。そして、何を思ったのか優が注文を変えた。
「あ、やっぱり、俺、ステーキやめにして、カレーライスにする」
「優君、遠慮しなくていいわよ」
と言うが、彼は聞かない。
あたしたちは、カレーライス、焼き魚定食、ハンバーグ定食を食べながら、高校の物理部の話、あたしが高校生だった頃の話、とりとめもない話をした。実際の所は、舞の独演会に近かった。ただし、それも、最初の１０分程だけだった。そのうち、舞の言葉が少なくなり、なんだか、顔が青ざめて来て、とうとう、気分が悪いといって手洗いに行ってしまった。
「舞ちゃん、最初はあんなに元気だったのに、どうしちゃったのかしら?」
とあたしが呟くと、優がゆっくり話し出した。
「うーん、多分、お姉さんの食べているハンバーグを見て気持ち悪くなったんだと思う」
「ハンバーグ?」
「ハンバーグって挽肉で作るだろ。それで、俺の指が挽肉になったのを思い出したんだと思う」
「指が挽肉って、どういうこと?」
優は、白い手袋をした右手を見ながら説明してくれた。
「おれの、指、シュレッダーで挽肉になったんです。小学校に行く直前の幼稚園生だった頃、いたずらで描かれた絵を処分しようとして、親父の書斎に二人でこっそり忍び込んで、シュレッダーを使っ

たんです。そしたら、絵と一緒に俺の指まで処分されたんです……
それを見ていた舞は……　それ以来、肉とか挽肉がダメになって、食べられないんです。ま、俺は平気で、ステーキとか好きですけど、舞はダメなんです」
「ああ、それで、さっきステーキを注文しようとして、やめたのね。あたしがハンバーグを頼んだのは迂闊だったわ。言ってくれればよかったのに」
「いや、おれも、ハンバーグだったら、大丈夫かと思ったんですけど、ダメみたいですね」
優は左手で持ったスプーンを置いて、話し出だした。
「絵を処分するためにシュレッダーを使って、その結果、指がなくなったことに舞は責任を感じているです」
「そんな、幼稚園児が責任を感じるの？」
「うーん。多分、小学生のころは忘れていたと思う。俺も忘れていたぐらいですから。でも、中学生のころ、あるきっかけで、舞も俺も、絵とシュレッダーのことを思い出したんです。舞がひっつき虫になったのはその時からです」
「そのきっかけって？」
「お姉さんだから話しますけれど、誰にも、特に舞には言わないでくださいよ」
そう言って、声を落として話し始めた。
二人が中学1年のころ、夏の夕方、帰宅途中の神社で、舞が強姦されそうになった。それを偶然見かけた優は、最初は、ナイフを持った大男が怖くて、物陰から様子をうかがっていた。そして、雷にうたれたように突然、思い出した。同じ類のことが幼稚園であったことを。幼稚園の悪ガキが、じゃんけん、いわゆる野球拳で、舞を裸にして、泣いている舞の絵を描いた。それをコッソリ物陰で彼は見ていた。その絵をシュレッダーにかけると言いだしたのは彼。本当は、その絵が見たくて、そういう口実を作った。強姦されそうな舞を見て彼は気ついた。コッソリ物陰から幼稚園児の舞の裸を見て

いた自分は、悪ガキと同罪だったと。そして、その時と同じ過ちを犯そうとしている。ここで、その罪を償わなければ。そのためには、自分の命さえ惜しくはないと思った。そう思うと、自分でも驚くほど大胆に、冷静に対処できた。背後から男にコッソリ近づいて、金的を思いっきり蹴り上げて、舞をつれて一目散に逃げた。舞の左腕を優の右腕で抱え込んで引きずるように逃げた。それ以来、舞は隙があると優の右肘をつかんでいるそうだ。

「というわけで、本当は、舞は責任を感じる必要はないんだけど、こういった事情は恥ずかしくて言えないんだ」

「そうねぇ。なんとなくわかるわ。その気持ち。やましさと恥ずかしさと、今更っていうところかしら」

「うん、そうそう、そんな感じ。誰にも言ったらダメだぜ。あ、ヤバい、お腹が……　ちょ、ちょっとトイレ行ってきます」

そう言って、優は慌ててトイレに行った。そして、彼と入れ替わりに舞が戻ってきた。すっきりした顔をしている。

「長かったわね。どうしたの？」

「ちょっと……　お腹か急にぎゅるぎゅる言い出して、トイレに駆け込んで出すものを出してきたの。もう大丈夫」

「え！　あたしがハンバーグを食べるのを見て、気分が悪くなったんじゃないの？」

「ハンバーグ？」

「そう。挽肉で作られたハンバーグ見て、シュレッダーの件を思い出したんじゃないの？」

「シュレッダー？　ああ、優ちゃんの右手ね。そう、今でも胸が痛むわ。絵を跡形もなく処分してくれった頼んだばっかりに、あんなことが起こったのよ。今から考えれば、どうでもいい絵だったんだけれど」

「どうでもいい絵？」

「そう。幼稚園の時、園長先生にこっぴどく怒られたの。悔しくって、園長先生を鬼婆（おにばばあ）にした絵を描いたの。描いた後で、怖くなって、

優ちゃんに頼んだの。ばらばらにしてほしいって」
あれ？　さっき優は、裸の絵つて言ってたけど、話が違うわ。舞は淡々と話を続ける。
「それで、優ちゃんがお父さんのシュレッダーなら完璧だってことになって、ああなちゃったのよ。責任を感じていなって言えば、ウソになるけれど、起きてしまったことは、しょうがないわよね。もうずいぶん昔の話だし。私が、そのなんだったけ、ひっつく虫？になったのは、優ちゃんが、強姦されそうになった私を守ってくれたからなの。中学生のころよ。それ以来、優ちゃんはいつも家まで送ってくれるようになったわ。優ちゃんたら、あの後、空手道場に通うようになって、今もウェイトを手首、足首につけて、ひそかに鍛えているのよ。さっき、電極つける時にリストバンドを外したでしょ。あれがそのウェイト。そうやって鍛えているのってかわいいと思わない？」
「かわいいと言うか……　うらやましいわ。若いっていいわね」
「話がだいぶ脱線したけれど、トイレに行ったのは、お腹がいたくなったから」
「優君もトイレに行くって言ったし、もしかして、食あたり？　何か変なもの食べなかった？　ここで食べているのは、二人とも違うメニューだし」
「あ、もしかしたら、おやつの時に食べた、怪しげなまんじゅうは？　賞味期限がどうとか言っていなかった？　優ちゃんも食べていたわ」
「そう、それ。　……それって、あたしも食べたわ！」
優がすっきりした顔になって帰ってきた。
「うー　すっきりした。すっきりしたら、なんか食べたくなってきた」
「そうね。それじゃデザートにしましょうか？　メニューから選んで」
メニューを見ている時に、それはやってきた。下腹部に台風が発生

したみたい。発達しながら進路を下にとった。
「あ、あたしも、と、トイレに行くから……　て、適当に頼んでおいてくれる？」

なかなかトイレから出られなかった。戻ってきたとき、二人は、1つのグラスに残ったチェリーを柄の長いスプーンで取り合っていた。どうやら、二人で一つのパフェを食べたのね。かわいいわねぇ。この二人が恋人じゃなかったら、逆立ちしてもいいわ。あたしに気がついた舞が気まずそうに申し出た。
「お姉さん、すいません。あんまり遅かったので、お姉さんのチョコレートパフェを二人で食べてしまいました」
「ということは、たった今、空になったそれは、あたしの分？」
「それじゃ、あなたたちの分は？」
「ええと、私たちの分、2つは、もう、とうに食べて、下げてもらいました」
「と言うことは、それぞれ、1．5杯分、食べた計算になるわね」
あたしは、睨みを利かせた。優が口をはさむ。
「いや、俺は、1．3杯分で、舞が1．7杯分です」
舞が反論する。
「ええ、優ちゃんが1．4杯分で、舞が1．6杯分よ」
「どっちにしろ、舞が沢山食べたことには変わりないぜ」
……もしかしたら、この二人は、恋人じゃないのかもしれない。幼なじみがそのまま体だけ大きくなって、頭の中身は小学生のまま。小学生が好き合っていても、恋人って言わないじゃない。

その晩、あたしは帰宅途中のコンビニでチョコアイスを一箱買った。

白手袋とひっつき虫（その3）

最初のデータ採りの翌日、D大学に行くと、加古先生は不在だった。学生によれば、なんでも、体調を崩して休みらしい。一応、夏風邪ということになっているけれど、本当の所は例のまんじゅうのせいだわ。

今年の夏は節電ということで、大学内の冷房の設定温度は28度厳守であった。じっとしていると汗が出てくる。PCが動き出すとなおさらだった。大学の生協で買ったロゴ入りのタオルを首に巻いて、仕事（データ解析）に集中する。

まずは、16電極、4指、4種の合計256の生波形をざっと見てみる。実は、さらにデータはある。繰り返した分、電極を少しずらした分だわ。データが多すぎてイメージが頭に入らない。そこで、1画面に16電極の信号を表示し、画面を順次表示していく。次に1電極の信号、4指、4種の合計16の波形を1画面に表示する。そういう具合に、表示するまとめ方を色々変えてみる。色つきの表示、鳥瞰図表示、等高線表示と多種多様な表示をして、データのイメージを頭に入れていく。正確には、頭にいれようと努力したと言った方がいいわね。とにかく、イメージを頭に焼きつけるのが大事。

目的は、波形から正しい指令を抽出すること。ある筋肉を収縮する指令を出した時の特徴がどの電極にどのように現れるかを調べ、対応を同定していく。もちろん、実際には指がなく、筋肉の大部分もないので、動かした筋肉からの信号を見ているわけではない。あくまでも、本人が筋肉を動かそうと思った時の神経活動波形を捉えるのだから、対応がはっきりしないものもある。

もっとも単純な指令の抽出方法は、ある電極の波形に注目して、その波形の値（電圧）が、あらかじめ決めておいた値、これを閾値（しきいち）と言う、を超えた時に指令と見なす方法だ。例えば、安静時には、0　V（ボルト）から0．1　Vで揺らいでいる信号が、筋肉を動かすよう意

識した時に、１　Ｖまで上昇したとする。この時、閾値を０．５Ｖとして、それより大きな信号が来た時に、指令が来たと判断して義手を動かすようにすればよい。こうしておけば、たまたま、信号が２　Ｖまで上昇した時でも、同じように指令と判断できるし、雑音がひどくて信号が０．４　Ｖまで上昇しても、指令とは判断せず、誤動作を防ぐことができる。この方法は単純なので、複雑な状況には対応できないことがある。例えば、電極の位置がずれて、信号の大きさが小さくなった場合、下手をすると閾値を超えず、指令が認識できない。それを防ぐために閾値を小さくしすぎると、今度は、雑音で閾値を超え、本来ないはずの指令と判断してしまうことがある。

　雑音の影響を抑えるには、何度も判断をするとよい。例えば、１秒間、信号を観察し、１秒間ずっと閾値を超えていれば、指令と判断するようにしておけば、雑音で０．５秒間閾値を超えても、指令と間違うことはない。こういった技法は一般的なもので、後は、複数の信号、異なる時間での信号の関係の組み合わせでもっと繊細な判断も可能だわ。

　データ解析を始めて2日目、一人ＰＣの前に座って黙々と作業を進める。外見上は静かな、でも、内面は嵐のようにデータの海に翻弄された時間が過ぎていく。時折、加古先生が様子を見に来る。というより寒いおやじギャグを披露しに来る。

「水上さんの周りには、多くの人が集まってくるのはなぜでしょう？」

「さあ？」

「皆（みな）ｃｏｍｉｎｇ、つまり、みなかみ（んぐ）ですから」

「……」

「うちでは、何をどう研究しているでしょうか？」

「さあ？」

「『義手』をエネル『ぎっしゅ』に研究しています」

「……」
「会社から電気『モータ』ーを『もーた』ら、学生に『もーた』くさんと言われた」
「……」
室内は零下３０度の寒さで、暖房が欲しいぐらいだったわ。

３日ほど、データと格闘しながら、テストプログラムを作成した。プログラムは幾つかのモジュールで構成される。電極の信号や、判断、指令をモニターするモジュール。信号の閾値で指令を判断するモジュールと、判断方法をパラメータで変えるモジュール。動作指令を受け取って加古先生にもらった機械の１本指を動かすプログラム。擬似的なテスト信号を生成するモジュール。モジュールの動作（処理）の履歴を記録し比較するための解析モジュールである。ハードは電極データを取り込む回路、プログラムを動作させ、１本指に指令を送るＰＣ、１本指を駆動する駆動回路と機械指のメカがある。擬似信号でバグ取りと調整（チューニング）をしながら予定通りの動作をするまで仕上げる。一通り完成したので、電極を２つ自分の人差し指の付け根に貼って試してみる。
「さて、動かすぞ。自分の指を曲げると……　あ、動いた！」
ぎこちないながらも、あたしの指の動きに１秒ほど遅れて機械の１本指が動く。最初は、指が十分曲がらなかったけれど、閾値や他のパラメータを変えて試行錯誤した結果、指が曲がったり伸びたりするようになった。あたしは嬉しくなって加古先生を呼びに行った。

「ほう、もう動いたんですか？　この短期間で、ここまでできるとは、さすが水上大先生ですね」
いつから、あたしは大先生になったのだろう？
「では、僕が大々先生の貫録を見せますから、ちょっと待っていてください」
いつから、加古先生は大々先生になったのだろう？

たっぷり10分待たされた。戻ってきた大々先生はUSBメモリをPCに入れて、幾つかファイルをコピーして、あたしのプログラムを開いた。

「ちょっと、大先生プログラムをいじらせてください。あ、オリジナルの方はちゃんとコピーをとっておきましたら、ご心配なく」

そう言って、あたしのプログラムを読み始めた。時々、つぶやく。

「ほお、こういうデータ構造を採用したのですか……　ふーむ、これは凝っていますねぇ……　コメントもちゃんと入っているし……

　これは、バグ取り用ですかねぇ……　あ、だんだん疲れて来ましたね……　性格が表れていますね……」

あたしは恥ずかしくなってきた。

「この辺ですかね……　あ、あった、あった、ここだ。それじゃちょっと細工させてもらいます」

そう言って、大々先生は、キーボードをたたき始めた。プログラムを読むスピードも並みじゃないし、書く方も速い！　もしかしたら大々先生は本物の天才かもしれないわ。

「できた！　それじゃ、本番行きますよ。水上大先生、指を動かしてみてください」

何が起きるのかわからなかったから、あたしは、恐る恐る指を曲げてみた。機械の指は先ほどまでと同じように曲がった。その瞬間、PCのスピーカーから

『カモーン・ベイビー！（Ｃｏｍｅ　ｏｎ　ｂａｂｙ!）』

と録音した声が聞こえてくる。一瞬、何のことかわからなった。そう、1本指の動きがまるで、カモーン、こっちへおいでとやっているように見えるだわ。伸ばした指をもう一度曲げてみる。

『カモーン・ベイビー！（Ｃｏｍｅ　ｏｎ　ｂａｂｙ!）』

加古先生の録音した声が、間抜けに聞こえる。あまりに間抜けすぎて笑ってしまった。

「あはは……　さすが、先生、いや、大々先生ですね。貫禄があり

ます」
と思いっきり皮肉を言うが、大々先生には通じない。
「そうでしょう。面白いでしょう。いやー　喜んでいただけて5回も録音しなおした甲斐がありました」
「5回ですか……」
ほんとにこの先生は大学の先生かしら、と疑問を抱いたわ。その時、指を動かしていないのに、PCのスピーカーから
『カモーン・ベイビー！　カモーン・ベイビー！　カモーン・ベイビー！　……』
と3秒おきに音声が流れ始めた。
『カモーン・ベイビー！　カモーン・ベイビー！　カモーン・ベイビー！　……』
「加古先生、これって、無限ループじゃないんですか？」
「そうかもしれません。でも無限かどうかは、どうやって確かめましょう。無限まで数えますか？」
「……」
その時、部屋に学生が入ってきた。ひょろっとしていて修士1年の中では一番まじめそうな学生だわ。
「加古先生、ちょっと、よろしい……」
『カモーン・ベイビー！』
先生が振り向いて、何か？　という顔をする。顔が引きつった学生は
「あ、えーと、お、お取り込み中のようですから、後で先生の部屋に伺います」
と言って、すぐに部屋を出ていった。
『カモーン・ベイビー！』
なんだか、ものすごい誤解をしたまま出ていったような気がする。
『カモーン・ベイビー！』

後日、1本指のテストをするために、優君を呼び出した。舞もついてきた。また、この二人かぁー　というのが最初に浮かんだ言葉。

でも、もしかしたら、面白いかも、と思い直した。優は装置を見て感想をもらす。

「机いっぱいのシステムで指1本ですか」

がっかりしたのが、明らかだったわ。

「そう言わないで。1本ができれば、4本はすぐだから」

「え、そうなんですか？　それじゃ、早くやりましょう」

実際の所、4本までは速いのだけれど、その先が結構、大変。

あたしの指で試験した時と同じように電極をつける。折角だから、舞に手伝ってもらう。

「えー　あたしがやるのー」

と口では嫌がっているけれど、ウキウキしているのは一目瞭然。

「立っている者は親でも使えって言うじゃない」

「えー　あたしはお姉さまのママじゃないわ」

「……　いいから、とっとと電極をつけて」

舞は、緊張しながら、優の右手をそうっと両手で触る。まるで紙風船を潰さないようにつかもうとしているみたい。それを優は不思議そうにみている。もしかして、この二人、手が触れ合うのは初めてとか？　ひとしきり優の肌触りを確かめると、舞は、10個の電極を手際よくつけていく。

筋肉があるわけじゃないので、信号は弱い。そこで、複数の電極の信号を処理して総合的に判断する作戦だ。優に動かしてもらって、機械指の応答を調べる。データを見ながら、あらかじめ用意してあったパラメータをいじって、もう一度、指を動かしてもらう。これを何回も繰り返しながら一番いいパラメータを探す。舞は、最初は、優の後から電極を覗き込んでいた。時々、優のサラサラ髪をいじっている。優が気がつかないのは当然としても、舞自身も意識していないように見える。母親が赤ん坊の頭を無意識に撫でるのと同じかしら？　そのうち、舞は飽きてきて、あたしの後ろに立って、今度は、あたしの作業を観察し始めた。

「お姉さま、これって、C言語？」
「そうよ。正確にはc＋＋（シープラプラ）よ。舞ちゃんはcを使ったことあるの？」
「ええ、素数の計算をするのに、この間、使ったわ」
「素数？」
「そう。学校祭で、物理部の出し物の中に、素数の計算があるの。誰が一番たくさん素数を計算できるかって」
「へぇー　そんな難しいことやるんだ」
「うん、他の子は、もう計算を始めているのだけれど、あたしは、まだ試行錯誤しているところ」
「試行錯誤？」
「うん。単に計算するだけなら、プログラムを走らせて待っていればいいのだけれど、プログラムを工夫すると速くなるの。それで、今、もう少し工夫できないか考えているの」
「舞ちゃんて、もしかしたらＳＥになれるかもしれなわよ」
「ＳＥ？」
「あたしみたいに、プログラムを作ることを仕事にしている人をＳＥ、システムエンジニアって呼ぶのよ。ＳＥの条件の一つは、プログラムの工夫ができることだから、舞ちゃんはＳＥの才能があるわ」

少しずつ、機械の1本指が優の意思を反映し始める。つまり、指令の判断はそこそこ正確になった。ところが、問題は、応答が遅いこと。信号が落ち着いてから判断するから、どうしても1秒は遅れる。さらに、モーターの始動で時間がかかる。今の所、ＰＣ上のプログラムの実行速度は問題ないけれど、実装するＩＣだと、プログラムの実行速度も問題になるかもしれない。遅れについては優も不満そうだ。
「姉さん、これは、ちょっと遅すぎるぜ」
「遅いのは、分かっているわよ」
「これじゃ、鼻くそもほじれないぜ」

「は、鼻くそはないんじゃない！　そんなことのために義手を作っているんじゃないわ！」
と思わず、熱くなって叫んだ。
「あ、ごめん。冗談です」
と素直に反省する。
「……　ねぇ、義手が完成したら、優君は何が一番したいの？　それができることを目標にして作るわよ」
「一番したいのは、決まっているぜ。舞の……」
優は口ごもった。すかさず舞が聞いてくる。
「舞に関係あるの？　義手で何をしてくれるの？　教えて！」
「いやー　そのー　今のは無し。パス、パスにしておいて」
「えー　パスなんてあり？」
舞の不満は収まりそうにないけれど、今は優を追求しない方がいい気がする。
「舞ちゃん、それより、少し手伝ってくれない。応答を速くするにはプログラムの大幅改造が必要なの。その改造を手伝ってほしいの」
舞ちゃんに簡単な関数、数字を大きさの順に並べ替えるプログラムを作ってもらうことにする。その間には、あたしは、プログラムを改造する。ついでに優君にも頼むことにした。部屋の隅の机に連れて行って、はんだ付けの道具一式と、３本分の機械指を渡して、配線をお願いする。
「物理部なら、簡単でしょ」
「舞が手伝ってくれると楽だけど、まあ、これぐらいなら一人で何とかできます」
そうなのだ、右手の指がないから、はんだ付けも、易しくはないわ。あたしとしたことが、余計なことをしたかしら。素直に反省する。
「優君、ごめん。右手が不自由なことを忘れていたわ」
「姉さん、気を使わなくていいよ」
「もしかして、義手で一番したいことってはんだ付け？」
「うーん、そうですね。そうすれば、舞を奴隷として使わなくて済

む。けど、本当にしたいのは……」
「本当にしたいのは？」
「えーと。姉さん、ここだけの話なんだけど……」
優君は声を落として続けた。
「本当にしたいのは、舞の胸をモミモミしたいんです」
あたしも声を落として応じた。
「えー　モミモミ？」
「そう、モミモミ。最近、舞の胸がぐんぐん大きくなってきているんです。それを見ていると、ないはずの右手の指でモミモミして、その感触を味わいたくって仕方ないんです。なんだか、まだ指がついているような気がするんです。不思議でしょう？」
「不思議じゃないわよ。なくなった部位が、まだあるように感じたり、その部位の感覚があるように感じることはよくあるらしいわ。優のモミモミの要望、姉さんが実現してみせるわ。あ、でも、舞ちゃんがオーケーするかどうかは別よ。万が一オーケーをもらえなかったら、あたしの胸をモミモミしてもいいわよ」
「え、遠慮しておきます。後が怖いから」
「そう？　舞ちゃんの胸よりあたしの方がモミがいがあると思うんだけれど……　モミがい、モミがい？」
あたしは、はっとした。大事なことを忘れていたのだ。
「モミがいって、感触、感覚よね。当たり前だけれど、義手には感覚はない……　いや、センサー、圧力センサーを指先につければ、触覚代りになるかしら？」
そもそも感覚は、脳への神経を用いた情報伝達。今の技術で、複雑な情報を神経に伝える術（すべ）はない。感覚がないということは、どこまで指を動かしていいかが分からない。もちろん見ていればいいのだけれど。いつでも見ているわけにはいかない。暗闇で見えないことだってあるわ。下手をすると胸をモミ潰してしまうこともあるかもしれない。

その日中に４本の指を動かし、応答を速くした。怖いくらいすんなりいった。次の問題は、指の感触をどうするか。感触があれば、フィードバックができる。それがなければ……　難問だわ。

白手袋とひっつき虫（その４）

本日も、キャンパスは、ギラギラ太陽の快晴なり。

ある者はいそいそと前だけを見て歩き、ある者達は大声でふざけている。かと思うと両手にダンベルをもって走りすぎていく集団もいたわ。若者たちに共通する点は、だれもギラギラ太陽を気にしていない点。一方、あたしは真っ黒な日傘を差し、常に太陽光線の向きを陰で確認しながら歩いていた。それでも、今朝は、学生のころに愛用した革のポシェットを引っ張り出してきて少しだけ学生の気分を取り戻す。ポシェットの大きさと形は、飯盒（はんごう）に似ていて、たっぷり入れられるのがいい所。細い革ひもで首から前にぶら下げると、小物がすぐ取り出せて、ウェストバック代わりになる。さて、今日は、白手袋試作１号機、略して白手１（ハクシュワン）のテストだ。

前回のシステム、１本指と急きょ追加した３本を合わせた４本は、原理を確かめるものだったわ。だから、優君が表現したような机いっぱいのシステムでも問題はなかった。だけど、実際に使えるような義手にするには、コンパクトにしなければならない。まさか、義手を使うために机を背負っているわけにもいかないしね。

そんなわけで、初めて手に装着するテスト機（白手１）を作った。と言っても、機械指と測定系以外の電源や制御用ＰＣは外付けでケーブルで繋がるので、全体の物量は前とほぼ同じ。作ったのは桃姫。苦労したのは２点、電極と肌の接触方法が一つで、もう一つはセンサー。高校生だから、体育や何かで、手を洗ったりして義手を外す機会は多い。一方、電極と皮膚の十分な接触を確保するためには、テープとか電気を通すゲルを使いたいのだけれど、脱着頻度が多いとそれもかなわない。そこで、機械的な接触で頑張ることにする。弾力のあるゴムで電極を押し付ける方法とバネ付の電極を使う方法をためす。今回のもう一つの課題はセンサーだわ。指の感触と指の

位置（曲がり具合）を直接伝えられように桃姫が考えた方法は、梃（てこ）とクランクの利用。指が曲がるにつれて、幾つかの金属棒が動いて、最終的に手のひらの先の方に押しつけた金属棒がわずかに動く。これが指の位置のモニターとなる。装着者は、このわずかな動きで指がまがっているか、伸びているかを判断する。さらに凝っているのは、モータによる指の屈曲とは別に金属棒と連動してほんのわずかに指が動く点だわ。これは、いわば、第４の関節。こうして触覚を擬似的に再現できる。つまり、この第４関節の動きやすさが指が触れている物体が堅いかやわらかいかを伝えてくれる。

少し日焼けした優君と舞ちゃんがやってきた。なんでも同級生たちとプールに行ったらしい。今日は桃姫の出番だ。電極の接触の具合、擬似触覚を優君の感想を聞きながら調整していく。擬似触覚の方は原理的には問題はないようだわ。でも、本人の慣れや訓練も大きな要素だから、しばらく様子を見ることにする。問題となったのは電極の接触。綺麗な信号を取ろうとしてきつくすると、電極の型が皮膚に残り、短時間ならともかく、一時間以上は耐えられそうもないと優がうったえる。かと言って、ゆるくすると、雑音が大きなり、誤動作を誘発する。最終的に、うまくいきそうだったのは、紐で手のひらと電極を縛ってしまう方法だ。ようするに靴紐みたいなもの。あれやこれややっていたら、あっという間に遅くなったので、作業はお仕舞いにして、皆で夕飯を食べに行くことにした。

途中から一緒に作業していた加古先生が
「駅前のベトナム料理屋に行きましょう。この間、水上さんと行ったところですよ」
と言うと、すかさず、桃姫が茶々をいれる。
「あれ？　加古先生、意外に手が早いんですね」
「そりゃー、もう、ボクシングをやっていましたから。速いですよ、僕のストレートは」

手が早いって違う意味なんですけど。突っ込みを入れたくなるわ。
「あ、そう言えば、メールを1本出さなきゃ。悪いけれど、皆さんで先に行っててくれますか？　西口のすぐそばです。後から追いかけます」
そう言って、加古先生は慌てて出ていった。
「それじゃ、あたしたちは、先に出ましょう」
と、3人に声をかけた。支度をして、部屋の明かりを消して、校舎を出た。辺りは、すっかり闇に包まれ、もう秋の虫が鳴いていた。

あれ？　久しぶりに神様の視線を感じる。と言うことは、何か悪いことが起きる？　でも、好いことが起きたこともあったわ。うーん、何だろう？　あ、あれ！　忘れ物。そう、あたしは、久しぶりに持ってきた飯盒型ポシェットを忘れてきた。多分、実験室ではなく、手洗いだと思う。
「ゴメン。忘れ物をしたみたい。先に行ってて。すぐ、追いかけるわ」
忘れ物は手洗いにあった。すぐに追いかけようと思ったけれど、鏡をみて気が変わった。口紅と薄いアイシャドウを直す。どうしてって？　そりゃ、加古先生がいるからよ。別に渡と二股をかけようってわけじゃないんだけれど……　妙齢の男性に不快な思いをさせるのは失礼じゃない。そんなことを考えていたら、結構、時間がかかってしまった。でも、大丈夫。ちゃんと近道を知っているから。あたしは、暗い近道を急いだ。用水路が蓋をされて小路になっている。畑や、吹きさらしの作業場があったりして、都会とは思えないのんびりした景色のはずだけれど、暗闇のせいでなんだか気味が悪いわ。同じ路を歩く人はいない。黒猫が路を横切ったきりだ。
ふいに、黒く鋭い視線を感じる。後方５ｍ程。立ち止まって、ゆっくり振り返る。立体感のない黒い影が足音を立てずに、ゆっくり近づいてくる。黒い視線の意味することは明白。３ｍまで接近したところで、影は立ち止まり、不意に右手を差し出した。右手の先の

何かは、わずかな明かりを時折反射する。ナイフだわ。あたしは、大声で助けを呼んだ。

「……」

いや、口をパクパクさせたが、声となるはずの肺から押し出された空気は、声帯を震わせることなく、口からスースーと漏れていく。影が押し殺したような声で2言(ごと)だけ言った。

「声をあげるな。バッグを置いていけ」

あたしは、飯盒型ポシェットを首から外して、ストラップを右手に持ち替え、影に差し出す。突き出したその腕が、あたしの意思とは無関係に震えているのを、左脳が観察する。

その時、影の向こうからタッタッタッと足音が聞こえ、もう一つの影が走ってきた。そして、影の向こう3mの所でピタッと立ち止まる。最初の影は振り返りナイフを向ける。

「水上さん？　と誰？　なんだか剣呑ですねぇ」

加古先生の声だった。張りつめていたあたしの神経（緊張）は30%ほど和らぐ。

「手に持っているのは、ナイフ？　そんなもん『ないふ』り、で頑張っちゃいますよ」

50%緊張が高まった。加古先生はカバンをそっと置いて、さらに、暗闇で光る銀縁メガネをはずして、胸のポケットに入れる。あれ、加古先生、ド近眼じゃなかったけ？　メガネ外したら、なんにも見えないんじゃないの？　影はナイフの刃先を上下にゆっくりゆらして、鋭い殺気を先生に向ける。先生は、握った両拳を胸の前で構えて、右足を少し引いて左拳を少し前に出し、ほんの少し猫背になったかと思うと、軽く、飛び跳ね始める。素人目にもわかるボクシングの構えだわ。加古先生かっこいい！

「私のリーチは平均より10cm長いんです」

リーチ？　ああ、手の長さね。たしかに手長猿なみに長いわ。

「おたくのナイフの刀身は10cmないですよね。とすると、私の

ストレートは、おたくに届きますが、おたくのナイフは私には届きませんよ」

そう言って、空中に軽くパンチを突き出す。これって、ストレート？　ジャブだったかしら？

「これでも、私はアマ7戦連続ノックアウトの経験があるんですよ」

「……」

先生は、空中にパンチを繰り出しながら呟いた。

「ストレート、フック、カウンター……、これがパンチの基本。あとは、フットワーク、そしてコンビネーション」

先生が多彩な技を連続して披露する。そうして1分程、先生と影はにらみ合っていた。あたしはの方は、腰が抜けて、座り込んでしまった。だんだんと影のナイフの刃先は不規則な軌道を描き、迷い始めた。先ほどまでの殺気はもうない。ふいに、影はこちらを向くと、脱兎のごとく、あたしの横をすり抜けて、走り去った。

「ふうー　逃げましたね。水上さん大丈夫？」

加古先生は、近づいて、眼鏡をかけて、あたしの顔を覗き込んだ。

「だ、大丈夫というかー　怪我もないし、何も取られなかったんだけど、腰が抜けたみたい。立てないわ」

差し出された先生の右手を握って立ち上がろうとした時、おかしなことが起きた。手を握った瞬間、先生はビクッと体を震わせたかと思うと、手を振り払った。そして、背後に回り込んで、なんと！　あたしのお尻を両手で持ち上げ、立たせてくれた。

西口で待っていた3人と合流し、料理屋に向かった。あたしたち2人の表情を見た桃姫はすぐに何かがあったことを悟ったけれど、後で話すことにしたの。あたしたちは座敷に腰を下ろした。こわばった全身の筋肉が弛緩し、緊張が解けていくのが自分でもよくわかった。それは加古先生も同じだったらしい。『おしぼり、おしぼり』と言いながら、手に取ったや否や、手を入念に拭き始める。あたしの予想では、この後、メガネをはずして、顔をごしごしするはずな

のだけれど……　その予想は外れた。どうやらそこまでオジサンではないらしい。

　料理を待ちながら、あたしは、先ほどの顛末を話した。時折、先生が頷く。話し終えた時、桃姫が肘であたしを小突いた。どうやら、あたしは先生を、うっとりした表情で眺めていたらしい。優君、舞ちゃんも感心したらしく、尊敬のまなざしで先生を見ている。ふと、疑問に思ったことを口にした。

「そう言えば、加古先生、あの時どうして、メガネを外したの？　外したらよく見えないじゃない」

「そりゃー、メガネの上からパンチされたら、ガラスが割れて危ないじゃないか」

「え！　先生強いんでしょ。相手のパンチなんか心配しなくていいんじゃないの？」

「強い？」

「だって、７回連続ノックアウトって、言っていたじゃない。あの脅しが結構利いたと思うんだけど？　あれ、嘘だったんですか？」

「あーあれ、嘘じゃないけれど、解釈が違うんです。つまり、ノックアウトしたんじゃなくて、されたんです。アマチュアの試合で７戦連続でノックアウト負けしたことがあるんです。ジムのトレーナーからは大記録だって言われましたよ」

「つまり、『めちゃくちゃ』弱いってこと？」

「その『めちゃくちゃ』は、同意しかねますが、弱いのは確かです」

座の雰囲気が一気にさがり、皆の尊敬の念が５０％減少した。でも、考えようによっては、弱いのがわかっていて、影とやり合おうとした勇気こそ誉めたたえるべきかもしれない。そう、思うと、なんだかジンとしてきて、テーブルの上の先生の左手にあたしは自然と右手を重ねた。

「ありがとう先生。あたしのために勇気を振り絞ってくれたのね」

そう言って、先生の目を覗き込んだ。ほんの一瞬、先生の視線はあたしの視線にロックされた。

突然、先生はあたしの右手の下の左手を引っこ抜いたかと思うと、おしぼりで入念に左手を拭き始めた。え！　なに？　なんで？　左脳が記憶を検索し整理する。その１：腰の抜けたあたしが立ち上がろうとした時、先生は手を振り払った。その２：店につくなり、おしぼりで手を入念に拭いた。その３が今。また同じように手を拭いている。演繹される結論はただ一つ。あたしの手が不潔で、触りたくないのだわ。涙目で先生を見つめる。その視線に気づいた先生は、最初は、『？』を顔に浮かべていたが、ため息をついて、申し訳なさそうな表情で話しだした。

「水上さん、すいません。アレルギーなんですよ」

「アレルギー？」

「そう、女性アレルギー」

「女性アレルギー？」

白手袋とひっつき虫（その5）

加古先生が自分のことを『女性アレルギー』と言った。何それ？
桃姫とあたしの漫才が始まった。
「女性アレルギーって、女が苦手ってことかしら？」
「アレルギーって言うぐらいだから、苦手どころじゃなくて、受け付けないってことじゃない」
「逆に言えば、男なら受け付けられるってこと？」
「なるほど、要するに『ホモ』ね。納得？」
「納得！」
隣で加古先生が、首をプルプル横にふっている。
「だから先生、結婚してないんだ。日本の法律では『ホモ』は結婚できないからね」
「それにしても、『ホモ』を見るのは初めてだわ」
「そう言えば、珍しいわね。加古先生、案外イケメンなのに」
先生はウンウン頷いている。
「収入、安定しているのに」
先生はウンウン頷いている。
「知性があって、軽薄なのに」
先生はウンウン頷いている。
「短小なのに」
先生はウンウン頷きかけて固まる。
「ホントにもったいないわ。男にしか興味ないなんて」
先生は、首をプルプル横にふって、ハイと手を挙げた。桃姫は、まるで裁判官のように厳かな口調で言った。
「加古准教授、発言を許します」
「ちょっと、水上さんも、熱海さんも酷いですよ。私は『アレルギー』と言ったんですよ。それを『ホモ』だなんて……　まだ『ホモ』には転向していません」

「まだ？」
「まだです……　とにかく、『アレルギー』なんです」
「アレルギーって、花粉症みたいな」
「そう、アレルギーです。言葉で説明しても埒が明かないようですから、お見せしましょう。熱海さん手を出してくれます？」
「こうかしら？」
そう言って、桃姫は右手をテーブルの上に載せた。加古先生は、自分の右手を桃姫の右手に重ねた。待つこと１０秒。赤い斑点が先生の手の甲に現れた。そして、斑点は次第に大きくなり、不定形を呈し始める。典型的なじんましんだわ。皆、息をのんだ。加古先生は勝ち誇った。
「でしょ。じゃ今度は、男性で試してみますか」
そう言って、右手を入念におしぼりで拭く。じんましんの赤い斑点は少しずつ、薄くなっていく。
「優君、手を出してください」
優は左手を出す。
「それじゃ、行きますよ」
そう言って、右手を重ねた。待つこと１０秒。先ほどからのじんましんは、どんどん薄くなって、消えていった。
「女性に触れるとじんましんが出ます。触れるのをやめて、放っておけば、次第に薄くなって消えますが、男性に触れるとより早く消えます」
「不思議ねぇ」
「不思議でしょう。でも、まあ、アレルギーには違いありません」

料理が運ばれてきた。スパイシーでハーブの利いた麺だわ。皆、おいしそうに食べ始めた。あたしは、ふと、疑問に思って尋ねてみた。
「加古先生は、昔から、女性アレルギーだったですか？　つまり、先天的なものでしょうか？　それとも後天的なものでしょうか？」

「花粉症と同じです。最初は、花粉にアレルギーがなくても、抵抗力が弱った時、例えば、病気の時、睡眠不足の時、そう言った時に大量の花粉をあびると、それを異物として認識し、アレルギー反応が起きて花粉症になります。一旦、花粉症になると、原則として、それは直ることはなく、花粉に対して常にアレルギー反応を起こします。アレルギー反応の代表がじんましんです」

「花粉症と同じってことは、何かきっかけがあったんですか？」

「ええ、ありました。子供の前ですので、詳しくは説明しませんが……」

そう言って、加古先生は事件について話し出した。

先生が学生の頃、あこがれの男性先輩、女性先輩が居た。二人とも才色兼備で、しかもお似合いのカップルだった。所が、男性先輩が女性先輩をふり、それから女性先輩が荒れ始めた。胸を痛めた先生は、彼女の心を支えようとした。所が、彼女は魔性だった。さんざん絞り取られ、睡眠不足になり、体力の限界を超え、抵抗力が落ちても絞り取られた。そして、気がついたら女性アレルギーになっていた。もちろん、本当に女性アレルギーなのか色々調べたそうだ。その結果、小学生から６０歳ぐらいまでの女性に対してはアレルギー反応があり、幼児やおばあさんにはないことが分かったそうだ。桃子が痛々しそうな眼差しを向けて、感想を述べた。

「ホントに災難だったわね。でも、女性アレルギーってどのくらい確かなの？　本当にその年代の女性なら、１００％だめなの？」

「まあ、１００％と断定するのは難しいですが、これまで、６６人の女性で調べました。そのうち、さっきの年代の５１人はアレルギー反応が出ました。仮に次の１名がそうでなかったとすると、５２人中例外が１人と言うことになるので、およそ、９８％の確率と言うことになります。ちゃんと危険率を設定して、検定はしていないので、大雑把ですが、１００％か、１００％にかなり近いのは確実でしょう……」

最後の言葉は消え入るようだった。ホントに絶望的ね。先生はハ

ッと顔をあげると無理に笑顔を作った。
「というわけで、最近、ホモに転向しようかと思っているんです。やっぱり、独り身はさびしいですから……」
ウンウン、その気持ち分かるわ。なんだか加古先生を応援したくなってきた。
「先生、男でも相手はかわいい方がいいですよね。ボクシングをやるぐらいですから、先生は肉体派ですね。とすると相手はかわいらしいタイプが似合うと思うんです」
「まだ、そこまで深く考えたわけじゃないけれど、そう言われればそうかもしれません」
あたしはいいことを思いついた。何も考えていなそうな舞と優に視線を向けた。優は不審そうな視線を返した。
「かわいいとなると……　優君なんてどうでしょう？」
「ふむ、それは考えもしませんでした。灯台もと暗しですね」
優は１５ｃｍのけぞった。反対に舞は２５ｃｍ乗りだしてきて血相を変えて抗弁した。
「ちょっと、お姉さま！　変なこと言わないで！」
ほほほ、引っかかったわね。舞ちゃんって、怒っている顔もかわいいわよ。
「あたしは二人の幸せを考えているのよ」
「二人の幸せ？」
「加古先生にとってはもちろんだけれど、優君にとっても悪い話じゃないわ。なんせ、加古先生は超優良物件ですから。しいて言えば、年の差婚が問題かしら？」
舞ちゃんは目を回している。きっと考えたこともない概念が消化できないのね。
「……とにかく、優ちゃんはダメ。絶対ダメ！」
そう言って、舞ちゃんは、あたしと加古先生を睨んだ。当事者の優は不思議そうに舞を見ている。何で舞が興奮しているかわからないみたいね。あたしは、次のステップに進んだ。

「分かったわ。加古先生のことは、おいておいて……」
隣で加古先生が異議ありと言っている。あたしはそれを無視して言った。
「舞と優は大丈夫かしら？」
「大丈夫っって？」
と舞は怪訝そうな表情をした。
「男性アレルギーとか女性アレルギーってことはないわよねぇ」
「そう言われても男の人の手をちゃんと握ったことはないから……」
と舞は自信なさそうに答える。
「それじゃ、今、試してみたら？　優と舞で」
「えー！」
舞が驚く。一方、優はずっと冷静だ。考え込んでいるようだわ。桃姫がさらにダメ押しをする。
「もし、加古先生みたいにアレルギーだったら、お先真っ暗よ」
加古先生はうなだれる。
「お先真っ暗ですか……」
舞は観念したようだ。
「分かったわ。優ちゃん手を出して」
「いい加減『ちゃん』はやめてほしいんだけど……」
そう言って、優は親指しかない右手を出した。舞は少しためらって左手を載せた。優はさらに左手を重ねる。最後に舞が右手を重ねる。二人とも相手側に乗り出した形になり、その結果、おでことおでこがわずかに触れ合った。
「それじゃ、そのまま１０秒間動かないでね」
舞の手が赤くなってきた。まさか、男性アレルギー？　手だけでなく顔まで赤くなってきた。それを見た優が心配そうな表情を見せる。でもじんましんのような斑点、不定形の斑点ではない。ようするに恥ずかしさで血がのぼっただけね。
「舞は、赤くなっているけれど、アレルギーではないわ。単に興奮しているだけ。二人ともアレルギーではないわね」

むしろ、これだけピッタリ触れ合っているのに全く動じない優の方が問題かもしれないわ。

温かいデザートが運ばれてきた。バナナにココナツミルクをかけたもの。あたしは加古先生に同情した。そして、別の可能性に気がついた。

「ねぇ、先生がアレルギーなのは、女だと意識するからじゃないかしら。だから幼児やおばあさんには反応しない。だとすれば、気持ちの持ちようでなんとか改善できないかしら？」

「ええ、それだとまだ救いようがあるんですが、精神的なものではなく、もっと物理的というか根源的なものです。その証拠に目をつぶっていても男女が区別できます」

「本当ですか？　それじゃ、試してみましょうよ」

桃姫は、そう言って大きめのハンカチを取り出して、加古先生の目をかくした。

「それじゃ、先生、右手を出してくれますか？　何人かが触りますので、男か女か当ててください」

桃姫は目線で、舞に合図を送る。舞は加古先生に触れる。桃姫が腕時計を見せて、１０秒待つように指示する。赤い斑点がぽつぽつ現れる。

「ハイ１０秒たちました。加古先生、分かりますか？」

「もちろん女性です」

皆、一様に難しい顔をしている。

「では、もう一人」

今度は優が触る。斑点は完全に消えた。

「これは、男性ですね。当たっているでしょう。納得しました？」

皆、頷いている。納得したみたいね。桃姫がダメ押しをする。

「それじゃ、最後ね」

桃姫は目線であたしを促す。そう、結果は、分かっている。あたしは手を載せた。アレルギー反応が出る……　はずだった。５秒経っ

た。何も起こらない。加古先生が回答する。
「これも男性ですね」
え、男性？　桃姫が不思議な顔をする。あたしは、手の載せたまま、斑点が出るのをさらに１０秒待つ。が、何も起きない。周りの見えない加古先生がしびれを切らした。
「もう、いいでしょう？」
そう言って目隠しを外した。
「だから、言ったでしょう。男女が当てられるって」
状況の理解できないあたしは手を載せたまま。
「おや、最後は水上さんでしたか。じんましんは出ないので、水上さんは『男』ですね」
と自信満々。先生以外は黙り込んでいる
「……」
桃姫が最初に口を開く。
「そ、そうだったの。碧は男だったの。てっきりあたしは、女だと思っていたんだけれど」
続いて、舞が喋る。
「ということは、これからは『お兄様』って呼べばいいのね」
つられて、あたしも喋る。
「そ、そうね。男なのに『お姉さま』はおかしいもんね……　ってそんなわけないでしょう！　あたしは女よ！　産まれてから今までずっと女よ！」
「本当？　証明できる？」
「しょ、証明と言われても……　」
舞がここぞとばかり逆襲してくる。
「『お兄様』って結構、かわいいし、一見すると女だから、加古先生の『ホモ』のパートナーにいいかもしれないわ。お兄様にとっては、先生は、超優良物件よ。収入も安定しているし、イケメンだし、知性的だし、しいて問題があるとすれば、年の差婚かしら、でも１０歳ぐらいなら問題ないわよ」

加古先生がウンウンと頷いている。あたしは起死回生の策を思いついた。

「証明できる……　証明できるわよ。あたしが女であることを」

そう言って、あたしは車の免許証を取りだした。そうなのだ、あたしは車は運転しないけれど、このために、苦労して免許を取ったのだ。

「皆の者、この免許証が見えぬか！　免許証は信頼できる身分証明書。ここに記載されている性別は……」

「男とも女とも書いていないわよ」

「……　この免許証、不良品だわ！　とにかく何が何でもあたしは女！」

皆に睨みを聞かした。加古先生が冷静に応じた。

「では、百歩譲って、水上さんが女性だとしましょう」

百歩譲らなくてもあたしは女性です。ウルウル。

「お願いが二つほどあります」

「まさか、あたしを実験台にしたい、皮膚とか血液のサンプルを取って研究したいって言うんじゃないでしょうね？」

「ピンポーン。鋭いですね」

「いやよ。あたしは実験台にはならないわ。他の依頼なら聞いてあげるけれど、実験台はいやですから」

「そうですか、それなら、それはあきらめます。もう一つのお願いは……」

「それは何？」

「私と結婚してくれませんか？」

へ？　結婚？

加古先生のもう一つのお願いは『結婚してくれませんか？』だった。一瞬、それが外国語のように聞こえた。舞が、最初に反応した。

「これって、もしかしてプロポーズ？　わあ、プロポーズの現場に居合わせるなんて初めてだわ」

桃姫も

「私も、初めてよ。面白そうね」

と言う。もちろん、あたしも初めてだわ。というか、プロポーズって、公衆の面前でするものじゃないと思うんだけれど……　そんなことは、どうでもいい。そのプロポーズの対象があたし自身なのだ。それが問題だわ。

「いきなり、結婚と言われても……　どうして、あたしなんですか？」

先生の代わりに舞が答える。

「だって、加古先生にとって、『お兄様』……じゃなくて、『お姉さま』は、天然記念物なみの……　じゃなくて、とても貴重な『女性』ですから、この機会を逃すわけにはいかないのじゃないかしら」

加古先生はウンウンと頷いている。あたしは、反論する。

「でも、それだけの理由？　確かに先生にとっては、アレルギー反応の出ない貴重な存在かもしれない。だから同情もするけれど。でも、あたしにとっては……　この際、はっきり言わせていただきますと、加古先生は、あたしにとって是が非でも結婚したい貴重な存在ではありません。つまり、不公平、不釣り合いじゃないかしら」

加古先生はウンウンと頷いている。桃姫が包囲網に加わる。

「碧は、貴重とか、不公平とか言っているけれど、碧にとって、加古先生は超優良物件よ、不公平じゃないわ……　でも、ホントの所、不公平とか超優良とか、外野の判断、つまり世間一般の物差しは、

どうでもいいの」
「どうでもいい？」
「そう。世間から見て不釣り合い、例えば、お金持ちと貧乏人、美女と醜男（ぶおとこ）、背の低い男と背の高い女……　そんな不釣り合いがあってもいいのよ。釣り合っているとか、分相応だとか、玉の輿だとか、そんなことはどうでもよくて、お互いが相手と結婚したいと思うかどうか……　加古先生が碧と結婚したいと思っているのなら、碧が加古先生と結婚したいと思うかどうか……　それが問題」
加古先生はウンウンと頷いている。このまま、桃姫と舞の相手をしていては、形勢は不利。直接、加古先生を引っ張り出さないと……
「そりゃ、お互いの気持ちが大事なのは分かるけれど……　加古先生を結婚対象として考えたことはなかったから……　急に結婚したいって言われても……　そもそも、加古先生は、アレルギーが出ない女性なら誰でもよかったのですか？」
「アレルギーは重要な要因ですが、それだけではありません。碧さんは、もしかして自分の魅力を認識していないのでは？」
先生が『碧』って名前で呼んだ。もしかして、一気に攻め込むつもり？
「あたしの魅力？」
「そう。世間一般の物差しで言えば……　まあまあ美人だし、かわいいとも言えるし、自立しているし、頭がいいし、誠実だし……」
「ちょ、ちょっと、先生、それぐらいにして下さい。じゃないと、浮かれてその気になっちゃうじゃないですか……　第一、あたしには事情があるの」
「事情？」
「えーと、そのー　今、つき合っている人がいるの」
そう、あたしは、今、渡（わたる）と付き合っている。『あたし一人と付き合って……　浮気は許さない』　そう渡に言ったのだわ。だから、二股をかけるなんて到底できない。
「……」

加古先生は、考え込んでいたけれど、舞は黙っていない。
「男の人？　それとも、女の人？」
「もちろん、男の人よ！」
「それで、そのー　つき合っていると言うのは、結婚を前提にでしょうか？」
そう加古先生が尋ねた。
「結婚を前提にかと言われると……　どうかしら」
「ふむ、やっぱり、誠実と言うかバカ正直ですね。そこが碧さんの一番の魅力です。ずるがしこい女性なら、そんなこと、正直には言いませんよ。碧さんのことですから、二股をかけることはできないし、相手の彼にもそれは許さないでしょう」
うっ図星。どうしてわかるのかしら。加古先生はさらに続ける。
「そして、彼にどうやって説明するか、その時に、彼の反応を想像するだけで、落ち着かない。二股をかけるぐらいなら、この場で、私のことを振ってしまった方が楽だ、そう考えているのでしょう。違いますか？」
これも図星。
「碧さんの弱点は、繊細すぎる点です。他人の眼を気にしすぎるといってもいいかもしれません。その結果、本当の自分の気持ちを言うことができず、内に抱え込んでしまう。普通の人なら、内に抱え込みすぎて爆発するか、妥協して繊細さを鈍らせます。ところが、碧さんは、頭の回転が速いものだから、ガラスのような繊細さを維持することができる。それでも、とても疲れているはずです。違いますか？」
先生の言葉が、ジグソーパズルの最後のピースのようにあたしの心にピッタリはまる。
「先生、どうして、わかるんですか？　あたし以上にあたしのことが分かるんですか？」
先生は、柔らかに微笑んで言った。
「私もあなたと同じ　だった　から　で　す」

不思議なことに、周りの時間の流れがゆっくりとしたものになる。加古先生の温かい眼差し、口を少しあけて驚いだ表情を見せる桃姫、小首をかしげる舞、何も考えていなさそうな優。その向こうには、湯気の立った麺を運ぶ店員。音が消え、ゆっくりとしたあたしの鼓動だけが響く。

ドックン、ドックン……　ドックン。

心臓が熱を帯び、徐々に熱くなってくる。金縛りにあったように体が動かないわ。息もできない。渾身の力を振り絞って、右手の平でテーブルを叩く。

「バン！」

とたんに時間の流れが正常になる。

「あ、あたしは……　あたしは……　どうしたらいいの？」

涙目で、先生と桃姫とを交互に見つめる。先生は、

「すこし、頭を冷やしましょう」

とだけ言った。

帰りの電車の中で、舞は優に聞こえないようにささやいた。

「お姉さま、さっきは、ありがとう。お礼がしたいの、絶対、損はさせないから。今度の土曜日の朝、空けておいていただけます？」

何のお礼なのか分からないけれど、あたしは頷いた。

土曜日の朝７時にとある駅で待ち合わせた。この所、ただでさえよく眠れないのに、早起きをしたため気分が悪い。よく眠れないのは、加古先生と渡のことで悩んでいるから。とにかく、渡と話しをしないといけないのだけれど、何を話していいかわからない。結局、電話できなかった。

待ち合わせ場所に現れた舞は、駅から１０分程の道場に案内してくれた。なんでも祖母が柔術を教えているらしい。よくよく聞いてみると、祖母は五色流柔術の師範で、幼いころから舞も稽古をつけてもらったそうだ。五色流は高祖母、つまり祖母の祖母が明治のこ

ろに、女性のための柔術をまとめたのが始まりで、戦時中には女子挺身隊の指導をし、そこそこはやったそうだ。もっとも、今は、弟子もほとんどおらず、舞が師範を引き継がなければ流派は消滅する。

道場では、舞の祖母が3人の小学生、もちろん女子を指導していた。あたしは挨拶をし、着替えた。柔軟体操をして、早速、舞から実践的な指導を受けた。今回は、五色流柔術ではなく、護身術のポイントを学ぶ。腕を掴まれた時、背中から抱きつかれた時、押し倒された時、ナイフを正面から突き付けられた時、と言った場面を想定したテクニックを教えてもらう。薄手の防具をつけて、思い切りやってよいと言われて、遠慮なく力を入れる。肘打ち、ひざ蹴り、と暴れるが、舞には全く利いていない。最後に、一番有効な護身術として、大声で助けを求める練習をした。終わった時は、睡眠不足と空腹もあって、ふらふらだったわ。

礼をして、畳の上に座り込んだ。

「お姉さま、頑張ったわね」

「ありがとう。フラフラよ」

「はい、ご褒美」

舞は、そう言って、特大おにぎり2個とお茶のペットボトルを差し出した。

「感謝、感激。遠慮なくいただくわ」

あたしは、夢中で食べた。お腹が膨らむと、今度は睡魔に襲われた。

「悪いけれど、ちょっとだけ、横にならせて」

道場で寝たりしてはいけないような気がするけれど、あたしはもう1分も起きていられなかった。そのまま、畳に寝転がって目を瞑った。

疲れているはずなのに、夢を見た。渡と加古先生が手をつないでいる。二人とも嬉しそうな顔をしている。渡は、おもちゃを買ってもらった子供のように喜んでいる。加古先生は、その子供の喜びよ

うを眩しそうに見ている。なんでも、二人は夫婦（めおと）となるそうだ。結婚式には是非とも来てくれと言われた。二人にふられたあたしは悲しいはずなのだけれど、夢の中のあたしは、不思議と悲しみを感じていない。それどころか、結婚式に着ていく服はどうしようかと考えている。

目をさますと、畳の匂いがした。いつのまにかお腹にバスタオルがかけてある。隣では、舞が本を読んでいる。視線を本からあたしに移した。

「起きた？」

「うん。どのくらい寝ていたのかしら？」

「丁度、１時間ぐらい」

「なんだか、頭がすっきりしたわ。ここんとこ例の件でもやもやしていたから、いい気分転換になったわ」

「例の件って加古先生からのプロポーズ？」

「そう」

「それで、お姉さまはどうするの？　返事はするの？」

「とりあえず、加古先生への返事は保留して、今つき合っている彼には現状を説明する……　そうそれだけ。単純なことだわ。ややこしいことはゆっくり考えればいい。悩むのはその時でいいのに、何を深刻に考えていたのかしらねぇ、あたしは」

そうなのだ。焦る必要はない。

「ところで、舞ちゃん、護身術を教えてくれて助かったけれど、舞ちゃん、かなり強いんじゃない」

「まあまあかしら。師範代を務めることもあるし」

「だったら、優に送ってもらわなくても大丈夫じゃない？」

「そうなんだけれど……　」

「優のそばに居たいのね」

舞は頷く。

「あれ？　もしかして、中学の時にナイフを持った男に襲われた時も、優に助けてもらわなくても余裕だったんじゃない？」
「余裕って程じゃなかったけれど、実戦は経験したことなかったの。だから、あたしだけだったら、どうなっていたか分からないわ」
「ふーん。でも、舞がそれだけ強かったら、優がわざわざ空手を習うことなかったんじゃない？」
「そうかもしれない。あ、念のため、言っておくけれど、優ちゃんはあたしが柔術をやっていて強いってことは知らないから」
「え、優には言っていないの？」
「ウン、言っていない。これは、お姉さまとあたしの秘密だから、絶対に優ちゃんに言ったらだめよ」
優はだまされているってわけね。すこしだけ、彼がかわいそうになった。

白手袋とひっつき虫（その7）

五色流道場から駅に歩きながら、渡に電話をした。渡は今日も仕事らしい。加古先生からプロポーズされ、悩んでいることを手短に、なるべく事務的に話す。最後まで話を聞いて渡は、

「了解」

と一言。え！　それだけ？

「渡、あたしの話をちゃんと理解した？」

「もちろんや」

「じゃ、その『了解』ってどういう意味？」

「了解はＯＫっちゅう意味。好きにしろっちゅう意味や」

「それだけ？　やめろとか、待ってくれとか、相手はどんな人とか、何か言いたいこと、聞きたいことはないの？」

「特にないわ。俺がどうこう言う問題やないし、決めるのは碧やから」

「そうなんだけど……　二股かけてもいいの？」

「ああ、ええよ。あ、ただ……」

「ただ？」

「えーと、俺とも時々デートしてほしい。そやないと、忘れてしまうで」

「も、もちろんよ……　渡、ありがとう」

「どういたしまして」

「渡は、あたしにはもったいないぐらいのいい人だわ」

「そりゃそうや。俺は、最高の男やし……　碧は最高の女や。そう言わんかったけ」

「そう言えば、花火の時に、そんなこと言っていたわね。とにかく、ありがとう」

「じゃあな」

そう言って、渡は電話を切った。ふー　とりあえず、前に進めるわ。

『二股』かー　これって『両手に花』って言うのかしら？　相手が男の場合は『両手に団子』かしら。渡はどちらかというと団子、加古先生は花ね。花より団子か、それとも、団子より花か……それが問題だ。こうして、人生始まって以来の『二股時代』に突入した。

ここ2カ月余りを振り返ると、感慨にふけりたくなるほど、色々なことがあったわ。とにかく、義手と呼べる白手袋試作2号機、略して白手2（ハクシュツー）は完成した。今日は、これを実際に試験する予定で、関係者（プラスひっつき虫1名）が集まるの。

最初のステップは義手の装着。優君に説明しつつ、試してもらう。義手を右手にはめ込み、埋め込みのボタンを押すとワイヤーが縮まって手の平に義手が固定される。ワイヤーを縮める度合いは5段階で変えられる。このワイヤーは、義手を固定し、電極を密着させる。

実は、この固定の所が一番難しく、完璧な解決策はないの。丁度、真ん中で折れた割り箸を輪ゴムで応急処置するところを想像するとわかりやすい。もし、２０ｃｍの割り箸が１０ｃｍ、１０ｃｍに別れたとして、それを５ｃｍ分重ねて輪ゴムで重ねた所をぐるぐる巻きにすれば、そこそこ使えると思うの。でも、もし、重ねる長さが１ｃｍだとしたら、使いものにならないくらいひ弱だわ。優君の義手も事情は似ている。残っている部位である手の平を使えるようにしたいので、その先の義手を支えるための長さ、割りばしの例で言えば重ねる長さ、が短い。だから、大きな力は支えられない。割りばしの例の輪ゴムに当たるのがワイヤーで、それをきつく巻きつければ、そこそこの力を支えられるとは思うけれど、きつくしすぎて血流が止まってはいけない。かと言ってゆるければ、力を支えられない。そこで、妥協案として、きつさ、つまり、ワイヤーの縮める度合いを、ユーザーの優が、その時々で変えられるようにした。

このワイヤーのきつさは電極の密着度合いにも影響し、その結果、信号の大きさにも影響する。そこで、信号の大きさの違いを補正（規格化）するために、装着後、最初に、力を入れてもらって、信号

の大きさを確かめる。この時の大きさを基準に、命令を判断するための閾値を補正するという仕組みだ。
「それじゃ、優君、やってみて」
「起動スイッチＯＮ」
小指につけたモニター用ＵＳＢケーブルを介して義手の起動を確認する。
「埋め込みスイッチで、ワイヤー収縮度を3に設定。装着！　次に最大力による規格化。1、2、3、規格化終了！　ランプ正常！」
「それじゃ、0から31まで数えてみて。時間を測るわよ。用意、スタート！」
「0，1、2、3、……
そう。右手の5本の指を使って、2進数で31まで数えてもらう。指を1本も立てない、拳（こぶし）の状態が0、親指だけ立てたら1、人差し指だけなら2、小指だけなら16という具合に指を立てた状態を2進数の1として、各指を各桁に割り当てる。こうすれば、すべての指を立てた時に1＋2＋4＋8＋16＝31となり、31まで数えることができる。
「……、30、31」
「ハイ。えーと27秒。義手側の判断時間と駆動時間の和の理論限界が約20秒だから、なかなかなものねぇ。練習すれば、もっと速くなるわよ」
隣で、同じように数えようと舞が四苦八苦している。
「どうしても、9ができないの～」
9は親指と薬指だけを立てればいいのだけど、普通の人は小指と薬指が連動して、薬指だけを立てるのが難しいけれど、この義手は、小指と薬指が独立なので、そんな問題はない。優はそんな舞を鼻で笑っている。
「それじゃ、今度はクイズよ。ここに柔らかいボールと堅いボールがあるわ。見ないでどちらかを当ててね」
そう言って、黒い布で目隠しをした。まず1番目に柔らかいボール

を優の義手に載せた。
「柔らかいボール」
「正解！　それじゃ、これは？」
そう言って、今度は堅いボールを載せた。
「堅いボール」
「正解、それじゃ、最後にもう一度」
そう言って、隠していた少しだけ柔らかいボールを載せた。
「……」
優は、口をへの字にしながら、ボールを握ったり、手を開いたりして感触を確かめている。
「姉さん、これ、前の2つと違うみたい。中ぐらいの柔らかさのような気がする」
「正解！」
目隠しを取って、3番目のボールを見せた。
「なかなかのものね。感覚も鋭いわ。これで、テストは終わり、あとは、実際に2，3週間使ってみて、練習しつつ、不具合の調査、いわゆるバグ出しが必要。うまくいけば、そのままずっと使えるし、不具合の度合いによっては、作り直すわ。とりあえず、あたしたちの仕事はこれで一段落よ」
そう言って、優の義手に今までよりワンサイズ大きい白い手袋をかぶせた。こうすると、遠目には今までの動かない義手と変わらない。
それから、充電、簡易防水、トルクの設定値、ログの確認等いくつかの注意事項を説明する。

「ありがとうございます」
優はあたしと、加古先生、桃姫の3人それぞれに頭を下げた。そして、舞の方に向き直ると、一旦、口を真一文字に結んだかと思うと、息を吸って、話しだした。なにか大事なことを言おうとしているのが感じられた。舞は小首をかしげる。
「舞、今までありがとう」

「はい？」
「俺の奴隷として、物理部では、はんだ付けを手伝ってくれた。掃除の時は、雑巾を絞ってくれた。いつも、俺のそばに居てくれた。本当にありがとう」
「……」
舞は、黙っている。そして、小さく開けた口に手をやって、驚きを隠している。優に礼を言われて喜んでいるのではない。何かを、何かとてもよくない優の次の言葉を予期していたわ。
「だけど、今、俺の意思で動く手を持っている。もう、舞は俺が指を無くしたことを忘れていいんだ。だから……　だから、奴隷解放」
「奴隷解放？」
優は、はっきりと言う。
「舞は、もうおれの奴隷じゃない。物理部は退部だ。明日から部活に出て来なくていい」
「退部？　それじゃ……　舞は……　部活に出ないで、一人で帰るの？　これまでみたいに家まで送ってくれないの？」
舞の声は、半分涙声だった。優は、毅然として
「そう、一人で帰ってくれ。帰れるだろう？　舞は強いから心配ない」
と言った。
「どうして、舞が強いってわかるの？」
「わかるさ。俺、空手を始めて、舞の姿勢がすごくいいってことに気づいたんだ。それに、時々、無意識に、空手で言うところのレの字立ちをしている。小さいころから何かの武道をやっているのは間違いない」
「言わなくって、ごめんなさい。でも……」
「俺の方こそ、悪かった。気がついてからも、舞が断らないことをいいことに送っていたんだ」
「そんなぁ……」
「だから、奴隷解放さ。これで、縁が切れる……　最後に、俺の右

手を触ってくれないか？」
舞は、あまりのことに茫然としている。それでも、機械的に手を伸ばし、両手で優の右手、白い手袋をはめた右手を包む。そして、うなだれた顔から、涙が一つ、二つと落ち、手袋をぬらす。皆、黙してその手袋を見ている。
舞は、突然、手を離すとカバンを持って部屋から出て行った。嗚咽を漏らしながら。

１５秒間の沈黙を加古先生が破った。
「優君、いいのですか？　追いかけなくていいのですか？」
「ええ。いつかは縁を切らなきゃって思っていました」
「どうして」
と桃姫が尋ねる。
「舞ってよく見ると、意外に可愛いでしょう。俺、学校の男子からうらやましがられているんです。可愛い彼女と付き合えていいなぁって」
よく見なくても、可愛いのは一目瞭然なんだけれど……
「だから、俺なんかにひっついているのは、かわいそうだなって思ったんです。それで、縁を切ったんです。これでも舞も自由です」
「ふむ、優君は変な所だけ大人なんですね」
と、変な所だけ子供の加古先生が冷静に言った。
「まあ、なるようになるでしょう」
と、桃姫も冷静に言った。あたしは、素直に頷けなかったけれど、黙っていた。若いっていいわねぇと思いながら。若ければ、いくらでもやり直しができるじゃない。それに比べて、あたしは、今の二股時代を逃せば、二度と春は来ない気がする。

白手袋とひっつき虫（その8）

皆で、打ち上げのはずが、加古先生とあたしの二人きりだ。しかも、来ているのは、おしゃれなレストランとは真逆の店。こんなはずではなかったのだけれど……

加古先生の研究室で白手2の試験をした時に、『次は、いつ、みんなで集まれるか分からないから、打ち上げをしましょう』と提案したのだけれど、舞は泣きながら帰ってしまうし、優もそんな気分じゃないと言って帰った。桃姫は、携帯電話を見ながら急用ができたと言って帰ってしまったけれど、あたしに目配せをしていたから、『二人で頑張って』、『後で、ちゃんと報告をするように』と言いたいのだろう。二人っきりになると、加古先生は、しばらく考えて口を開いた。

「丁度、よい機会ですので、水上さんと私でデートの練習をしましょう」

「練習？　本番じゃなくて、練習なんですか？」

「そう、練習です。練習と思えば気楽でしょう。何せ、私は例の女性アレルギーのせいで、ここ15年ほど、まともなデートはしていませんから。とりあえず、お店、レストランを探しましょう」

そう言って、加古先生はそばにあったPCで店を検索しだした。二人で相談しながら、地域を指定し、参加者をカップルとし、料理はイタリアンとし、雰囲気重視を選択した。幾つかの候補のうち、ワインが豊富という店が、あたしに『おいでおいで』をしていた。

「先生、このレストラン、ワインが売りらしいわ。いいと思いません？」

と先生に先生に持ちかけた。

「ワインですか――」

少し考え込んで、続けた。

「いいでしょう。今日は、一段落したのですから、碧さんの好きなものを飲んで、好きなだけ食べてください」
あれ？　今の先生の言い方、少し引っかかるわ……　『好きなだけ』って言ったわ。もしや……
「先生、もしかして、今日は、あたしにご馳走するって考えていません？」
「ふむ、ばれましたか。たまにはいいでしょう。それに、今日はデートですし、デートなら男がご馳走しなきゃかっこ悪いでしょう」
「今日は練習でしょ。練習なら割り勘ですよ」
「それじゃ、本番と言うことにしましょう」
ふー　加古先生は、どうあっても、あたしにご馳走したいのね。
「わかった。では、ご馳走してください。イタリアンではなく、あたしの食べたいものを食べさせてください」
「いいでしょう。『ナン』でも食べさせてあげますよ」
はて？
「いや、その、よく、カレーにつけて食べるパンですよ。何でしょう？　『ナン』でしょう」
「え！　あ、は～」
ただえさえ、笑えないギャグなのに、笑うタイミングを逃したら、苦痛以外のなにものでもないわ。
「えーと、えーと、『何』の話をしていたのかしら」
「『ナン』の話ですよ」
あたしは、先生をキッと睨みつけた。
「しばらく口を閉じて！　う～ん。そうそう、あたしの食べたいものを食べさせてほしいの」
「で、何を食べたいのでしょうか？」
「幸せになれる料理！　『先生』が食べて幸せを感じる料理がいいわ」
「おや、おや、そうきましたか……　いいでしょう。取っておきのお店にご案内します」

そして、今、あたしたちは、裏通りに面した小さなお店の前にいる。換気扇がブンブン音をたてている。のれんをくぐると、香ばしい油の匂いが漂い、店の奥からは小気味よい『ピチピチ』という揚げる音が聞こえてくる。そう、ここはとんかつ屋だ。

店内は、木調。小さな木の机、小さな木の椅子が所狭しと並べられている。どこにでもありそうな定食屋という雰囲気だわ。ちょっとだけ違うのは、新しくて清潔そうなところかしら。注文を取りに来たおかみさんの歳は30代後半。半袖白衣からむっちりした二の腕がのぞく。白ベレー帽からこぼれる黒髪とくっきり引いた口紅が綺麗な笑顔に映え、はっとする美人だわ。加古先生は、特大ヒレかつ定食を2人前とビールを一瓶頼む。厨房へ注文を伝えに行くおかみさんを見送る先生の鼻の下が伸びている。あたしは、咳払いをして話しかけた。

「加古先生、食べる前から幸せそうですね」

「え、そうかもしれません」

「先生は、美人に会うと幸せですか?」

「それは、その――　そうですね。男ですから、そう思うのは自然じゃないでしょうか?」

とあっさり認めた。

「それじゃー　あたしと会うと幸せですか?」

「もちろんです。でも、それは、碧さんが美人だからというだけではありませんよ。私が碧さんに恋をしているからです」

あたしは、思わずお茶を吹き出しそうになった。

「恋ですか?　先生でも恋をするのでしょうか?」

「その、『先生でも』の意味が理解できませんが、先生は恋をしてはいけないのでしょうか?」

「いえ、そういう意味ではなくて……　先生のような歳でも恋はするものでしょうか?」

「そりゃ、しますよ。自分でもこの歳になって恋をするとは思わな

かったから、碧さんの疑問ももっともです。『ブラームスはお好き』というサガンの小説がありまして、３９歳のヒロインが若い恋人と別れる時に自分の歳を理由にするんです。私が読んだのは二十歳前後だったと思うのですが、３９歳でも恋をするんだってビックリしました。と同時に、３９歳までは恋をしていいんだって思ったんです。でも、今、自分がその歳を超えて分かるんです、恋に歳は関係ないって。ただし、高齢での恋はお勧めしませんが」

「え、どうしてですか？　先生、今、歳は関係ないって言ったわよ」

「恋は心臓に負担をかけるんです。恋って、不安に苛まされたり、ときめいたりするじゃないですか」

「ときめく？」

「そう、幸せと幸せへの予感でウキウキ、ドキドキする、つまり、ときめきませんか？」

「う～ん。正直、恋の経験はあまりないから、ときめくってわからないわ。不安ならわかるんだけれど」

「まあ、私もときめいたのは一度だけですから、大きなことは言えませんが、いいものですよ。折角ですから二人で一緒にときめきましょう」

「……」

何と答えてよいやら。『恋をしましょう』ならまだしも『ときめきましょう』って何？　変だわ。先生もあたしの違和感に気がついて「言いたいことはわかりますよ。そんな計画的に恋はできるものじゃないし、計画的にときめくものでもないですからね。でも、そんな予感がするんです」

と言って、先生はあたしの左手に自分の右手を重ねた。その手のぬくもりは不思議な感触を持っていた。あれ？　何だろうこの感覚。あたしは目をつぶって左手に神経を集中させた。先生は手の平、指の腹、指先であたしの手を撫でまわす。手の甲、指の股から爪まで、それこそ舐めるように触れていく。あたしを愛おしいという気持ちが痛いほど伝わってくる。思わず先生の手を握りかえそうとしたそ

の時に
「お待ちどうさま」
とおかみさんが皿を持ってきた。先生は慌てて手を引っ込める。
「さあ、召し上がれ」
そこには、特大ヒレかつが載っている。揚げたてなのか、シュビシュビと音を立てているし、衣は黄金色に輝いている。お～　これは、おいしそう。思わず唾をゴクリと飲み込む。
「いただきます」
そう言って、ソースをかけるのももどかしく、早速、一口。衣のシャリっとした歯触りが経験したことがないほど心地よい。もぐもぐしっかり噛みしめると、肉汁のうまみが口いっぱいに広がる。
「幸せ～」
「そうでしょう。そうでしょう。ここのかつを食べるともう他の店には行きたくなくなります」
そう言って、加古先生はにこにこしながら、あたしが食べるのを眺めている。
「私は、食べるのが好きな女性と結婚したいのです」
「作るのが好きな女性ではなくて、食べるのが好きな女性ですか？」
「そう、そうです。一緒に食べる幸せを味わいたいのです」
先生の視線を意識してもう少し上品に食べないと、と思いながら、あたしは、ヒレかつ定食に骨抜きにされてしまった。
　ふと、気がつくとあたしはジャスミンティーを飲んでいた。下膳するおかみさんをぼーっと見ていると、おかみさんが先生に目配せをし、先生はかすかに頷いて応える。おかみさんはあたしの方へ振り返り、にっこりわらう。え！　何？　何なの？
「先生、今のおかみさんとのやり取りは、何です？」
「いえね、いい人ができたら連れてくるっておかみさんに約束したんです。それで、そのいい人が碧さん、あなたというわけです」
全く、先生は、強引というか、なんというか、じりじり攻めてくるタイプね。

「ところで、先生。どうして結婚したいのですか？」
「うーん。安心ですかねぇ。安心がほしいのだとおもいます」
「安心って、どうして結婚すると安心なんですか？」
「やっぱり、自分のことを見ていてくれる人がそばにいるという点でしょう。泣いたり、笑ったりする自分の人生を見ていてくれると思うと安心できるのです」
「それは、見守って、困った時は助け合うという安心とは違うの？　そもそも、夫婦は、一緒に泣き笑いして、一緒に人生を歩むのではないの？」
「見守るというのは当たっていますが、助け合うとか一緒に人生を歩むというのは、ちょっと違うように思います。例えば、碧さんが妊娠して、つわりがひどかったり、切迫早産の危機があったり、出産で命が危なかったりしても、碧さんの夫は見守ることしかできません。一緒に人生を歩むつもりでも、はなれて暮さないといけなかったり、相手が病気にかかって突然死別したりすることだってあるでしょう。別々の人間ですから、何でもかんでも一緒というわけにはいきません。でも相手の人生を見守ることはできます。結婚とは、どちらかが死ぬまでお互いの人生を見守り合うという契約だと考えています」
「加古先生ってドライなんですね。もう少し、結婚に対して夢を持ってもいいのに」
「それなりに歳をとって、色々な結婚を見ていますから。まあ、私自身も経験があるわけではないので、ある種の幻想をいただいているかもしれません。ところで、碧さん、そろそろ、先生とか加古先生はやめてくれませんか？」
「でも、先生は先生ですし……」
「一応、結婚を前提に付き合っているのでしょう？」
「結婚を前提って言われれば、そうだけれど……」
「でしたら、私を名前で、寛（ひろし）と呼んでくれませんか？」
「寛？　寛さんはどうでしょう？」

「では、それで」

帰宅する電車の中で、窓に映る自分に語りかけた。あなたにとって結婚って何？　加古先生、いや、寛さんは安心を得る契約と言ったわ。あたしが想像する結婚は家庭をもつこと。子供がいて、家族で夕飯を食べるのが家庭だわ。加古先生の想像する結婚とあたしの想像する結婚は、同じかしら？　それとも違う？　先生は結婚に積極的だけれど、あたしは先生ほどでもない。渡はほとんど考えていない。いや、少しは考えているかも。そう言えば、先生は、恋をしましょう、ときめきましょうとも言ったわ。渡ともデートしないといけないし、忙しくなりそうね。あれ、デートしないといけないって、今、言ったわよね。前は、なかなかデートできないって文句を言ってたような気がするけれど、渡に冷めてきたのかしら？　ああ――　ややこしい！　まるで、プログラムで構造体を定義してすっきりさせたつもりだったのが、構造体のメンバーの処理を分散させなきゃならなくなった時みたい。

あたしは、帰宅途中のコンビニでビールを一缶買った。

白手袋とひっつき虫（番外：告白桜の伝説）

月曜日

朝から、舞は憂鬱だった。優にふられ、週末は涙が枯れるまで泣いて、自分なりにけじめをつけた……　つもりだったのだけれど、朝、一人で登校するとなんとも言えないさびしさがつのる。先週までは、最寄駅の先頭から2両目のところで、待ち合わせて登校していた。今朝は、優は現れず、一人で電車に乗った。舞は努めて冷静にこれまでのつき合いを振り返った。

そもそも、舞は、優と恋仲だったのだろうか。確かに、優とは幼なじみで、幼稚園から高校まで同じ。しかも、部活も同じだったから、高校への行帰りはいつも一緒だった。だけど、キスはおろか、まともに手を握ったのは、先週の義手仲間との食事の時が初めてだった。そして、その時、優を異性として認識した。それまで、いつも左手で優の右ひじをつかんでいた。だから肌が触れ合わなかったわけではないけれど、異性としては見ていなかったのかもしれない。もうひとつ舞が気づいた点は、いつも優が隣、左隣に並んでいたことだ。だから、正面から互いの顔を見つめあったことはほとんどない。そこまで考えて、舞の憂鬱はいっそう深くなった。

同じクラスの優は遅刻寸前に教室に入ってきた。『おはよう』と誰の目も見ずにクラス全体に挨拶をした。相変わらず、右手には白い手袋をはめポケットに突っこんでいる。すぐにショートＨＲが始まり、１限目が続く。

舞の親友の香織と優の親友の智也の二人はすぐに異変に気付いた。舞と優が一緒に登校しなかったこと、優がしきりに気にしている右手は指が動くようになったこと。休み時間に入ると早速二人の親友は、それぞれの親友の元に飛んで行った。香織は心配そうに親友に声をかけた。背が高くほっそりした香織は、姉御肌でクラスの女子

から頼りにされることも多い。と言っても自分から皆の上に立ちたがるタイプではなく、普段はおとなしい。そんな所が、舞と似ているかもしれない。

「ねぇ、舞、一体何があったの？　優と喧嘩したの？」

「いや、その……　もう少し深刻なの」

「え！　もしかして、別れた？　というか、その様子だとふられたの？」

「ふられた、というより……、そもそもつき合っていたわけじゃないし……」

「ふれたのじゃなかったら、何なのよ！」

香織の声がだんだん高くなっていく。逆に舞の声はだんだんと小さくなっていく。

「縁が切れた……　縁を切られたのよ」

「あちゃ、最悪！　だから言ったじゃない！　キスぐらいさっさとしなさいって」

香織は怖い顔をしている。まるで仁王のようだ。しばし、黙考して、こう言った。

「こうなったら、あたしが話をつけてくる。優の性根叩きなおしてやる」

歩きだした香織のスカートをつかんで引きとめる。

「や、やめて香織！　お願い……　お願いだからやめて……」

最後の方は、うつむいて囁いた。香織が怒れば怒るほど、優を失ったことが重大に思えて来て、舞は涙を抑えられなかった。もう涙は枯れたはずだったのに……

　授業が終わり、部活に行く人、帰る人、掃除当番、友人とおしゃべりする人、とそれぞれ、それなりの目的を持って散っていく。優は智也と話しながら教室を出ていく。学校祭が近いので、物理部の出し物の準備をするのだろう。舞は部長の優から退部と言われている。部長だからと言って勝手に部員を退部させられるわけではない

だろうけれど、もう、舞は、物理部に顔を出す気力がない。教室の出入りの扉のところで、智也が振り返って舞と視線を合わせるが、すぐに事態を理解したらしく、扉を締めて、優をあわてて追いかけた。香織は吹奏楽部だから年中忙しい。そんなわけで、舞は一人で帰る。一人で帰るのも悪くないと無理矢理自分に言い聞かせた。

火曜日

クラスのほぼ全員が、優と舞が別れたことを知っていた。舞は現状を受け入れべく葛藤している。授業が終わり、舞は一人で帰る。下駄箱まで行って、忘れものに気づいて教室に戻った。その教室では、既に当番が掃除を始めていた。この学校では、男子2名、女子2名のグループで掃除をする。その中に優もいた。優は女子1名と楽しそうに談笑しながら、雑巾を絞っている。左手で軽く絞って、次に手袋を外した右手義手と左手で雑巾をゆっくりと絞っていく。これまでは、いつも舞が優のために雑巾を絞っていた。所が、義手ができたので、舞の出番はなくなった。もう関係ないと思いつつ、舞から優を奪った義手が憎らしく思えた。

水曜日

昼休みに入った直後に同じクラスの男子1名が舞の所にやってきた。『弁当を食べ終わったら、告白桜の所へ来てほしい』と言った。舞は暫く考えた後にほんの少し微笑んで承諾した。暫く考えたのは、告白桜にまつわる伝説としきたりを思い出していたからで、少し微笑んだのは、自分がそのしきたりの対象になることなど想像したこともなく、滑稽だったからだ。

告白桜は、校庭の隅に生えている桜のことで、愛を告白したり別れをきり出す場であると、皆、先輩から教えられる。と言ってもその由来となった伝説の方は語る人によって微妙に違う。舞が聞いた話はこうだ。戦前、この高校は女学校だった。戦時中、生徒だった

ある女学生が赴任してきた若い国語教員に恋をした。桜の木の下で二人は古典文学を読みながら古の愛を論じた。所が、時代は戦時。その教員は招集され南方の海に散った。残された女学生も、たび重なる空襲の末、命を落とした。戦後、二人を知る学生たちが、遺品の古典を桜の木の根元に埋めた。その後、女学校は共学の高校に変わり、しきたりが生まれた。ここの高校生が同窓生に交際を申し込む場合には、必ずこの桜のそばで申し込むこと。女学生の霊が二人の交際を見守り、二人は幸せになる。万が一交際を破棄する場合は、やはりこの桜のそばで破棄しなければならない。そうすれば、二人は後腐れなく別れられる。もし、桜のそば以外の場所で申し込みや破棄をした場合には、女学生の霊がとんでもない不運を二人に与えるらしい。いつしかその桜は『告白桜』と呼ばれるようになった。これが、本来の伝説としきたりで、さらに新しいしきたりが戦後に生まれた。

桜の真前に小さな池があり、生物部が生簀として使っている。この池は『わかれ池』と呼ばれている。告白桜から校舎にもどるには、池を迂回しなければならない。そこで、交際申し込みが受諾され、二人が付き合うようになった場合は、二人は池の片側を一緒に迂回する。交際が拒否されたり、交際が破棄された場合は、二人は池の両側に別れて迂回しなければならない。それが戦後の新しいしきたりだ。ちなみに、桜と池は生物部が管理している。何年か前にサッカー部員がふざけて池に入り込んで、生物部の部長（女子）を激怒させた。サッカー部員が全員丸刈りになって、その怒りを治めたというのがもっとも新しい伝説だ。

伝説を信じ、しきたりを重んじるかと問われれば、ここの高校生はそんなことはないと答える。所が、実際の当事者になると、判で押したように皆このしきたりを守る。このしきたりによって、交際のプロセスがオープンかつドライ、つまり、明けっ広げで、さばさばしたものになる点が、当事者にとって都合がいいらしい。

舞は、黙々と弁当を食べながら、どうしたものかと考える。弁当仲間の香織は、さかんに、その男子のいい所を演説している。同じクラスメートなのに関心がなかったせいか、舞はその男子をよく知らなかったのだ。教室の隅では、優が弁当を食べながら聞き耳を立てている。結局、舞は交際の申し込みを断った。交際する気にならないというのが理由で、なぜ、交際する気にならないのかは舞自身も答えられなかった。一方、断られた男子の方は、憂いを帯びた舞の表情に癒され、それだけでもう断られがいがあったと納得するのであった。

告白桜でのその一部始終を3人の生徒が見ていた。そのうちの2人である香織と智也は教室の窓から見ていた。智也は野鳥観察用の双眼鏡を持ち出した。

「さすがに、双眼鏡はよく見える。あ、なんか男の方が話している」

横で黙っていた香織が口を開く。

「あたしにも見せなさい……」

そう言って、智也から双眼鏡を取り上げる。智也は不服そうな口元と嬉しそうな眼を見せていた。この季節、当然花はない。それでも茂った葉は、心地よい木陰を作り出し、男女を見守っている。香織は、しばらく観察して

「不思議ね、断られた男の方が嬉しそうにしているわ……」

と呟いた。

告白桜のしきたりを見ていたもう1名というのは優だ。自分が告白桜を見ていることを誰にも知られたくないらしく、非常階段から告白桜の方を見ていた。もし、そばで彼を見ている者がいたら、真一文字に結んだ口と怖そうな眼に気づいただろう。

木曜日

昼休みに入った直後に隣のクラスの男子1名が舞の所にやってきた。昨日のクラスメートと同じように『弁当を食べ終わったら、告白桜の所へ来てほしい』と言った。弁当仲間の香織がその男子の説

明を一生懸命してくれた。何でも剣道部の副主将で、文武両道らしい。結果は昨日と同じ。

金曜日

昼休みに入った直後に一つ上の学年の男子1名が舞の所にやってきた。昨日の男子と同じように『弁当を食べ終わったら、告白桜の所へ来てほしい』と言った。弁当仲間の香織がその男子に関する情報と噂を全て解説してくれた。生徒会では書記として皆をまとめているそうだ。結果は昨日と同じ。少しだけ違ったのは、香織が昨日までのように智也の双眼鏡を取り上げなかったことだ。

翌週月曜日

昼休みに入った直後に一つ下の学年の男子1名が舞の所にやってきた。先週の男子達と同じように『弁当を食べ終わったら、告白桜の所へ来てほしい』と言った。弁当仲間の香織も貴公子と言われていることしかその男子については知らない。結果は先週と同じ。帰ってきた舞に、香織はため息をつきながら言った。

「ねぇ、舞、一体どういうことになっているのか分かっているの？」

「さあ、どういうことかしら？　ここの所、毎日、誰かが交際を申し込んでくるけれど……」

「しかも、そろいもそろっていい男ばかりよ。それを残らず断るなんて……」

「ふーん。そうだったの。でもしょうがないじゃない。交際したいと思う人はいなかったんだもの。そのうち、そういう人が現れるかもしれないじゃない」

火曜日、水曜日、木曜日とこれまでと同じことが続いた。

金曜日

昼休みに入った直後に男子1名が舞の所にやってきた。教科書を

しまって弁当箱を取り出した舞は、その男子の気配を察し、視線を上げようとして固まった。目の前ににぎり拳(こぶし)、白い手袋をした拳が差し出されたのだ。見ていると、かすかにモーター音を立てながら、拳が開いていく。手袋の手の平にはこう書かれてあった『食後、告白桜へ』。舞は視線を上げずにコクリと頷いた。視線をあげれば優と眼を合わすことになる。それが怖かったのだ。そう、告白桜は交際を申し込む場とは限らない。交際を破棄する場ともなる。そして、告白桜の前でかわされた言葉は、反故にされることはない。

舞は、優に少し遅れて教室を出て行った。それを香織と智也が見送る。智也が嬉しそうに香織に双眼鏡を渡す。

「はい、双眼鏡」

「え、あたしに貸してくれるの？　智也はなくてもいいの？」

「もうひとつ持ってきたから」

「用意がいいのね」

「まあね」

桜の前で、優は口を真一文字に結んでいる。その目は堅い決意を秘めている。一方、舞は、昨日までと同様の憂いを帯びた表情とは異なり、不安のため蒼白であったと言った方がいいだろう。正面からお互いの眼を覗き込んで、優が口を開いた。

「舞、……　お、俺と交際してください。恋人として交際してください」

それを聞いた舞は、厚く小さな唇から眼、頬、顔へと笑顔が徐々に広がっていく。まるで朝顔が咲く様子を早送りで見ているようだ。その笑顔が広がった途端、舞は、難しい顔をして、答えた。

「いいわ。でも、一つ条件があるの、やってほしいことがあるの」

「条件か～　分かった、何でもするよ。奴隷でも何でも」

優は、舞の眼を見て言った。

「キスして」

それを聞いた優は、眼を大きく見開き、そして、頷いた。舞は静か

に目を閉じる。
　優はゆっくり顔を近づけ、眼をつぶって、恐る恐る舞の頬に口づけた。丁度、まっさらのキャンバスに最初に筆をつけた時のように。
　ほんの1秒ぐらいだろうか。優が顔を離すと、舞は既に眼を怒らせていた。
「違う！」
「違うって、何が？」
「ここ！」
舞は、自分の厚く小さな下唇を人差し指で押さえた。優は、ごくりと唾を飲み込み頷いた。舌先で自分の唇を湿らせ、再び、顔を近づけた。今度は、もう間違いようがない所まで、優の唇が近づいたのを見届けてか、舞は目を閉じた。二人の唇がふれた瞬間、舞は両手で優を引き寄せた。

　教室では、香織と智也が双眼鏡を見ながら実況中継をしていた。
「おお、優選手、舞選手にかなり接近しております……　あ！　いきなり、ほっぺにチュー攻撃だ。これは、効いたでしょう。きっと舞選手はもうメロメロのはずです」
「智也、読みが甘い！」
「へ？」
「ガキじゃあるまいし、ほっぺにチューぐらいじゃ全然だめよ」
「え！　それじゃどうすればよかったのでしょう」
「そりゃ～正面突破に決まっているじゃない。見てて、第二ラウンドよ」
「確かに。優選手、再び、舞選手に攻撃だ。これは、誰が見ても明らか。正面突破だ！　カウント入ります。ワン、ツー、スリー、……、ナイン、テン。カン！カン！カン！
舞選手、完全にノックアウトされました。　いや、ノックアウトされたのは優選手の方でしょうか？　香織解説員の判定を聞いてみましょう。いかがでしょう、香織先生」

「もちろん、二人の勝利よ。二人で壁を乗り越えたのよ」
「さすが、香織解説員、的確な解説です。おや、香織解説員の頬を涙が伝っています」
ポカ。
「余計なことは言わんでよろしい」
「と言うことで、両選手は、今、しっかり手をつないで、花道、池の周りを一緒に歩んでおります。アナウンサー冥利に尽きる感動的な試合でした。それでは、時間になりましたので、この辺で実況中継は終了いたします」

「ほんとに、あの二人には苦労させられるわね～　でも、苦労した甲斐があったわ」
そう言って、香織は安堵のため息をもらした。智也は考え込むようにして感想をもらした。
「それにしても、いいですねぇ～　キスって」
「あら、智也、相手はいるの？」
「希望する相手はおりますが、まだその段階には……」
「何なら、あたしが手伝ってあげようか？　相手はどんな人？」
そう言って、香織は智也を振り返った。
「えーと、希望する相手は……　親友の恋に嬉し涙を流す人です」
智也の返事を怪訝そうな顔で香織は受け取った。
「はあ？　それって……　あたしのこと？」
智也がウンウンと頷く。
「智也は、面白いことを言うわねぇ～　何なら試してみる？」
「と言うことはイエスという意味、交際してくれると言う意味ですか？」
「イエスかノーは告白桜で返事するしきたりじゃない。今から行こうか？」
そう言って、香織はニヤリとした。智也はすこしだけ戦慄を覚えた。
「い、いえ、心の準備がありますので、明日あたりはいかがでしょ

うか？」
「遅い！　少しだけ妥協して、今日の放課後よ！」

放課後、香織と智也が告白桜へと歩いていく。香織が先頭で、智也は２ｍ後ろを重い足取りでついていく。教室では、優が、智也の机から勝手に双眼鏡を２つ持ち出して、その一つを義手の右手を使って、舞に手渡した。舞が怪訝そうな顔で優に尋ねた。
「この双眼鏡で、あの二人を観察するの？　そんなの二人に悪いわ」
「悪くはないさ。目には目を、歯には歯を、双眼鏡には双眼鏡をって言うじゃないか？」
不思議そうな表情を浮かべた舞は、５秒後に優の言葉を理解し、驚いて尋ねた。
「それって、あの二人があたしたちを双眼鏡で見ていたっていう意味？」
「そういうこと」
「じゃ、キスした所も見られたの？」
「ああ、ばっちり見られた」
舞の顔はみるみる赤くなった。

幸い、香織と智也はキスをした。舞が
「ねぇ、あの二人のキス、長くない」
と言うと、優も
「確かに。たっぷり５秒間はしてたな。後でからかってやろうか」
と言った。舞と優はたっぷり１０秒間キスしていたのだが。

こうして、５秒間キスという新たなしきたり（ルール）が告白桜に加わった。ちなみに、二人のうちどちらかが１年生なら、正面キスは免除され、代わりに頬キスをしてもいいことになっている。

白手袋とひっつき虫（その9）

土曜日の早朝、いなり寿司を持って電車に乗った。行く先は舞の待つ五色流道場。護身術をもう一度教えてもらって、きちんとマスターしたかったからだ。優から縁を切られた舞の様子が気になっていたからという理由もある。

前回と同じようにストレッチから始め、一通り復習した後に、新しいパターンも習った。今日は、心身ともに調子がいいせいか、体を動かすのが楽しくてたまらない。たっぷり運動すれば、自然とお腹がすく。

「ハイ、どうぞ。この間の特大おにぎりのお礼」

そう言っていなり寿司を舞に差し出す。

「あら、おいなりさんね」

舞は、小さな口で、一口ほおばった。

「おいしい！」

「でしょ。あたし、東京に来るまでは、いなり寿司がこんなにおいしいものだと思わなかったの」

「え、東京のいなり寿司って違うの？」

「東京のいなり揚げは甘くて味が濃厚なの。初めて食べた瞬間からやみつきになったわ。だから時々、スーパーでいなり揚げを買って、寿司飯の中にいろんな具を入れて試してみるの。今日はぎんなんを入れたわ」

「ちゃんとぎんなんが入っているのはわかったわよ」

舞は、いなり寿司をゆっくり食べた。小さな口をめいいっぱいあけてほおばるその厚い唇が妙になまめかしい。

「お姉さま、じっと見ないでよ。恥ずかしいわ」

「あ、ごめん、ごめん。ついつい舞ちゃんの唇に見とれちゃって」

「唇？」

「そう。舞ちゃんは可愛いけれど、特に唇は可愛いわ。お姉さまが

キスをしたくなるくらい」
「ええ！　お姉さま、それだけはやめて。ファーストキスもまだなのに！」
「あら、そうなの。それじゃ、ファーストキスは大切な人のために取っておきなさい」
「大切な人？　大切な人って誰かしら？」
「キスしたくなる人が大切な人で、大切な人ならキスをしたくなるわ」
「う～ん。それって、大切な人の定義になっていないわ」
「そうね。ようするに、難しく考えちゃだめ。素直になること。それと普段から人に興味を持つこと。そうすれば、誰が大切な人か自然にわかるわ」
「自然に？」
「そうよ。でも、あたしは人に興味を持てなかった。というか、興味を持つのが怖かったの。だから、恋愛もできなかったわ」
そう、あたしはまともな恋愛をしたことがないし、恋愛が怖かった。舞にはあたしのようになってほしくない。ちゃんと恋愛を経験していれば、今のあたしみたいに、加古先生と渡の二股をかけて、ウジウジ悩むこともないわ。二人のどちらと結婚したいかもよくわからないし……　そもそも、あたしは二人が好きなのかしら？　恋しいと思っているかしら？　あたしは次第に自分の世界に没入していった。
「おいしかったわ」
舞の声で、我に返った。いつの間にか、舞はいなり寿司を2個平らげて、満足そうな笑みを浮かべていた。
「幸せそうね」
「え、そうかもしれない。大切な人と一緒に食べたからかしら」
「あ、ありがとう。あたしが大切な人だなんて……　ということは、舞ちゃんのファーストキスはあたしが奪ってもいいのかしら？」
「それは、その……」

「それじゃ、男が嫌いになったら、お姉さまがキスを教えてあげるわ」
「お姉さまってそういう人だったの？」
「そういう人だったのよ」
と言って、あたしはニヤリと笑った。舞は一瞬怯えた。本当にこの子は素直ねぇ。その怯えた表情が庇護欲をそそる。あたしは吹き出した。
「あはは、ごめんごめん、今のは冗談よ」
舞は、ほっとして、緊張をといた。それがまた可愛いわ。
「舞ちゃんは本当に可愛いわねぇ。優君が言ってたこともまんざら嘘じゃなさそうね」
「優ちゃんが？」
しまった！　口がすべった。優の名前は禁句だったわ。先週、舞は優から縁を切られて、泣きながら帰ったのだった。今日は、舞を励ますつもりで来たのに、あたしとしたことが……
「優ちゃんは何て言っていたの？」
「え、それは、その～　何だったけ？　思い出せないわ」
とあたしはごまかそうとした。
「ねぇ、教えて。お願い！」
思いつめたような舞の眼に吸い込まれそうになる。
「しかたないわね。確か……　こんな風なことを言ったわ。『舞は学校中の男子が認める可愛い子で、俺なんかにひっついているのはかわいそうだ』って。『自由にさせなきゃいけない』とも言ったわ」
「優ちゃん、そんなことを言ってたの」
舞は目を伏せ、考え込んでしまった。あたしは、自分の失敗を挽回すべく何か言わなきゃと思って焦った。
「それは……　多分、優君が舞ちゃんを『愛』していたからよ」
「愛？」
「そう愛よ！　好きとも違う、恋するとも違う、愛よ！」
とりあえず、そう断言した。

「愛は、好きとも恋とも違うの？」

へ？　子供のくせに意外としつこいわね。脂汗を垂らしながら、答えを考える。右脳と左脳をフル回転させて。チーン。

「好きと恋は、自分の感情。自分の素直な感情。それに対して、愛は……　愛は相手を思いやること、相手の立場に立って、相手の幸せを考えること。相手の幸せのためであれば、自分が嫌われてもいい、自分が不幸になってもいい、それが愛じゃないかしら」

この答って結構いい線を行っているじゃない。とあたしは自画自賛した。

ふと、舞に目をやると……　涙をぽとぽと落としていた。

「私、やっぱり、優ちゃんを忘れられない」

しまった。こういうのを地雷を踏んだって言うのかしら？　とりあえず、舞の頭をあたしの胸に抱き寄せた。たまには垂れ乳も役に立つわねと思いながら、静かに泣く舞の頭を抱いた。

５分後、泣きやんだ舞に残りのいなり寿司を押しつけて、あたしは、逃げるように帰った。そして、自己嫌悪に陥った……　コンビニでアイスを買うまでは。

翌日曜日、ハイになったあたしは、新しいいなり寿司を持って、休日出勤している渡の職場に押しかけた。待ち合わせ時間よりも少し前に渡の勤める旅行社の入ったビルに到着したので、窓口を覗いてみることにした。もちろん、渡は、窓口担当ではないので、窓口に居るとは期待していなかったわ。

店内にはゆったりとしたＢＧＭが流れ、どことなく高級感が漂う。ここは本店だから、窓口も支店とは雰囲気が違う。きっと客層が違うのね。よく見ると窓口のスタッフは皆、美女ばかり。絶対、顔で選んでるわ。カウンターのスタッフは同じ制服を着ていても、ブローチやスカーフが個性の違いを際立たせている。あでやかな美女、清楚な美少女、つややかな女性、ボーイッシュな女の子、古風な美

人。まるで花園に迷い込んだよう。中でも、一番の美女は、カウンター奥のデスクに座る凛とした女性。ピンストライプの黒のスーツが全身から放たれる色香をかろうじて抑え込んでいる。まるで現代のクレオパトラね。あたしは、深いため息をつき、ハイな気分がしぼんでいくのを実感した。渡がこの場にいないのがせめてもの救い。だって、もし、ここに渡がいれば、ハーレムそのものだわ。

　早速、スタッフに声をかけられたけれど、旅行の申し込みに来たわけではないので

「今日は、パンフレットをもらいに来ただけですので、お構いなく」

と言って、あたしは、パンフレットの並べられたコーナーに行った。今だとクリスマスとお正月のシーズンに合わせたパンフレットが並んでいる。伝統的なヨーロッパ、エネルギッシュなアジア、夏を迎える南半球と地域も色々あるわねぇと思っていたら、

「迷っていらっしゃるようですね。ご希望のイメージをおっしゃっていただければ、ピッタリのツアーをお探ししますよ」

そう言って、ボーイッシュで元気のよさそうなスタッフが近づいてきた。うーんそうね。どうしようかしら。

「最近、人気の出てきたトルコなんかいかがでしょう。東洋と西洋の接点であるボスポラス海峡を擁する古都イスタンブールをはじめ、見どころは沢山ありますよ」

　その時、カウンターの美女たちの視線が一斉に動いた。視線の先には見なれた茶髪の男性。いつもと違って、グレーのスーツをきっちり着こなした渡だった。書類を持ってカウンター奥へ歩いていく。そして、なんと、例のクレオパトラと話し始めた。『渡！』　鼻の下が伸びているわよ。動揺したあたしは、眼の前のスタッフの質問に上の空で答えていたらしい。

「あ、『渡る』ですか？　橋がかかっていますから、ボスポラス海峡を渡るのは簡単ですよ」

まずいわ、なんとか、『いなり』寿司を口実にあの二人を引き離さないと。このまま、渡をほおっておくとろくなことにならない予感

がする。
「あ、『イナリ』湖ですか。よくご存じですね。フィンランドのイナリ湖は、オーロラ鑑賞の隠れたスポットです」
渡がクレオパトラのデスクにかがみこみ、書類の文字を指でなぞって、何やらささやいている。『近い、近いわよ！』　渡の頬がクレオパトラの髪に触れそうだ。
「え、もっと『近い』方がよろしいですか？　タイのビーチなんかはいかがでしょう？」
クレオパトラも、指で書類をなぞりながら話している。その手は柔らかく、動作にはつやがある。やめて！　その『みずみずしい』肌で渡を誘惑しないで。
「あ、『水』はお嫌いですか？　では、山の方がよろしいですか？」
クレオパトラの指は、さも当然のように渡の指をつまんで、書類の上を誘導していく。触っている！　その瞬間、あたしの頭は『真っ白』になった。
「『真っ白』ですか？　ああ、山ではなくて砂漠がいいのすね、それでしたら、こんなのはいかがでしょう」
渡！　だめよ、クレオパトラの眼を見つめちゃだめよ。あの『媚び』るような眼に魅入られたら、渡はもうあたしの所には帰ってこれないわ。
「コビ？　ああ、ゴビ砂漠ですね。では、こんなツアーはいかがでしょう」
　クレオパトラとの打ち合わせを終えた渡は、ようやくあたしに気がついた。蟻地獄ならぬクレオパトラ地獄から脱出して、ズンズンやってきて
「よ！」
といつもの笑顔で迎えてくれた。心配していたあたしは、その笑顔にほっとすると同時に、緊張の糸がプッツンしたみたい。あたしの目の前で、ボーイッシュな彼女と渡が何やら会話していたが、言葉が頭の中をすり抜けていく。あたしは、黙って渡の笑顔を見つめて

いた。
「あれ、もしかして、この方、八丈主任の知り合いですか？」
「え、まあ、そうやけど」
「あ、わかったわ。いつだったか主任が自慢していた綺麗で若い義理のお母様ね」
彼女は、急にあたしの方へ振り向いて
「いつも、主任には世話になっています。仕事だけじゃなくて、プライベートでもお世話になっています」
と挨拶したので、あたしは、機械的に返答する。
「いいえ、こちらこそ、いつも渡がお世話になっております」

「碧！　碧！　どうしたんや」
気がつくと、あたしはビルの屋上に渡と二人で立っていた。温かな陽光が屋上の植栽に降りそそいでいる。あたしは渡に抱きついて半べそをかきながら呟いた。
「会いたかったの。戻ってきてありがとう。クレオパトラ地獄から戻ってきてありがとう」
「なんや、その～　クレヨン、パトカー、地獄って」
「な、なんでもないわ。忘れて」
「ああ、ええよ。そのかわり……」
そう言って渡はキスをしてきた。その熱く優しいキスはあたしの不安を徐々に溶かしてくれた。

「あれ？　あたしは何でモンゴルのパンフレットを持っているかしら」
「あ、ほんまや。『蒼き狼になって草原と砂漠をかけ抜けよう』って書いてあるで。碧はモンゴルが好きなんか？」
「いや、別にそういうわけじゃないけれど。なぜモンゴルなのかしら？　さっきのボーイッシュな女の子が勧めてくれたんだわ。色々、話をしたのだけれど、何も覚えていないわ。それに、最後に何か変

なことを言われた気がするけれど……　思い出せないわ」
「思い出さんでええよ」
渡は、キスであたしの口をふさいだ。
　植栽のそばのベンチで、いなり寿司をお腹いっぱい食べた。最後に長いからみつくようなキスをした。もちろん、いなりの甘い味がした。はっきりしたことは、あたしが渡を好きだってこと。ずっと渡のそばに居たいと思う。

　白手袋試作2号機、略して白手2（ハクシュツー）を優が使い始めてから3週間後、使用具合を見るために、再び研究室に来てもらった。研究室にやって来たのは、優だけではなかった。なぜか舞もついてきた。別れたはずだったのだけれど、どういうこと？　隣の加古先生は当然という顔をしている。よくよく二人を見ると、前と違って、舞の右手を優が左手でしっかり握っている。
　時折、二人が見つめ合って、仕事がはかどらないのだけれど、あたしは文句も言わずに淡々と進める。優に使用上の問題はなかったかと聞くが、モータのトルクがやや弱いこと以外には特に問題はないらしい。どうやら、優はあたしたちが苦労して製作した右手義手のことより、左手で握った舞の手の方が気になるらしい。日中の電池の減り具合をログで確認して、モーターの最大電流を2割ほど引き上げることにした。
　一通り仕事を終えて、前回やり損ねた『打ち上げ』を提案しようかと思ったけれど、一緒にいるだけで幸せそうな二人に、打ち上げは野暮だと思ってやめた。

「なんとかなりましたね」
加古先生は、二人を見送りながら感想をもらした。
「そうですね。若い恋はすがすがしいわね」
とあたしも感想を述べた。

「では、私たちは、イタリアンで大人の恋を楽しみましょう」
加古先生の愛おしそうな眼は、あたしの心の片隅に小さな炎をともした。

一人イブを楽しむ女（その1）

恋する『乙女』にとって1年で一番大事なイベントと言えば、間違いなくクリスマスイブでしょう。イブは本命の相手と過ごすものと世間は信じている。そして、今年ばかりは、あたしも世間の常識を無視するわけにいかない。全く、イブのことを考えるだけで頭が痛くなるわ。いっそのこと、23日の翌日が25日になってしまえば、一石二鳥。歳もとらないし、本命選びで悩むこともない。

昨年までは本命ゼロだったのに今年は加古（かこ）先生と渡（わたる）の二人の候補がいる。イブまでの残り日数、これまでのデート頻度、デート1回当たりの親密度の増加率を考えて予測すると、イブまでに本命を決めるのは不可能。12月にはいってこの状況に愕然とする。それでも次善の策を弄するあたしは立派？　それともせこいかしら。

イブ前々日。蟹がおいしいという評判の中華レストランに加古先生を誘う。もちろん、フォーマルな赤紫のスーツに人魚のブローチでばっちり決める。ただしメイクは少しぼかし目にした。イヤリングはしない。目立つアクセサリーは1点だけと決めているのが一つの理由。

青島ビールで乾杯して、クリスマスプレゼントの無線マウスを進呈する。本当は、オリジナルのマウスパッド、表には先生の、裏にはあたしの顔写真が印刷されたマウスパッドを考えていたのだけれど、さすがに恥ずかしくてやめたの。もちろん、加古先生に見られるのが恥ずかしいのではなく、先生が自慢げに学生に見せびらかすことを想像したのよ。とにかくこのアイディアは封印。もし、先生に言ったら、絶対、自分でそれを作るわ。なにせ、加古先生は、先生の顔とあたしの顔が向き合った合成写真を携帯の待ち受け画面にしているくらいだから。そんなことを考えながら、味もそっけもないマウスを先生に進呈した。

「おや、無線マウスですか。いやー　これはいいですね。早速職場で使わせてもらいますよ」
「喜んでもらえて、よかったわ」
「ところで、碧さんは、マウスはどんなふうに握るのですか？」
そう言って加古先生はマウスを差し出した。握り方なんてあるかしらと思いつつ、いつものようにマウスを右手で握る。先生は嬉しそうにして、マウスを握った右手に自分の右手を重ねた。え、何？
「では、私はこのマウスを碧さんの右手だと思って使わせてもらいます」
「……」
またやられたと思った。先生は何かにつけてあたしに触りたがる。女性アレルギーが出ないのがよっぽど嬉しいのか、一瞬の隙をついて触ってくる。『手相をみてあげましょう』ぐらいまでは可愛かったわ。先日、デートにイヤリングをしていったら、『よく見せてくれ』と言って、頬にキスをされた。その時、不謹慎ながらゾワゾワっとしてしまった。でも、たまにあたしの心の琴線に触れることがある。そして、追尾精度３ｍｍ、命中率１００％の言葉のミサイルが、あたしのこわばった心を氷解させるのよ。
　先生もちゃんとプレゼントを用意してた。可愛いニットの帽子とおそろいのミトン。光沢のある白色と柔らかな手触りに感激した。折角だからと思って、帽子をかぶって手袋をはめてみた。
「ほおー　まるで妖精ですね。思ったとおりです」
「妖精？」
あたしは、思わず吹きそうになったけれど、先生のまじめな顔を見て思い直した。コンパクトで映してみると、そこにはいつもと違って、柔らかい雰囲気の自分がいた。そしてそれは帽子のせいだけではないような気がした。それともやっぱり帽子がいいのかしら。
「あら、これ、カシミヤだわ」
「かしみや？　樫の宮？　かしみ屋？　ブランドの名前でしょうか？」

いぶかしがる先生に、1拍遅れて教えた。
「カシミヤはヤギの毛から作った繊維です。羊毛から作ったウールよりも高級とされているわ」
「そうなんですか。素材は知りませんでした」
「先生が選んだのではないですか？」
「結果的にはそうなりましたけれど、最初は選ぶ自信がありませんでした。そこで、店員さんに『シャープな美女にあこがれる本当はかわいい少女を、かわいく見せるものはありませんか』って聞いたんです」
「シャープな美女？　かわいい少女？」
「でも、それは失敗しました」
「失敗？」
「ええ、失敗しました。『ご自身がその方をかわいいと思っていれば、自然と選べますよ』と言われまして……　仕方なく、携帯で撮った碧さんの写真を見ながら5軒の店を回りました」
「5軒も！」
携帯を持ってうろうろする先生を想像すると笑えるわ。と当時に涙も出そうになる。
「ありがとう先生」
と礼を言う。
「ハイ！　2回目です。今日はこれで、『2回』私のことを先生と呼びました。キスまであと1回ですからね」
しまった！　忘れていたわ。前回のデートで約束させられたのよ。あたしが先生を名前の『寛（ひろし）』で呼ばないものだから、あと3回『先生』と呼んだらキスをすることになった。ジリジリと包囲網が狭まっていくのがわかる。でも、名前で呼ばれない不満は理解できるわ。今度こそ気をつけなくちゃ。

蒸して真っ赤になった蟹をつついているあたしに加古先生は尋ねた。

「２４日はどうなさるんですか？」
来た来た！　それを聞かれることはちゃんと予期していた。用意した答えを言う。
「実は、２４日はあたしの誕生日なの。２９歳になるの。それで、実家で母と弟に誕生日を祝ってもらうんです」
後半は真っ赤なウソ。
「おや、おめでたい日ですね。それじゃ、小さいころから盛大に祝ってもらった……」
先生はあたしの不満そうな表情を見て、いったん口をつぐんで続けた。
「盛大に祝ってもらったというよりは、ついでに祝ってもらったという感じでしょうか？」
あたしは、小さかった頃を思い出してウンウンと頷く。そう『ついで』というのは当たっているわ。

小さい頃は、あたしの所にもサンタが来ていた。ところが、ある時パパはこう諭した。
「今年はサンタさん忙しいみたいなんだ。だから、小さい子にはプレゼントを配れるけれど、大きなお姉ちゃんお兄ちゃんの所までまわっている暇がないんだって」
「ええ！　ことしは、サンタさんにかわいいマフラーをおねがいしていたのに」
「でも、みどりは誕生日だから、パパとママから誕生日プレゼントを貰えるだろう。だから、パパママからとびきり豪華な誕生日プレゼントをもらって、サンタさんのお仕事を楽にしてほしいって頼まれたんだ」
「たのまれたって？」
「もちろんサンタさんに頼まれたんだ。ほら、これが証拠の手紙」
そう言って、クリスマスカードを渡してくれた。雪だるまとトナカイの描かれたカードを開けると何やらミミズのような模様がある。

「パパ、これって字？」
「そう。英語の文字だよ。お父さんが翻訳してあげよう」

『親愛なるみどりさま
毎日、元気にしていますか？
みどりはいつもいい子にしているので感心です。
今年はプレゼントが必要な小さい子が多く、みどりにプレゼントを届ける時間がありません。
許してください。
あなたをいつも見守っているサンタより』

あたしは、そのミミズ模様を見ながら、大きな手で手紙を書くサンタを想像していた。手紙をもらえたと言う事実に胸がいっぱいになって、こう答えた。
「わかったわパパ。ことしは、この手紙でじゅうぶんよ」
パパは、大きな手であたしの頭をなでてくれた。
今から考えると、パパは、誕生日とクリスマスのプレゼントを別々に用意するのが面倒だったのだわ。きっとパパのことだから包装紙も別にしていたと思う。それを一つにしようと考えた秘策が、サンタからのクリスマスカード。そのカードはあたしの宝物になった。高校生になって、ふと、カードを翻訳してみたら、パパの言った通りのことが書かれてあってビックリした覚えがある。何に対しても手を抜かないパパらしい。
サンタからのクリスマスカードは嬉しかったけれど、翌年からはカードもなく、プレゼントの個数が1個減って、損をした気分になったのは確かね。だいたい、クリスマスのお祝いと誕生日のお祝いが一緒になるとお祝い度の総和はどうしたって目減りする。というわけで、あたしはクリスマスイブを嬉しさ1．5倍で迎えるのが常だった。

温かい紹興酒を一口飲んで加古先生はあたしを慰めてくれた。
「でも、クリスマスイブが誕生日だなんて、うらやましいですよ」
「どうして？」
「だって、覚えやすいじゃないですか」
「それはそうだろうけれど……」
「誕生日で一番大事なことは、親や友人が自分を祝ってくれること、思ってくれることです。毎年、イブの日になれば、沢山の知人が『そう言えば、今日は碧の誕生日だった』と思い出してくれるはずです。そして、その一瞬、ほんの短い瞬間かもしれないけれど、あなたのことを思ってくれるはずです。こんな得なことはないじゃないですか」
「そんなこと考えたこともなかったけれど……　そうかもしれない」
あたしは、今まで損をしたと思っていたけれど、本当は得をしていたのね。あたしって、ホントにおバカさんだわ。瞳に涙が溜まっていくのがわかる。またもや先生は琴線に触れたのだ。
「ありがとう先生」

熱々のゴマ団子をほおばっていると加古先生が尋ねてきた。
「年末年始はどうするのですか？」
「名古屋の実家で過ごすつもり。たまには、母に顔を見せないと心配しますので」
一瞬、加古先生は変な顔をした。あれ、嘘じゃなくて本当の予定なんだけれど……　そう、その時は、何がおかしいのかわからなかったわ。

レストランを出ると寒風が吹いていた。コートの襟を立て両手をポケットに入れても足元から冷たい風が吹き込んでくる。勘定をすませた先生はあたしの正面に立ってささやいた。
「約束ですから」
暗闇の中、先生の表情は見えないけれど、にっこりほほ笑んでいた

のは声からわかる。あたしはとぼけた。
「何の約束でし……」
先生の唇があたしの言葉をふさいだ。

一人イブを楽しむ女（その2）

イブ前日。水族館に渡を誘う。駅から水族館まで歩きながらあたしの話を聞いてもらう。

「今まで水族館は好きだったのだけれど、動物園は嫌いだったの」

「何でや？　歩き回らなあかんからか？」

「確かに動物園の方が広いけれど、そうじゃないの。檻の向こうから投げかけられる視線がいやなの。チンパンジーとか高等な動物になるほど人間をじっと観察しているの。それが耐えられないの」

「う～ん、そんなこと考えたことあらへんけど、考えたとしても逆やないか？　つまり、動物が人間を観察するんやなくて、人間が動物を観察するのが動物園やないか」

「そうかしら？　動物園に来るたいていの人は、たまにしか来ないわ。普段は、学校に行ったり、仕事をしたりしているから、動物を見ても珍しいとしか思わないじゃないかしら」

「それが普通やで」

「だけど、檻の中の動物は違うわ。食べることと寝ること以外に何をすると思う？」

「さあ。何やろう？」

「人間をじっくり観察するのよ。そして、家族の中で財布を握っているのは誰かと考えたり、フェロモン出している女がいれば、芸を見せて男の気をそらしたり、自殺願望のある乙女にしんみり話しかけたり。そう風に、毎日、毎日、人間を見ているのよ。だから動物園では、動物が人間を観察するのよ」

「碧は考えすぎやで」

「そんなことないわ。とにかく、そういうわけであたしは動物園が嫌いだったの。反対に水族館は好きだった。魚は高等動物じゃないし、なによりこちらとあちらの間に分厚い透明な仕切りがある点が違うわ。つまり、見る方も、見られる方も別世界だから気にならな

い。動物園のように空気を共有することもない」
「ああ、それで、今日は水族館なんか」
「違うわ。実は、ここのところ別の水族館の仕事をしているの。今、向かっている水族館も何度か見に来たことがあるわ」
「へぇ、そうなんか。それやったら、今日はライバルの偵察？」
「それも違うわ。純粋に渡と水族館を楽しみたいだけよ。ライバルだけれどここの水族館は楽しいわよ」
そう話している間にあたし達は目的の水族館に着いた。

玄関ホールは、年末年始を控えて華やかに飾ってある。中でも人魚のイルミネーションは女の子に人気があり、幼女から熟女まで写真を撮ってもらっている。もちろん、あたしたちカップルも撮ってもらった。

さすがに今日は人出が多い。家族連れの子供達が元気に走りまわり、それを親が追いかける。その一方で、カップルは二人だけの世界に浸ろうと懸命である。今日は混んでいるからすべてのコーナーを見ている暇はない。何度か来たことのあるあたしは、渡の手を引いて、見どころを案内していく。

この水族館の目玉は巨大水槽。分厚いアクリルの壁で囲まれた空間では、愛嬌のある小さなサメ、きらきら光る無数の小魚、柿色や淡青色のラインの入った魚達が社会を形成している。その中でも貴族にあたるのが大きなエイ。優雅に泳ぐその姿は、魔法の絨毯が空を飛んでいるようだわ。
「エイは何も悩みがないように見えるわね」
「まあ、魚類やし、何も考えへんのやろ」
「ところで、さっきの話の続きなんだけれど、最近、別の水族館であるプロジェクトを始めたの。うちの会社からプロジェクトに加わっているのはあたし一人。あとは水族館のスタッフ」
「ふーん。さびしいやないか」
「少しね。でも外の眼も必要だというのが、あたしの入っている理

由の一つ。もちろん実際に物づくりの段階になればプロとしての出番もあるわ。でも、今はまだテーマを決めた段階」

「テーマ？」

「テーマは、五感で海をリアルに感じさせること。最近、そういうのが流行っているのよ。丁度、観光牧場で、馬に乗ったり、ヤギに餌をあげたり、ウサギをなでたりするでしょう。それと同じようなことを色々な水族館でやっているの」

「つまり、魚や貝を触ったり、餌をやったりできるっちゅうやつ？」

「そう。でも、あたし達の目指すものは、さらにその一歩先。珍しいだけじゃなくて、優しさ、厳しさも含めて海を感じさせ、海に行きたくなるような水族館を目指しているの」

「そんなことして、みんな海に行くようになったら、水族館の商売あがったりやないか？」

「それは心配ないわ。珍しいものが手軽に見れる点で、水族館は存在価値があるから」

巨大水槽は上から見ることもできる。ちょっとした浜のスペースがあって、人工的な波が打ち寄せている。

「これも五感にうったえる一つのやり方よ」

「五感？」

「波の音がするでしょう。それに、磯の香りもわずかにするわ。これをもっと進めて、人間が魚の気持ちを理解できるようにするのが究極の目標」

「それは無理やろう。魚は水中に住み、人間は陸に住むんやから」

「そうね。同じ空気を共有できる動物園とは違うわ。でも、あたし達は、水族館をもっと動物園に近づけたいの」

「それって、碧の嫌いなこととちゃう？」

「確かに昔のあたしは嫌いだったわ。だけど今は違う。渡は、同じ空気を吸うこと、触れ合うことの快感を教えてくれた。肉体的な触れ合い、精神的な触れ合い、両方とも大事だって教えてくれたわ」

「精神的触れ合い？」
「そう。いつかの渡の言葉を借りれば、『心を預ける』ということ」
「そんなこと言ったやろか」
「渡は忘れっぽいから覚えていないでしょう」
「そう言われると、なんや悔しいなぁ」
「うんと悔しがって……　で、人間は五感だけでなく言葉がある。言葉で思いを伝えることができる。温かい思いも冷めた思いも伝えられる。そうやって、思い思われることが人間なんだってわかったの。だからそれを避けてちゃいけない……　渡には感謝しているわ」
あたしは、渡に微笑みかけた。が、渡は不思議そうな顔をする。
「う～ん。俺にはようわからんけど……　やっぱ、碧は頭良すぎるんとちゃうんか？」
「あはは、そうかもしれない」

あたし達は水族館内の食堂で海鮮丼を食べた。さっきまで泳ぎまわっていた魚が思いおこされ……　食欲がわいた。
「あたしが渡に教えらる事はほとんどないけれど、過去は捨てたもんじゃないってことは理解してほしいの。そのためのクリスマスプレゼントを用意したのよ」
あたしは、自分で包装し直した箱を渡に渡した。この時ばかりは渡も丁寧に包装を取った。
「なんかのディスプレイみたいやな。それとも写真立てか？」
「いい線いっているわ。デジタルフォトフレーム。メモリーに入った写真を順番に映していく機械よ。和風に言えば、自動表示更新機能付映写板って所かしら」
「児童、行進、昨日、着いた晩？」
「……　何でもないわ、忘れて。この中には渡とデートした時の写真が入っている。そうだ、さっき玄関ホールで撮った写真も入れるから、ちょっと貸して」
そう言ってあたしは、ケーブルでデジカメをつないで写真を転送す

る。

全部をスライドショーで表示してみる。そんなに枚数はないけれど、渡と過ごした時間が思い起こされ、何度見ても感慨深い。渡は、ほんの少し嬉しそうな顔を見せたかと思うと黙ってしまった。すぐにその理由を思いあたったけれど、念のためにその反対のことを言ってみた。

「感動するでしょ？　渡は過去のことを覚えない主義かもしれないけれど、過去も悪くないでしょ？」

「これ自体は悪うないけど……　明日のイブ、碧の誕生日になれば悪夢に変わるかもしれん。そう思うたら、素直に感動でけんで」

「そうね。その通りかもしれない。でも、いい思い出も、わるい思い出も皆ひっくるめて渡の過去なの。そうした道を歩んできて今の渡がいるのよ。あたしも同じ。渡と出合ったから今のあたしがあるの。渡だけじゃないわ。プロポーズしてくれた人もいた。あたしを育ててくれた人もいた。そういう人があたしの人生に交差し絡みつき影響し合った。そういう風にして過去は現在に反映されているよ。そのデジタルフォトフレームは捨ててしまってもいいし、メモリーを消去してもいいわ。でも、渡はあたしの人生の一部だったし、あたしは渡の人生の一部だったことは忘れないでほしいの」

「わかった。俺、八丈渡は水上碧とつきおうてたことは忘れん。そやけど、今は、このプレゼントは受け取れんわ」

「今は受け取れない？」

「明日……　明日２４日、俺が碧に渡す誕生日プレゼントと交換やったら受け取るで。遅まきながら、俺も勝負に出ることにした。碧にプロポーズした先生には負けられん」

そう言って渡は、腕を組んで黙ってしまった。あたしに向けられた強い視線を感じる。それはとても強く、まともに眼を合わすことはできない。でも、あたしも渡と同じぐらい強情だ。ため息をついてから渡に答えた。

「明日は、渡とは会えない。だから明日は誕生日プレゼントは受け

取れないわ」
最初は、加古先生にした嘘の言いわけを渡にもするつもりだったの。つまり、『明日は名古屋の実家に帰って誕生日を祝ってもらう』って。でも、今、渡に嘘をつくことはできない。こんなにあたしのことを思ってくれているのに嘘はつけない。かといって渡の次の言葉、当然予期される次の問いに対する答えを用意していたわけではなかった。
「明日は、加古先生に会うからか？」
渡は先生の名前を口にした。あたしは暫く考えて返事をした。
「ノーコメント」
そして、渡を睨みつけた。もし、少しでも眼をそらせば、涙が出るのはわかっていた。そうなれば、明日のことも黙っていられなくなることは確実。だから、あたしは渡を睨みつけた。
「……　そうか」
と渡は眼をそらした。
別れ際、渡はいつもと違って軽いキスをした。寒風があたし達の間を吹き抜けていった。

一人イブを楽しむ女（その3）

イブ当日。どうするかは決まっていた。だけど、何をするかは決まっていない。浅い眠りは憂鬱な気分を晴らしてはくれないが、キンと冷えた早朝の外気は今年の誕生日が例年と違うことを期待させる。が、根拠はない。

分厚く切ったトーストをほおばりながら、年末の雑事をチェックする。年賀状はすでに表裏をプリンターで印刷し投函した。部屋の掃除は、なんとなく気分が乗らないので後回し。クリスマスと年始の飾りつけはしない。実家に帰る切符はすでに購入した。色々考えていると2つほど思いつく。一つは実家で年始に食べる和菓子の調達。もう一つは来年のスケジュール帳の準備。あたしのスケジュール管理はアナログ派。手書きの手帳を愛用している。先日、文具屋で真っピンクな手帳を購入した。目立つ色なら忘れたり、失くしたりしにくいと思ったのよ。

今年のスケジュール帳に書かれた年末以降の予定を新しい手帳に転記していく。重要な個人情報の転記も忘れてはいけない。スリーサイズも一応転記する。ただし、バストとウェストは若干増加した。ふと気になって、今年のスケジュールを見返してみる。5月以降には、出張や社外の打ち合わせの合間に、デートもちらほら入っている。水上碧の28歳の1年は、結構充実していたと思う。いろんな人といろんな所に行ったわ。ゆっくり歩く人、自分勝手に歩く人、猛スピードで歩く人、あたしに合わせて歩く人……　沢山歩いた……　なんだか無性に歩きたくなったわ。

黒ジーンズをはき、白タートルネックに昨年の誕生日に自分に買ったシルバーのネックレスをする。グレーのフリースジャケットを着こんで、加古先生にもらった純白の帽子にミトン。さらにお気に入りのウォーキングシューズをはけば、すぐにハイになる。

上野公園の西郷さんの銅像に敬礼した。その時、銅像がちらっとこちらを見下ろした。久しぶりの神様の視線だった。

「見守るのは今日が最後じゃ」

突然の宣言に戸惑うが、もう一度敬礼した。

「行ってきます」

少し迷って反時計周りを選ぶ。そう、あたしは、イブの日かつ29歳の誕生日に『一人』で山手線に沿って歩くことにしたの。山手線は1周35ｋｍ、線路に近い道、線路と平行な道を上手に選んでいけば距離は線路とあまり変わらない。時速4．5ｋｍ／ｈで歩けば、8時間ほど。午前中に4時間、午後に4時間歩けばいい。

上野公園からは鶯谷を目指さずに谷中墓地を通る。ここは、ゼンマイ仕掛けの狐さんと行ったところ。今でも携帯片手に型どおりのデートをしているかしらと懐かしくなる。

田端の先から大塚近くまでは線路に沿った歩きやすい道がある。大塚から池袋までは大胆にショートカットして超高層ビルのわきを通る。確かここの上にも水族館があったわ。

池袋は買い物客でごった返していた。ここは特急の始発駅になっている。連絡が取れず、不安を抱えたまま特急に乗ったことがある。行く先には、牛がいて、牛飼い少年がいた。その少年は、時折、会社に顔を出しては、あたしを飲みに誘うが、ここ数カ月は顔を合わせていない。彼ならイブはかわいい女の子と過ごしていそうだわ。

途中、ドーナツとコーヒーで小腹を満たし、分速を80ｍ／ｍｉｎに上げる。大学のわき、韓国料理店のそばを通ってガード下をくぐると新宿副都心。超高層ビルが立ち並ぶ。あの大地震の時、この辺りのビルも相当揺れたに違いない。あたしも散々な目にあった。今でも、時々揺れているような気がする。最初はめまいだと思った。大地震の二日前、たまたま打ち合わせでビルの地下にいた。そうしたらめまいがしてきて体が揺れているような気がしたの。風邪で三

半規管がやられたのだと思ったら、他にもそういう人がいて地震だということになった。あの時あの場に居た一人は仙台で被災した。一方、あたしは、こうして元気に『一人』で歩いている。

本命候補は二人いたけれど、結局、最後まで一人に絞ることはできなかったし、その場しのぎでどちらかを選ぶことなんて不誠実なことはできなかった。だからこうして『一人』でイブを楽しみ、『一人』で誕生日を祝うの。侘びしくないと言えば嘘になる。けれど、あたしを思ってくれる人がいる。それだけで幸せだ。

渋谷駅は沢山の路線が交差する若者の街。この地下鉄の改札前で、高校の同級生と別れの握手をした。彼は、あたしに思いをよせていたのだけれど、気がつかなかった。最近まで音信不通だったが、先日、別の同級生から、彼が日本に帰ったきたらしいと教えてもらった。ネットで検索してみたら、アメリカの大手ＩＴ企業の日本支社長だったわ。別れる時にアメリカで成功してやると言っていたけれど、その通りみたい。あたしは、エースにもなれず、本命もいないとウジウジしている。やっぱり鍛え方が違うのかしら。

恵比寿でこってりしたラーメンをすする。替え玉も頼んだ。保湿クリームを顔に塗って、スローペースで歩き出す。大崎から品川はショートカットする。下町の電気メーカーがちらりと見える。加古先生はここのモーターを愛用している。義手には最適なモーターと言ってたわねと思っていたら、本人から電話がかかってきた。

「もしもし、加古寛です」

「あ、碧です。こんにちは」

「誕生日おめでとう」

「ありがとう」

「今どこ？」

一瞬、２日前の嘘を繰り返そうかと思ったけれど、嘘をつくのはエネルギーがいる。正直に答えることにした。

「もうすぐ品川駅」
「何をしているのですか」
「歩いているわ」
「一人で？」
「……　ノーコメント」
「……　ということは、一人ですね。また、後で電話します」
と一方的に電話が切られた。今の電話はなんだったの？

品川からは国道を歩く。途中、江戸の南出入り口だった大木戸を通過する。空港へ行くモノレールとお台場に行くゆりかもめが見える。再び加古先生から電話がかかってくる。
「もしもし、加古寛です」
「また電話？　なによ？」
冷たい返事を返す。
「今どこ？」
「浜松町。先生、何度も電話してきて、今日は暇なの？　今、何をやっているの？」
「微分」
「はあ？　それじゃあね」
今度はこちらから一方的に電話を切った。
切った途端に電話がかかってきた。また加古先生かと思ったら、渡だった。
「よ、元気？」
「元気も何も昨日会ったばかりじゃない」
「そうやった。ところで、碧へのプレゼントを今、買うたところや」
「昨日言っていた誕生日プレゼント？　『今』、買ったの？」
「そう、今。買いたてのほやほやで」
「まさか、焼き芋じゃないでしょうね」
「焼き芋やったりして」
「冗談でしょう！　これ以上、あたしを太らせる気？」

「冗談、冗談。でも、はよ、わたしたいんやけど、今どこ？」
「今、浜松町だけど……」
「丁度ええ。浜松町の隣の新橋駅で３０分後に待ち合わせや」
「ちょっと、忘れたの？　２４日は会えないって昨日言ったじゃない」
「とにかく、俺は行くから」
そう言って、渡は一方的に電話を切った。今日は、渡にも加古先生にも会わないと決めていたのに……　まったく、何なのよ。
　あたしは予定通り北上する。新橋はすぐそこ、１５分程で着いてしまう。渡を待つか、それとも、予定通り、渡には会わないようにするか……　どうしようかしら。駅前の蒸気機関車は青いイルミネーションがまばゆい。相当な年齢のはずの機関車には、かなり恥ずかしい装飾だわ。この機関車の前で渡と最初に会ったことが思い出される。渡は、確か……　１７分遅刻して、あたしはかなり頭に来ていた。最近は遅刻癖がだいぶましになったけれど……　そうだ、遅刻したのを理由に会わないって手もあるわ。携帯の着信記録をみると電話をもらったのが１５時１４分。これに３０分を足せば１５時４４分。この時刻までは待つことにする。念のため、化粧室でメイクを直す。
　ハイ、１５時４４分。あ、でも、１分ぐらいは誤差があるかもしれない。
　ハイ、１５時４５分。そう言えば、どこで待ち合わせるか言っていなかったけれど、もし、違う所で待ち合わせしていたら……　そんなことはありえない。機関車の前に決まっている。いくら、渡でも最初に出会ったのがここだってことは覚えているはず。だから、別の場所で待ち合わせるなんてあり得ない。あり得ないけれど、無理やり、２分間余分に待つことにする。
　ハイ、１５時４７分……　あたしは強い女よ。だから妥協はしない……

１５時５０分に渡が現れた。
「よ、待たした？」
安堵して、怒った顔を作った。
「忙しいんだけれど」
「なんでや？」
「上野公園の西郷さんの所まで歩くの」
「上野まで、電車は？」
「今日は、歩いているの。上野から歩き始めて、山手線に沿って、池袋、新宿、渋谷、品川と歩いてきたわ」
「ふーん、結構な距離やな。今日は俺とは会えないって言っていたけれど、俺が一緒に歩いたらいかんかったんか？」
「あたしは一人で歩きたいの」
「そういや先生はおらんけど、これから会うんか？」
「会わないわ」
「じゃ、俺も一緒にあるくわ」
「迷惑なんだけれど」
「じゃ、一歩後ろをついていくわ」
「もう、勝手にしないさい」

線路をくぐって銀座の方へ歩く。ここからは歩行者天国を通って上野までいける。オンラインパートナー紹介サービスのＳＥ（システムエンジニア）と歩いたのが思い出される。大きな手をしていた。最後に東京タワーに上ったのだったわね。プライベートなメールアドレスを教えたら、毎月第３木曜日にメールが来るようになったわ。たわいもない内容。計画犯ね。本当はもっと頻繁にメールをしたいのだと思う。本当はもっと悩みを聞いてほしいのだと思う。だけど、それをしないのは彼のプライドね。それが、わかるから、逆にあたしは、気取らず、ありのまま、正直にその時のあたしの状況を返信する。

渡は、なにも言わずについてくる。黙っているが辛いはずなんだ

けれど、あたしが我慢できなくなって、声をかけるのを待っているのね。こうなったら我慢比べだわ。

洋書店の前で、知った顔が待っていた。加古先生だ！

「こんにちは。予想より２０分程、遅いですね」

「……」

なんで、あたしがここを通るってわかったのだろう。山手線に沿って歩くのは今朝決めたこと。加古先生は知らないはず。あ、でも、さっき２回電話があったから、この界隈だってことはわかったかもしれない。でもどうして洋書店の前を通るってわかったのかしら？

「不思議そうな顔をしていますね。さっきの電話で言ったように微分をしたのですよ」

「微分？」

「品川通過時刻、浜松町通過時刻が電話でわかりました。２駅間距離は地図を見れば分かります。距離を時間で割れば速度がでます。つまり微分です。速度はおよそ分速７５ｍ／ｍｉｎです。品川、浜松町を通ってさらに歩く道、その道を予想しました。また、分速からいつどこを通るかが大体予想できます。で、私がかけつける時間も考えて、ここなら確実だとおもって、待っていたわけです」

「……　呆れたわ」

「でも、予想より２０分遅かったですね」

それまで、加古先生の話を黙って聞いていた渡が口を開いた。

「あ、すいません。それは俺と会ってたからですわ……　あ、俺、八丈渡です。碧とつきおうています」

「初めまして、加古寛です。碧さんとのつき合いでは後輩になります」

話が続きそうな予感がして、話を終わらせようと試みる。

「ちょっと、二人とも、何なの？」

「碧に会いたかったからに決まっているやないか」

「私も同じです」

「とにかく、あたしは、上野まで歩くんだから邪魔しないで」
「了解」
「右に同じです」

二人並んであたしの1m後ろをついてくる。なんでこんなことになったのかしら。本命候補が二人そろって、顔を合わせている。どう考えてもこれは修羅場……　のはずが、二人は楽しそうに話している。
「加古先生、速攻でプロポーズしたって聞きましたけれど、決断早いですね」
「碧さんの素晴らしさには目をつけていましたから、女性アレルギーが出ないとわかった瞬間にプロポーズしました。それに八丈さんが先行しているのも知っていましたから、ゆっくりしていられないと思ったのも理由ですね」
「正直、加古先生のプロポーズのことを聞いた時は動転しましたよ。最後まで取っておいたデザートを奪われたような感じやった」
「その気持ちわかりますよ。ところで、八丈さんはつき合い長いでしょう。もう碧さんとは寝ました？」
ぶっ、何を言いだすの！
「まだです。一度、襲われかけたことがありますが」
げげ、な、なんで知っているの！
「そうですか。では、丁度いい機会ですから紳士協定を結びませんか」
「紳士協定？」
「碧さんがどちらかに決めるまでは寝ないと」
「なるほど、で、キスはオッケー？　ディープでもオッケーですか？」
「もちろんＯＫです」
「なら、俺はええよ」
「では、協定に合意したということで」

かってに合意しないでよ！　待てよ。それって、味見できないってことよね。はあ～

「協定は協定として、プレゼントはいいですよね」

「もちろんや。なんせ今日は碧の誕生日やし」

「そうですよね。私は、とっておきのプレゼントを用意しましたから」

とっておきのプレゼント？　チョコレートを死ぬほど食べさせてくれるとか……

「俺も、最終兵器を用意しました」

最終兵器？

「それはまた物騒ですね。でも私の方が最終かもしれませんよ」

「ということは……」

「そう言うことです」

え、何？　何？　なんで二人で納得しているの？　だいたい、二人ともふざけているわ。なんためにあたしが苦労したと思っているのよ！　本命が決まらないから、イブ前々日と前日と別々にデートして、イブは一人で過ごすつもりだったのに。そうすれば、公平だと思ったのよ。それを二人して押しかけてきて、二人で盛り上がっているなんて、どういう神経しているの！

結局、悶々としている間に闇の濃い上野公園に着いた。ピクリとも動かない西郷さんの銅像に敬礼して報告する。

「西郷さん、ただいま無事帰還しました……　無事じゃないわねぇ。虫が2匹くっついてきたから」

「とりあえず、皆でどこかに入りませんか？　寒いですし」

加古先生は皆をうながし、コーヒーショップに入った。あたしはふてくされていた。そんなことはお構いなく二人は話を進める。

「ほんなら、そろそろ勝負といきますか？」

「いいでしょう。先手は八丈先輩にゆずりますよ」

「よっしゃ。俺の最終兵器はこれや」

そう言って、綺麗にラップされた小箱を取り出した。あたしへの誕生日プレゼントらしい。ゆっくり包装をとくと、青い布の外装の箱が出てくる。ファッションブランドのロゴが入っている。この箱の雰囲気からすると時計かしら？　それとも何かのアクセサリー？　出てきたのは、簡素なシルバーの指輪。リングの内面には渡と碧のイニシャルが彫ってある。これってもしかして……

「碧、これを左手薬指にはめてへれへんか？」

「……」

なんと返事したものか。渡のすぐ隣では加古先生がにこにこしている。もしかして先生も……

「では、後手の私からも」

そう言って、やはり小箱を取り出した。案の定、指輪だった。渡からのプレゼントと違って、少し金色が入っている。イニシャルが彫られているところは同じ。

「……　あたしの左薬指は1本しかないのよ」

「ふむ。であれば、2つの指輪を重ねてはめますか」

「そういう手があるか、さすが先生」

「冗談言わないでよ。とにかく、受け取れないわ……　あたしみたいないい加減な女に受け取る資格はないわ……　二股かけて、二人を振り回して……　迷惑かけて……」

じわじわと涙があふれてくる。

「ごめんなさい」

もう顔をあげることもできなかった。でも、加古先生はいつだって優しい。

「私は、碧さんのそうやって正直で、一生懸命な所が好きなんですよ」

渡はいつだって温かい。

「俺も加古先生と同じ意見や。それに泣けるのはいい女の証拠やで」

「そうですよ。もっと自信を持ってください。もっと胸をはってください」

自信？　自信なんかないわ。でも、二人に思われるなんてあたしは幸せだ。目の前のネックレスは去年自分に買ったもの。ところが、今年は二人が指輪をくれると言う。今年のあたしは幸せだわ……でも、なぜ今年は違うのかしら？　昨年までのあたしは、他人の視線が怖かった。今でも怖くないと言えば嘘になる。でも今年は、自分から出て行った。知らなかった人とデートし、話をし、つき合うようになって……　思いをよせた。もしかしたら思いをよせたから思われたのかもしれない。渡が口を開いた。

「指輪をはめんでもええから、受け取ってくれんかなあ」

「誕生日プレゼントですし」

「……」

あたしは決心した。

「わかった。お二人の『指輪』と『思い』を預かるわ」

ネックレスを一旦はずし、2つの指輪を通し、またネックレスをする。胸には2つの指輪が並んで輝いている。

「この指輪は責任を持って預かるわ。だから暫く返事を待ってくれる？」

「了解」

「右に同じです」

　上野の街の灯りは優しさと強さをもっている。神様に見守れなくともあたしはやっていける。一人じゃないのがわかったからやっていける。

エピローグ（黙っていられない男）

俺、八丈渡（はちじょうわたる）。某旅行会社で海外ツアーの企画をやっている。前の会社では、秘境のツアーガイドをやっていたんやけれど、新しい会社では企画。企画やからデスクワークが多いんやけど、現地調査で海外に行くこともある。これがまた結構きついんや。

水上碧（みなかみみどり）、俺の女と言いたい所やけど、彼女や。俺よりかなり頭がええ。え、女と彼女の違い？　そら、言わんでもわかるやろ。

碧はなかなか堅いヤツや。某電気屋でシステムなんとかっちゅう仕事をしている。なんでも屋とアイツは言っているけど、いろんなことやってるのは確かや。この間なんか、仕事の余り物とか言って、オレンジもどきを三つ持ってきた。『これが酸っぱいもの、これが甘いもの、これが普通』と言って、俺の前に並べたんや。三つとも外見は全く同じやったから、酸っぱいか甘いかなんて、食べる前から分かるわけない、と思うてた。食べてみたら、碧の言う通りやったから、ビックリしたわ。ホンマに理系の女は怖ろしい。

今日、１２月２４日。クリスマスイブ、でもって碧の誕生日や。３０歳になる。いやいや、この一年間はホンマにヒヤヒヤやったで。何がヒヤヒヤやったかって？　そら～　ま、大人には色々あるんや。ゆっくり聞かしたるから、あわてんといて。

現在、午後２時５０分。待ち合わせの時間より１０分も早い。俺の記憶では、碧との待ち合わせで俺の方が早いんは初めてや。もっとも碧に言わせれば、俺の記憶はかなりいい加減らしい。

場所、新橋駅の機関車前。俺のそのいい加減な記憶によれば、ここで待ち合わせるのは３回目や。

1回目、初めて会った時、俺は、かなり遅刻したらしい。目を吊り上げて怖い顔した女やと思ったのが第一印象や。その日、碧は足挫いて、ついでにトマトジュースこぼして、血染めのようになった。あれはインパクトあったで。でも、ホンマのとこ、あの日、俺は碧に惚れたんや。なんでかって言われても……　やっぱし、かわいかったんやろうな。よう泣くし、ドジやし、要領悪いし。いや、要領悪いっちゅうのは、正確やない。恐ろしく頭の回るヤツで、相手が物、組織とかルールとか、堅い物が相手の時は、きっちり計算して、要領よく行動できるんや。ところが、相手が人の場合やと、不器用きわまりないんや。それが自分でもようわかってるから、遠慮して何もできんのや……　俺が惚れたんはそんな所かなあ。

プレゼント、買うてない。いや、プレゼントは、買うもんやなくて借りるもんやと言った方がええかなあ。

去年は、最後の切り札やと思って、奮発して高い結婚指輪を贈ったんや。そしたら、ライバル、その時のライバルは大学の先生やけれど、同じこと考えてて、やっぱり指輪を贈ったんや。碧はどうしたと思う。今は決められんっちゅうて2つとも没収したんや。没収した指輪をどうするかと思うたら、2つとも鎖に通して首にぶら下げたんや。勲章みたいにな。まあ、知らん奴が見たら、男の数を自慢しとるイヤミな女に見えるやろう。本人は、十字架を背負うやような悲壮な顔しとったから、言わんかったけどな。

まあ、あの時は俺もショックやったけれど、その後のことを考えたら、まだましやったと思う。2個やった指輪は春には3つになりえ、夏には4つになった。増えたうちの1つは牛飼いの贈ったもので、もう1つは巨人の贈ったものらしい。まるでどこかの神話みたいやけど、二人とも実在するらしい。さすがに俺も、指輪が4つになった時は、もうダメかと思たで。それで、俺もせこい手を使ったんや。いや、せこいかもしれんけれど、本人たちが納得しとるから悪いことをしたわけやないで。

実は、最初のライバルの先生とは、何故か、うまがあって友達になったんや。その先生がある時、仕事でシナイ山ちゅう珍しい所に行くことになった。で、俺は職権利用して、うちの窓口の一番の美人を紹介したんや。いつの間にかいい関係になって、碧の胸の指輪が1個減ったんや。あの先生、女性アレルギーちゅう冗談みたいな病気を持っていて、女なら誰でもいいわけやない。で、紹介した窓口の美人が碧の次の例外、つまり、アレルギーの出ない女やったから、先生も相当な強運やと思う。ま、冗談みたいな病気のおかげで、冗談みたいな絶世の美女を射止めたんやから、人生何が起こるかわからんわな。

秋には、3つだった指輪が1つに減って、先日、胸の指輪はとうとうゼロになった。最後の1個は、今、碧の薬指にはまっている。ホンマのとこ、指輪がキツキツやったり、ユルユルやったら、どないしようかと心配したんやけれど、ピッタリやった。この時が、この一年で一番、ヒヤヒヤした時や。高い金出して買うた指輪が、1年たって、合わんことが分かったら笑えんもんな。俺も、案外、強運やで。

お、今話してた彼女が来たわ。遠くから見ると妖精みたいやろ。近くで見ると怖いで。それでも、この一年で随分、顔がやわらこうなった。つっぱてた所がなくなったんやな。

そろそろ、独り言もおしまい。俺の独り言につきおうてもろうて、ありがとな。ホンマ、黙ってるのは死ぬより辛いから、聞いててくれて助かったわ。あ、言い忘れとったけれど、彼女に用意したプレゼントは、賃貸の新居の鍵や。これで、明日には、碧は俺の女や。多分な。

エピローグ（黙っていられない男）（後書き）

これで完結です。読んでいただきありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6707t/

総合課のエースはわたし

2011年12月24日11時24分発行